
修羅の巫女 2 《悪魔編》

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修羅の巫女2 《悪魔編》

【Nコード】

N0842B

【作者名】

暁

【あらすじ】

神選10階に入った阿修羅^{あしゅら}、激しくなる戦いの中で確に見付けた居場所。しかし、その居場所を脅かさんとする黒い影、全ての歯車が回り始めた時、世界は再び終焉へと向かう、阿修羅^{あしゅら}が望まない混沌の未来へと…………。

01..その名は………(前書き)

続編が始まりました、今回は毎日の更新は無理ですが、遅くならな
いように努力します。

01::その名は……

J a p a n V C S O V a t i c a n h e a d q u a r t e r s

風神

「ねえ、聞いて聞いて！第10階決まったんだって」

月神

「おせえんだよ！今その話をしてたところだ」

破壊神

『フッフ、自慢気な顔がまた馬鹿みたいだね』

雷神

「皆、そんなにいぢめ無くても良いんでねえか？」

太陽神

「田舎者は喋らない方が良いッスよ」

死神

「ハハッ！確かに、惨めになるぞ」

芸術神

「良いじゃないの可愛くて」

星神

「……………可愛い」

知識神

「俺の情報によると神徳は戦闘神らしい」

太陽神

「うわぁ、何か怖そうなのが来たッスね」

死神

「そうか？多分強い奴なんだろうな、ウズいて来たぜ」

風神

「絶対にダンディーな紳士よ！」

月神

「それはあり得ねえ！絶対にゴツイオッサンだ！」

雷神

「恐い人じゃねえんなら誰でもいい」

知識神

「出身はジャパンらしい」

芸術神

「ジャパンは綺麗ですからね、恐らく綺麗な男性が来るんじゃないかしら」

星神

「……………怖くない人」

破壊神

『鬼みたいに強い奴だったりして』

死神

「だとしたら体は傷だらけに決定だな！」

太陽神

「みんな分かって無いッスね、絶対にメチャクチャ美人の女の子ッスよ」

知識神

「貴様、ジャパンに行った事あったんだよね？」

太陽神

「そうなんスカ！？」

死神

「テメエの事言ってるんだよ！物忘れ酷すぎると斬り刻むぞ」

破壊神

『頭悪いだけが取り柄だからね』

雷神

「それっでとりえゝか？」

風神

「良いのよ！コイツにはそれ以外に取り柄なんて無いんだから」

星神

「……………可哀想」

芸術神

「そうよ、馬鹿なのは立派な取り柄よ」

太陽神

「フオローになって無いッスよ」

死神

「それで、名前は何ていうんだ？」

知識神

「阿修羅だ」
あしゅら

01..その名は………（後書き）

会話だけでしたが性格だけを見るにはこれが一番だと思います、今回も神話等に登場する神様を使います、もしかしたら有名な神様なんかも……………。

とりあえず今後を楽しみにしていただき、歯車が回った時、驚いて頂けるよう作者も努力します。

02..バチカン

2日前

Japan VCSO Japan branch office

阿修羅^{あしゅら}は突然部長室に呼び出された、任務から帰って来たばかりで疲れている中、無理矢理大至急来いと言われてイライラしながらエレベーターを降りた。

何故か部長室は暗く大きな外部と映像通信する時に使うモニターだけが光っている。

「ボス！用って何？これから食べ歩きに行きたいから早くして」

「ああ、それ無理かも」

阿修羅^{あしゅら}は小さな階段を登るとモニターには何処かで見た事ある外国人、前と同じような金髪に襟にカミウムマーンの刺繍の金色孔雀^{こんじきくじゃく}と同じ白いコート、そして前見た時と同じように椅子に座りチーズケーキを食べている。

「うわあ、阿修羅^{あしゅら}ちゃんだ！2年前より大人っぽくなってて可愛い」
「もしかして元帥？」

VCSOのトップ、通称元帥、このモニターに映っているチーズケーキを食べている男の一言で裏の世界が動く、それくらい凄い人物、のハズ。

「写真集欲しいなあ」

「はあ、ホーリナーはアイドルじゃないのよ」

「そうだね、まあ良いや、こっち来たら僕が作れば良いか」

「こっちに来てから？」

「そうだよ、阿修羅ちゃん、君は神選10階の第10階に選ばれた、拒否権無しね」

再びチーズケーキを食べて微笑む、阿修羅は固まって元帥を眺める事しか出来ない。

「嫌だ！」

「お、おい！摩和羅女！」

小さな階段を登って摩和羅女が上がって来る、それを追うように緊那羅が慌てて入ってくる。

「ダメだ！阿修羅は日本にいるんだ！」

「摩和羅女、出てこないって約束だろ」

「うわあ、摩和羅女ちゃんと緊那羅ちゃんだ、日本支部は可愛い娘ばかりだね」

元帥は笑顔で話しているが、摩和羅女は今にも泣きそうな顔でモニターを睨む、話の中心人物の阿修羅は固まったまま動こうとしない。神選10階、それは化物の集団、一人で一国の軍隊を滅ぼせると言われてるくらいの力を持った者が10人集まる裏の支配者。

「まあそういう事だから阿修羅ちゃん、明後日バチカンの本部に来てね、バイバイ」

強制終了、真っ暗な部屋には摩和羅女のすすり泣く声だけが響き渡る。

金色孔雀は無言で電気を付けるとぼーっとしている阿修羅が真ん中

にいる、摩和羅女はすがりつくように阿修羅の腕を掴む。

「阿修羅あ、行かないよな？」

「行かなきゃダメだよ、元帥が言ってたでしょ、強制だって」

「阿修羅が行かなかったらどうなるの？」

「分かるでしょ？」

念のために聞いた緊那羅に笑顔で応える金色孔雀、摩和羅女はその場に座り込み涙を流した、阿修羅はやっと正気になり摩和羅女に視線を合わせる。

「摩和羅女、泣かないでよ」

「でも、でも、阿修羅は遠くに行っちゃうんだぞ、3人でクレープも団子も食べれなくなっちゃうんだぞ、それでも阿修羅は良いのか？」

「摩和羅女、阿修羅を困らせるな、阿修羅だって本当は行きたいんだろ？」

阿修羅は何も言わずにうつ向くだけ、緊那羅も摩和羅女も知っていた、阿修羅が前から神選10階に憧れていた事に。

緊那羅と阿修羅は神選10階入りの最有力候補になる程の実力になっていった、阿修羅は体を動かすタメに戦いを求めている、しかし阿修羅は強くなるにつれ任務が楽になってきた、それで体が動かさなくなったと緊那羅にばやいていた。

「行って来なよ阿修羅」

「嫌だ！緊那羅は嫌じゃないのか!？」

「阿修羅のタメだよ」

緊那羅は唇を噛み締めながら目を伏せた、摩和羅女もそれを見て涙

を拭う、阿修羅^{あしゅら}は力無く笑って摩和羅女^{まわらによ}の肩に手を乗せた。

「摩和羅女^{まわらによ}、永遠に別れる訳じゃないんだから」

「そうだよ、神選10階に俺が任務依頼すれば多分阿修羅^{あしゅら}が来てるよ」

「それは無いよ、私がいるから」

阿修羅^{あしゅら}は笑うと立ち上がった。

「緊那羅^{きんなら}、最後に手合わせお願い」

「負けて自信なくさないでよ」

「大丈夫、私は神選10階、戦闘神の阿修羅^{あしゅら}だから」

I t a l y c i t y a r e a

市街地を歩く阿修羅^{あしゅら}、真っ白なYシャツを第3ボタンまで開けてそ

ここに合わせてカミウムマーンの刺繍のネクタイをしている、袖は3回折って七分、制服の紺のスカートに黒いスパッツ、そして腰に届くくらいの綺麗な黒髪のストレート。

2日前に金色孔雀こんじきくじやくに手渡されたのはアバウトなイタリアの地図と紹介状のみ、バチカンの位置は一応分かるが細かい道は分からない。

「はあ、頭悪い」

阿修羅あしゅらは地図をクシャクシャにして適当に放り捨てた。

「おゝい！ゴミを捨てるな、綺麗なイタリアのまちが汚くなるべえ」

「(英語ってこうやって訛るんだ、ってか私に分かるって事は………
….)」

阿修羅あしゅらは片耳を塞ぎながら、丸めた地図を広い近くのゴミ箱に捨てた、阿修羅あしゅらため息をつくと声の主を捜した。

「ひでえ奴だあ、何でゴミすでる、お前何処の隊だ？」
「隊？」

そこに立っているのは赤茶色の天然パーマの髪の毛で右目が見えない少年、大きなジーンズの裾は折って調節してある、白いチェックシャツも袖を何度か折り調節してある、そして何より肩から肘にかけてカミウムマーンの刺繍、つまりこの少年はホーリナー。

「もしかしてオラの事知らないとか言うんじゃないよな？」

「はあ、知らないわよ、初めて来たんだから」

「初めて？お前、名前さ何だ？」

「阿修羅あしゅらよ、日本から来た」

「もしかして——」

「何やってるんスカ？ほら、持って持って」

後ろから歩いて来たホーリナーに無理矢理ダンボールの山を押し付けられた天パの少年、天パの少年はよろめきながらも何とかダンボールの山を安定させた。

「へ、ヘリオス、その子は——」

「うわあ！超可愛いッスね、ユピテルに勿体無いッスよ」

阿修羅^{あしゅら}を睨む阿修羅^{あしゅら}と同じ年くらいの男、小麦色の肌に金髪の手髪、前髪だけ上がっていて明るさが際立つ、紺色のポケットの多いハーフパンツに、右側にカミウムマーンの刺繍が入ったダウンスベストを全開で着ている、これがヘリオスと呼ばれたホーリナー、そして天パの少年はユピテル。

「田舎者は早く届ける、じゃないとまた料理長に怒られるッスよ」

「それはヘリオスも——」

「早く行く！」

「あとその女の子は——」

「気を付けて帰るんスよ」

ヘリオスは殆ど強引にユピテルを帰らせた、ヘリオスは阿修羅^{あしゅら}を舐め回すように見ている。

「はあ、何？」

「可愛いッスね」

「はあ、おだてても何も出ないわよ」

「別に良いッスよ」

阿修羅^{あしゅら}はヘリオスを無視して歩き始めた、ヘリオスは慌ててポケットに手をつっ込みながら追って来た。

「そうだ、貴方バチカンって何処にあるか知ってる？」

「知ってるッスよ」

「道案内して」

「何で？」

「行きたいからよ」

「へえ、本部にッスか」

ヘリオスは渋ったような顔をして阿修羅^{あしゅら}を覗き込んだ。

「多分入れないッスよ」

「何で？そっちから呼んでおいて」

「何だ呼ばれたんスカ！」

「当たり前でしょ、じゃきゃこんな所来ないわよ」

「じゃあ行こうか！」

ヘリオスは阿修羅^{あしゅら}の手を掴み歩き出した、阿修羅^{あしゅら}は男性に触れるのが初めて、そのゴツゴツした手に多少なりと心拍数が上がっていた。ヘリオス、太陽のような笑顔に底無しの明るさ、阿修羅^{あしゅら}はこういうタイプが嫌いだった、理想としては静かでクールな年上タイプが最近出来た好み。

「ジャパンって全部ゴールドで出来てるんスよね？」

「はあ、いつの時代？全部金なのは金閣寺っていうお寺だけ」

「凄いッスね！全部ゴールドなんスカ！？」

「それだけね」

「見てみたいッスね、ジャパンに任務行く時があったら案内頼むッスよ！」

阿修羅^{あしゅら}は心の中で緊那羅^{きんなら}いる限り日本への任務が無い事を分かっていた、万が一緊那羅^{きんなら}が神選10階に入るのなら話は別だが。

「それにして変わった格好してるんスね」

「貴方に言われたくないわよ」

日本の制服姿の女にダウンベストの前をはだけた男、どちらも人の記憶に残ったら一緒に忘れられない思い出になるだろう。

「これならいつでも海に入れるじゃないッスか」

「はあ、海に入る任務なんて皆無に等しいわよ」

「分かって無いッスね、世界各地には色んなサーフポイントがあるんスよ、任務だけで世界を飛び回ってたら頭がおかしくなっちゃうよ」

今のヘリオスの一言で阿修羅^{あしゅら}は世界各地の食べ歩きを想像した、世界には色々なスイーツがある、それを食べ歩ける毎日を想像して生唾を飲んだ。

ヘリオスは阿修羅^{あしゅら}の手を掴み腕をブンブンと振り回す、阿修羅^{あしゅら}はヘリオスのペースに吞まれ手を離すに離せない。

「着いた着いた、ココを越えれば向こうはバチカンッスよ。」

まあ俺らにはバチカンって言うより、VCSO本部って言った方が馴染み易いッスね」

阿修羅^{あしゅら}は恐る恐るイタリアからバチカン、VCSO本部に足を踏み入れた。

ホーリナーに成り2年目、異例の早さで神選10階に入った阿修羅^{あしゅら}、
阿修羅^{あしゅら}がこの地に足を踏み入れた事により、世界は大きく歪んでい
く。

03：第10階

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

阿修羅^{あしゅら}はヘリオスと一緒に目と鼻の先にある石造りの大きな塔を指した、教科書などでは見たことの無いいかにも怪しい2つの塔、所々で渡り廊下があり繋がっている。

阿修羅^{あしゅら}とヘリオスの隣を通り過ぎるとお辞儀する者がしばしばいる、恐らくホーリナーに関わりのある者達だ。

「「ヘリオス様、こんにちは！」」

小学校高学年くらいの子供達がヘリオスを見て一斉にお辞儀した、阿修羅^{あしゅら}はその奇妙な光景に目を真ん丸にしてヘリオスを見る。

「誰？」

「育成所の生徒ツスよ」

「育成所？」

「知らないんスカ？育成所ってのは俺達が見えるような異質な人達をソルジャーにする所ツスね、まあそれを拒否した人が協力者とかになってるんスけど、ソルジャー達の事を俺らが神だから天使って言ったりもするんスよ」

こんな小さな子供のうちからダークロードと戦うタメの特訓を受けている、そんな現実を知って阿修羅^{あしゅら}は心が痛んだ。

石塔の中は日本支部とそこまで代わり映えはしない、窓から見える景色が山じゃなくてイタリアの町並みという事ぐらいだ。

ヘリオスは阿修羅^{あしゅら}とエレベーターに乗ると最上階に向かう、ヘリオスが乗っていると途中から乗ろうとした者もお辞儀したまま乗らない。

「何で皆乗らないの？」

「俺が神選10階だからッスよ、本当に神様になったみたいで気持ち悪いけど、すぐに慣れるッスよ」

阿修羅^{あしゅら}は一ホーリナーと神選10階の違いを大きく見せ付けられた。エレベーターが最上階に着くとそこには大きなドーナツ型のテーブルがある、それを囲むように11脚の椅子、ガラス張りでこの部屋だけ何か違うオーラを出している。

「こっちこっち」

ヘリオスは阿修羅^{あしゅら}の手を引っ張って奥にある扉のドアノブに手をかけた、そこには指令室と書いてある、ヘリオスがドアを開くと大きなデスクに大きな椅子、そして片手にチーズケーキを持った金髪の男性が外を見ている。

「元帥、阿修羅^{あしゅら}って娘連れて来たッスよ」

「阿修羅^{あしゅら}ちゃん!？」

元帥は慌てて走り寄る、隣にいたヘリオスは突き飛ばされ、阿修羅^{あしゅら}を舐め回すように見る、その間もチーズケーキを口に運び続ける。

「本物の阿修羅^{あしゅら}ちゃんだ、可愛い！」

「はあ、これが私達のボス、先が思いやられる」

元帥は笑いながらマイクのスイッチを入れた。

「あー、あー、神選10階全階、今すぐに会議室の所定の位置に集合」

恐らくこの塔全てに響いたであろう元帥の声、元帥はマイクのスィッチを切ると残ったチーズケーキを口に放り込んで指を舐めた。

「ほら、ヘリオスも自分の席にいてよ」

「了解ッス」

ヘリオスは指令室から出ていくと元帥は笑いながら阿修羅^{あしゅら}に近寄った、阿修羅^{あしゅら}は不気味に思いながらもその場を動けなかった、元帥は阿修羅^{あしゅら}の左腕を掴むと腕輪を何かで包む。

「な、何!？」

「良いから良いから」

阿修羅^{あしゅら}はしぶしぶ待ち続けた、何の違和感もないし少し重いくらい、ディアンギットの腕輪が崩壊する事もあり得ない。

「はい、終了」

腕輪を覆っていたモノが外れたが何の変化も無い、何のタメに着けていたのか理解出来ない。

「ココだよ」

元帥は腕の手首の内側を指差した。

《No. 10 floor》

「第10階？」

「そう、阿修羅あしゅらちゃんは今日から神選10階の第10階だよ、まあこの番号は区別するだけだからあんまり意味は無いんだけどね」

阿修羅あしゅらはその数字を眺めた、神選10階の第10階の阿修羅あしゅらになった瞬間。

阿修羅あしゅらは内心味気ない作業に落ち込んでいた、もう少しそれっぽい事をやるモノだと思っていたのだが、腕輪にナンバーを彫って終わり。

「もうそろそろ集まったかな」

「誰が？」

「神選10階の皆、阿修羅あしゅらちゃんの席は僕の隣だから分かり易いよ」

元帥は先に扉を開いて会議室に行った、阿修羅あしゅらは深呼吸をして会議室への扉を開いた。

丸いドーナツ型のテーブルを囲むように9人のホーリナーが座っている、元帥はヘリオスの隣に座りその隣が一つ空いていて阿修羅あしゅらはそこに座った。

隣にいる小さな女の子が阿修羅あしゅらを舐め回すように見る。

「新しく第10階になった阿修羅あしゅらちゃんだよ」

「うえ！？阿修羅あしゅらが第10階だったんスカ！？」

「何だヘリオス、テメエ知り合いか？」

机に長い足を乗せた紺色の長い髪の毛の男性、かなり妖しい笑い方をしている。

「ココまで一緒に来たんスよ、何でユピテル言ってくれなかったんスカ？」

「それはオラが言おうと——」

「酷いッスよね、俺だけ除け者ッスカ」

一番ヘリオスが酷いと思える、ザッと見渡すだけでもかなり濃い人物ばかり、阿修羅あしゅらの格好も変には思えなくなるような者ばかり。

「じゃあヘリオスから自己紹介」

「またッスカ？」

「やらないの？」

元帥しゅらが不適な笑みを浮かべるとヘリオスが焦って立ち上がった、阿あ修羅にはその意味が理解出来ないままヘリオスの自己紹介が始まる。

「第1階の太陽のヘリオスッス、出身アメリカのハワイで18歳でッス」

阿修羅あしゅらと同じ年、そしてあえてハワイと言った事からそこに固執しているらしい。

次に隣のバンダナを着けた黒くて長い髪の女性が立ち上がる。

「第2階、月神アルテミス、出身はエジプトで年は20」

白のタンクトップの背中に刺繍、ブーツカットのジーンズでエジプトというよりはラテン風、しかし顔はエジプトの美女を連想させる。

「第3階、芸術神のメルポメネ、出身はロシアで28よ、よろしくね」

おしとやかな感じで裾に刺繍がある真っ白なノースリーブのドレスがそれを際立たせる、ブロンドのウェーブの髪の毛と白い肌が本当

に激しい戦いをした者とは思えない。

『綺麗だから騙されない方が良いよ、戦い方は僕よりもえげつないから』

「モリガンには負けるわよ」

「どっちもグロいッスよ、グチャグチャとぺちゃんこっすよ」

あしゅら阿修羅はその会話よりモリガンの全てが気になった。

『第4階、破壊神のモリガン』

そのまま座った、年も出身も言わないままに、モリガンの声は変声機を使ったように中高年の男性の声と子供の女の子の声が混ざった声、服装は露出が無く、顔は白いマスクで覆われ、真っ白なローブをはおっている、袖の所の刺繍だけが唯一白ではない。

「第5階、知識神ダグザ、ポルトガルで25だ」

紺色のスーツで中には白いTシャツ、見えないがTシャツの裾には刺繍がある、ミディアムの茶髪で髪の毛は右側に流している、メガネを着けていて知的な印象。

「第6階、雷神のユピテル、出身はルーマニアの17歳だあ」

あしゅら阿修羅は隠れている右目が気になってしょうがない、チラリとも見える事が無く見にくいのではないかと不安になった。

「第7階、風神のククルカン、出身はすぐそこのイタリアで年は10代最後の19歳、よろしく！」

襟の高い青いジャージのファスナーを一番上まで上げて口がスッポリと隠れている、白の膝にかかるプリーツスカートの裾に刺繍、セミロングの金髪は自らが光ってるかのように美しい。

「第8階、死神のタナトス、出身はフランスで22だ、今度手合わせ頼むぜ」

タナトスは立ち上がりずに言った、真っ白なロングTシャツの胸の辺りに刺繍、ズボンには皮で髪の毛は肩を覆うくらいの青いロング。

「…………第9階、星神、アストライア、カナダ14」

接続詞その他は無い名詞だけの自己紹介、真っ白なパーカーのお腹のポケットの所に刺繍がある、フリルの青いミニスカート、ブロンドの髪の毛をツインテールにしている幼さが際立つ。

阿修羅^{あしゅら}は人前に出るのが苦手なゆっくりと立ち上がった。

「はあ、第10階、戦闘神の阿修羅^{あしゅら}、出身は日本で18歳」

「俺と同じ年じゃないツスカ!」

阿修羅^{あしゅら}は無視して座った、元帥は身を乗り出してヘリオスを押し戻して立ち上がった。

「これから一緒に戦う仲間だから、手を出しちゃダメだよ」

阿修羅^{あしゅら}のみならず全員からため息が漏れた、元帥は無視して指令室に帰って行った、残った神選10階は全員阿修羅^{あしゅら}を見ている。

『いつ死ぬかな?』

「おいモリガン!いきなりそういう事言うか!?」

『だってそうじゃないか、呪われた第10階、その席に座った奴らは皆早死にする、阿修羅あしゅらはいつ死ぬのかな？楽しみだ』

モリガンは立ち上がり一人でエレベーターに乗り降りて行った、モリガンに食い付いたアルテミスは舌打ちして椅子に背を預けた。

「モリガンは俺達でも良く分からないんスよね」

「アイツはロボットだろ、誰も素肌見た事無いんだろ？」

タナトスが嘲笑うように言った、確かにとヘリオスが食い付き二人で盛り上がる。

「……………血」

「どうしたの？アストライア」

「……………モリガンの見た」

「アイツの血を見たのかよ！？オイルとかだったら笑えるぜ」

「……………真っ赤」

当然だ、ロボットに神が付いたら苦労しない、しかしあそこまで隠しているとなると何かしらあるに違いない、と阿修羅あしゅらは考えていた。

「ねえねえ！日本って全部ゴールドで出来てるのよね！？」

「ククルカン、それは大きな間違いだ、ゴールドで出来ているのは通称金閣寺、しかも食事の華やかさを出すのにも使われるあの金箔を張り付けただけの寺だ、足利尊氏が立てた鹿宛寺をマルコポーロが見て『黄金の国ジパング』と言った、ただそれだけの事だ」

無駄に詳しいダグザ、知識神の神徳は伊達じゃない、日本人でもそこまで知っている者は少ないのに、ポルトガル出身のダグザがそこまで詳しくしっていると流石に気持悪い。

「はあ、それにヘリオスも同じ間違いした」

「ふっ、戦う事しか出来ない馬鹿共が」

「何よ何よ！ダグザに言われるのは毎度の事だけど、ヘリオスと一緒にしないでよ！」

「ククルカン、そういうのを確か『どんぐりの背比べ』って言うんだぞ、そうだよな阿修羅^{あしゅら}？」

「そうよ」

意外にもアルテミスが日本のことわざを知っていた、ククルカンは悔しさから机をバンバン叩きながら怒りを露にした、そんなククルカン^{ククルカン}をユピテルが慰める。

「大丈夫だあ、悪いのは黄金の国なんて言ったマルコポーロだべ？ククルカンはわるぐねえ」

「何かムカつくけどありがとう」

メルポメネは二人の和やかな雰囲気を見て笑って立ち上がった、それを見るとアストライアも慌てて立ち上がる。

「……………戻る？」

「うん、行く？」

アストライアは首を大きく振ると走ってメルポメネの基に向かい、隣に立つとメルポメネの腰の辺りキュツと掴む、二人はそのままエレベーターに乗り込んだ。

「ああ、かったりい！」

「どうしたんスカ？」

「これから任務なんだよ」

「タナトスが任務を嫌がるなんて珍しいッスね」
「タイだぞタイ！何であんな僻地に俺様が行かなきゃいけないんだよ！」

色々ぶつくさ言いながらタナトスはエレベーターに乗り込んだ、完全にエレベーターの扉が閉まった後に扉を蹴るような音が聞こえた。

「俺も失礼する、まだ報告書が残ってるもんでな」
「ヤバ！アタイもだ！」

ダグザとアルテミスはエレベーターが戻ってくるのを待って乗り込んだ。

「ククルカン、今日暇が？」

「暇よ」

「楽しそうな映画見つけたから見に行がねえか？」

「行く行く！」

ククルカンは勢い良く立ち上がってユピテルの手を引っ張った、ユピテルは引きずられながらエレベーターに乗り込んだ。

「俺達だけッスね」

「はあ、私の部屋まだ聞いて無かった」

「それなら俺の部屋の前ッスよ」

「案内して」

「了解ッス！」

阿修羅^{あしゅら}とヘリオスは同時に立ち上がった、ヘリオスが阿修羅^{あしゅら}に駆け寄ると、後ろから押してエレベーターに押し込んだ。

04…女子寮

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

神選10階の居住区は居住塔の最上階にある、居住塔にはシャワーや食堂、そしてソルジャー、つまり天使達の居住区もある。

エレベーターから一直線に伸びる通路、右側から奥にかけてが第1～5階、左側の奥からエレベーター側にかけて第6～10階の部屋がある。

阿修羅^{あしゅら}の部屋はエレベーターを降りてすぐ左側、ヘリオスが貰って来た鍵を使い扉を開けると阿修羅^{あしゅら}叫んだ。

「広い!!」

「そんな驚く事ッスか？」

「驚く事よ、日本の部屋なんて6畳1間」

この部屋はまるでホテルのスウィートルームのような内装に広さ、阿修羅^{あしゅら}は寝室に行くとベッドの大きさにビックリする、恐らくクイーンサイズくらいはあるであろう大きさ、軽く腰掛けるとぐっと沈む。

「これが私だけの部屋？」

「そうッスよ、何か要望があれば一日で変えてくれるから何でも言った方が良いッスよ」

「でも呪われてるのよね？」

阿修羅^{あしゅら}の一言でヘリオスの笑顔が引き吊る、呪われているとはモリガンが会議室を出る前に行った一言。

「まあたまたまッスよ」

「本当に？」

「そうッスよ、悪魔に堕ちたり、ダークロードに体をのっとられてタナトスに殺されたり、山の任務で足を滑らして死んだり、ダークロードに人質にされてタナトスに殺されたり、戦いの毎日で気が狂って自殺したり、戦いの邪魔をしてタナトスに殺されたり、そんな事くらいだから気にしなくて大丈夫ッスよ」

阿修羅^{あしゅら}は力の抜けた笑みのまま固まった、確かに呪われている、しかもタナトスを中心に2回に1回くらいのペースで殺されてる。

「それがどれくらいの内に？」

「2、3年くらい前じゃないッスか？呪われ始めたのは今のルシファーが日本にいた頃に悪魔に堕ちたのから始まったんスよ」

現ルシファー、それは阿修羅^{あしゅら}にディアンギットの腕輪の素を渡した者、ホーリナーだった頃の名前は帝釈天^{たいしゃくてん}。

「思い出した！ヘリオス、貴方日本に来た事あるでしょ？」

「そうみたいッスね」

阿修羅^{あしゅら}は気が抜けた、日本支部の歴史に間違いなく刻まれた鬼との戦い、そしてその時に現れたルシファーと神選10階、全てが規格外の出来事だった。

「ヘリオスが来たお陰で今の私がいる、何も覚えて無いの？」

「そんな任務の一つ一つなんて覚えてられないッスよ」

「あのルシファーと戦ったのに」

ヘリオスは明らかに驚いている、そして何か考え事をするように少ない記憶の扉を片っ端から開けている、頭や体をよじりながら考えるが出てくるのは汗だけ。

「ああ！ 忘れた！」

「はあ、あり得ない」

「しょうがないじゃないッスか、小さい事はいちいち気にしないたちなんスから」

「私とヘリオスが同じとは思えない」

「それ、俺が歳より馬鹿って言いたいんスか？」

ヘリオスは顔を膨らましてあぐらをかいて床に座った、阿修羅は膨らんだヘリオスを見てプツと噴いてしまった。

「笑った！」

「だってその顔」

「戦闘神も笑うんスね」

「そりゃ笑うわよ、一応人間なんだから」

「戦闘神なのにこんなに可愛い女の子だし、冷たい人だと思ったら笑うと可愛いし、阿修羅って可愛いッスね」

満面の笑みで阿修羅に可愛いと言うヘリオス、阿修羅は呆れてため息をついてありがとうと一言言っておいた。

とても2年前に助けに来たあのヘリオスとは思えない、今よりむしろ2年前の方がしっかりしていたと思えるくらいだ。

「はあ、人って変わるのね」

「またため息、阿修羅はため息が多すぎッス、不幸になるッスよ」

阿修羅はまだホーリナーじゃない時に同じ事を言われたのを思い出

した、その古い親友を思い出して少し心が締め付けられた。

阿修羅^{あしゅら}が沈んでいるとヘリオスは慌て始めた、恐らく、不幸、という言葉が阿修羅^{あしゅら}を傷付けたのだと思ったのだろう。

「わ、悪かったッス、不幸なんて言わないッスから、ね？」

「別にヘリオスの事を考えてた訳じゃないから」

「じゃあどうしたんスカ？」

「過去に浸ってただけ」

ヘリオスは分からないと頭を掻いて口を尖らせた、そんなヘリオスを横切って阿修羅^{あしゅら}は部屋の入口で振り返る。

「もっと案内して」

「OKッスよ！」

ヘリオスは跳ぶように立ち上がると、阿修羅^{あしゅら}を追い越して玄関に行った、そこで満面の笑みで手招きをするヘリオス、阿修羅^{あしゅら}はため息と共にヘリオス玄関へ歩いて行った。

「何処に行きたいッスカ？」

「4階」

「何でまた4階なんか？」

「何となく、女の勘ってやつ？」

「まあ良いッスけどあんまりオススメ出来ないッスよ」

「別に良いのよ、4階が私を呼んでるんだから」

阿修羅^{あしゅら}は玄関を出てすぐ右側にあるエレベーターのボタンを押した、ヘリオスは慌てて部屋の鍵を閉めると既に来ているエレベーターに乗り込み、扉を閉じた。

エレベーターはあっという間に4階に着くと扉が開く、廊下自体は神選10階のフロアと変わらないが、扉の数が圧倒的に違う。

最上階の神選10階のフロアは10室、しかし4階は40室もある。

「凄い、何ココ？」

「育成所の生徒の女子寮ツスよ」

「あ、ヘリオスは入って良いの？」

「い、一応ツスね」

ヘリオスは頬を掻きながら顔を真っ赤にした、阿修羅あしゅらはぼーっと見て回っていると一つの扉が開いた、そこからはアストライアよりも若い少女が出てきた。

「こんにちは」

阿修羅あしゅらは笑顔で挨拶すると少女は不思議そうな顔で阿修羅あしゅらを見た。

「誰？」

「そっか、まだ私は新人だから分からないのか、私は新しく第10階になった戦闘神の阿修羅あしゅらよ、よろしくね」

子供が大好きな阿修羅あしゅらは笑顔で目線を合わせて手を差し出した、そんな阿修羅あしゅらとは裏腹に少女は慌てて一歩下がると片膝を着いて下を向いてしまった。

「す、すみません！神選10階のお方だとは知らずにご無礼を、お許し下さい！」

「はあ、何も無礼な事してないよ」

阿修羅^{あしゅら}はそっと少女の頭に手を置くと、少女はビクツと体を震わせて固まってしまった。

そして少女の大きな声で部屋にいた者達がぞろぞろと出てきた、全員が女の子でいずらくなつたヘリオスは阿修羅^{あしゅら}にバレないようにエレベーターに乗り込んだ。

「ミル、どうしたの？」

阿修羅^{あしゅら}より少し年下くらいの女の子が、阿修羅^{あしゅら}の前で片膝を着いて少女の肩を叩いた。

「シャーリさん！こ、このお、お方が……………」

「どうもよろしくね、シャーリちゃん」

阿修羅^{あしゅら}が笑顔で手を差し出すとシャーリは不思議そうな顔をして阿修羅^{あしゅら}を見る。

「誰ですか？育成所の生徒以外は立ち入り禁止ですよ」

「そうなの！？」

阿修羅^{あしゅら}は驚きヘリオスの姿を捜すがヘリオスは既に身をくらましていた。

「はあ、ヘリオスが逃げた」

「あ、貴方！ヘリオス様にそのような暴言を吐いて、ただで済むと思ってるの！？」

「もしかしてシャーリーちゃんはヘリオスのファンとか？」

普通の女の子との会話を若干楽しんでいて大事な事を忘れていた、ヘリオスと最初にエレベーターに乗った時にヘリオスが言った言葉

を。

「ふあ、ファンな訳無いでしょ！恐れ多くてファンなんて……」

「シャーリさん——」

「ミルは黙ってて！貴方、所属と名前を名乗りなさい！私は育成所女子長のシャーリです」

「はあ、怒らないでよ、所属は神選10階の第10階になるのかな？
名前は阿修羅あしゅらよ」

シャーリの顔は怒りに歪んだ、顔は耳まで真っ赤になり握った拳は震えている。

「嘘も甚だしい！そんな嘘が通用すると思ってるの！？」

「はあ、これで信じて貰える？」

阿修羅あしゅらはディアンギットの腕輪に彫られた自分の番号をシャーリに見せた、シャーリは徐々に顔の力が抜け、そして目からはポロポロと涙が流れ落ちる、シャーリは力無く地面にへたりこむと手の甲で涙を拭う。

阿修羅あしゅらは可哀想になり両膝を着いてシャーリの顔を覗き込んだ、その時に阿修羅あしゅらは全員が片膝を着いてる事に気が付いた。

「も、申し訳ありません！大変ご無礼を、私の犯したこの大罪、死でも何でも受け入れます」

「はあ、大袈裟な」

「大袈裟じゃありません！神選10階に新しく成られた阿修羅様あしゅらとは知らず、数々のご無礼に加え暴言、そして侮辱の数々、お詫びしもしきれません！」

阿修羅あしゅらは泣いてるシャーリをそっと抱き寄せると、軽く背中を叩い

てあげた、周りにいる者はおろか、抱き締められているシャーリも完全に固まってしまった。

「私が神様ならまだしもただの人間よ、貴方達と同じ、それなのにちよつと注意したからって死ぬ事ないじゃない」

シャーリはそつと阿修羅あしゅらから離れると上目使いで阿修羅あしゅらを見る、阿修羅あしゅらは満面の笑みでシャーリに応えるとシャーリは涙が流れた痕を
ごしごし拭いた。

「しかし何かお詫びをしなくては、私達を生かすも殺すも阿修羅あしゅらさま次第、私達にとっては神様同然、ですから何か罰を……………」

阿修羅あしゅらは正座して顎に手を当てて考えた、そもそもそんな偉くなつたという自覚の無い阿修羅あしゅらにそんな事をする勇氣もない、しかしシャーリはすがりつくような真剣な眼差し。

「はあ、じゃあ、これは連帯責任ね」

全員が泣きそうな目で阿修羅あしゅらの事を見つめる、10歳程の少女から阿修羅あしゅらと同じくらいまでの女の子まで。

「私を神様からお友達に格下げして」

「し、しかし——」

「謙讓語も禁止、これから私達と貴方達はお友達、良いでしょ?」

シャーリはうつ向き考えている、そんなシャーリに全ての視線が集まる、しかしミルだけは阿修羅あしゅらをジツと見ている、阿修羅あしゅらはミルにそつと微笑むとミルはペアと笑顔になった。

「よろしくね、ミルちゃん」

「本当に良いの？」

「当たり前でしょ、^{あしゅら}阿修羅様、以外なら自由に呼んで」
「……………お姉様！」

ミルがそう叫ぶと青ざめた女子生徒達が一斉にミルを見た、シャーリは口を開けたままあり得ないくらい驚いた顔をしている。

「ミル、流石にそれは……………」

「良いわよ」

^{あしゅら}阿修羅は女子校時代に戻ったような気がして嬉しかった、初等部の児童は^{あしゅら}阿修羅の事を‘お姉ちゃん’と呼ぶ生徒がいたからだ、丁度ミルくらいの子だった。

「シャーリは？」

シャーリは耳を真っ赤にして^{あしゅら}阿修羅を上目使いで見た、少し大人っぽい^{あしゅら}阿修羅を見て更に赤くなる。

「私も、お、お姉様で……………」

「良いわよ、皆も自由に呼んで」

その後所々で‘お姉様’という言葉が飛び交う、まだ対等な立場では無いものの、神様扱いされるよりはましと妥協した。

「シャーリはいくつなの？」

「18歳です、来年から天使として戦いに参加します」

「何だ、私も18よ、少し子供っぽいのね」

周りから小さな声でクスクスと笑う声が聞こえる、シャーリはキツと阿修羅^{あしゅら}を見ると頬が膨らんだ。

「酷いです、私気にしてるのに、そりゃ私はガキっぽくて弱いですよ、お姉様とは似ても似つかないですけど、いつかは神選10階の皆さんが背中を預けられるくらいになるんですから」

阿修羅^{あしゅら}はそこまで言っていないと思いながら苦笑いを浮かべた、廊下にいる者、そして扉から顔を出して覗いてる者、色々な者が阿修羅^{あしゅら}を見ている。

「でも珍しいですね、神選10階の方がココに来られるだけでも珍しいのに、お友達なんて……………」

「神選10階って変な人ばかりでしょ、なんかあんなのとぼっかりいたらおかしくなりそうでね、丁度まともな友達が欲しかったの」

阿修羅^{あしゅら}に人の事は言えないが、それよりも変わり者ばかりの集団、ある意味近寄り難い存在だ。

「お姉様は変じゃない」

「はあ、愚問ね、ミル」

「確かにその格好は普通じゃないですよね」

「あつ、そういう事言う？子供っぽいのにそういう事言うんだ」

阿修羅^{あしゅら}はシャーリの頬をつねって引っ張った、シャーリは阿修羅^{あしゅら}の手の甲を掴みながら涙を浮かべた。

「いふあい！いふあいふえふ（痛い！痛いです）」

阿修羅^{あしゅら}は思いつきり引っ張ってパチンと離れた、真っ赤になった頬

を擦りながらうるんだ目で阿修羅^{あしゅら}を睨んだ。

「酷いですう」

「プツ」

阿修羅^{あしゅら}はシャーリの顔を見て笑うと、シャーリも怒りながらも徐々に笑みになり、笑い始めた。

05：エビルユニオン

Japan VCSO Vatican headquarters

阿修羅^{あしゅら}が神選10階になって3日が過ぎようとしていた。

神選10階は強いダークロードがいた場合のみ出動する、大量なダークロードの場合はソルジャーが出動して殲滅する、だからそれほど神選10階の出動は少ない。

阿修羅^{あしゅら}は暇な時は4階、つまり育成所女子寮にいるのが大半だ。

今日はヘリオスとモリガンは報告書に追われ、メルポメネとアストライアはソルジャーとの手合わせ、ククルカンとユピテルは遊びに行き、ダグザとアルテミスは任務、残った阿修羅^{あしゅら}はタナトスが近寄り難いので4階のシャーリの部屋にいる、シャーリとミルと阿修羅^{あしゅら}が入ると少し狭く感じる。

「はあ、任務に行きたい」

「お姉様、任務任務って言っているとタナトス様みたいになっちゃいますよ」

阿修羅^{あしゅら}は首を傾げた、あのめんどくさがり屋のタナトスが任務の事を口にするとは思えない。

「タナトス様は怖い」

「怖い？」

「お姉様も聞いた事あると思いますけど、タナトス様は見境無しに殺しをするんです、神選10階でもソルジャーでも戦いを邪魔すると平気で殺しちゃうんです、皮肉な意味も込めて死神って言う人も

いるくらいなんですよ」

阿修羅^{あしゅら}は色々思い出した、ヘリオスが話した呪われ第10階の事、自己紹介の時に手合わせを頼むって言われた事。

「タナトス様は戦いが大好きなの、大好き過ぎてダークロードを斬りながら笑ってる、ビデオでタナトス様の戦ってるのを見たら怖くて鳥肌がたったの」

阿修羅^{あしゅら}は日本にいた時に聞いた神選10階の話を思い出した、霊を斬りながら笑っている神選10階、それは間違いなくタナトスの事だろう。

阿修羅^{あしゅら}が戦闘を楽しむ戦闘神なら、タナトスは殺しを楽しむ死神。

3人は阿修羅^{あしゅら}の日本での話等で盛り上がってる時、廊下が異様に慌ただしくなった、しかしそれを異変と捉えずに3人は話続ける。
しかし部屋の扉が開かれた事でシャーリとミルは凍りつく、扉が勢いよく開くとそこには青い長髪の男性が立っている。

「「タナトス様!？」」

「はあ、何しに來たの?ここは女子寮よ」

「テメエを迎えに來たんだよ」

「迎え?」

タナトスは壁に寄りかかりながら阿修羅^{あしゅら}に何かを投げた、何かを受け取った阿修羅^{あしゅら}の後ろでシャーリとミルはビクビク震えている。

「テメエが電話を持ってねえからわざわざ俺様が知らせに來たんだ、感謝しろ」

「何を知らせに?」

「これから任務だ」

3人は任務という言葉に顔が明るくなる、これが阿修羅^{あしゅら}の初任務となる。

「早く行くぞ」

「えっ？」

「今回のテメエのペアは俺様だ」

その言葉に阿修羅^{あしゅら}は頭を抱え、シャーリとミルは泣きそうな顔で阿修羅^{あしゅら}を見る。

「タナトス様、お姉様を殺さないで」

「ミル！何言ってるの？」

「ガキ、今ココが戦場だったらテメエの事を殺してた、ココが本部だった事に感謝するんだな」

「タナトス！」

阿修羅^{あしゅら}はキツとタナトスを睨む、タナトスは妖しい笑みで阿修羅^{あしゅら}を上から見る、後ろではシャーリとミルが深々とタナトスに頭を下げている。

「良い目で睨むじゃねえか、でも早死にするなよ、第10階さん」

「大丈夫よ、間違ってもダークロードには殺されないから、ダークロードにはね」

「もう一度言う、早死にするなよ」

タナトスはそれだけ言うのと部屋を出た、阿修羅^{あしゅら}も脅えたシャーリとミルを慰めて足早に部屋を出る。

Over the unknown

神選10階の移動はヘリコプターを使って移動する、軍用に近いスペックのヘリコプターを何十も所有していて、神選10階もソルジャーもこのヘリコプターを使う。

阿修羅^{あしゅら}は窓から外を見ている、タナトスは椅子に座っていてもこれから始まる戦いへの興奮が薄れないらしい。

阿修羅^{あしゅら}は冷静を装っているが、初めての任務と久しぶりの運動にうずうずしている。

「任務は何を殺せば良いの？」

「エビルユニオンだ」

阿修羅^{あしゅら}の頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ、タナトスはため息をついて足を組んだ。

「デメエは訓練の期間に何をしてた？」

「ひたすら戦闘」

「だからって1ヶ月くらいは基礎知識みたいなのを教えられるだろ？」

「そうなの？ 私は1ヶ月で訓練が終わったからそんな暇が無かったのね」

タナトスは右手で頬杖をつき、左手で紙コップに入ったコーヒーを持っていたが、コーヒーが手をすり抜け床に落ちる、そして阿修羅^{あしゅら}を真ん丸の目で見ると、阿修羅^{あしゅら}は苦笑いを浮かべてタナトスを見た。

「じよ、冗談だろ？」

「嘘な訳ないでしょ」

「マジかよ？ 俺様でも3ヶ月だぞ、ってか最初の1ヶ月はディアンギットの鉄を得物に固定するので終るハズだぞ」

阿修羅^{あしゅら}は初めて戦った時からディアンギットの鉄は得物を成していた、それに日本支部の面々はそんな事を何も言わなかった、恐らく金色孔雀^{こんじきくじやく}の人柄がそのまま支部の色として定着したのだろう。

「でもカミウムマーンに名前とかを診断してもらう時に解放するじゃない」

「それは得物をしっかり見極める意味も込めてだ」

「そうなんだ、それでエビルユニオンって何？」

「エビルユニオンってのはダークロードがダークロードを取り込み力を増幅させて出来たダークロードだ、普通そんな事をすれば霊体が肉体から溢れだし体を保てなくなる、だが稀にだが取り込めるモノが出る、強さは単純に考えてレベル5の倍だ」

阿修羅^{あしゅら}は笑みを浮かべながら生唾を飲んだ、自分と同じようなオラを感じたタナトスは不適な笑みを浮かべる。

「楽しみなのか？」

「久しぶりに運動が出来そうだね」

「流石戦闘神様だ」

阿修羅^{あしゅら}はタナトスを睨んだ、一番嫌いな事、戦うのは好きだがそれは体を動かせるから、必要だからダークロードを殺すだけで好んで殺してるわけでは無い、それ故に殺して楽しんでるように言われるのを阿修羅^{あしゅら}は嫌う。

「私は体を動かしたいだけ、別に殺さないで済むなら殺したくないのよ」

「過程なんてどうでもいいんだよ、問題は殺せるかどうかだろ？」

「貴方と私じゃ価値観が違うみたいね」

「そうみたいだな」

再び気まずい空気が流れる、他人との干渉を好まないタナトス、自分の意志を曲げない阿修羅^{あしゅら}、二人の相性は最悪に等しい。

「まあ一つだけ同じ事がある」

「はあ、あるわけ無いでしょ」

「今回の任務、俺様は楽しみでしょうがない、テメエもだろ」

阿修羅^{あしゅら}は悔しいが認めるしかない、‘戦う’、という‘過程’があるから、‘殺し’、たという‘結果’がある、そして‘殺し’、という‘結果’のためには‘戦う’、という‘過程’が必要。
戦闘と死は表裏一体、お互いを認めようとせずとも同じ穴のむじな。

「まあ今回の任務は思いっきり楽しもうぜ」

「はあ、悔しいけど楽しむのよね、結局」

「認めるよ、兄弟」

阿修羅^{あしゅら}はタナトスを睨むとタナトスはケラケラと笑い始めた、阿修羅^{あしゅら}はため息をついて窓の外を見た、全てを否定しきれない阿修羅^{あしゅら}はタナトスを黙らせる手が無い。

タナトスは落としたコーヒーを片付けさせ、新しいコーヒーを頼む。タナトスはコーヒーを一気に飲み干すと外を見た、雲一つなく地形が一目で分かる、阿修羅^{あしゅら}も同じモノを見ている。

「もうすぐ着く」

「着いたらどうするの？」

「直行する、向こうの人間が案内してくれるハズだ」

「その後は？」

「帰る」

「じゃあ少し寄り道しても良い？」

「何で？」

タナトスは若干不機嫌な顔で阿修羅^{あしゅら}を見る、阿修羅^{あしゅら}は任務後の事に意識がいつている。

「スイーツの食べ歩き」

「そんなに時間は取らないぞ」

「取ってもらえるだけでもありがたいわよ」

タナトスは鼻で笑うと再び外を見た、阿修羅^{あしゅら}は笑顔になりながらその地にあるであろうスイーツを想像して涎を溜める。

06：死神

Spain uninhabited town

荒廃しきって人の気配どころか生物の気配が無い町、埃とカビの臭いが鼻を突き、辺りは建物であったであろう瓦礫の山、そんな中に阿修羅とタナトスはある。

人が住まなくなった、否、住めなくなったこの町は異質な空気が支配する、協力者も町の手前までしか輸送せず、脅えるように帰って行った。

地元スペインのホーリナーも近寄ろうとしないこの町、しかしタナトスの顔は自然と笑みになる、阿修羅はハンカチで口と鼻を押さえながら警戒して進む。

「ゾクゾクするぜ、テメエもそう思うだろ？」

「はあ、環境が最悪」

「贅沢言うな、殺せばそれで良いんだよ」

阿修羅は逆でしょと言おうとしたが辞めておいた、普通なら環境が良ければどんな戦いも我慢する、こっちのほうが自然に感じられる。

「どこにいる！早く出てこい！」

「はあ、出てくるわけ無いでしょ」

「出てきたら儲けもんだろ」

「そんなので……………って、いたわよ」

阿修羅が頭を抱えながら指を指すとそこには異様に大きいダークロードがいる、3m近くある筋肉質の体にバランスの悪い体。

「何あれ、おかしい体」

「不完全なエビルユニオンだ、完全に取り込みきれずもう一方が形となって現れるとあういう風にバランスが悪くなる」

阿修羅^{あしゅら}は不完全な相手でも更に強い敵に笑みにが溢れる、タナトスも若干の笑みを浮かべてエビルユニオンを睨む。

二人が同時に腕輪に触ろうとした時、目の前にいるエビルユニオンとは別のエビルユニオンが頭上に現れた、拳は深く地面に突き刺さり辺りに様々なモノが飛び散る。

「バレバレなんだよ、気配を隠す努力をしろ」

「霊の方がまだ上手く隠れてるわね」

エビルユニオンを挟むように阿修羅^{あしゅら}とタナトスは左右にいる、二人は軽々と避けてエビルユニオンを不適な笑みで睨む。

阿修羅^{あしゅら}とタナトスは同時に腕輪に触れた、阿修羅^{あしゅら}の得物は長刀、名は夜叉丸、タナトスの得物は太刀、名はスケイル。

「テメエは不完全体を殺れ、俺様は完全体を殺る」

「何で貴方が楽しそうな方を取るの？」

「良いじゃねえか、新人には軽い方だ」

阿修羅^{あしゅら}は不満そうな顔で、歩きながら不完全なエビルユニオンに近寄る。

タナトスはスケイルを肩に担ぎながら完全なエビルユニオンを睨んだ、タナトスの目には一点の曇りも無い、あるのは殺意のみ、太刀のスケイルを持っているタナトスの姿は皮肉抜きで死神。

ゆっくり歩きながら口角を上げ、犬歯を覗かせる、そして口を軽く開けて目を大きく見開く。

「この緊張感、最高だ」

「ホーリナーの分際で私を甘く見るな」

「そうだ、そうだな、テメェらは喋れるんだよな」

タナトスはクスクスと笑い始める、そしてスケイルをクルクルと回し、右腕から背中中に添わしてスケイルを持つ。

「斬り刻んでやる」

「不可能だ、私の装甲は貴様らの刃でも貫けない」

「カット【切断】」

スケイルの刃が真っ黒に光り始める、その怪しい光に照らされたタナトス顔は殺意だけで形成されている。

「何をしたか分からないが、私の前では通用しない」

エビルユニオンは拳を振り上げ、タナトスに振り下ろす、タナトスは体を軽くずらして拳を避けた、地面に突き刺さった拳に傷一つ付いていない事から豪語するだけの装甲はある。

「まずは右腕だ」

タナトスの右側にある右腕をスケイルで軽々と切断した。

「グワアアアア！」

片腕だけで軽く当てて力を入れず引いただけ、まるで日本刀で豆腐を切ったかのようにスツとスケイルの刃が入った。

「な、何をした？」

「どうせ死ぬんだ、種明かしをしてやるよ、俺の神技は何でも切断する、それが例えディアンギットから出た鉄だとしてもな」

タナトスは笑いながら地面に落ちたエビルユニオンの右腕を斬り刻んだ、小さく斬り刻まれた腕を見てエビルユニオンは絶望すら覚えた。

「せめてもの選別だ、一瞬で死ぬのと苦しみながら死ぬの、どっちが良い？」

「ふざけるな！」

エビルユニオンは残った左腕でタナトスを殴ろうとしたが、タナトスはあるという間に背中に回り込む、そのスピードでエビルユニオンはタナトスを見失った。

「交渉決裂だな、テメエ的にはサクリ殺して欲しいんだろうな、でも俺様はそんなに優しくないぜ」

タナトスは背中合わせになったままエビルユニオンの左肩から先を斬り落とした、エビルユニオンの背中で悪魔のような笑みを浮かべた。

「き、貴様あ！」

「頭が高いんだよ」

タナトスは振り向き様に両足を斬り落とす。

「ギャアアアア！」

胴体と頭だけになったエビルユニオンは苦痛と怒りに満ちた表情でタナトスを睨む、タナトスはスケイルを地面に着いて、スケイルに支えられながらエビルユニオンを眺めた。

「命ごいでもするのか？まあ今のテメエなら死んだ方がマシか」

「き、貴様、いずれあのお方達が、ホーリナーを、殲滅する、それまで、強がっている」

「ダークロードごときに俺様は殺せない、とりあえず聞いとくが俺様達を誰が殲滅するって？」

「死んでも言わない」

「クロージョン【腐食】」

スケイルの刃が黒から紫に変わる、タナトスはスケイルを両手で握り高々と上げる、大きな口を開けて目を大きく見開く。

タナトスはスケイルを上段から思いっきり振り下ろす、スケイルはエビルユニオンの胸に1cmも刺さらずに止まった、確かに装甲だけは異常にあるようだ。

「ハハハ！素直に斬れば良いモノを、言っただろ、私の装甲は刃を通さぬとな！」

「少しでも傷が付けば良いんだよ」

タナトスとエビルユニオンがスケイルが刺さった傷口を見ると、徐々に腐食しはじめてきた、じわじわと傷口を中心に腐食は進んでいく。

「これから10分だ、死ぬに死ねない苦痛を味わうんだな」

「殺せ！早く殺せ！」

「拒否する」

タナトスはエビルユニオンを背中に歩き始めた、タナトスが恐れられる理由、それは殺しを楽しむ事でも性格でもない、その戦いのえげつなさとダークロードの悲鳴がそうさせる、そしてダークロードの悲鳴で快感を覚えるタナトスの不気味さもそれに拍車をかけている。

阿修羅^{あしゅら}は拳を振り回しながら暴れる不完全なエビルユニオンを見上げた、そしてたまに放たれる攻撃も顔色一つ変えずに避ける、その度に落胆のため息を漏らす阿修羅^{あしゅら}、徐々に神選10階の任務にも落胆してきた。

「はあ、それで終わりなの？」
「ギシャアアアア！」

先程から何かを話そうとしているのだが不完全なのか言葉にならない、阿修羅^{あしゅら}は呆れて頭を抱えると、今まで両手で持っていた夜叉丸を右手だけで持った、ブランと力なく垂れる右腕と夜叉丸、夜叉丸は既に地面についている。

「アブソルペーション【吸収】」

夜叉丸が唸るように反応しはじめた、阿修羅^{あしゅら}は前に倒れるように地面を蹴る、夜叉丸を引きずった跡には細い筋が出来ている。

エビルユニオンは阿修羅^{あしゅら}を殴ろうと拳を振り上げるが、急に加速した阿修羅^{あしゅら}は振り上げたエビルユニオンの右腕に夜叉丸を突き刺す。

ズズズズズズ！

「グギヤアアアア！」

夜叉丸はエビルユニオンの霊体をすすると、エビルユニオンの右腕は干からびミイラと化した、それと同時に夜叉丸は黒みがかかる。

阿修羅^{あしゅら}は夜叉丸を抜くと軽く間合いを取る、エビルユニオンの右腕は細くミイラのようになり使いモノにならない。

「ギシヤアアア」

エビルユニオンは懲りずに再び阿修羅^{あしゅら}に向かって走ってくる、阿修羅^{あしゅら}はゼロ距離で放たれた拳に真っ正面から夜叉丸を突き刺した。

ズズズズズズ！

「ウガアアアアア！」

今度は左腕が干からびミイラと化す、両腕がミイラと化して苦痛に

顔を歪める。

「さてと、終わりにしてあげる」

阿修羅はバックステップで大きく間合いを取り、両手で阿修羅を握ると切っ先を斜め下に向けた、軽く左足を引いてエビルユニオンを睨む。

「チェンジ【転化】、エミッション【放出】」

阿修羅はそのまま夜叉丸を切り上げると夜叉丸は元の色に戻る、それと引き替えに漆黒の刃が放たれた。

漆黒の刃は地面をえぐりながらエビルユニオンに向かう、エビルユニオンは動く余裕も無く立ち尽くしたまま。

漆黒の刃は地面と同時にエビルユニオンを股から頭にかけて両断して消えた。

「なかなかやるじゃねえか」

「ありがとう」

「まあ戦い方は俺様並にえげつないがな」

阿修羅は鼻で笑って軽くタナトスを睨むと出口に向かって歩き出す、タナトスはズボンのポケットに手を入れて阿修羅の後ろを追う。

帰って行く阿修羅とタナトスを高い所から眺める人、赤黒いローブをはおりフードを深く被っている悪魔、見えるのは思いっきり笑った口だけ。

「新入りか、ルシファー様に報告しなくちゃ、大事な妹さんは強くなりましたよ、って。」

でも私も戦ってみたいなあ、戦ったら怒られちゃうかな？怒られちゃうよね、俺の妹に何してるんだあ！って、ルシファー様に怒られるのはちよっといやだなあ、まあ私は一緒にいた死神が殺せば良いや、アハハハ！」

悪魔は座っていた所から後ろ向きで倒れると、黒い穴に吸い込まれるように消えて行った。

Spain city area

阿修羅^{あしゅら}は日本支部時代から続けている任務後恒例の食べ歩き、タナトスはコーヒーが飲みたいと一緒に着いてきた、一人で回るのは寂しいが、よりによって相手がタナトスとなると話は別、むしろ一人にさせてほしいくらいだ。

「まだか？」

「まだよ、お菓子が見付からない」

コーヒーを飲みながら周りを見渡すタナトス、阿修羅^{あしゅら}はフルにセンサーを使ってお菓子を探した、スペインのお菓子など知らない阿修羅^{あしゅら}はしらみ潰しに探すしかない。

タナトスは2杯目のコーヒーを調達した頃、テーマパークでポップコーン売っているようなボックスに、見たことのある星型の長いお菓子。

「そういえばチュロスってスペインのお菓子だな」

「そうなの!？」

「ああ、チュロス食ってるククルカンにダグザがうんちくたれてたから確かだ」

阿修羅^{あしゅら}は輝いた目でチュロスを持てるだけ持って袋に入れる、紙ナプキンを一掴みして胸ポケットに入れて、ナプキンを一枚取りチュロスの端に巻き付け、そこを持って大きく一口食べた。

「おいひい!」

タナトスは満面の笑みの阿修羅^{あしゅら}を苦笑いを浮かべながら呆れて見た、阿修羅^{あしゅら}は口にチュロスを頬張りながら、ナプキンを取ってチュロスに巻き付けてタナトスに差し出す。

「いふ? おいひいわひよ (いる? 美味しいわよ)」

「……………貰っとく」

タナトスは手を使わずに阿修羅^{あしゅら}の持ったチュロスにくわえた、そのままイモムシが葉っぱを食べるようにチュロスをついばむ。

阿修羅^{あしゅら}はそんなタナトスが意外に可愛く見え、思わず笑みが溢れる。

「確かに美味しい」

「でしょでしょ！任務は最悪につまんなかったけど、スペイン自体には大満足ね」

熱弁した後に再びチュロスを口に放り込む、タナトスはいつ調達したか分からない3杯目のコーヒーを飲みながら帰路を歩く。

阿修羅^{あしゅら}の手に持った袋にいっぱいにあったチュロスは残り2本となった、タナトスはあり得ないという表情を浮かべてナプキンを巻いてチュロスを取る阿修羅^{あしゅら}を見た。

「大食いだな」

「うるさいわね、甘い物は別腹」

「任務とは大違いだな、戦闘神様」

「皮肉？」

阿修羅^{あしゅら}はチュロスを一口食べながらタナトスを睨んだ、タナトスは笑いながら阿修羅^{あしゅら}の胸ポケットからナプキンを取った。

「別腹でも太るぞ」

そう言って最後の一本のチュロスを口に放り込んだ、阿修羅^{あしゅら}は最後の一本を食べられた悲しみで泣きそうな目でタナトスを見る、タナトスは一口かじると苦笑いを浮かべながらチュロスを差し出した。

「く、食うか？」

阿修羅^{あしゅら}の顔はパアッと明るくなり、チュロスを一口で食べた、タナトスはそんな阿修羅^{あしゅら}を見て自然と笑みが溢れる。

「戦闘神様も女の子なんだな」

「な!？」

阿修羅^{あしゅら}は口を開いて顔を真っ赤にしながらタナトスを見た、タナトスは苦笑いを浮かべながら阿修羅^{あしゅら}の顎を掴んで口を閉じる。

「女が大口開けるな」

阿修羅^{あしゅら}は口を結ぶように口を閉じるとタナトスの前を歩いた、タナトスはクスクス笑いながら阿修羅^{あしゅら}の背中を見て歩き続ける。
しかし阿修羅^{あしゅら}のタナトスに対するイメージは大きく変わった、最初に警戒は無く、少なくとも皆が言ってる程酷い人物ではない、阿修羅^{あしゅら}にとっては一緒にいても良いタイプだ。

07..魔女

Mongolia plain

真っ白なベストをなびかせたヘリオスと、真っ黒な髪の毛が風に舞うアルテミスの自黒コンビは、任務なのに何故か馬に跨っている、その理由はココがモンゴルの大平原だから、下手にその地域の環境を荒らせないホーリナーは地域によって乗り物を使い分ける事もしばしば。

今回の任務内用は大量に出現したステージ5の殲滅、遊牧民の儀式で呼び寄せてしまったステージ5を殲滅する事、先にソルジャーが行って戦っているが、敵のあまりの多さに苦戦中とのこと。

「阿修羅は大丈夫ツスかね？」
あしゅら あしゅら

「さっきからお前は阿修羅阿修羅って！うるせえんだよ！こっちは任務終わりで疲れてる中での任務だつてのに！」

「だって初任務がタナトスとツスよ、そりゃ不安にもなるツスよ」

先程からヘリオスは口を開けば阿修羅あしゅらの名前が出てくる、アルテミスにとっては苦痛以外の何物でもない、そんな話を聞くくらいなら馬と話した方がマシとも思えるくらいだ。

「見えてきたツスね」

二人の目と鼻の先には大量のソルジャーの中でも胸から上が出ているステージ5、そして地面にはソルジャーの死体がいくつかが転がっている、無傷の者は皆無に等しい。

「アルテミス、援護頼むッスよ」

「当たってもアタイを恨むな」

「大丈夫ッスよ、信じてるッスから」

「ふっ、任された」

ヘリオスは手綱を持ったまま馬の上に立つ、そして二人は同時に腕輪に触れた、ヘリオスは切っ先が無い片手剣、名はレーヴァテイン、アルテミスはチャクラム、ドーナツ型の暗器で指を輪の中に入れて回しながら投げる、名はフルムーン。

「皆退け！ココからは俺らがやりますから！」

ヘリオスは馬の背中から高々とジャンプした、大砲のように上がったヘリオスは笑いながらステージ5達を見る。

「インフェルノ【烈火】！」

レーヴァテインを真っ赤な炎が包み込む、むしろレーヴァテイン自体が燃えている。

ソルジャーはあっという間にステージ5から離れた、そしてステージ5の群れの真ん中にヘリオスが着地する。

しかしヘリオスの後ろには斧を振り上げたステージ5がいる。

「エクスペンション【拡大】」

フルムーンは斧を振り上げたステージ5の寸前で大きくなり、ステージ5の首を切り落とす、そして大きなフルムーンはフリスビーのように曲がると、今度はアルテミスに戻って来た。

「チェンジ【転化】、リデューション【縮小】」

フルムーンは元の大きさに戻るとアルテミスの指に納まる、群れの真ん中で助けられたハズのヘリオスは、膨れっ面でアルテミスを睨む。

「ずるいッスよ、せっかく俺がかっこよく斬ろうと思ってたのに」
「知るか、アタイだって見てるだけってのはつまらないんだよ」

ヘリオスはブツブツ言いながらも攻撃してくるステージ5を斬り落とす、斬られたステージ5は燃えながら地面に倒れ、灰と化す、そしてその度に草は燃え、徐々にヘリオスの周りは火の海と化す。その火の海の中で笑顔を振り撒きながらレーヴァテインを振る、太陽の笑顔に触れたステージ5はその無邪気さで灰と化す、まるでステージ5を灰にして遊んでいるようだ。

「す、スゲエ、化物だ」

「俺達がまとめて戦っても歯が立たなかったのに、ヘリオス様は一人であれだけ……」

「俺、一つの隊がまとめてかかれはいくら神選10階様達でも倒せると思ってた、でもあんなの傷一つ付けられねえ」

アルテミスはソルジャー達の会話を聞いてニヤニヤ笑っている、それはヘリオスが笑いながらステージ5を斬り捨てている訳ではない。

「おい、お前ら」

「は、はい！」

「確かにヘリオスが強く見えるだろうけど、さっきからアイツは右足を動かしてないぞ、右足を軸に遊んでやがる」

そう、ヘリオスは右足を軸に体を動かしながら戦っている、ヘリオスが切り込んで真ん中に入る時は常にやっている事、任務を遊び感覚で楽しむヘリオスならではの。

アルテミスは馬から降りて座りながらフルムーンを投げる、標的はヘリオスに向かわずにソルジャーに向かうステージ5。

アルテミスは飛び道具系の得物では世界最強、純粹に命中率や殺傷能力では摩和羅女まわらによも引けを取らないが、アルテミスはそれだけではない。

「アルテミス様！後ろ！」

「分かってる、いちいち騒ぐな」

アルテミスは投げたフルムーンとは別に新たな得物を形成する、いくつもの得物を作り出せるのは飛び道具系だけの特権。

「エクスペンション【拡大】」

振り下ろした大斧を避けたアルテミスは直径1m以上になったフルムーンを構える、フルムーンは暗器としても近距離の武器としても使える、これが最強の由縁。

アルテミスは内側を持ち、横に薙払うようにフルムーンを振るとステージ5の首を斬り落とす。

「アタイをナメるんじゃないよ」

アルテミスが振り返ると火の海に忽然と佇むヘリオス、ヘリオスの目の前の最後の一体は火が燃え移り、悶え苦しんでいる。

ヘリオスはゆっくりと近付くと、燃えるステージ5を見上げる、金色のハネツ毛は火に染まり燃えてるように見える。

「もう苦しまなくても良いッスよ」

素早い炎の一閃がステージ5の首をはねた、そしてヘリオスはレヴァティンを戻すと、周りの炎は何も無かったかのように消え去った、しかし地面には灰の山が出来ている、太陽に近付き過ぎた者の末路だ。

「何か呆氣ないッスね」

「それはアタイのセリフだよ！全部ヘリオス一人で殺りやがって！」

「どうせアルテミスは戦わないじゃないッスカ、仲間が戦うかダークロードが戦うか、人任せな月じゃないッスカ」

アルテミスが食って掛ろうとした時、広い平原にソルジャーの悲鳴が響き渡る、ヘリオスとアルテミスはソルジャー達に目を移すとそこには3体のエビルユニオン。

「そんなのまでいるんスカ！？」

「驚いてる暇があったら処理しろ！」

「ベロシティ【光速】！」

速く移動するなんてスピードではない、消えて気付いたら現れる、一瞬でエビルユニオンの首をはねた、ヘリオスに反応出来たの者は誰一人としていない、神選10階のアルテミスですら反応出来ないくらいのスピードだ。

光よりも速く、夜よりも静かな神技、殺すという事に特化している、近付こうものなら灰にされ、遠ざかろうものなら知らぬ間に殺される。

「悪いアルテミス、残りそっちに行ったッスよ」

よそ見をしていたアルテミスには、残りの2体が突進してくる。
この状況で笑っているのはヘリオスのみ、ソルジャーは慌て、アルテミスは舌打ちと共にヘリオスを睨んだ。
近距離型の神選10階ならば汗ばむ程度で倒せる、中距離型なら本気を出せば倒せる、しかし遠距離型のアルテミスには危険が伴う、例え倒せたとしても重傷は免れられない。

「ヘリオス様！アルテミス様は遠距離型のハズ、助けに行かなくて宜しいのですか！？」

「まあ確かに普通の奴ならヤバイツスね、でもアルテミスは最強ツスよ」

「しかしエビルユニオン2体相手には危険です！」

「分からないスかねえ？太陽に触れた者が灰になるように、月に魅いられた者は狂っちゃうんスよ、月の美しさの前では誰もが狼ツスよ、まあアルテミスは綺麗じゃないツスけど」

アルテミスはエビルユニオンを睨むよりキツくヘリオスを睨む、後ろにいたソルジャーはメデューサに睨まれたかのように石と化した。アルテミスは意識をエビルユニオンに向けると、手の平をエビルユニオンに向けた。

「ルナティック【狂気】」

手の平でフルムーンが周り始め、淡い光を放ち始める、その光をエビルユニオンが見た瞬間、エビルユニオンの動きが完全に止まる。
そして右側にいたエビルユニオンが左側のエビルユニオンを両手で挟む、そして悲鳴とも奇声とも取れない声で唸ると、エビルユニオンの頭が軽々と潰れた。

「何が起きてるんだ？」

「信じられない、ホーリナーしか襲わないはずのエビルユニオンが、同じエビルユニオンを殺した？」

そして残った最後の一体のエビルユニオンは体を掻きむしり始めた、身体中に爪の傷痕ができ、最後には自分の喉元を掻き切って息耐えた。

最強の遠距離型、それは全ての面においての強さを示す、単純に暗殺能力だけなら日本支部の摩和羅女まわらによの方が上、しかし摩和羅女まわらによになくてアルテミスにあるモノ、それがオールラウンドの強さ。

「俺聞いた事がある、アルテミス様はその戦う様から、魔女、と呼ばれている事を……」

「そうッスよ、元来魔女と月っていうのは繋がりが多いんスよね、それにアルテミスのあの戦い方で魔女って呼ばれるようになったんスよね、タナトスが死神って呼ばれてるように」

「ヘリオスだって同じようなものだろ、太陽、」

世に名だたるホーリナー等にはこのようにニックネームのようなモノが自然と付けられる、そしてそれを繋げて『死神のタナトス』や『魔女のアルテミス』、『太陽のヘリオス』等戦い方や神技等と呼ばれている。

日本支部で緊那羅きんならが世界的に有名だ、『音速の緊那羅きんなら』と言われ阿修羅あしゅらよりも有名である、その理由は護法神と戦闘神、その二つでVCSOが警戒して出回らないようにしているから。

しかし、阿修羅あしゅらに二つ名が出来た時、それが終焉への幕開け。

08：報告書

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

阿修羅^{あしゅら}はやっと報告書を書き終わり、ベッドにうつ伏せに倒れこんだ。

日本支部時代の報告書と言えばアバウトもいいところ、敵の種類とその他のみ、その他は書いても書かなくても何も言われない。

しかし、神選10階の報告書は細かいにも程がある、敵の種類、敵の特徴、敵の得物、敵の身長、敵に会った場所、自分が使った神技、負傷、戦闘時間etc. . .

阿修羅^{あしゅら}は初めて見せられた時に、本気でそれを放棄するのを考えた、しかし、あのタナトスも大人しく受け取ったのを見て、拒否権が完全に無くなった。

阿修羅^{あしゅら}がベッドにうつ伏せになり、軽く痙攣していると誰かが部屋をノックした。

「はぁ、入って良いわよ!」

大きな声で言うのと扉が開いた音がした、足音は阿修羅^{あしゅら}がいるベッドルームの扉の前で止まる。

「……………入る、良い?」

「良いわよ」

扉を開けて入って来たのはアストライア、ブロンドの髪の毛が一瞬、女らしさを見せるがツインテールの可愛らしさが勝る。

「どうしたの？」

「……………メルポメネ、任務」

「寂しいの？」

アストライアは無言で頷いた、白いパーカーのポケットに入れてる手が悲しさを増す。

しかし、こんな気弱な女の子でも神選10階、恐ろしい力を持った神のに愛された者。

「来て良いよ」

阿修羅^{あしゅら}はベッドの端に座ると、隣をポンポンと叩いた、アストライアの顔はパアッと明るくなり、小走りで阿修羅^{あしゅら}の隣に若干寄り添うように座った。

「……………初任務、大丈夫？」

「タナトスと？」

頷いたアストライアの目は不安で溢れている、バチカンにいれば嫌でも耳にするタナトスの噂、当然アストライアも聞いた事があるはず。

「大丈夫よ、それに皆が思ってる程、悪い人じゃなさそうだし」

「……………タナトス、怖い」

「そうかな？」

「……………ダークロード、殺す、笑ってる」

そういえば阿修羅^{あしゅら}はタナトスの戦っている姿を見ていない、任務外は普通の青年だが、もしかしたら戦いでは恐ろしいまでに豹変する

のかもしれない。

「アストライアはタナトスと一緒に任務した時はどうだった？」

「……………強い、怖い」

タナトスの対しての印象が良い阿修羅^{あしゅら}には想像がつかない、神選10階を殺したのも何かの間違えだと思えるくらいだ。

「……………ソルジャー、殺した」

「タナトスが？」

アストライアは再び無言で頷く、そして阿修羅^{あしゅら}はタナトスや報告書とは別のある用事を思い出した。

「今から行きたい所があるんだけど、行く？」

「……………何処？」

「私のお友達の所」

「行く」

アストライアにしては珍しく間が無かった、それに心なしか笑みが溢れている。

阿修羅^{あしゅら}は笑顔で立ち上がると、アストライアも立ち上がり阿修羅^{あしゅら}のスカートを掴んだ、アストライアが誰かの服を掴むのは阿修羅^{あしゅら}とメルポメネだけ、アルテミスやククルカンには話すがこのようにべったりになる事はない。

これがアストライアがメルポメネの次に阿修羅^{あしゅら}を信頼してる証拠だ、阿修羅^{あしゅら}の天性の姉貴肌がそうなのかもしれない。

阿修羅^{あしゅら}が向かった先は4階、任務が終わったらシャーリとミルの所

に行くのを約束してた。

アストライアは阿修羅あしゅらのスカートを握ったまま辺りを見回す、そして阿修羅あしゅらはシャーリの部屋のドアをノックした。

「どちら様？」

「お姉様」

「お姉様!？」

ドタバタという音と共にシャーリの部屋の扉が開いた、アストライアは驚き完全に阿修羅あしゅらの後ろに隠れる、阿修羅あしゅらはアルテミスの頭を軽く撫でながらシャーリを見る。

「そっちは……………」

シャーリからは阿修羅あしゅらの後ろに隠れてるアストライアが見えなかった、そっと覗き込むとそこにはアストライアがいる、シャーリは驚き片膝を付いて頭を下げた。

「あ、アストライア様! 申し訳ありません!」

「……………気にしない」

「はい?」

「……………大丈夫」

アストライアは若干微笑んでシャーリを見た、恐らく最初の阿修羅あしゅらと同じような感じだ。

「お姉様、何でココにアストライア様が?」

「一緒に来たいって行っただから」

アストライアはシャーリを見て頷いた、しかし何故かシャーリの顔

が凍る。

アストライアの隣にはいつの間にかミルがいた、ミルはアストライアを舐め回すように見る。

「……………ミル？」

「……………やっぱり、ルーリスちゃん！」

ミルはアストライアを阿修羅あしゅらからはぎとるように抱きつく、その瞬間シャーリの顔は絶望と不安で溢れた。

「ミル！何してるの！？」

シャーリはアストライアからミルを引き離れた、そしてそのままシャーリはミルの頭を押さえてひざまづく。

「アストライア様！あるまじきご無礼、お許し下さい」

「ルーリスちゃん、私だよ！ミル、覚えてるよね？」

「ミル！口を慎みなさい！」

「……………気にしない」

アストライアはシャーリの手を退けてミルを起こした、ミルは満面の笑みでアストライアに抱きつく、アストライアは微妙な笑顔でミルの背中に手を回す、シャーリと阿修羅あしゅらの頭にはクエスチョンマークが浮かぶ。

「ルーリスちゃんもバチカンにいたんだ」

「……………第9階、アストライア」

「もしかしてルーリスちゃんがアストライア様！？」

アストライアは無言で頷く。

廊下の感動の再開はシャーリの部屋に場所を変更された、アストライアは大人しく座り、ミリはずっとアストライアを見続ける。

「まずは、アストライアとミルの関係から話して」

「私とアストライアちゃんは同じ孤児院にいたんです、でも私がお買い物行って帰って来たら孤児院が無くなって、みんな血だらけで倒れてる中にアストライアちゃんがなくて、皆に聞いても孤児院の事もアストライアちゃんの事を知らないって言うの」

恐らく孤児院はダークロードに襲われたのだろう、そしてその一切を忘れたのはホーリナーが関わっているから、それがアストライアか否かは分からない。

アルテミスは腕輪を指差した。

「……………友達」

「友達がディアンギットの腕輪になったの？」

アストライアは頷いた、ディアンギットの腕輪が人に付くのは色々なパターンがある、阿修羅^{あしゅら}は貰った物、アストライアは友達、他にも感情の高ぶりや、特定の場所に行ったから等、色々な理由がある。

「でも良かった、アストライアちゃんが生きてて」

「……………アタシも」

「アストライアちゃん、色々お話ししたい事もあるし見せたい物もあるからお散歩に行こうよ！」

アストライアは笑顔で頷くと、ミルは立ち上がり手を差し出す、アストライアがその手を掴むと、走ってシャーリの部屋を出て行った。残された阿修羅^{あしゅら}とシャーリは呆然、何となく二人の関係が分かった。

くらい。

「感動の再開、ですよね？」

「そうなるんじゃない」

「でもアストライア様は神選10階でミルは育成所の生徒、良いんですか？」

「アストライアも楽しそうだったし良いのよ」

阿修羅^{あしゅら}は旧友の事を思い出した、普通の女子高生だった最後の最後まで一緒にいた親友、今でも思い出すと苦しくなる過去である。

「アルテミス様はミルと同じ年なのにあんなに立派で、ミルが迷惑かけなければ良いんですけどね」

「アルテミスも楽しんでるから良いんじゃないの、神選10階になる前の仲間と別れて寂しかっただろうし」

シャーリは何故か苦虫を噛み潰したような顔をした、阿修羅^{あしゅら}はその意味が分からない。

「お姉様、神選10階の仲間は神選10階だけなんですよ」

阿修羅^{あしゅら}は更に難しい顔をする、阿修羅^{あしゅら}には日本支部の面々も仲間だと思っているからだ。

「神選10階になる程の力を持ったホーリナーを支部長達が手放す訳ないじゃないですか、神選10階に来る人はその支部の厄介者なんですよ、支部長が手に負えなくなったらホーリナーを神選10階にする、言わば問題児の集まり何です」

阿修羅^{あしゅら}は驚きを隠せない、何故なら日本支部長の金色孔雀^{こんじきくじゃく}は、死ん

でも阿修羅あしゅらを手放さないと思ったからだ、そして阿修羅あしゅらの中に一つの可能性が浮かんだ。

「はあ、多分私は元帥に無理矢理連れて来られたんだ」

「何ですか？」

「知らない、でも日本支部のボスが女を手放すとは思えない」

バチカンと日本で何かしらの取引があったか、元帥が金色孔雀こんじきくじゃくを脅したか、それに阿修羅あしゅらに変わる誰かが入る予定がある、それしか考えられない。

「仮に問題児の集まりだったとして、タナトスは納得出来る、でもメルポメネやダグザみたいな人を手放すのは分からないんだけど？」
「メルポメネ様はあまりの美しさで、男のホーリナーが任務に集中出来ずに死者が続出したから、ダグザ様は頭が良すぎて支部長をないがしろにしすぎてバチカンに送られたらしいですよ」

この二人ならあり得ないと言いきれないのが凄い、阿修羅あしゅらは苦笑いを浮かべたまま固まった。

神選10階が色物な理由もそこにある、変わり者だからこそ問題児になる。

「お姉様は日本支部ではどんなだったんですか？」

「楽しかったよ、私よりも少し歳上の女の子と、ミルよりも少し歳上の女の子、その3人でよくお菓子を食べに行ってた」

阿修羅あしゅらより歳上の緊那羅きんなら、最強という言葉あしゅらを阿修羅と2分したホーリナー、年下の摩和羅女まわらによ、遠距離の暗殺や命中力だけなら世界一、アルテミスよりも急所を突くのは上である。

「お菓子の食べ歩きなんて楽しそうですね」

「じゃあ今度行く？」

「良いんですか!？」

「当たり前でしょ、それにイタリアの街も案内してほしいし」

「喜んでお願いします!」

阿修羅^{あしゅら}は日本支部とは違うながらも、着実に穴を埋め初めている。

09..波旬

A m e r i c a w a s t e l a n d

荒れ果てた荒野をひたすら歩き続けるダグザとメルポメネ、埃が舞い上がり草は枯れ果てている。

今回の敵はスコル、北欧神話の狼、神話等はダークロードを伝説にするタメに作られた物語、VCSOが世の中に自然に風化させるタメだ、日本では自然災害や疫病に変えて風化させている、ヤマタノオロチや鬼が良い例だ。

「何でスコルなんでしょう？」

「スコル、古ノルド語で‘ 嘲るもの ’ を意味する、北欧神話と言われるくらいだからアメリカにいるのは不自然だな」

「何か引っかけありますね」

「俺達は任務を遂行するだけだ」

メガネの奥のポーカーフェイスのダグザと、ブロンドの髪の毛をなびかせながら目を細めて笑顔を作るメルポメネ、恐らく神選10階で二人程頭の回転が速い者はいない、それ故にこの違和感にも気付いてしまった。

「いませんね」

「本来ならこんな依頼が来る事自体がブルーローズなんだがな」

「あら、美しい表現ですね」

詩的な表現するのはキザなダグザならではの、伊達に知識神の神徳を

掲げている訳ではない。

二人が更に歩くこと10分、突然空中に黒い穴が空いた、二人は警戒して腕輪に触れる、ダグザの得物は2本のトンファー、名はサラスヴァティー、メルポメネの得物は1m四方の布と手袋、名はラフスキン、名の通り鮫肌のように荒れた布。

「何でこんな所に？」

「来ましたよ」

黒い穴から2m程の狼に似た生き物が飛び出してきた、コレがスコル。

ダグザは左手のサラスヴァティーをスコルの口に入れ閉じれないようにした、右手で顎から殴り上げて間合いを取る。

スコルは背中から落ちるがすぐに体制を立て直して二人を威嚇する、ダグザはサラスヴァティーを回しながら、メルポメネはラフスキンを引きずりながら近付く。

スコルが地面を蹴ると地面は深くえぐれている、そして人間のそれを遥かに超えるスピードで二人の後ろに回りこんだ。

「メルポメネ」

「ハードウン【硬化】」

メルポメネがラフスキンを広げると正方形の壁となる、スコルがそれをひっかくと一瞬で爪が削れた。

全て削れる前にスコルは間合いを取るが、ダグザが横に先回りして、ダグザはスコルの下に入り込み肋骨を殴り上げる、骨が折れるような音と共にスコルの悲鳴がこだまする。

ダグザはスコルの動きが止まった瞬間スコルの目の前まで走り込む、スコルの顔が下がった瞬間、鼻の頭をサラスヴァティーで殴った、

スコルの頭は地面に叩き付けられる。

ダグザは間合いを取りスコルの出方を伺う。

「弱い、神話になる程の生物がこれほどか？」

「語り継がれた物語ですよ、少しの誇張くらいは愛敬でしょ？」

ダグザが鼻で笑ってスコルを見るとそこにスコルはいなかった、気付いた時には眼前にスコルの前足がある。

「速い!？」

ダグザは何とかサラスヴァティーで防ぐが体制が不十分だったために吹き飛ばされた、ダグザの頭から爪の傷痕と流血。
そしてスコルは一瞬消えるとメルポメネの前に現れた。

「ハードウン【硬化】！」

メルポメネは神技を放つ前にラフスキンの形を変えてそれで固めた、ラフスキンは剣に形を変える。

スコルは前足をメルポメネに振り下ろす、メルポメネは圧されながらも剣で前足を受ける、しかし傷付いてるのはスコルの前足、ラフスキンは全てを削り落とす言わば最強のヤスリ。

「触れる事すら出来ない相手、どんな感じですか？」

スコルは前足から血を流しながら間合いをとった、しかしメルポメネはその後を追う、スコルが止まった瞬間、メルポメネはスコルの前足に剣状のラフスキンを突き刺した。

「グギヤアアアア！」

「その汚い肌、変え時じゃないですか？」

ラフスキンの手袋を填めた手を手刀の形にする、そして足に突き刺すとそのままスコルの皮を剥いだ。

返り血を浴びてもその笑顔から付いた二つ名は、鮮血、メルポメネの事を恐れを込めて『鮮血のメルポメネ』と呼ぶ、鮮やかというのは半分は敵の醜さへの皮肉である。

悶絶するスコルはもう一方の前足を振り上げ、メルポメネに向かって振り下ろす、しかし前足とメルポメネの間には頭から流血するダグザがいる、ダグザはサラスヴァティーでしっかりと前足を受けた。

「あら、ありがとうございます」

「それより、もう少し返り血を浴びないで戦えないのか？」

「私という真っ白なキャンパスにダークロードの真っ赤な血、これこそ最高の芸術だとは思いませんか？」

「思わない」

ダグザは即答でサラリと答えた、戦いのえげつなさはモリガンと2分するだけある、初めてメルポメネの戦いを見た者は気分を害し戦闘不能になると言われている。

スコルは足に刺さったラフスキンを無理矢理引き抜くと間合いを取る、そして遠吠えをすると身体中の毛が逆立ち始めた。

「ヤバそうだな」

「まだ何かあるのかしら？」

「仕方ない」

ダグザは目を閉じた。

「フォーサイト【予知】」

ダグザは目を開いたが何の変化もない、そしてスコルは目の前から一瞬で消えた、そのスピードはベロシティ【光速】にも匹敵する。メルポメネは完全に見失った、メルポメネが次にスコルを確認したのは、ダグザがスコルの前足を受けた時だった。

「やっぱり味方にとると頼もしいですね」

「死にたくなければそこから動くな」

フォーサイト【予知】、それは全てがスローモーションになる上に、相手の2秒後の行動が残像のように見える神技、つまりダグザの前ではどんなスピードも通用しない。

スコルは再び消えるが現れた時にはダグザに前足を受けられている、メルポメネはその光景をただ立ち尽くして眺めるだけ、恐らく今のスコルの動きを目で見えるのはダグザだけであろう。

しかしスコルのスピードは落ち始めてきた、既に攻撃の瞬間がメルポメネに確認出来るくらいに。

「幕引きだ」

ダグザは腰の辺りでサラスヴァティーを構える、そしてスコルを強く睨み腰を据える。

「エクスプローション【爆発】」

スコルの振り下ろした前足をダグザが殴ると、サラスヴァティーは

爆発した、スコルの前足は千切れ吹っ飛ぶ。

「では私が最後に……………」

「いや、俺がやるから——」

「エクスペンション【拡大】」

ラフスキンは巨大化するとスコルの頭に巻き付いた、ダグザはそれを見たく無かった、そのおぞましきは郡を抜く。

メルポメネはスコルの頭に巻き付けられたラフスキンを引っ張った、スコルの物凄い悲鳴はすぐに納まり、真っ赤になったラフスキンがメルポメネの手に戻った時、スコルの原形を留めていない顔がそこにはある、削りに削られ半分以上の大きさになった頭。

「ムナクソ悪い」

「そうですか？」

ダグザは頭の血を拭いてスーツに付いた埃を叩き落とした、メルポメネは美しいブロンドの髪の毛も、真っ白な透き通るような肌も、カミウムマーンの詩集の入った純白のドレスも真っ赤に染まっている。

メルポメネは顔や肌を拭いている時、空中に黒い穴が空いた、そこから赤黒いフードが頭を出す、そしてそこから赤黒いローブを着た悪魔が出てきた。

悪魔は顔がぐちゃぐちゃになったスコルを見ると顔を蹴り飛ばした。

「使えないネ、噛み殺せって言ったヨ」

頭を踏みつけながら言い放つ、あから様にイライラしている、そしてフードを取るとダグザとメルポメネを睨んだ、みつ編みの腰に掛

かる髪の毛につり目のまだ幼さが残る女の子。

「フッ、怪我してるネ、弱いネ」

「言ってる事が矛盾してるぞ、弱い奴に俺達を殺させようとしたのか？」

「そうネ、お前ら弱いネ、だから雑魚でも殺せる思ったヨ」

ダグザは警戒して再び腕輪に触れる、サラスヴァティーを握り回しながら攻撃のタイミングを伺う。

「戦うネ？」

「貴様、悪魔だな？」

「正解ネ、波旬ヨ」

「チャイニーズだな？神の時の名前は？」

「火神、祝融」

「わざわざ言うとは、愚かだな」

「殺す相手ネ、知ってても無駄な事ヨ」

波旬は腕輪に触れた、得物は棍、名は承影、右手は腰の辺りで握り左手は胸の高さで伸ばして握った。

「貴様らの目的は何だ？」

「知る必要無いネ！」

波旬は地面を蹴った、素早く無駄の無い動きでダグザに向う、メルポメネが腕輪に触れようとしたがダグザがそれを阻む。

「俺一人で大丈夫だ」

「気をつけて下さい」

サラスヴァティーの回転が速まる、波旬はスピードを殺さずに喉元に承影を突き出す、ダグザは回転したサラスヴァティーで打ち落とす。

しかし波旬はその勢いを殺さずに半回転させて、承影をダグザの頭に振り下ろす、ダグザはもう一方のサラスヴァティーで防いだ。

「弱いネ」

波旬はダグザを蹴り飛ばすと、体制を崩したダグザの腹を突く。

「ガハッ！」

そのまま反対側を使ってダグザの頭を思いっきり打ち抜いた。

「グハア」

ダグザは何とか踏ん張ると間合いを取る、頭からはとめどなく血が流れ出し、片目の視界がゼロになる。

「フォーサイト【予知】」

「それ知ってるネ」

「なら勝ち目が無い事も分かるな？」

「欠点がある事もネ」

波旬は素早い動きでダグザに近寄るがダグザには全てが見えている。通常ならば常人離れた素早い連撃も全て受け流す、しかしダグザも波旬も気付いていた、それでも波旬が圧してる事に。

ダグザは受け流す事は出来てもカウンターする余裕が無い、悪魔だからとかそういう簡単な理由ではない、単純に武術が常人離れしているだけ。

「飽きたネ、コレで終わりヨ」

波旬は大きく振り被りダグザの頭めがけて承影を叩き込む、ダグザは右手のサラスヴァティーで防ぐが、承影の1／3が折れてダグザの背中を打ち抜いた。

「クハッ！」

ダグザはうつ伏せに波旬の前に倒れた、波旬は頭を踏み潰すと背中に承影を突き付ける、そこを突けば心臓が貫かれる。

「ダグザ！」

「来たら殺すヨ」

「何が目的だ？」

「目的？無いヨ、ただ殺しに来ただけネ」

波旬はダグザの頭を更に強く踏みつける、ダグザは苦痛に顔を歪ませ、再びスコルに付けられた傷口が開いた。

「そこでお前が見てもコイツは死ぬけどネ」

「メルポメネ、逃げる」

「ダメネ、生き残りたいなら片方殺して仲間なるネ」

「頼む、逃げてくれ」

「うるさい！黙るネ」

波旬は怒りに顔を歪めてダグザの頭を何度も踏みつけた、メルポメネは涙を浮かべて唇を噛み締めダグザから目を反らした。

「もう虐める飽きたネ、死ネ」

波旬は承影を振り上げた、しかし振り下ろそうとするが振り下ろせない、波旬の腕には誰かに握られている。

「ルシファー様はお怒りだ」

「その声はベルゼブブ!？」

「勝手な行動は慎め」

「神選10階殺す、何が悪いね!？」

「ルシファー様は望んでいない」

波旬は赤黒いフードを被っていて顔は分からないがベルゼブブと呼ばれた者の手を振りほどき、睨みつける。

「帰るぞ」

「何でネ!？」

「何度言わせる? ルシファー様の怒りに触れたいのか？」

「チッ、分かったネ」

二人はベルゼブブが出てきた黒い穴に帰って行った。

メルポメネは慌ててダグザに近寄ると上半身を抱き上げた。

「大丈夫?」

「死にはしない」

「今すぐ誰か呼ぶからそれまで待てますか?」

「大丈夫だ」

メルポメネはホーリナー専用の携帯でアメリカ支部の救護班に応援を求めた、そしてダグザの血でドレスを更に赤く染める。

ダグザはこんな中でも悪魔についてのデータをまとめた、ダグザが神技を使っても勝てなかった悪魔は神技すら使っていない、ダグザ

は鼻で笑うと拳を握り締めた。

10：祭

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

ヘリオスは任務後の報告書との格闘に追われていた、ヘリオスから言わせればエビルユニオンの群れの方が圧倒的に楽しい、ヘリオスは報告書が溜りすぎて倒れた事もあるくらいだ。

報告書を書き終ったヘリオスは床で死んだ虫みたいになっていた時、誰かが扉をノックした、ヘリオスはゴキブリみたいに這って玄関まで行き、扉を開けた。

ここには阿修羅が立っている、阿修羅の顔は何故か暗い、ヘリオスは阿修羅の顔を見るとゆっくり立ち上がった。

「どうしたんスカ？」

「ダグザが負けた」

「手合わせでもしたんスカ？」

「違う、任務中に悪魔が現れてその悪魔に………」

ヘリオスは阿修羅同様に暗い顔になった、しかし空元気の満面の笑みで阿修羅を元氣付けようとするが、阿修羅にはショックが大きすぎたらしい。

「生きてるんスよね？」

阿修羅は無言で頷く、ヘリオスは本当の笑顔で阿修羅の両手をヘリオスの両手で挟む、今の阿修羅にはそれが暖かく感じられた。

「死んでないなら良いじゃないッスか、ダグザも疲れてただけッスよ」

「ダグザの傷は頭からの軽い流血だけ、それにダグザは神技を使ったのに悪魔は武術だけだったんだって」

ヘリオスは今度こそ本気で笑顔を失った、ダグザの神技を知っているからだ、ヘリオスでもダグザと神技ありで戦ったら勝算は低い。

「でも何でダグザと悪魔は戦ったんスか？」
「分からない」

落ち込んだ阿修羅とヘリオスはドアの所で黙ったまま立ち止まってしまった、うつ向き、流れる沈黙、ヘリオスは必死に辺りを見回して話の種を探した。

そしてヘリオスの目はカレンダーで止まった、ヘリオスの顔がパアッと明るくなると阿修羅の肩を掴んで揺らす。

「阿修羅！ フェスティバルに行くッスよ」

「お祭り？」

「そうッス！」

「でもそんな気分じゃー」

「行けば気分も晴れるッスよ！ そうと決まったら行動あるのみッスね、行くッスよ！」

ヘリオスは阿修羅の手を掴んで部屋を出た、すぐ近くにあるエレベーターのボタンを押して待つ、阿修羅はあまりの出来事にヘリオスに手を掴まれている事に気付いてない。

I t a l y c i t y a r e a

ヘリオスと阿修羅は祭の出店を見ながら歩いてる、日本とは違った華やかさに阿修羅は半分元氣を取り戻した、後の半分はヘリオスが阿修羅の腕を振り回すタメに萎えてしまう。

阿修羅は当然スイーツの食べ歩き、相手がヘリオスのせいで名前等は分らないが、薄い記事を重ねて中にクリームが入った物やチーズケーキに似た物、名前が表記されていても英語や日本語ならまだしも、イタリア語を読めるのは恐らくダグザとククルカンくらい。

「よく食べるんスね」

「そう？」

「さっきから食べっぱなしじゃないッスか」

阿修羅はそうかなと言いつつも食べ続ける、二人は歩き続けていると目の前から見慣れた二人が、赤茶色の天パで右目の見えない少年と、金髪のみディアムボブで襟が高いジャージのファスナーを一番上まで閉めた女の子。

「ユピテル！ククルカン！」

ククルカンは大きな手を振りながら走って来る、ユピテルはそのククルカンに引っ張られながらつんのめるような状態で走って来た。

「良いな良いな！スフォリアテッラとパスティエーラだ、一つ頂戴！」

「良いわよ」

「サンキュー！」

ククルカンは阿修羅が紙袋の入れたクリームの入ったお菓子のスフォリアテッラと、チーズケーキのようなパスティエーラを両手に取って頬張った。

「スフォリアテッラとパスティエーラって言うんだ」

「イタリアの南部のお菓子よ、うちのには北部の方が好きなんだけどね」

「南部と北部で何か違うの？」

「全っ然違うって！」

「食べてみたい」

「行く行く！？」

「行きたい！」

ククルカンはOKと言いながら口にスフォリアテッラを放り込んだ。

「コレがら広場で踊りやるみてえなんだけど、行がねえか？」

「行く行く！」

「私も行きたい」

「じゃあ俺も行くッス！」

4人は広場に向けて歩き始めた、阿修羅とククルカンは笑いながらお菓子を食べ、ユピテルは3人を先導する、ヘリオスは楽しそうにククルカンと話てる阿修羅を見ながら。

4人が広場に着くと既にイベントは始まっていた、人を掻き分けて一番先頭まで行く、ククルカンにとっては馴染みが深いが、阿修羅にとっては初めて見る踊り、ユピテルは手拍子しながら子供のよう楽しむ。

「どうどう？イタリアの踊りって綺麗でしょ？」

「俺的にはフラダンスの方が優雅で良いッスね」

「私の国のよりは良いわね」

「オラの国には踊りがねえから良いなあ」

「田舎は踊りも無いんスカ？」

ユピテルはヘリオスを見て膨らんだ、阿修羅はそんなに年が、離れて無いのにユピテルがいやに可愛く見えてしまった。

『タラントウラか』

「「「モリガン!？」」」

「はあ、脅かさないで」

『僕もこの踊り好きだね』

「本当本当!？やっぱりイタリアは良いよね？」

『イタリアが良いわけじゃないよ、この狂ったようなタランチュラみたいな踊り方が好きただだよ』

4人は呆れてため息をついた、モリガンは踊りを見ているが顔を覆

う真っ白なマスクのせいで表情が分からない、不気味な二重声が更に感情を隠す、そしてモリガンの真っ白なローブを引っ張る誰か。

「……………任務」

「アストライア、何してるの？」

『そうだ、忘れてた、ユピテルとククルカンはコレから任務だよ』

二人は明らかに不満そうな顔でモリガンを見る、ククルカンよりも小さいモリガンは若干見上げるような形となった。

『僕達も任務だからコレで失礼させてもらうよ』

「……………バイバイ」

二人は人混みを抜けて任務へ向かった、ユピテルはごねるククルカンに手を差し出す、ククルカンはジャージの襟が高く口が隠れてて表情が分かり憎いが、不機嫌なのは何となく分かる。

「行くべえ」

「行くよ！行けば良いんでしょ！？」

ククルカンはユピテルの手を引っ張ると、人混みを押し退けて任務に向かった。

残されたヘリオスと阿修羅は顔を見合わせ無言で考える、そしてヘリオスは暗みがかった空を見上げ、阿修羅の手を掴んで笑う。

「コレから花火があるんすよ！」

「見るの？」

「とっておきの場所があるからそこに行くッスよ！」

ヘリオスは阿修羅の手を引いて人混みを抜け出し、元来た道を引き

返した。

笑いながら走るヘリオス、阿修羅はヘリオスに置いて行かれないようにしっかりと手を掴み、ヘリオスの手を掴んだまま走った。

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

結局バチカンに帰って来てしまった、阿修羅はブスツとしながら本部塔を上がる。

そして物置となっている階で止まる、阿修羅は頭にクエスチョンマークを浮かべながら、ヘリオスに手を引かれて物置を走った。

ヘリオスは荷物を掻き分けて奥に進むと、窓を開けて阿修羅を呼んだ。

「ココはとっておきッスよ」

「え？ちょ、ちょっとヘリオス！」

ヘリオスは阿修羅を手招きすると笑って窓から飛び下りた、ココは地上50m以上、そこから飛び降りたらホーリナーと言えど間違いなく死ぬ。

阿修羅は慌てて窓から顔を出すと下ではヘリオスが手を振っている、しかも地上50mどころか2m程下にいる。

「ココは本部塔と居住塔の連絡通路の屋根ツスよ」

「はあ、先に言ってよ」

「早く来るツスよ」

阿修羅は安心して窓から飛び下りた。

「あとココ滑るツスよ」

「先に言ってよ！」

阿修羅は案の定足を滑らせ、ヘリオスに受け止められた、阿修羅が顔を上げるとヘリオスの顔が至近距離にある、受け止めたのだから極自然。

阿修羅は顔を真っ赤にしてヘリオスから離れた。

「ちえ、良い感じだったんすけどね」

「う、うるさいわね」

「それよりも、あっち見るツスよ」

阿修羅はヘリオスの指差す方を見るとそこにはイタリアの街並みが、暗い中で街頭や家の灯り、更には祭の灯りで彩られている。

ドンッ！

真っ暗な夜空に打ち上がる大きな丸い花火、国は違えど花火に大差はない、爆発する度にイタリアは花火色に染まる。

「凄い………」

「立ってないで、座るッスよ」

阿修羅は目を反らさずに座った、地上50mからの花火観覧、真っ正面で上がる花火は同じ物でも一際美しく思える。

ヘリオスは食い入ってる阿修羅の手を握った、阿修羅は気付いていても拒否はしない、応えもしないが。

「夜の太陽みたいッスね」

「ヘリオスと被らせてるの？」

「バレちゃったッスね」

阿修羅はため息をついた、しかし何故か笑みになってヘリオスの横顔を見つめる、花火が打ち上がる度に照らされるヘリオスの顔、お世辞抜きで整った顔と言える、大きな目に大きな口、鼻筋は通っていて日本人とは作りが違う。

「ヘリオス、阿修羅の神徳って何か知ってる？」

「当たり前ッスよ、戦闘神ッスよね？」

「一つはね」

花火を見続けてたヘリオスは大きな目を更に大きくして阿修羅を見る、若干つり上がった目に形の整った目と鼻、大和撫子、それが阿修羅を形容するに等しい言葉。

「戦闘神の阿修羅、でも国によっては太陽神の阿修羅なの」

「本当ッスか!？」

「本当よ」

「何か運命ッスよ!これは運命意外の何者でも無いッスね」

ヘリオスは身を乗り出して身体中で感動を表現した、阿修羅はその時に近付いたヘリオスの顔に見入ってしまった自分を嫌悪した。

「でも太陽が二つもあったらうっとうしいわよね」

「そうッスか?いつでも日が昇ってて良くないッスか?」

「それも嫌」

「じゃあ一つになれば良いんスよ」

阿修羅は目を真ん丸にして、顔を真っ赤にした、ヘリオスは分かっているのかいないのか分からないが、ケロツとしている。

阿修羅は無言で花火に視線を移すが、隣が気になり全く目に入らない。

男性に対する免疫が皆無に等しい阿修羅にとって、心拍数を急上昇させるのには充分過ぎるくらいだ。

11..奇襲

Over the unknown

移動用のヘリコプターに乗っているアストライアとモリガン、人形のように全く動かないモリガンと、窓に張り付いて外を食い入るように見るアストライア。

下は一面に広がる森、そこが何処の国だかも分からない。

二人が向う国はインド、エビルユニオンが暴れまわっているらしい、簡単な任務だが油断大敵である。

アストライアはマグカップに入ったココアを両手で飲みながら、人形のように動かないモリガンを見た、まるで電源を切ったロボットのように、全く動かない。

「……………モリガン」

『何?』

全く動かずに言い放つ2重声、神選10階の大きな謎のモリガン、何もかもが未知数で、その生態を知る者はいない。

「……………何か動かないから」

『動かなきゃいけないのかい?』

「……………そ、そうじゃないけど」

モリガンは再び動かなくなった、ただたんにアストライアが見てて気持ち悪いだけ。

その後もモリガンはピクリとも動かなかった、アストライアは見な
いように窓に張り付いていると、下のジャングルが何か光った。
アストライアは軽く首を傾げると、普通に座り直した、その時、ヘ
リコプターの真ん中を高速で、何かが貫いた、ヘリコプターは徐々
に揺れ始め、遂には落下しはじめた。

『コレはヤバイね』

「……………どうなる？」

『落ちる』

モリガンは腕輪に触れた、しかしヘリコプターの中で取り出すには
少々大き過ぎた。

モリガンの得物は巨大な鉄球、名はシヴァ、シヴァはヘリコプター
を壊し、アストライアとモリガンを外に放り出した。

「……………し、死んじゃう」

『大丈夫だよ』

「……………無理」

『グラビテーション【重力】』

モリガンはシヴァを投げ捨てると、アストライアを掴んだ、その瞬
間、二人の落ちる速度がゆっくりになった、シヴァはジャングルに
突き刺さり大きな埃を舞いあげる。

二人は舞い上げられたビニール袋のように落ち、静かにシヴァの上
に降りた。

グラビテーション【重力】は重力を操る神技、重くするも軽くする
もモリガン次第。

「ちえ、生きてたのかよ、つまんないの」

シヴァの下から眺める赤黒いローブをはおった悪魔、声や大きから少年と思われる。

手にはナイフが握られている、名はティルヴィング、これでヘリコプターで打ち落としたのだ。

『悪魔か、何で僕達を？』

「それはあれだよ、‘命令’、ってやつ？」

「……………誰の？」

「それは言えないよ、ルシファー様に怒られちゃうもん」

『親玉はルシファーか』

悪魔は口を押さえて明らかな同様を見せてる、モリガンの口からはクスクスという声が聞こえる、アストライアはモリガンの後ろに隠れて、シヴァの上から悪魔を見下ろした。

「でもちっちゃいからハズレだね」

『お前に言われたくないね』

「お前じゃないよ、リバイアサンだよ」

『自分から名乗ってどうする？』

リバイアサンは再び頭を掻いて慌てる、モリガンは必死に笑いを堪えてるように見える、不気味な小さい口喧嘩、端から見たらそうにしか見えない。

「良いもん！みんな死んじゃうんだから！」

『みんなって事はお前も死ぬんだよ』

「君ムカつく！僕絶対に許さない！」

リバイアサンは無数のティルヴィングを様々な方向に投げた、ティルヴィングは木に当たり、一斉に四方八方からアストライアとモリ

ガンに向かって来た。

アストライアは危機を感じて腕輪に触れた、得物は剣と盾、名は剣がフリスト、盾はヒルド。

『後は任したよ』

アストライアは頷き、モリガンと背中合わせになった、右手には剣のフリスト、左腕には盾のヒルド。

モリガンは鉄球から伸びる鎖を掴んだ、二人は同時に動き出すと、金属音がジャングルに鳴り響く。

アストライアはフリストとヒルドで半分を打ち落とした、そしてシヴァの鎖の輪の中にはティルヴィングが引っ掛かっている。

『コレくらいで僕達を殺せるとでも思ったの？』

「コレくらいで僕が満足すると思ったの？」

モリガンの目の前には跳び上がったリバイアサンがいる、リバイアサンの両手にはティルヴィングが握られていた。

ティルヴィングはナイフ、投げれば遠距離、握れば近距離、アルテミスにも引けを取らない遠距離型だ。

『リデューション【縮小】』

シヴァは一気に縮み、リバイアサンは横薙に斬りかかるが、モリガン達は地面に落ちて行った。

リバイアサンが着地すると、野球ボール程になったシヴァを持っているモリガンがいた。

モリガンはシヴァを手遊びしながら、真っ白な仮面の奥の瞳はリバイアサンを睨んでいる。

『参考程度に聞くけど、お前の神の頃の名前は？』

「海神のニヨルドだよ」

『やっぱり、‘反響’か』

‘反響のニヨルド’、遠距離型のナンバー2としてVCSOでその名を轟かせた、任務の最中味方を殺して失踪、その後の消息は不明だった。

リバイアサンはクスクス笑っているモリガンを見て辺りを見回した、間違い探しの如くその異変に気付いたのだ。

「……………エクステンション【延長】」

ジャングルの中から剣が伸びて来た、それはリバイアサンの斜め上、リバイアサンは何とか避けるが、視界の片隅に小さいシヴァを投げようとしているモリガンが目に入った。

モリガンはシヴァを投げると、リバイアサンに向かって行った、モリガンの手元の鎖はどんどん出ていく。

『チェンジ【転化】、エクスペンション【拡大】』

リバイアサンの前でシヴァは元に戻ると、勢いを殺さずにリバイアサンに向かって飛んでいる。

リバイアサンはティルヴィングでシヴァを受け止めるが、その重量に圧され、吹っ飛んだ。

モリガンはシヴァに飛び乗ると、辺りを見回し、リバイアサンを見つけた。

モリガンはそのまま玉乗りのようにシヴァを転がす。

重いハズのシヴァを足で軽々と回せるのは、ディアンギットの腕輪から形成された得物は、使用者に掛かる重量を無視出来るから、どんなにシヴァが大きくなってもモリガンなら振り回せる。

モリガンが玉乗りしているシヴァは、迷わずリバイアサンに向かっている、どんどん加速し回転も加わり手に負えないくらいに。

「うわわわぁ！こんなのあり？」

リバイアサンは慌てて立ち上がり、横に跳んでギリギリで避けた。

「…………エクステンション【延長】」

伸びたフリストがリバイアサンに襲いかかる、リバイアサンは何とかティルヴィングで打ち落とすが、再びモリガンが乗ったシヴァが転がって来た。

「ううえ！方向転換も出来るの！？」

モリガン、シヴァに乗り、根こそぎダークロードを踏み潰す様から呼ばれた二つ名は‘道化のモリガン’、不気味な仮面やローブ、そしてシヴァを操る様がピエロだからだ。

「もう！僕怒った！」

リバイアサンはバックステップで大きく間合いを取った、そして地面に2本のティルヴィングを突き刺し、両手を天に向けた。

「ツナミ【津波】！」

リバイアサンが手を出すと、リバイアサンの後ろからジャングルを飲み込むような津波が、モリガンは慌ててシヴァの鎖を投げ、アストライアに巻き付けて引き寄せた。

モリガンはアストライアを抱きかかえながら、シヴァの後ろに隠れ

る。

『エクスペンション【拡大】！』

「そんなの自然の力の前では無意味だよ」

直径10m程に巨大化したシヴァを津波が軽々と飲み込んだ、シヴァはガタガタを揺れ始め、そのまま津波に飲み込まれて吹き飛んでしまった。

モリガンはシヴァを放し、アストライアを強く抱き締めると、津波の中で受け身を取った。

しかし津波の力は強く、中にある折れた木にモリガンの体は強く打ち付けられていた。

「ぜんぶ無くなっちゃえ！」

津波が収まり、丸裸になったジャングルの遥か向こうにモリガンがいる、その腕の中にはしっかりとアストライアがいるが、モリガンの体は血で赤く染まっている。

「……………モリガン！大丈夫？」

『……………』

気を失っていて反応が全く無い、仮面の下からは血が流れ出し、モリガンの怪我の危険性を物語っている。

アストライアは立ち上がり、腕輪に触れて無くなった剣と盾を形成した、名はフリストとヒルド。

「……………モリガン、可哀想」

アストライアはぬかるんだ地面を思いっきり蹴ると、リバイアサン

に向かって走り出した、どれだけ流されたかは分からないが、リバイアサンはこっちの死を確認するまでいるハズ。

リバイアサンは口笛を吹きながらモリガンとアストライアの死体を捜してた。

「何処にいるんだよ？生きてたらルシファー様に怒られちゃうだろ」
そしてまた口笛を吹きだす、とてもそこにジャングルがあったとは思えないような大地、それほどの神技をともに受けて、生きているハズがない、リバイアサンはそう考えていた。

しかし、目の前から一人の少女が走って来た、それは紛れもない、死んだと思っていたアストライアだ。

ブロンドのツインテールは元気を無くし、フリルのミニスカートは足に張り付いている、真っ白なパーカーは水を吸って重そうになっていて、顔は怒りに充ち溢れている、だがそれは紛れもなくアストライアだ。

「一人って事はもう一人は死んだんだ、ラッキー」

リバイアサンは腕輪に触れた、得物はナイフ、名はティルヴィング。試しに2本ティルヴィングを投げるが、軽々と弾かれた、リバイアサンはしっかりとティルヴィングを握り、構えた。

アストライアは跳び上がり、リバイアサンの図上からフリストを振り下ろした、リバイアサンは軽々とティルヴィングで受けると、ナイフで突こうとするが、アストライアにその腕を蹴り飛ばされてしまった。

アストライアはそのままヒルドでリバイアサンの頭を殴り飛ばした、その時にフードが外れ、覗かせた顔はまだ幼くあどけなさが残る少年の顔。

リバイアサンは受け身を取り間合いを取る、アストライアはフリストを後ろに向けていた。

「……………エクステンション【延長】」

フリストは伸びると地面に突き刺さり、物凄い勢いでアストライアをリバイアサンに向けて押し飛ばす。

「そんな使い方ありなの!？」

アストライアは勢いを殺さずに、元に戻ったフリストを振り下ろした、リバイアサンは横に跳び避けたが、着地したアストライアは、左腕を巻き込んでいた。

「……………ミーティア【流星】」

ヒルドを思いっきり振ると、ヒルドと同じ大きさの光が流星の如くリバイアサンに襲いかかる。

リバイアサンは着地したばかりで、方向転換出来ずにテイルヴィングで受けるが、受けきれずに吹き飛ばされた。

赤黒いローブと幼い顔には泥が付き、頭はアストライアにヒルドで殴られ流血、両腕からはアストライアの神技で血が滲出ている。

コレが近距離型と遠距離型の差、埋めようの無い圧倒的な力。

「……………帰って、人、殺したく無い」

「やだね、今帰ったらルシファー様に怒られちゃうもん」

「……………お願い」

リバイアサンは跳び上がった、そして頭を下に向ける。

「ファイヤーワークス【花火】！」

跳び上がったリバイアサンの身体中から、ティルヴィングが花火のように放たれた。

アストライアは反応しきれず、急所を避けるように防ぐ事は出来たが、身体中に切傷を作ってしまった。

「油断したね！間合いを取れば僕の勝ちなんだよ！」

リバイアサンはアストライアがよろめいた隙に、ティルヴィングを投げて左太股に突き刺した。

アストライアは片膝を着いた頃には、目の前にリバイアサンがいた、リバイアサンは腕を大きく引いて、アストライアを殺意の目で睨んだ、アストライアはうつ向き目を瞑り覚悟した。

…。

……。

…………。

……………。

……………。

……………。

……………。

『いつまでうつ向いてる？』

アストライアが目を開くと、目の前には赤く染まったローブを着たモリガンがいる、モリガンの手には鎖が握られ、鎖にティルヴィングが突き刺さっている。

しかし、完全には受けきれずに、モリガンの仮面をも突き刺していた。

仮面はそこから縦に亀裂が入り、二つに割れてしまった、仮面の下

は幼いが、冷たく鋭い目をした少年の顔が、人形のように真っ白で冷たい瞳はリバイアサンを睨んでいる。

「潰れちゃえ」

少年にしては低い声だが、まだ声変わりの片鱗すら見せていない声。モリガンはアストライアを抱いて、バックステップで間合いを取ると、リバイアサンの図上からはシヴァが落ちて来た。

リバイアサンが上を見上げた頃には遅く、シヴァに押し潰された。

「この事は誰にも言うなよ」

「……………何で？」

「何でもだ」

「……………可愛いのに？」

「関係ない」

モリガンはポーカーフフェイスを装っているが、顔は人間らしく真っ赤に染まっている、コレがモリガンの仮面で隠された本当の姿。

二人は近くの支部に電話をかけながら、歩いてその場から遠ざかった。

遥か後方からリバイアサンが押し潰されたシヴァを見てるリバイアサン。

折れた丸太に座りながら、血が滲む両手で頭の血を拭った。

リバイアサンはシヴァに押し潰される前に、足下に黒い穴を作りそこに落ちていた、そしてココに再び現れ、二人の動向を眺めていたのだ。

「あゝあ、負けちゃった、ルシファー様に怒られちゃうよ、波旬はベルゼブブに物凄い虐められてたし、あれは怖かったなあ、血まみれのボロボロになるくらい虐められてもん、……………僕もかな？」

リバイアサンは自分の体を抱きながら震えた、そして震えながら立ち上がると、弱々しくあるいて黒い穴の中に入って行った。

12..増殖

Singapore uninhabited island

ユピテルとククルカンはモーターボートに乗って、シンガポールの海を移動している。

今回の任務は無人島にいるエビルユニオンの殲滅、しかし詳細が皆無に近い、VCSOの信頼関係で神選10階が動いたが、疑問は払拭しきれない。

そんな事はつゆ知らず、ユピテルは船酔いと戦っていた、畑育ちのユピテルにとって海は天敵に近い。

そんなユピテルを気に掛けてるのか、からかっているのかは分からないが、先ほどから話しかけている。

「見て見て！海が凄い綺麗！」

「オラはもう無理だ」

「何で何で！？……………キャー！ユピテル、イルカイルカ！」

異常にテンションが高いククルカンにより、少なからず元気を取り戻しつつある。

しかし、まだククルカンに付き合う程のエネルギーはない、船酔いとの格闘に勝てるくらいだ。

「凄い凄い！ユピテルあの島超綺麗！」

「あそごが任務だあ」

「何であんな綺麗な島にエビルユニオンが出るのよ、……………ムカつく」

ユピテルは水を一気に飲み、酔いを多少覚まして無人島に上陸した、ククルカンはユピテルを呼ぶと、ユピテルな飛び付くようにして上陸した。

船は戦いの巻き添えを受けないように、沖の方で待っている、つまりこの島にはエビルユニオンとユピテルとククルカンしかないことになる。

二人は島の森を掻き分けながらエビルユニオンを探した、エビルユニオンがいる所には、特有の嫌な空気が漂っているはずなのだが、この島にはそれがない、その事にすら気付かないユピテルとククルカン。

森が終わると、明らかに人工的に拓かれた場所、しかしククルカンは喜んで走り出した。

「凄い凄い！ココに誰かいたのよ！ねえユピテル？」

「そうかもしれないねえ、な」

「何か空が綺麗」

空を見上げるククルカンの後ろに黒い穴が開く、一瞬でユピテルの顔が変わった。

「ククルカン危ねえ！」

「……………風が変わった」

ククルカンの顔が変わり、ククルカンが軽く体をを反らすと、矢が空を切った。

ククルカンとユピテルは同時に腕輪に触れる、ユピテルの得物は三

又の矛、名はトライデント、ククルカンの得物は刃の付け根から柄を覆うように反対側までナックルガードの刃が付いた槍、名はルドラリス。

ククルカンとユピテルの隣に行く構えた、その顔にいつもの明るさは無く、風のように柔らかな表情。

黒い穴の中からは赤黒いローブを着た二人の悪魔が出てきた、二人は同時にフードを取り、少女と女性がユピテルとククルカンを見る。

「ベリト、死神いないよ？私死神と戦いたいのに」

「敵は選ばない、目の前の敵を殺すのみ」

「そうだよねえ、ルシファー様の命令なら何でもする犬だもんねえ」

グチる少女はアスタロト、そのアスタロトを凍りそうな程冷たい目で睨む女性がベリト。

ユピテルとククルカンは二人に気を配りながらも、辺りを見回した、それは明らかにおかしい二人の得物からだ。

アスタロトの得物は湾曲した双剣、名はカリバーン、そしてベリトの手には何も握られていない、つまり矢を放ったのは他にいる。

「コレを探しているのか？」

ユピテルとククルカンがベリトを見ると、腕輪から液状の鉄が流れ出し、弓矢を形成した。

「何よ何よ！何で隠したりするのよ！」

「隠した訳ではない、ただ、私の得物には定形がない、それだけだ」

そう言うとベリトの手元の弓は液体に戻り、再び固まると剣の形を成した、得物が形を変えるなどあり得ない事、腕輪に刻み込まれた不変の記憶、それを变える事は例え悪魔でも不可能である。

「我の得物に定形は無い、名はグラムだ。
こう言えば理解出来るか？ 神の時は鍛冶神のダヌ」

鍛冶神のダヌ、『千器のダヌ』、千の武器を操ると言われた事から
この二つ名が付いた。

「何かベリトばかり名乗ってずるい、私はアスタロト、前は豊穰
神のアシュタロトだよ、よろしくね」

満面の笑みでペコリと頭を下げた、周りにすら緊張感を与えるベリ
トと、緊張感の欠片も無いアスタロト、そのせいで必要以上に緊張
するユピテルとククルカン。

アスタロトは軽く跳ねながら体をほぐす、ベリトはグラムを様々な
形に変えて手遊びをしている、ユピテルはトライデントをしっかりと
握り相手の出方を伺う、ククルカンは……………。

「ああ！もう！退屈退屈！誰か動いてよ」

「貴方が動けば良いんじゃないの？」

「それだ！ククルカン、スッタート！」

ククルカンは地面を思いっきり蹴り飛ばして走り出した、それにつ
られてユピテルも走り出す、アスタロトは跳びはねながらカリバー
ンを振り回している、ベリトは大剣を造り出し両手で握った。

ククルカンはルドラシスをアスタロトの喉元に突き出す、アスタロ
トは左手に握ったカリバーンの刀身で受けると、右手のカリバーン
で難払う、しかしククルカンは柄を覆う刃で防ぐと、ルドラシスを
思いっきり突きだし、アスタロトを突き飛ばした。

「わぁお、馬鹿力あゝ」

「うるさいうるさい！それ言うな！」

「気にしてるんだ、馬鹿力馬鹿力馬鹿力馬鹿力馬鹿力馬鹿力……」
「うつるさゝい！」

ククルカンは跳び上がると、ルドラシスを振り上げた、そしてアスタロトに向かって思いっきり振り下ろすが、大振り過ぎて軽々と避けられてしまった。

しかし地面は砕け、砂埃が舞い上がる。

「ツイスター【竜巻】！」

ククルカンはルドラシスを半身になり、片手で突き出すと細い風の渦がアスタロトに襲いかかる、小さく細くても力は自然の竜巻をも凌駕する力。

アスタロトは両手のカリバーンで防ぐが、凄まじい力で吹き飛ばされた、アスタロトはジャングルに突っ込むと、木を何本か倒し止まった。

「人が傷付くような事言った罰よ！」

「2号が死んじゃった、可哀想」

ククルカンは慌てて後ろを向くと、地面にあぐらで座っている無傷のアスタロトが。

アスタロトは笑顔でククルカンを見るとVサインを作った、ククルカンは理解出来ずに一歩後退りする。

「な、何なのよ？確かにうちはあるたを殺したはず」

「殺したのは2号だよ、マザーはココ」

「何よ何よ！何したってっていうの！？」

「インクレイス【増殖】」

アスタロトの背中から脱皮するようにアスタロトが出てきた、そしてあぐらをしているアスタロトの後ろに立つと、二人同時に笑う。

「き、気持悪い！」

ククルカンは顔を真っ青にして、恐怖に満ちた目で座っているアスタロトを突き刺した、赤黒いローブを更に赤く染めてルドラシスに倒れ込んだ。

「あ、あは、あはは、アハハハハハハ！馬鹿馬鹿！死んじゃ意味無いじゃない！バツカじゃないの！？」

本体を倒したハズだが後ろのアスタロトは顔色一つ変えずに笑っている、確かに本体は赤い血を流して死んでいる、心臓を貫いたのだから確かだ。

「早く死になよ、マザーが死んだのよ？」

「うーん、どっちも私だから片方死んでも、もう片方は死なないんだよね、アスタロトであってアスタロトでない、みたいな？むしろ今度からは私がマザー？」

「ちよっと待ってよ32号！マザーが死んで2号も死んだんだから、3号の私がマザーになるのが筋でしょ？」

ククルカンが声がする方を見ると、そこにはアスタロトが腕を組んで立っている、そしてそれにつられるようにゾロゾロとアスタロトがジャングルから出てきた。

ククルカンは真っ青な顔で辺りを見回し、目に涙を浮かべた。

「イヤイヤ！ 気持悪い！………吐気がする」

「だらしないなあ、気持悪いって言われるこっちの身にもなってよ、案外傷付くんだ——」

「ツイスター【竜巻】！」

大きな竜巻がアスタロトの群を包み込む、しかし先ほどの神技程の力は無い、踏ん張れば何とか飛ばされずに済む程だ。

ククルカン は膝から崩れ落ちると、頭を抱えて髪の毛をグシャグシヤにする、目を大きく見開き気が狂ったようにも見えた。

「バキューム【真空】！」

竜巻に吞まれたアスタロトは切り裂かれ始めた、それは鎌鼬、風の中に真空が舞い、それに触ればその皮膚は鋭く裂かれる。

致命傷になったアスタロトはバタバタと倒れていく、残ったアスタロトは驚き、ククルカンを睨む。

アスタロトが驚くのはその力の強大さではない、2つの神技の同時発動、それが出来るのは神選10階でもククルカンのみ、悪魔でも辿り着けない領域。

辺り一帯をアスタロトの血で染め、風は吹き止んだ、全てのアスタロトが体を切り裂かれ倒れている。

ククルカンは不気味な笑い方をしながら頭を抱えていると、空中に穴が開く、そこから出てきたのは嫌というほど見たアスタロト。

「嘘、嘘嘘、イヤ、ヤメテ、見たくない、もうイヤ！」

「あらら、気が狂っちゃった？ まあしょうがないよね、私自身も操ってて気持悪かったもん」

「アヤツル？」

「そう、私が正真正銘のマザー、インクレイス【増殖】はいわば操

り人形を増やすようなモノ、だから戦いのど真ん中にいると集中出来ないんだよね。

それとマザーを殺しても他がマザーになるのも嘘だよ、最初から全部が私の人形、私は高みの見物ってやつ？」

ククルカンがアスタロトを見る目は死んだ魚のよう、身体中の力が抜け、そこにいつもの威勢などはない、アスタロトがつついても無反応である。

「ありやりや、まあ良いや、その体借りる前に私の神の時の二つ名教えてあげる、‘無限のアシュタロト’、殺しても殺しても出てくる事からこうなったんだって。

でもね、私って戦場タイプじゃないんだよね、むしろ、隠密タイプ？コレやる時は相手を殲滅するし、口止してあるからあんまり知られてないんだよね」

アスタロトはククルカンに近付き、ルドラシスを蹴り飛ばして抱きついた、アスタロトはそっと目を閉じて、体をククルカンに預ける。

「パラサイティズム【寄生】」

アスタロトはククルカンに溶け込むように消えた、そしてククルカンは立ち上がると、軽く跳び跳ねる。

「案外軽い体だ、この綺麗な体、貰っとくよ」

ククルカンは笑うと歩き出す、先程までの落ち込んだ重い空気は無く、明るく軽い足取りだ。

まるで別人のように。

13::苦悩

Singapore uninhabited island

ユピテルは三叉の矛、トライデントを構えながらベリトの出方を伺う、ククルカンの事が気になるが、今は気を配ってられるほど余裕は無い。

ビリビリと肌を切り裂くような緊張感、一瞬でも気を抜けば殺されるような殺気。

数々の修羅場をくぐり抜けたユピテルでさえ、冷や汗が滝のように流れる、相手は何も構えず何も持たずに立っているだけ、なのにユピテルは一步も動けない。

「動かないのか？」

急に言葉を発したベリトにユピテルは体を震わして驚いた、ベリトは初めてポーカーフェイスを崩し、若干微笑んだ。

「驚かなくても良いんだぞ？」

「クッ、うるせえ」

「私は貴様みたいな可愛い男はタイプだ、仲間になるなら見逃してやるが？」

「断る！ククルカンがたたがってるのに、オラが裏切るわけにはいがねえ」

「そういうところも好きだ」

ユピテルの緊張はピークに達した、ベリトの場違いな余裕がユピテルの緊張を煽る、そして呼吸が必要以上に速くなる。

「大丈夫か？」

ベリトは一瞬でユピテルの目の前に現れ、ユピテルの両頬を両手で挟んでいた。

ユピテルの顔は青ざめ、手が震え始めた、ベリトの妖艶な雰囲気とその場の緊張感の不相応さは並ではない。

「怖がらなくても良いんだぞ、私は貴様の事を気に入っている」

「お、オラは好きじゃねえ」

「残念だ」

ユピテルは両手でベリトを突き飛ばし、トライデントを構えた。

息を呑み、トライデントを突き出す、ベリトは剣を造り出し、トライデントを真っ正面から受けた。

「本当に残念だ」

「ククルカンを裏切るごとは出来ねえ！」

「まあ良い、死んだ顔もまた一興」

ユピテルはトライデントを剣にひっかけて、そのまま弾き飛ばすとベリトを蹴り飛ばした。

尻餅をついたベリトに跨るように、ユピテルはトライデントをベリトの喉元に突き付ける。

「攻められるのも一興か」

「早く消えろ、オラ人殺しはしたぐねえ」

「甘いわね、敵に情けをかけるというのか？」

「オメエは敵じゃねえ、道を間違えた仲間だ」

「あ、あは、アハハハハハハハ！」

ユピテルは至って真剣な眼差し、ベリトは高々と笑い、冷静になると涙を流した。

ユピテル程他人の涙に弱い人間はいない、ベリトはこんなくだらない策略をする程ずる賢い人間でもない。

「私、他人に情けを掛けられたのは初めてだ」

「なら神に戻れ、オラが手伝ってやる」

「フロッグ【剣山】」

ベリトが地面に腕を突き刺すと、地面から無数の針が突き出してきた。

ユピテルは避けきれずに、右腕と右足を貫かれた、ユピテルはトライデントを突き立て、体を押し上げながら引き抜くと、手足からはとめどなく血が流れ出す、それと同じようにベリトの目からも涙が流れ出す。

「もう私は引き返せない、例え今神に戻ったとしても、ルシファー様に殺されるであろう」

「なら、オラが、守る、それでも、駄目か？」

ベリトは赤黒いローブで涙を拭った、そして力のある目でユピテルを睨む。

「感謝する、私は色々な意味で神選10階入りが有望視されていた、弱い支部の連中を若干の軽蔑の目で見ていたからだ。

その時、私の目の前にルシファー様が現れたんだ、ルシファー様は私の居場所をくれると言った、ホーリナーに嫌気が射していた当時の私には魅力的だったのかもな。

それ以来私は居場所を見付けるためにホーリナーを殺し続けた、多

分悪魔に居場所が無かったんだ、だから居場所を見付けるために殺してたのかもな？

貴様は何故神選10階に？貴様のようなホーリナーを支部長が手放すとは思えないのだが？」

ユピテルは苦笑い浮かべた、そのベリトの悲しい顔、悪魔になるよりも神選10階になっていれば、居場所が見付けられたかもしれない、ユピテルはその事ばかりが頭を中で考えていた。

「オラはこんな性格だから、支部長の任務重視でホーリナー軽視の意義を唱えだんだ、そじたらすぐに神選10階入りだ、でもオラは後悔しでねえ、オラは神選10階になってククルカンとも、ベリトとも会えた、それだけでも良い」

ベリトは呆れた顔をで微笑んだ、ユピテルはそれ以上の笑顔で笑う、ベリトは初めて悪魔になった事を後悔した、そしてユピテルに会ってしまった事にも。

「貴様は私が殺す、それが私の悪魔としての居場所だ」

「じゃあオラは動けなくしてでもベリトを連れて帰る」

ユピテルはトライデントを構えた、ベリトは当て付けの如く三叉の矛を造り出す、二人は微笑むと地面を蹴り飛ばした。

素早い連撃で辺りには火花が飛び散る、使い慣れているユピテルにすら圧し負けていないベリト、それでも二人の顔には笑いが耐えない、ユピテルは右腕と右足に空いた穴等気にせず、血を飛び散らせながらベリトの攻撃に応える。

「強いなあ」

「貴様もな」

二人の体は徐々に切れていく、疲れや気の緩み等からだ、しかしそれすらも無いかのように二人はこの戦いを楽しむ。

しかし、その二人を邪魔する一つの人影、金色のミディアムボブの髪の毛に、青い襟で口が隠れるジャージ、そしてカミウムマーンの刺繍が入ったプリーツスカート。

「二人ともシューリョー！」

その大きな声で必然的に二人の手は止まった、声の主を捜すとそこにはククルカンが笑顔で手を振っている、ユピテルは安堵の表情を浮かべ、ベリトは明らかに不満の表情を浮かべた。

「手出しはするな！」

「そうだククルカン、オラは大丈夫だ」

「えー、つまんない、私も殺したい」

ユピテルの顔が若干引き吊った、そしてベリトに向けていたトライデントを地面に下ろす。

「私も参加させてよお」

「お前誰だ？」

「やだなあ、ククルカンだよ、頭の前から足の爪先までククルカンでしょ？」

「違う！ククルカンは、私、なんて言わない、俺の言う事も嫌々聞く」

ユピテルの体がバチバチと鳴り始めた、髪の毛は徐々にはね始め、電気が徐々に目に見えるようになった。

「うわぁ、バレちゃったか、凄いなえ」

ククルカンの頭がガクツとうなだれると、背中の辺りからアスタロトの顔が出てきた、ユピテルは恐怖で顔を歪めると、唇を噛み締め弱々しくアスタロトを睨んだ。

「ククルカンに何をした!？」

「大丈夫だよ、体を借りてるだけだから、……借りてるね」

アスタロトは再びククルカンの体に戻ると、ククルカンの顔が上がり、不適な笑みで笑った。

「絶対に許さない、ククルカンの体を汚しやがって……」

「借りてるだけだって、肉体的にも精神的にも害は無いから安心して、君が何もしなきゃね」

「エレクトリフィケーション【帯電】!」

ユピテルの体が電気で包まれた、長い前髪は浮き上がり右目が覗く、右目の瞳は白く、視力が失われている。

この目は腕輪の力と引換に視力が失われた、ユピテルは嵐の日に畑仕事をしていたら、雷が体に落ちて気付いたら腕輪が着いていた。

「うげえ、気持悪い目」

「ククルカンの体を返せ」

「やだよお、欲しかったら力ずくで取り返すんだね」

アスタロトは腕輪に触れた、得物は柄を覆うナックルガードが付いた槍、名はルドラシス。

アスタロトは大きく踏み込むと、ルドラシスをユピテルの喉元に突き出した、しかしユピテルは軽々と避ける。

アスタロトは一旦引くと再び突いた、ユピテルは難なく避けるが、アスタロトは何度も何度も突く、しかしユピテルに当たるところか擦りもしない。

「ずるいよお、どうせその電気ですらしてるんでしょ」

「出来ない事もないが、触れなければ不可能だ」

ユピテルが全て避けられる理由、それは右目、右目は光を捉える事は出来ないが、微弱な電気信号にいたるまでの電気を捉えられる、つまり相手の体の電気信号を見て、相手の一手先を詠む、そしてそれだけではない。

ユピテルが地面を蹴ると、地面がえぐれて一瞬見失う、油断というのもあるが、そのユピテルの生身では有り得ないスピード。

「何それ！？ベロシティ【光速】にしては遅いよね？」

アスタロトは顎に人差し指を当てて首を傾げた、その余裕はククルカンの体に取り付いているから、ユピテルがククルカンを傷付けられないのは気付いていた。

アスタロトはユピテルめがけて何度も突くが、当然相手の行動が分かるユピテルには当たらない。

「ねえ、つまんないよお、攻撃しないの？」

ユピテルは無言で避け続ける、アスタロトの一瞬の隙を探して。

「ほらほら、しんぢゃ……う、よ？」

アスタロトの体の動きがぎこちなくなってきた、ベリトは目を丸くし、ユピテルは心配しながらククルカンの体を見る。

ククルカンの体は顔を押さえてルドラシスを地面に突き刺した、そしてカクカクと不規則、不自然な動きをする。

「な……、に？………で、でろ、でろ………、じゃ、ま……、しない、で………、ゆ、ゆび………う、そ？」

「ククルカン！？」

丸で一つの体を二つの精神が取り合うように、ククルカンの体が苦しみもがいている。

そして動きが止まるとククルカンの体はユピテルを睨み、ルドラシスを構えた、ユピテルはそれにつられてトライデントを構える。

「ちょっと邪魔が入っちゃったけど、問題ないわよ」

「アスタロト、今のは何だ？」

「分かんない、でもこの体の持ち主の精神に邪魔された」

「貴様のその力はまだ未知数だ、自分の精神が崩壊しないように気を付けろ」

「分かってるよ」

アスタロトは再びユピテルに突きの連撃を放つ、ユピテルは電気信号による先読みだけではなく、生身ではあり得ない動きで全てを避ける。

そしてアスタロトの手元が一瞬ぶれたのを見計らい、ルドラシスをトライデントもろとも地面に突き刺し、アスタロトの後ろに回り込む。

うなじの辺りを軽く触ると、バチツという音と共にアスタロトが崩れ落ちた、アスタロト本人だけではなく、ベリトも目を丸くしている。

「ククルカンの体から早く出ろ、さもなくばこのままバチカンに持

って帰る」

「アスタロト、撤退だ」

アスタロトは素早くククルカンの体から出ると、ユピテルから離れた、ユピテルはククルカンのうなじを触ると再びバチッという音が鳴る。

「何したのよ？その体全然動かない」

「何にせよ、今回撤退だ、相手の力の全貌が掴めない以上、こちらが不利。」

貴様、次に会う時は必ず殺す、でなければ私の悪魔としての理由が無くなる」

ベリトとアスタロトは黒い穴の中に消えて行った、そしてユピテルがククルカンの頬を軽く叩くとククルカンはゆっくりと目を開ける。

「やっと起きた」

「ユピテル、ゴメンね、うちのせいで」

「大丈夫だ気になってねえ、それよりまだ痺れ残ってるか？」

ククルカンは指を動かすと頷いた、ククルカンの体が動かなくなった理由、それはユピテルの微弱な電気でククルカンの体の電気信号断ち切ったから、それにより脳からの信号はシャットダウンされ、体を動かす信号が届かずに終わる、その後遺症が痺れというわけだ。

「ユピテルまた怖くなった」

「ホンドか？」

「本当本当、俺、って言ってたもん」

「まあククルカンが無事だったからそれでよしだべ？」

ククルカンが首が外れんばかりに頷く、ユピテルは笑顔で立ち上がると、ククルカンに手を差し出す、しかしククルカンは思うように体が動かず、腕を上げる事すらぎこちない。

「ダメダメ！ユピテル、抱っこ！」

「うえ！？」

「動かないんだもん、ユピテルのせいなんだから責任取ってよ」

ユピテルは顔を真っ赤にしながら、先に背中に腕を通した、しかしその瞬間、ククルカンの上に倒れ込む。

「何何！？セクハラ？」

「ち、違う、また切れた見てえだ」

「切れたって……、筋肉が！？」

「ちよつと無理しすぎた見てえだな」

先ほどの戦い、ユピテルは電気で無理矢理脳を呼び起こし、人間では不可能なスピードで無理矢理動かしていた、簡単に言えば自分を操っていた事になる、それ故に肉体が限界を超えたのだ。

「ちよつとちよつと！どうするのよ！？」

「ククルカンが動けるようになるまで待つしがねえ」

「動けるまでってどれくらいよ！？」

「最低でも20分だ」

「嫌嫌あああああ！」

広い無人島にククルカンの高い声だけが響いた。

14：昇進式

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

阿修羅は久しぶりの休みを楽しんでいた、あまり休みが無く、戦い漬けだった毎日だったので休みはありがたい。

阿修羅は日本にいた頃によく聴いていた曲をかけた、暇な部屋での唯一の娯楽だ。

阿修羅は軽く鼻歌を歌いながら、本を読んでいたその時、ホーリナーに支給される携帯電話が鳴った、音楽を消して通話ボタンを押し、耳を近付ける。

「やりましたよお姉様！」

電話口で大声を張り上げるシャーリ、阿修羅は軽く耳を離すと、ゆっくりと近付けた。

「ど、どうしたの？」

「受かったんです！私ソルジャーになったんです！」

「本当に！？良かったわね」

「来週からもう初任務ですよ、その前に明日の天使昇進式があるんですけどね」

育成所の生徒からソルジャーになるためにはそれなりの式がある、半年に一回あるソルジャー昇進試験を突破した者が、一人一人その意気込みと誓いを立てるというもの。

単なる儀式なので、失敗したからといって、ソルジャー落ちすると

いう事はないが、大勢が見守る中で前に立つというのは、かなりのプレッシャーがある。

「今回は10人だけだったので持ち時間が長いんですよえ」

「見に行つてあげようか？」

「そんないいですよ、神選10階のお姉様が出るようなモノでも無いですし」

「楽しそうだし行くわよ」

電話口で慌てるシャーリをよそに阿修羅は電話を切った、あまりVCSOの事を知らない阿修羅にとって、VCSOで起こる全てが新鮮だった、特に神選10階は特権階級で、阿修羅の欲求を満たしてくれる。

それに友達の晴れ舞台を見ないわけにはいかない、そういう野次馬魂的なモノが、阿修羅を行動にかきたてた。

翌日、阿修羅は団服を着て広場に出た、既に準備がされていて、任務に出ていないソルジャーや、育成所の生徒達がいる。

阿修羅はその人混みを掻き分け先頭に向かった、端の方で邪魔しなければ見せてもらえと思ったからだ。

阿修羅は先頭までたどり着くと、仕切ってる偉い人を見つけた。

「あのお、すみません」

「邪魔邪魔、忙しいから後にして」

偉い人は阿修羅を見ずに追い払おうとした、自分にも否がある阿修羅は腰を低くしながら顔を出す。

「ちょっと良いですか？」

「だから邪魔だっ——」

偉い人は振り向き、阿修羅を睨むと真っ青になって固まった、割りと慣れた反応にだが、何故か阿修羅は頭を下げる。

神選10階だからといって人より偉いとは思っていない阿修羅は、神選10階は同僚、それ以外は見下す事は無く、なるべく対等に見ている。

偉い人は片膝を付き、深々とひざまづいた、阿修羅は慌てて同じ目線になると、何故か謝る。

「阿修羅様とは知らずに大変ご無礼を！」

「はあ、それより昇進式を見学しても良いですか？」

「そんな滅相もない、神選10階様が見られるようなモノでは……

…」

「今後私の背中を預ける人達ですよ、やっぱり見ておきたいじゃないですか？」

「そ、それではすぐに準備させますので！」

偉い人は走って何処かに行ってしまった、阿修羅は困り果てて、壇上に腰掛けると、辺りを見回した。

ソルジャーや育成所の生徒は阿修羅を見ている、憧れや羨望、純粋に見とれている者、野次馬的な者まで様々だ、しかし皆遠い存在を見るような目で見ている、女子寮の生徒を除いては。

その中から一人の少女が満面の笑みで前に出てきた、阿修羅もよく知った顔。

「お姉様！」

「ミル、久しぶり」

ミルは壇上に座っている阿修羅の太股に両腕を乗せ、その上に顔を乗せて上目使いで阿修羅を見る、回りのソルジャーは顔面蒼白、女子寮の生徒は羨望の眼差しを送る。

「ききき、君！何をしている！」

戻って来た偉い人は世界の終わりのような顔でミルを見た、阿修羅とミルは至って普通の顔で偉い人を見る。

「あ、オリフィエル様すみません、ちゃんと列に戻ります」

「違うだろ！阿修羅様になんたるご無礼を！」

「良いんですよ、ミルは私の大切な友達ですから」

阿修羅は軽くミルの頭を撫でると、ミルは満面の笑みを浮かべる、偉い人もといオリフィエルはどっと疲れたらしい。

「オリフィエルさんっていうの？」

「はい、オリフィエル様は育成所の一番偉い人なの」

「そうなんですか、そんな偉い人に上からモノ言ってすみませんでした」

阿修羅は壇上から飛び下りると頭を深々と下げた、オリフィエルはそれにつられて頭を下げる。

「阿修羅様、そんな頭を下げないでください」

「でも私は傭兵風情ですし」

「しかし神選10階様ですし——」

「阿修羅！何やってるんスか？」

阿修羅とオリフィエル、そしてミルが声の主を捜すと、そこには買

い物袋をぶら下げたヘリオスが。
オリフィエルは再び頭を下げるとヘリオスは笑顔で挨拶した。

「何してるんスカ？」

「昇進式を見ようと思ってね」

「楽しそうッスね、俺も――」

「ヘリオス、俺に付き合うんじゃないのか？」

後ろの方から出てきたダグザ、ヘリオスは暫くの沈黙の後。

「ゴメン阿修羅！今日はダグザに付き合わなきゃいけないから、また今度誘って」

「いや、元から誘って無いから」

「バイバイッスよ」

ヘリオスはダグザの後ろに着いて走って行った、最近のダグザは何かおかしい、それに気付いてた阿修羅は、ヘリオス達の後を追おうとしたが、もう始まるとの声に断念した。

式が始まると、ソルジャーの団服を纏ったシャーリを入れて10名が出てきた、壇上の席に座ると、目の前はソルジャーや育成所の生徒で埋め尽されている。

シャーリは阿修羅を見付けると、より一層体がこわばり、無駄に力が入った姿勢になる。

式の内容は長々としたカミウムマーンへの誓いに始まり、ソルジャー総隊長のお言葉、オリフィエルのお言葉、そして新しくソルジャーになった者達の誓いの言葉、最後にカミウムマーンこと通称元帥の言葉で終る。

そして阿修羅の右側には元帥、左側にはソルジャー総隊長と、有り得ない顔ぶれに挟まれた。

元帥は色んな意味でやりづらいが、恐縮する程ではない。

しかしソルジャー総隊長は、岩のようにゴツゴツした顔立ちに、ステージ4のように大きな体、見た目だけならホーリナーの100倍は強そうなお方だ。

「何で阿修羅ちゃんがココにいるの？」

「お友達がソルジャーになるからよ」

「育成所にお友達？随分珍しいお友達がいるんだね」

元帥へラへラしたままの受け答え、その間にも使いの者が元帥にチーズケーキを届ける。

「阿修羅ちゃんもいる？」

「はあ、いないわよ」

二人のやりとりを微動だにせず聞いている総隊長、その空気で分かる威厳で、阿修羅の背筋は自然と伸びる。

無駄に長いカミウムマーンへの誓いも微動だにせず聞いている、その姿を軽く尊敬を含めて見る阿修羅。

「……では総隊長、お願いします」

司会の人が言うと、姿勢が良いまま立ち上がり、綺麗な歩き方で壇上に上がった、その瞬間にソルジャー全員の顔が変わる。

「ココにいる10人は神選10階様方の礎、己の命を差し出し、神選10階様をお助けする、生き残る事を考えるな、ソルジャーの命一つで神選10階様のお命を助ける、それが我々の使命だ！」

総隊長はそのまま壇上を下りた、そして阿修羅の隣に座ると、今度はオリフィエルが壇上に上がった。

阿修羅は隣の総隊長を嫌な目で見る、それは壇上で話した事だ、どうしても阿修羅は納得出来なかった、いくら偉い人でも、命を無駄にする人間は許せない。

「流石にあれじゃあソルジャー達が可哀想じゃないですか？」

「いえ、それくらいの覚悟でなければ困ります、我々は阿修羅様達の盾なのですから」

「違います、ソルジャーは私達を助ける言わば弓矢です、私達の背中を任せられる人達です。

それに日本でよく使われる表現では、1本の矢は簡単に折れてしまいますが、3本まとまれば折れません、ソルジャー一人一人はホーリナーに比べたら弱いかもしれませんが、ソルジャー特有の団体戦術は郡を抜くものがあります。

だから盾なんて言わないで下さい、敵の攻撃は剣でも防げます、弓矢がその間に相手を射抜けば、誰も傷付かずに済むじゃないですか？」

総隊長の難しい顔は嘲笑うような顔になった、天使の笑顔というのはみじんも感じられない、阿修羅はその笑い方が嫌でたまらなかった。

「矢も所詮は四、目を背けるのも矢の役目です、我々は捨て駒なんですよ」

阿修羅はムスツとして壇上を睨んだ、調度元帥が壇上への階段を上っているところだった。

元帥はマイクの前に立つと、阿修羅の方をちらっと見て、笑って手

を振った、阿修羅はため息と共に目を反らすと、自然は総隊長の左手首に当たる、そして少しだけ見えるその腕輪、阿修羅は目を大きく見開いた。

「それ、ディアンギットの腕輪ですよね？」

「いかにも」

「ってことは、総隊長さんはソルジャーじゃなくてホーリナー？」

「近からずとも遠からず、元はアルゼンチン支部でホーリナーをやっていたが、神選10階に憧れていた力不足な俺はソルジャーに志願したんです、俺みたいな奴は少なくありません、全隊長の7割は元ホーリナーです」

阿修羅はある事を思い出した、初めてヘリオスに会った時にソルジャー志望か？と聞かれた事。

ソルジャーとはホーリナーやダークロードが見える、特異体質な者が集まっただけの兵隊では無く、神選10階に憧れるホーリナーの集まりでもある。

ソルジャーで認められて神選10階になった例は珍しくない、神選10階の補充で各支部長全員が断った場合、総隊長から神選10階に抜擢されるのだ。

しかし、ソルジャー上がりの神選10階の命は長く無い、一番長くて5ヶ月、それほどソルジャーと神選10階の差は大きいのだ。

式はいよいよメインイベントに突入した、それは神選10階になるのと比較的に似ている、元帥の持っている腕輪のような物を腕に装着し、暫くするとタトゥーのようにナンバーが刻み込まれる、それはソルジャーを示すIDのようなモノ、その時の痛みは皆無だ。

「次、シャーリちゃん」

元帥はいつもの調子でシャーリの名前を呼ぶ、しかも女性には全然ちゃん付け。

今回ソルジャーになった者の内、シャーリが最年少だ、18歳でソルジャーになれるとはいえ、昇進試験を突破出来る者はそう多くはない、毎年一人ないし二人くらいしか出ないのだ。

元帥は緊張してるシャーリの腕に腕輪を装着すると、にっこりと笑ってシャーリの目を見た、ソルジャーにとって元帥は別世界の生き物、それを前にしたシャーリが冷静でいられる訳が無い。

「はい、終わり、それじゃお願いね」

元帥はシャーリをマイクの前に立たせる、シャーリはガチガチに緊張し、冷や汗プラス顔面蒼白でマイクの前にたった。

「ここに、今回、ささ、最年少で、ソルジャーに、な、った、シャーリです」

シャーリは思うように喋れない、そんなシャーリに見かねて、阿修羅は小さな声でシャーリを呼ぶと、シャーリに小さくガッツポーズを送った、シャーリは元気を取り戻し、笑顔で頷くと、力のある目でソルジャー達を見た。

「ふう、今回最年少でソルジャーになったシャーリです、神選10階様のためにも、この命尽きるまで全力を尽くす事を誓います」

阿修羅は教科書通りのシャーリに誓いが嫌だった、前にシャーリは阿修羅の前で『ソルジャーにはなりたいけど死にたくない』と言っているのだ。

ソルジャーの暗黙の了解で、神選10階を守って死ぬ事程本望な事はないらしい、それ故に生きたいと漏した者は皆に白い目で見られ

る。

10人全員の誓いが終わり、普通なら元帥からのお言葉になるはずなのだが、元帥は阿修羅を見ながらニヤニヤ笑っている、阿修羅は嫌な予感が頭を占領した。

「本来なら僕が激励の言葉か何かを言うんだけど、君達が死んでも守りたい神選10階様がいるから、その人のお言葉も聞いちゃおうか？」

広場が盛り上がるのと同時に阿修羅からため息が漏れた、拒否したいところだが、広場の盛り上がり方を見て断れる者はいない。

「それじゃあ、神選10階、呪われた第10階の――」

元帥が言い切る前に、阿修羅が物凄い速さで壇上にいる元帥の顔を蹴り飛ばした、広場は二つの意味で息を呑んだ、一つは元帥を蹴り飛ばした事に、そしてもう一つは阿修羅のスピードに。

元帥は前を見ていたので見えなかったが、反応出来た総隊長でさえ気付いたら阿修羅が壇上にいた、ソルジャーに至っては気付いたら元帥が吹っ飛んでいた、更にあれだけの不意打ちにも関わらず元帥は無傷、蹴られる寸前で腕ガードしたのだ。

「いきなりは無しでしょ、まあ僕はMだから嬉しいんだけどね」

「はあ、最悪な上司ね」

阿修羅は自分に注がれるいくつもの視線に気付いた、そして蹴り飛ばされた元帥は、阿修羅に喋るように促す。

阿修羅は洪々マイクの前に立つと、広場を埋め尽すソルジャーと育成所の生徒が目に入った。

「元帥から紹介があった第10階、戦闘神の阿修羅です、この中のソルジャーで私と任務を共にした人も少なくないと思います。

そこまで多くないソルジャーとの任務経験の中で、確かにソルジャーの方々は勇敢です、でも‘私達’のタメに命を使うのと、命を無駄にする事を履き違えている人がいます。

神選10階の殆どは貴方達を大切な存在だと思っています」

殆ど、それはタナトスとモリガンを抜いた全員の事、タナトスはソルジャーを虫以下にしか思っていない、モリガンは邪魔と言ってソルジャーを除け者にしてしまう。

「私達を助けようとした人は助けられます、でも命を無駄にする人は他人にまで危害が及ぶ、貴方達の命をけっして無駄にはしないで下さい。

ソルジャーとして一まとめにした命は沢山あります、でも、一人一人の命を一つずつしか無いんです、せめてその命、貴方達の一番大切な人のタメに使って下さい」

広場はざわついてる、総隊長と言ってる事が違う故の同様、そして阿修羅の甘さへの嘲笑。

それが分からない程阿修羅は馬鹿ではない、ダグザに比べればそれほどではないが、それなりに頭の良い阿修羅は、最初からこうなる事が分かっていた。

「はあ、分からないのかな？ 貴方達に無駄な事をされると困るの、ステージ5をたこ殴りにして、やっと殺せるくらいで意気がらないで、私達が相手にしてるのはエビルユニオン。

それに貴方達が死にそうなのに見捨ててる程非常でもない、出世のためか私達を崇拜してるのかは分からないけど、生き残りなさい、貴

方達ソルジャー一人の命で私達が助かるほど私達は弱くない、神選10階をナメないで」

広場がシラケる、そして元帥はニヤリと笑った。

阿修羅はシャーリに一言謝り壇上から降りると、そっと椅子に座り、足を組んで壇上の元帥を睨む。

「阿修羅ちゃんキツイ事言うでしょ？」

元帥はマイクを通して話しかけるように喋る、大物故の余裕か、緊張を知らない無頓着かは分からない。

「でもね、ココにいるソルジャー43隊872人、多分相手次第じゃあ神選10階に傷一つ付けられないよ、現にさっきの阿修羅ちゃんの蹴り、反応すら出来なかったでしょ？」

分かる？神選10階は一人一人が人間兵器、目の前に敵だけなら十分に力を発揮出来る、でも兵隊を気にしていると兵器も殺りづらいんだよね。

阿修羅ちゃんが言いたいののは、豆鉄砲風情がミサイルと同じ働きが出来ると思うなって事」

ソルジャー達は沈んでしまった、神選10階直下の軍隊として誇りを持っていた彼らだが、神選10階側の言い分を聞いて、その誇りは跡形もなくズタズタに切り裂かれた。

「ハウラースステージ5の氾濫、キルナの裏切り、ヘルソン消耗戦、ロンダのエビルユニオン、イエナの悲劇、……………そしてホーリナーラグナロク」

ホーリナーラグナロク、それは18年前に起った神選10階と悪魔

の、ホーリナー史上最悪の戦い、当時のルシファーが、天竜の巫女、^{あすら}阿修羅を奪おうとし、神選10階と悪魔が正面から戦った。その時の元帥まで現場に出た、そしてその時第3階だったのが今の元帥、契約神ミトラだ、生き残ったのは第7階の天空神ランギ、元帥（第3階の契約神ミトラ）、第1階の護法神の毘沙門天、^{あすら}阿修羅は自分の命と引き換えにルシファーを殺した。

「今挙げた戦いは僕がソルジャーに命を救われた戦いだよ、神選10階とソルジャーの連携が取れば、君達がしたかった事も出来る、だから神選10階に合わせて戦ってみな、神選10階も助けられるかもよ」

元帥はそのまま壇上から下りた、元帥が阿修羅を見ると、阿修羅は穏やかな笑顔で元帥を見た、元帥が言った事は阿修羅の願いと同じだからだ。

ソルジャー、つまり天使、天使は神を助ける者、そして、神をさらなる高みへ導く者。

15..力と疑惑

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

報告書を書くのが終わり、やる事が無いので、昼寝をしようと思った阿修羅は、ベッドに横になり石造りの天井を見上げた。

基本的にVCSOの各支部、本部共に全てが石造りになっている、神選10階の部屋や会議室も例外ではない。

阿修羅の部屋の木製の扉を誰かが叩いた、阿修羅はその主が誰だか容易に想像がつく。

アルテミスとククルカンは任務、メルポメネとアストライアは育成所で指導、モリガンとタナトスは任務終わりの帰路、ヘリオスとユピテルは毎度のパシリ。

そうなるに残るのは、阿修羅と任務に行き、恐らく報告書を書き終えたであろう人物。

阿修羅はゆっくりと扉に向かい、開けて良いと一言言うと扉が開き、茶色いミディアムストレートの髪に眼鏡、そしてスーツの下に刺繍の入ったTシャツを着ているダグザが立っている。

「何？」

「付き合ってほしい」

「何に？」

「修業だ」

阿修羅は首を傾げると、ダグザは阿修羅を無理矢理部屋から引きずり出し、エレベーターに押し込んだ。

阿修羅は頭の上にクエスチョンマークを浮かべたまま、本部塔の地下にある多目的スペースに連れて行かれた。

そしてダグザは何も言わずに、阿修羅にディアンギットの腕輪よりも大きい腕輪を渡した。

それはホーリナーが練習に使う、ディアンギットの鉄に霊体を透過させる装着、腕輪の上に装着させる事により、本来は霊体に当たらずのディアンギットの鉄からその能力を奪い、無機物にしか当たらないようにする（ホーリナーの団服は例外）。

それによりホーリナー同士が、神技抜きで本気で戦えるようになった、そしてそれにより任務成功率が30%も上がったというデータもある。

「俺と本気で手合わせをしろ」

「別に良いけど、何でそんな事？」

「負けたくないからだ」

そう言うと、ダグザは腕輪に触れた、得物は両手のトンファー、名はサラスヴァティー。

阿修羅も渋々腕輪に触れた、得物は長刀、名は夜叉丸。

ダグザはサラスヴァティーを回し始めると、阿修羅は右手一本で夜叉丸を持ち、腕から力を抜いた、そして体を前後に揺らし、前に倒れるのと同時に走り出した。

阿修羅はしなやかな動きで斬りかかる、ダグザは無駄の無い動きで受けると、素早くサラスヴァティーで殴りかかる。

完全にダグザに背中を向けている阿修羅だが、そのまま後ろ向きで蹴り飛ばす、ダグザのみぞおちにめり込むが、ダグザは踏ん張りサラスヴァティーを阿修羅の後頭部の寸前で止めた。

「本気を出せ」

「相討ちよ」

半身になったダグザの後頭部、死角となったところに逆手で持った夜叉丸が突き付けられている。

「ふっ、やるな」

阿修羅は間合いを取ると、それを追うようにダグザが走って来た、しかし、素早い動きでダグザの後ろに回り込み、上段から蹴り飛ばす。

ダグザは何とかサラスヴァティーで防ぐが、体勢を崩してしまった。阿修羅は夜叉丸を両手で握り、振り下ろしたが、ダグザは体勢を立て直そうとはせず、片手を地面に付いて、そのまま阿修羅の手を蹴り飛ばした。

阿修羅は夜叉丸を離してしまい、再び素早い動きで間合いを取る。

「その動きは何だ？」

「ベロシティ【光速】よ」

「嘘を付け、技名など言っていないし、反応出来る、それがベロシティ【光速】なわけないだろ」

「技名を破棄した分速度は落ちるけど、相手に何も悟られずに出来る、私が神選10階に入って編み出した技よ」

阿修羅は感覚だけで、技名を言わない事により速度は落ちるが、通常よりも速い動きが出来るので、相手の意表を突く事が出来る。

「流石戦闘神、そんなの聞いた事がないぞ」

「ありがとう、じゃあ私にも質問させて、ダグザの神技は体術ってよりも策略タイプでしょ？なのになにでこんな事を？」

「それが通用しない敵が現れたから、単純な事だろ？」

あの時からダグザの頭には波旬に負けた事しかない、完敗どころの話ではない。

神選10階でも神技を使ったダグザには一目置いている、しかし波旬は本気のダグザ相手に圧倒的な力の差を見せ付けた。

「ククルカンのような真似は出来ない、それなら体術の底上げしかないだろ」

「まあ良いわよ、私のタメにもなるし、付き合ってあげる」

「恩に着る」

再び阿修羅とダグザの乱戦が始まった、阿修羅の素早い攻撃を無駄無く返すダグザ。

そしてダグザの力のある攻撃をいなす阿修羅、その力は五分、体術タイプの阿修羅と神技タイプのダグザが五分、それは本気で戦えばダグザが優勢という事。

二人の修業は2時間以上にも及んだ、阿修羅とダグザは疲れきって壁にもたれかかっている。

「阿修羅、俺らに何か隠していないか？」

「私が隠し事？」

「そうだ、大きいなんてもんじゃない、阿修羅一人じゃ抱えきれないくらいのモノだ」

「はあ、そんなのあるわけ無いでしょ」

阿修羅は軽くあしらうと、軽く笑ってダグザを見た、しかしダグザ

の顔は至って真面目、それによって阿修羅の笑みは苦笑いに変わった。

「天竜の巫女、じゃないのか？」

「私があのだの伝説の‘天竜の巫女’？あり得ないわね」

「神の名、得物の名、生まれた年、全て説明がつく」

阿修羅の顔が若干険しくなる、しかし阿修羅に身に覚えがない、あのダグザが嘘を付くわけがないし、不確かな情報を信じる事もない。

「天竜の巫女’の阿修羅あすらには毘沙門天との間に、2人の子供がいた、そしてその子供はあの大戦以来消息を絶っている。

そして記録だとその5日後、阿修羅は日本で拾われている、その後子供が出来ない天獅子家に養子として貰われ、天獅子小町として16歳まで過した。

しかし16歳の時、当時の帝釈天、現ルシファーによりディアンギットの腕輪を取得する、それ以降は阿修羅として過ごし、新しいホーリーナーが見つかったのと、元帥が日本支部への資金提供を放棄するという脅しにより、神選10階に入り今に至る」

阿修羅は絶句した、ダグザは阿修羅の事についても知りすぎている、全てと言っても過言では無いくらいに、しかも阿修羅が知らなかった事まで。

「それでも‘天竜の巫女’なんて知らない」

「そうか、しかしそうになると‘天竜の巫女’はもう一人いる事になる」

「もしかして緊那羅とか？私と同じくらい強いし」

「あり得ないとは言いきれないな」

阿修羅とダグザが神妙な顔をしていると、エレベーターが止まり、扉が開くと、中からは金髪に黒い肌、刺繍の入ったベストにポケットの多いハーフパンツ。

「「ヘリオス？」」

満面の笑みの太陽のようなヘリオスが立っている、しかしヘリオスの笑顔は一瞬で膨れっ面になった、阿修羅はその顔にすら愛敬を感じた。

「ダグザばかりずるいッスよ」

「これからやるか？」

「違うッスよ、俺も阿修羅と一緒にいたいって事ッス」

ダグザは呆れてため息をついたが、阿修羅の目はホーリナーから女になった、その事に阿修羅もヘリオスも気付いていない。

「最近任務ばかりですれ違いッスからね、話したかったッスよ」

「俺は戻るぞ」

「ダグザがいても良いッスよ」

「俺が嫌なだけだ」

ダグザはそのままエレベーターに乗り込んだ、二人だけになった阿修羅とヘリオスは笑みになる。

ヘリオスは阿修羅の隣に座ると、少しだけ近付く、阿修羅はそれに笑顔で応えると、ヘリオスは更なる笑顔を作った。

「何か最近のダグザ怖くないッスか？」

「そうかな？」

「戦ってる時だけタナトスに似てるんスよね、戦いに駆られてると

「うか、力を欲してるみたいなきッスね」

二人は覚えがある、ダグザが波旬に負けてから、ダグザの全てはそこから狂い始めた。

「でもそれが本来の私達の姿でしょ？力を求め、それを行使する、成りたくないけど、私はタナトスやダグザは間違ってると思う」

「そうッスけど、………阿修羅は違うッスよね？」

「私は運動よ、体を動かす場がコッしか無いだけ」

ヘリオスの不安な顔は満面の笑みに戻った、阿修羅は優しい顔でそのヘリオスを見る。

二人の笑顔、永遠ではないその笑顔が崩れた時、世界は破滅へと向かう。

16..真実

France city area

ダグザとモリガンはアパートの屋根の上でエビルユニオンを倒した後だった、建物を壊さないように戦うのは至難の技だが、穴一つで済んだ。

任務を終わらせ、帰ろうとした時だった、後ろを向いた時に目の前に黒い穴が空く。

2人は再び戦闘体制に入り、腕輪に触れた、ダグザの得物はトンファー、名はサラスヴァティー、モリガンの得物は鉄球、名はシヴァ。更に出てきたモノを見て顔が険しくなる、金髪の短い髪の毛を逆立て、赤黒いローブをはおった悪魔が出てきた。

「また間違えたっつの！何百回使っても慣れないっつの」

「貴様が何故生きている？」

悪魔の後頭部にはサラスヴァティーが突き付けられている、悪魔は冗談混じりで両手を上げて舌を出した。

「何故貴様が生きている、第10階、愛神のアナंगा」

「わぁお！ダグザにモリガンじゃん、久しぶり！」

『死人が何故ココにいるんだい？悪魔に堕ちてるし』

「死人？死んで無いっつの、見りゃ分かるっしょ？」

緊張感の無いその態度はダグザを苛立たせるには十分だった、そして元アナंगाはそれを見逃さず、ダグザの隙について間合いを取った。

『珍しいね、ダグザが感情をそこまで出すなんて』

「怖いねえ、更に怖くなったんじゃない？」

「黙れ」

「そんな怒るなっつゝの、前から俺とお前は馬が合わなかったけどさあ、少し大人になれっつゝの」

「……………殺す」

ダグザが怒りに任せてアナンガに殴りかかろうとした時、シヴァの鎖が体に巻き付き、モリガンの後ろまで引っ張られた。

そしてモリガンが一步前に出て、アナンガに顔を向けた、仮面のせいで分からないが、その威圧感から睨んでると思われる。

『ダグザらしくないね、もう少し冷静にいこうよ』

「やっぱりモリガンは分かっているねえ、ダグザとは大違いだっつゝの」

『君も煩いよ、僕の質問以外は喋らないでほしいな』

「なら早く言えっつゝの」

『君は死んだはずだ、任務でタナトスの怒りに触れてタナトスに殺された、その君が何故ココにいるんだい？しかも悪魔に堕ちてるし』

「俺がタナトスの野郎に殺されたあ？馬鹿も休み休み言えっつゝの、俺は悪魔になるためにタナトスを殺そうとした、でも流石‘死神’だ、しぶといのなんのって、それで気付いたら逃げられてた、まあ悪魔になるのはナイジェリアのホーリナー殺したんだけどね、だから今はアスモデウス、よろしく！」

ダグザがやっと立ち上がると、服の埃を叩き、モリガンの頭をグツと押し付けて、眼鏡を直した奥からアスモデウスを睨んだ。

「でもさあ、おかしいっつゝの、タナトス、アイツ大嘘吐きだぞ」

「興味深い仮説だな」

「悪魔になる条件、それは裏切り、つまりホーリナーを殺す事だ、でもタナトスは殺してる、なのにホーリナー、それっておかしいよな？」

「どういう事だ？」

「本人に聞けっつゝの」

そう言うと、アスモデウスは後ろ向きに屋根から落ちた、二人は慌てて下を見ると、アスモデウスは中指を立てたまま黒い穴に入って行った。

ダグザは怒り、屋根にもう一つ穴を増やしてその場を去った。

ダグザとタナトスは、本部に戻るとすぐに会議室に神選10階を集めた、幸い全員が本部にいたため難なく集まった。

楽しみにしているヘリオス、頬杖を付いてるアルテミス、笑顔で感情が読み取れないメルポメネ、仮面で感情が読み取れないモリガン、イライラしてるダグザ、二人の世界に入ってるユピテルとククルカン、机に足を乗せてるタナトス、小さく座り緊張感しているアストライア、飽き始めている阿修羅。

「タナトス、貴様は何故ホーリナーなんだ？」

「知らねえよ、俺様が神に愛されてるからじゃねえの？」

「違う、何故ホーリナーを殺してホーリナーなのか聞いている」

「何が言いてえんだよ！今頃になってそんな昔の事掘り返すんじゃないよ！」

タナトスは椅子を蹴り飛ばし、ダグザの所まで行くと、ダグザの胸ぐらを掴んで立ち上がらせた、しかしダグザはポーカーフェイスを崩さない。

「ホーリナーを殺したホーリナーは悪魔になるらしいぞ？」

「デメエも堕ちたな、誰から聞いた噂だ？」

「アナンガだ」

阿修羅とモリガン以外全員の顔が曇る、阿修羅はアナンガが誰なのか分からない、モリガンは仮面で表情が分からない。

阿修羅はアストライアの肩を叩くと耳打ちをした。

「アナンガって誰？」

「……………元そこ」

アストライアは阿修羅の席を指差した、つまり前に阿修羅の席に座っていたホーリナー、第10階ということ。

「アナンガ、今は悪魔に堕ちてアスモデウスが言っていた、貴様、ホーリナーを殺していないだろ？ いなくなったホーリナーは何処行った？」

タナトスは舌打ちをしてその場から去ろうとしたが……………。

『グラビテーション【重力】』

タナトスの体は急に重くなり、立っているのもままならなくなって地面に叩き付けられた。

「モリガン！ テメェぶっ殺すぞ！」

『本当の事を言ってほしいんだけど』

「じゃあ俺様を自由にしろ！」

『嫌だ』

「ぐうあああああああ！」

重力が増し、体が地面に押し付けられる、その力により体は軋み、息をするのも困難になる、それでもモリガンを睨み続けるタナトス。

「モリガン、タナトスが可哀想だよ」

『阿修羅は黙ってて、もしかしたらタナトスは裏切り者かもしれない』

「うら、ぎりも、の、か」

『何がおかしいんだい？』

「ころ、せよ、うらぎり、もの、なんだろう？」

タナトスは汗を滲ませながら笑った、その不気味な笑顔は憎悪に満ち、モリガンですら怯ませるくらいの威圧感だった。

「もう辞めてよ！タナトスが可哀想じゃない、何がいけないの？ホーリナーがホーリナー殺してない事がいけない事なの！？」

「確かにそうツスね、阿修羅の言う通り誰も死んでないんすよ？」

「貴様ら、コイツのせいで敵が増えてるんだぞ、他の二人も悪魔に堕ちてるかもしれない、タナトスのせいで犠牲が増えてるのに見過ごせる訳ないだろ」

阿修羅とヘリオスに背を向けていたダグザが二人を見た時、喉元に夜叉丸を突き付けられている。

「モリガン、早くタナトスを離して」

『その前に君が――』

「そうはさせないツスよ」

ヘリオスはモリガンの後ろから、モリガンの喉元にレーヴァテインを当てている。

その間にも徐々にタナトスは衰弱していく、恐らくこのままであつたら10分も持たないであろう。

「モリガン、アタイも阿修羅に賛成だよ、今タナトス殺してみな、あんたを輪切りにしてやるよ」

「うちもうちも！何かモリガンとダグザ感じ悪い」

「オラもそう思う」

「しかし私達を騙していたのも事実ですよ？」

「……………タナトス、悪い」

タナトスは様々な反応に苦笑いを浮かべた、最後の力を振り絞ったといえるような笑み、それは死期を悟ったようなモノだった。

「早く離しなさいよ！殺すわよ！」

『ムカつく』

「タナトスも悪いッスけど、今のモリガンの方が悪いッスよ」

「貴様ら、こんな事をやってただで済むと思ってるのか？」

「お互い様でしょ？」

「はや、く、……………ころ、……………せ」

タナトスの口からは血が流れ出し、呼吸は不規則で荒い。

「早くしなさいよ！」

『阿修羅は仲間を殺す程鬼にはなれないだろ？』

「……………最低！」

阿修羅はダグザを蹴り飛ばすと、ヘリオスの腕の中からモリガンを引きずり出し、モリガンの肩に夜叉丸を突き刺した。

『クッ』

「仲間に刃を向けるのは初めてじゃないの」

『これくらいで僕が引く訳ないだろ』

阿修羅はモリガンの肩から夜叉丸を抜くと、モリガンの腕に突き刺した、モリガンの真っ白なローブは血で染まり、会議室で二人の間に水を挿せる者はいない。

「アブソルペーション【吸収】」

ズズズズズズズズズ！

『クッ！あああああ』

「死ぬわよ？腕干からびてきたでしょ？苦しいでしょ？」

「阿修羅！モリガンが死んじゃうッスよ！」

「あんたそれはやり過ぎよ」

「うるさいわね！」

阿修羅の怒声により会議室には夜叉丸がモリガンの霊体をすすする音のみが響く、そして阿修羅は妖しい笑みを浮かべてモリガンを睨む、仮面で分らないがモリガンの顔は恐れに歪んでいるはず。

『……………か、解除したよ』

「本当に？」

「ほ、本当だ」

「阿修羅、早く辞めるッスよ！モリガンが死ぬッスよ」

「エミッション【放出】」

霊体をモリガンの腕に流し込む、夜叉丸の刀身は黒から銀に変わる。完全にモリガンに霊体が戻った時、モリガンは阿修羅を蹴り飛ばしてエレベーターに向かった。

扉が開くと同時にダグザも乗り込む、そして会議室には床に横たわるタナトスと声の出ない者だけが残った。

「デメエ、馬鹿だろ？」

「私に言ってるの？」

「他に、誰がいる」

「はあ、命の恩人に向かって馬鹿よばわり？恩知らずも良いところね」

阿修羅がタナトスを鼻で笑うと、タナトスは口から血を吐き出して笑った。

阿修羅に恐れを感じていたヘリオスは、元に戻った阿修羅に安堵の

色を浮かべたが、服を引っ張られ無理矢理現実に戻された。

「アストライアッスか」

「……………任務」

「マジッスか？」

「……………怒られる」

「分かったッスよ、あゝあ、ダグザのせいで阿修羅と遊べなくなっちゃったッスよ」

ヘリオスは愚痴を溢しながらエレベーターに乗り込むと、阿修羅と倒れて動けないタナトス以外がエレベーターに乗り込んだ。

阿修羅は近くにあった椅子に座ると、寝返って仰向けになったタナトスを眺めた。

タナトスは若干不機嫌な目で阿修羅を睨むが、阿修羅は全く動じずに眺め続ける。

「見せ物じゃねえぞ」

「なら起きて何処かに行けば？」

「動けねえんだよ、モリガンのクソ、本気出しやがって死んだらどうするんだよ？」

まあ、何処かの女よりはマシか」

タナトスは鼻で笑うと阿修羅は柔らかい笑みを浮かべた、その間もタナトスは動けずにいる、余程重力を加えられてたのだろう。

タナトスは身体中に傷を負っても立っている程の精神力、それを知ってるモリガンも容赦をしなかったのだろう。

しかし阿修羅は目の前のタナトスが可哀想でしやうがなかった、強いハズのタナトスをココまでにしたモリガン、若干の憎悪が生まれた瞬間でもあった。

「聞かないのか？」

「嘘を付いていたこと？それなら別にいいわよ、殺して無いんだから理由なんていらないでしょ？」

タナトスは再び鼻で笑うと、軋む体を無理矢理起こし、近くにあった椅子に座り、他の椅子に足を置いた。

「最初に嘘を付いたのは寄生された時だった、我を失って俺様に斬りかかって来るホーリナーの四肢を斬って仕留めようとした時だ、そのホーリナーはダークロードに頭をプチッと潰されやがった、そんな時は殆ど俺様が殺したようなもんだろ？」

問題はエビルユニオンに人質に取られた時だ、当時の第10階、草木神のフロラ、そいつが俺様との任務中にミスしやがった、その時から俺は死神になったのかもな……………」

17…追憶

1年半前

Germany main street

ドイツの夜の街を歩く神選10階二人、一人は刺繍の入ったロングTシャツに皮のジーンズ、そして紺色の長い髪の毛のタナトス。そしてもう一人はワイシャツにスーツタイプのパンツ、胸ポケットの所にカミウムマーンの刺繍、真っ黒なベリーショート髪の毛の女性、それが当時の第10階、草木神のフロラだ。

今回の任務はウェアウルフの討伐、それは二人にとっては楽な任務のハズだった。

フロラの胸で光るペンダントはフロラがタナトスに頼んで調達させた物、そしてタナトスはフロラのイメージに合ったペンダントを探しだし、それをフロラの誕生日プレゼントとして渡した。

当時のタナトスの笑顔の理由はフロラにあり、フロラ笑顔の理由はタナトスにあった、二人は恋人同士、誰にも知られていない二人だけの秘密だった。

「ウェアウルフねえ……………」

「さっさと終らせるぞ」

「もお、少しは楽しんでも良いんじゃない？ 多くないデートの機会なんだから」

「そ、そうだな」

この頃のタナトスは動揺というモノを持ち合わせていた、まだ死神

になりきれないタナトス、恐れられていたものの、多少他とは違うレベルで誰もが身震いする程ではない。

「今日は綺麗な満月、ウェアウルフも元気なんだろうな」

「何だそれ？」

「いやあ、月がウェアウルフのバロメーターかな？とか思ってみたりする」

「面倒くせえ生き物だな」

フロラは綺麗な声で笑った、この頃のタナトスは戦いを好んでいない、すぐに任務を終らせる事だけを考えていた、それは誰にも言っていないがフロラに会いたいから。

「ウェアウルフう、早く出てこいよお！」

「そんなんで出てきたら苦労————」

「ワオウウウウン！」

「しなかったな」

「私凄くない！？」

はしゃいでるフロラを気にせずに任務の体勢に入るタナトス、その間もフロラは自分の凄さに酔いしれてる。

「フロラ！動くなよ」

「ほえ？」

タナトスは腕輪に触れた、得物は太刀、名はスケイル。
タナトスが大きくスケイルをフロラの頭の上で振ると、上から落ちて来たウェアウルフを叩き飛ばした。

「やるう」

「緊張感を持って」

「あらら、怒られちゃった」

フロラはふざけながらも腕輪に触れた、得物はムチのように伸びる剣、蛇剣、名はククツチ。

二本足で立つ狼のような亜人、それがウェアウルフ。

タナトスは一目散にウェアウルフに飛び込む、スケイルを上段から振り下ろすが軽々と避けられる。

タナトスの横に回り込んだウェアウルフは鋭い爪の手刀で突こうとするが、ククツチがしなやか軌道を描いてタナトスとウェアウルフの間を遮る。

「感謝しとく」

「いえいえ」

フロラはククツチを一旦戻すと、切っ先をウェアウルフに向けると、ムチと化して物凄いスピードで伸びてウェアウルフに向かう、ウェアウルフは手で弾くが、ククツチは軌道を変えて再びウェアウルフに襲いかかる。

ウェアウルフは何度か横に避けたが、タナトスが追撃してくる、スケイルを横薙に振り、ウェアウルフを思いつきり薙払った。

ウェアウルフは家の壁につっこみ大きな砂埃と共に姿を消した。

「あああ、見えなくなっちゃった」

「消えた訳じゃないんだ、何となく分かるだろ」

「ここかな？」

フロラがククツチを伸ばしたが空かした、その理由は二人の上、フロラの勘は当たっていたが跳んで避けたのだ。

フロラはククツチを瞬時に戻し、ウェアウルフに向けてククツチを伸ばすが、一瞬で消えて二人の後ろに現れた、タナトスは慌てて後ろに斬りかかるが再び避けられてしまった。

「クソが、速すぎだ」

「さすが狼、満月が綺麗なだけあるね」

タナトスは呆れながらもウェアウルフを目で追った、何処に出るかは分かるが移動中は見えない、我慢強かったタナトスで痺れを切らすくらい何もしてこない。

「フロラ、大きな瓦礫寄越せ」

「了解！」

フロラは家の壁を切り、ククツチを巻き付けてタナトスに投げ付けた。

「カット【切断】」

スケイルの刃が黒く光るとタナトスはスケイルを構えた、そして素早い連撃で瓦礫をバラバラにすると、スケイルの背で全てを打ち上げる。

「グウウウン」

瓦礫が体に当たりウェアウルフは打ち落とされる、下手な鉄砲数撃ちや当たる。

タナトスはあるという間にウェアウルフの隣に立つと、鎌を首に当てて上から眺める。

そしてさっさと任務を終わらせようとスケイルに力をいれたが、刃

は空を斬った。

「キャッ！」

タナトスが慌てて後ろを見るとフロラを取り押さえて喉元に爪を突き立てるウェアウルフがいる、後ろからはおい締めになれ動けないフロラを見てタナトスは青ざめた。

「放せよ」

「貴様こそ武器を放せ」

「話せるのか、なら話は早いな」

「私の言うことを聞け、さもなくばコイツを殺す」

「タナトス！私ごと斬って」

タナトスはスケイルを強く握りうつ向いた、この状態でウェアウルフがフロラを解放するとは思えない、しかしスケイルを放さなければフロラは確実に死ぬ、フロラを傷付けずにウェアウルフを離す方法、それがタナトスには思い浮かばなかった。

「俺様達はテメェから手を退く、だからテメェも離れろ」

「なら武器を捨てろ」

タナトスは舌打ちをするとスケイルを投げ捨てた、それと同時に屋根の上から別のウェアウルフが飛び下りて来た。

「そういう事か」

「ハハハ！馬鹿な野郎だ、この女もろとも死ね」

「絶体絶命？」

こんな中で緊張感の感じられないフロラ、そんなフロラのお陰でタ

ナトスに若干笑顔が戻った。

「フロラ、大丈夫だからな」

「うん、一人じゃ死なないから大丈夫だよ」

「おい、何言ってるんだよ？」

「タナトスに会えて良かった、私神選10階になれた事、最高に楽しかったよ」

「おい、馬鹿な事言ってんじゃねえよ、フロラは俺が助ける」

フロラはニコリと笑うと自分の胸にククツチを突き立てた、後ろで抑えてるウェアウルフは気付いていない。

「おい、危ないぞ！」

「バイバイ、タナトス」

「フロラアアアアア！」

タナトスが走り出した瞬間、フロラは涙を流してククツチを伸ばした、ククツチはフロラと後ろのウェアウルフの心臓を貫き、宿主を無くして消えた。

フロラはウェアウルフと一緒に胸から血を流して倒れ込んだ、タナトスはもう一体のウェアウルフの首を斬り飛ばし、フロラに駆け寄った。

フロラはタナトスの腕の中で力を無くして赤い血を胸から流している、息はせずに笑顔で眠っている。

「フロラ、嘘だろ？一緒にフランス行くんだろ？」

必死にフロラの体を揺するが全く反応しない、タナトスの目からは涙が溢れ落ち、フロラの体を少しずつ濡らした。

「辞めてくれよ、いなくなるなよ、俺様を一人にするなよ」

「……………」

「返事しろよ！勝手に死んでんじゃねえよ……………、フロラの事愛してるんだよ」

その時タナトスは初めてフロラに気持ちを伝えた、しかし、その声はフロラには届かず、タナトスの気持ちに伝えられない。

残ったのはフロラの血で染まったペンダントと亡骸だけ、タナトスは真っ赤なペンダントを自分に着け、亡骸を抱き上げてドイツの闇に消えて行った。

「……………つう訳だ、柄にもなく語っちゃったな」

「ペンダントは今でもあるの？」

「ああ、これだ」

タナトスはシャツの下からペンダントを取り出した、溝は古い血で

黒く染まっている、阿修羅はペンダントを見て涙を流した、それはまだタナトスが過去を引きずっているという事。

「泣く事じゃねえだろ？」

「でも、でも……………」

「そういうところが似てんだよ」

「私が…………フロラに？」

「そうだよ、神選10階だからって飾らないところとか、平気で俺様の領地に入ってきて来るところとか、……………お節介なところとか、アイツに似すぎなんだよ、だから長々と話ちまったんだろうな」

タナトスは遠い目をしながら話した、阿修羅を見てるようで違うモノを見てる、恐らく阿修羅とフロラの共通点だけを見ているのだろう。

「俺様は戻るぞ」

「私も行くよ」

フラフラになりながら立ち上がるタナトスに肩を貸し、真っ直ぐエレベーターへと向かった。

18：戦争（前書き）

またまた会話だけです、今回は神徳ではなく名前なので読みやすいと思います。

18：戦争

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

元帥

「今回会議を開いたのは君達の永遠の宿敵、悪魔の事だ」

タナトス

「悪魔がどうした？」

元帥

「悪魔が動きだしちゃってさあ……………」

阿修羅

「別に前々から動いてなかった？」

ククルカン

「うんうん、こん中でも悪魔と戦った事ある人多いよ」

アストライア

「……………悪魔、強い」

モリガン

『誰かさんのせいで増えてたしね』

ダグザ

「その話はもう終わりだ」

メルポメネ

「しかし不利なのは確かじゃないですか？」

タナトス

「デメエらぶつ殺すぞ！」

ユピテル

「喧嘩はよぐねえ」

元帥

「そうそう、それに僕も話したいんだけど」

ヘリオス

「そうッスよ、何か楽しい事になってるんスよね？」

元帥

「楽しくはなってないね、むしろホーリナーラグナロクよりもヤバい状況だよ」

ダグザ

「笑わせるな、神選10階は無傷で健在だぞ」

元帥

「そう、ココだけ見ればね」

アルテミス

「どういう事だい？アタイらが生きててもヤバい状況って？」

元帥

「世界の神選10階レベルのホーリナーが殺され始めてる」

阿修羅

「その何がヤバいのよ？」

元帥

「今の状況じゃあ神選10階の補強が出来ないって事」

モリガン

『つまり僕達が死ねばホーリナーが潰れるって事だね』

タナトス

「でもよお、正直神選10階よりも強い奴もいるだろ？そいつは死にやしねえだろ？」

ヘリオス

「そうッスよ、軍神のオーデインとか俺や阿修羅、もしかしたらタナトスよりも強いッスよ」

元帥

「ヘリオスは良いところ突いたね、オーデインは悪魔に堕ちたよ」

ダグザ

「馬鹿な！奴は絶対的な誇りを持っていたハズだ」

アルテミス

「そうだよ、アイツ程支部とホーリナーを大事にする奴はいない」

メルポメネ

「力を欲していたとも聞きますけどね」

モリガン

『力に溺れたか？』

ククルカン

「感じ悪う、うち案外好きだったのに」

ユピテル

「そんな呑気な話じゃねえべ？」

アストライア

「……………怖い」

元帥

「大丈夫だよアストライアちゃん、もっと怖い状況だから」

アルテミス

「全然大丈夫じゃねえよ！」

阿修羅

「はぁ、頭が痛い、早く話を進めましょう」

元帥

「そうだね、今回の悪魔の目的は仲間を増やす事らしい、オーディンが良い例だね、それで拒否した場合には殺す、そういうかなり強引なやり方でやってるみたいだよ」

タナトス

「それで、何人が悪魔に堕ちたんだ？」

元帥

「オーディン一人だけだよ」

ヘリオス

「それなら大した事じゃないじゃないッスか」

ダグザ

「話を聞け、他は殺されてるんだ」

阿修羅

「はぁ、何人殺されたの？」

元帥

「5人だよ」

ククルカン

「死にすぎ死にすぎ！何よその数、何でもっと早く手を打たなかったのよ！？」

アルテミス

「今回はアタイもククルカンに賛同するよ、ちょっと行動が遅すぎるんじゃないのかい？」

元帥

「手厳しいね、元老の意向もあるんだよ」

モリガン

『元老のおっさん共は邪魔ばかりだね』

タナトス

「先輩だからって調子乗ってんじゃないやねえよ」

ダグザ

「それより情報が必要だ、誰が死んだ？」

元帥

「医神のアスクレピオス、酒神のバックス、道祖神のプーシャン、美神のパシテア、牧神のパンだ」

阿修羅

「（緊那羅はいない、良かった）」

ヘリオス

「そりゃかなりヤバイッスね」

アストライア

「……………酷い」

メルポメネ

「ホーリナーには痛手ですね」

ダグザ

「それで、神選10階の対応はどうするんだ？指をくわえて見てる訳じゃないよな？」

元帥

「まあこれだけ情報があれば次の行動は何となく読める」

モリガン

『先回りするのかい？』

元帥

「そうだよ、2人1組にソルジャー1隊でホーリナーの護衛に向かっ
てもらおう」

タナトス

「何でソルジャー共が必要なんだよ？」

ユピテル

「正直邪魔だべ？相手は多くても3人、オラ達だけで十分でねえか
？」

元帥

「念のためだよ、ダークロードがいたら邪魔だろ？」

阿修羅

「なら私は緊那羅の護衛に付く、問題はある？」

元帥

「そのつもりだよ？」

ククルカン

「うちはうちは！？」

元帥

「今言うよお、阿修羅とヘリオスは音楽神の緊那羅、ユピテルとメル
ポメネは悪神のアカ・マナフ、ダグザとタナトスは文化神ケツァ
ルコアトル、モリガンとアストライアは商業神のメルクリウス、ク
クルカンとアルテミスは創造神のズルワーン」

ククルカン・アルテミス

「「ちょっと待てえ！」」

ククルカン

「何でうちがこんながさつ女と一緒にじゃなきゃいけないのよ！」

アルテミス

「そうだよ、アタイはこんな我が倅女と一緒に嫌だね！」

モリガン

『どっちも同じじゃないか』

元帥

「そうそう、新しい何かがあるかもしれないでしょ？」

ヘリオス

「俺は満足ッスよ、ゴールドハウスも見れそうッスからね」

阿修羅

「はぁ、何のために行くんだか」

タナトス

「俺様は任務だから我慢する」

ダグザ

「大丈夫だ、俺は悪魔なんかに堕ちない、貴様に嘘は吐かせないから安心しろ」

メルポメネ

「私はユピテルとですか、よろしくお願いします」

ユピテル

「精一杯頑張るべえ！」

モリガン

『僕はチビとか』

アストライア

「……………お互い様」

アルテミス

「邪魔したら殺すわよ」

ククルカン

「何よ何よ！あんたこそ邪魔しないでよね！」

元帥

「じゃあ頑張ってねえ」

18：戦争（後書き）

これからって時に申し訳ないんですが、これから投稿が滞りがちになってしまいます。

作者の私的な事で申し訳ないんですが、最後までお付き合いいただけたら有難いです。

本当に自分勝手に申し訳ありませ。

19：帰還（前書き）

長らくお待たせしてすみませんでした、作者の個人的事情で連載が滞ってた事をお詫びします。

これから物語がクライマックスに向かって動き出します、作者もピッチを上げて執筆しますので、どうか最後までお付き合い下さい。

19..帰還

J a p a n a i r p o r t

阿修羅とヘリオスは調度空港から出たところ、VCSOは各国の空港を使用している、バチカンの権力や協力者を使ってそれを可能にした。

今回は日本支部に一番近い関西国際空港を使用した、そして空港の倉庫には赤いオートバイがある、阿修羅が前もって頼んでおいた物だ。

阿修羅はヘリオスを促してバイクに跨った、ハンドルには簪が刺さっていて、阿修羅は簪で髪の毛をまとめた。

「日本支部は自由過ぎるから、そこまでの交通手段も自由なの」

「何か楽しいツスね！」

阿修羅はニヤリと笑ってエンジンをかけた、図太い音が倉庫に響き渡る、ヘリオスがしっかりと捕まったのを確認すると、ほぼフルスロットルでスタートした。

前輪が持ち上がったのにヘリオスは声を上げ、笑いながら阿修羅の服をしっかりと掴んだ。

京都府に入った時、携帯電話がスカートのポケットで鳴った、ヘルメットを着けていなかったのだから聞こえた。

「私のポケットから携帯取って！」

叫ぶようにヘリオスに言った、ヘリオスはビックリしてスカートに視線を移し、恐る恐るポケットに手を入れる、浅く手を入れて指先で携帯を取り出した。

「日本支部ッスよ！」

「私手が離せないから私の耳に当てて！」

ヘリオスは通話状態にして阿修羅の耳に携帯を押し当てた、阿修羅は前傾姿勢のためにヘリオスは阿修羅に抱きつくような状態になり、浅黒い頬を赤く染める。

「もしもし？」

『阿修羅！？俺だよ俺、金色孔雀だよ』

「ボス？今そっちに向かっているところなんだけど」

『その前にさあ、毘楼勒叉と毘楼博叉の援護に行ってほしいんだ、なんかステージ5にエビルユニオンが混ざってるみたいだから、地図は携帯に送るよ』

「はあ、分かったわよ」

阿修羅が軽く首を動かすとヘリオスは携帯を耳から離した、その瞬間に携帯に衛星からの地図が送られて来る。

ヘリオスは訳が分からずに阿修羅の顔の前に携帯を出した、それにより更に密着した形になる。

「……………ってああ！」

「な、何スカ！」

「今降りる所過ぎた！」

「それヤバくないッスカ！」

「しょうがない、しっかりつかまってよ！」

阿修羅はハンドルを思いっきり切ると、ブレーキを踏んでドリフトUターンする、ヘリオスは振り落とされないように阿修羅にしがみつくが、そんな事をしてる自分が恥ずかしくなってしまうた。

高速道路でUターンすれば物凄い勢いで車が迫って来る、阿修羅はそれを軽々と避けながら先ほど通り過ぎた所から高速道路を降りた。高速道路を降りてから間も無く目的地に着いた、元は大きな墓地だった所は更地になっている、そしてそこには大量のステージ5とエビルユニオン、それを挟むように毘楼勒叉びるろくしゃと毘楼博叉びるはくしゃがいる、得物のハンドアックス、右京と左京でジャグリングをしているが二人は頭から血を流し肩で息している。

「飛ばすわよ！」

「OKッスよ！」

後ろで立ち上がったヘリオスを弾き出すようにバイクが横になる、ヘリオスは弾丸のように跳び上がると同時に腕輪に触れた、得物は片手剣、名はレーヴァテイン。

「インフェルノ【烈火】！」

レーヴァテインから火が出る、そしてダークロードの真ん中に降り立つと、近くのエビルユニオンを一瞬で斬り伏せた。

「誰だよあれ？」

「私の仲間よ」

「阿修羅!？」

二人は希望に満ちた目で阿修羅を見てその場から退いた、阿修羅は

簪を取りバイクのハンドルに刺し腕輪に触れる、得物は長刀、名は夜叉丸。

「阿修羅が何でココに？ 毘楼博叉知ってるか？」

「知らない知らない、でも良いタイミングだね」

「ココからは神選10階の仕事よ」

阿修羅は両手で夜叉丸を握るとダークロードの群れに突っ込んだ、既にかなりの量が減っているダークロード、例の如くヘリオスの周りは火の海になる、阿修羅はその海に躊躇無く入り、他のダークロードを斬り伏せる。

双子の二人は神選10階の阿修羅と自分達の知ってる阿修羅を照合してみるが、全くもって別人、強さが比にならないくらいに上がっている、それに驚きを隠せないようだ。

ヘリオスと阿修羅が炎に包まれ見えなくなった頃、毘楼勒叉と毘楼博叉の応援に來た摩和羅女の車が停まった、中からは緊那羅と摩和羅女が目丸くして出てきた。

「緊那羅、何か凄い事になってるぞ」

「私達って消防師じゃないよね？」

中に人がいるなど想像もしてない二人はそれを眺める事しか出来なかった、そしてヘリオスが全てを斬り伏せて得物を戻した時、火が全て消えてヘリオスと阿修羅の姿が見えた。

「「阿修羅！」」

「摩和羅女？ 緊那羅！？」

走って阿修羅に抱きついた緊那羅と摩和羅女の背中に阿修羅は手を

回した。

「阿修羅！嬉しいぞ、帰って来てくれたんだな」

「はあ、一応任務で来たんだけど」

「私がいるのに？それに新人も強いから必要無いよ」

「うわあ、日本支部って可愛い子ばかりッスね」

阿修羅の後ろから覗き込んだヘリオスに摩和羅女と緊那羅は驚き、
一歩退いてしまった、明らかに日本人では無いところを見ると任務
というのを納得し、更に神選10階が来た理由がわからなくなった
らしい。

「はあ、あのボス、また説明してない」

「でもあんた達が出てきたって事はヤバいんだよね？」

「緊那羅、貴女の命がね」

日本支部の面々の顔がこわばった、今や緊那羅は神選10階にも匹
敵する力、それを脅かす程の力が日本に迫ってるという事。

「それに新人もッスよ」

「そう、私が抜けた後に入った新人も危ないらしいわよ、神徳が何
か知らないけど、かなり強いよね？」

「神徳は無い、ただ神技を早く覚えて、応用力があるだけ」

「でも沙羯羅^{しゃがら}は凄いんだぞ！一人でステージ5を30体、しかも一
瞬で殲滅したんだ、いくら神選10階でも無理だろ」

阿修羅とヘリオスの驚きを見ればどれだけ凄いか分かる、どれだけ
頑張ってもそれだけの霊を一瞬で殺す事など不可能。

「あれッスよ！神技が凄いんスよね？」

「ただ大きくしたり小さくしたりするだけ、私や阿修羅みたいに前衛向きじゃないしね」

「会ってみたいわね」

「なら戻ろう！」

摩和羅女は車をすぐ近くにつけると、バイクを特殊な車に装着する、そして全員摩和羅女の運転する車に乗り日本支部に向かった。

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

久しぶりの日本支部に感傷に浸る暇も無く摩和羅女とヘリオスが飛び出した、阿修羅はため息と共に二人の後を追う、隣には色々話したい緊那羅、阿修羅はココがホームだと改めて実感した。

「阿修羅の彼氏は元気ね」

「か、彼氏じゃないわよ！」

「そうなの？ずいぶん仲が良かったけどね」

「そ、そうかな？普通だと思っわよ」

「私の目は誤魔化せないよ、私的にはもっとワイルドで大人で自己

チューで陰があつて、他人を寄せ付けないような人が良いけどね」

阿修羅には一人だけ緊那羅のタイプど真ん中の人物を知ってる、ソルジャーを殺す程ワイルドで、一応他人を思いやる大人なところはある、自己チューなのは恐らく天下逸品、陰はありすぎてどれから触れたら良いか分からない程、他人など阿修羅とヘリオス以外は近寄ろうとしない。

「今度神選10階の人を紹介してあげるわよ、緊那羅にピッタリな人がいるからね」

「何かあんに男を紹介されるのは気に入らないけど、お言葉に甘えとくよ」

阿修羅は優しく笑うとヘリオスと摩和羅女が待つてるエレベーターに乗った。

エレベーターは最上階に着くとそこには迦楼羅かるらと摩醯首羅まけいしゅら、そして金色孔雀がいる、変わっていない二人に思わず阿修羅から笑みが溢れた。

「神選10階第1階と第10階、カミウムマーンの命により緊那羅、及び沙羯羅の護衛に参りました、お二人は私達二人でお守りします」

神選10階としての挨拶を済ませる阿修羅の横で呑気に欠伸をするヘリオス、任務も本番以外は緊張感の欠片もない、しかし、一度任務になれば絶対的な力で相手を灰にする笑う太陽。

「阿修羅久しぶりだね」

「阿修羅の噂、俺も耳にする」

迦楼羅は小さく笑い、摩醯首羅は襟やらフードやらサングラスで表情は分らないが、声色は優しい。

そして阿修羅達の後ろでエレベーターの停まる音が鳴った、恐らく最後の二人、沙羯羅と摩侯羅迦ましろかの到着だ！

「ボス！何よあれ！？嘘依頼もいいところよ！もー最悪、エビルユニオンだよエビルユニオン！ああムカつく！ビックリして汗かいてメイクが落ちちゃったじゃない！」

沙羯羅は七分丈の細身のジーンズにキャミソール、そしてカミウムマインの刺繍が入ったカーディガン。

明らかに不機嫌な沙羯羅は腕を組んで後ろを向くと、目の前にはあの阿修羅がいる、そして阿修羅は沙羯羅を、沙羯羅は阿修羅を見て固まった、そして暫くの沈黙。

「志穂！？」

「小町！？」

大きすぎる声が会議室にこだました、阿修羅と沙羯羅以外は耳を塞いでいる。

「こ、小町だよね？あの小町だよね？」

「そっちこそ志穂よね？」

「今は沙羯羅……………」

「私は阿修羅……………」

二人の目には少しずつ涙が溜まり、静かに流れ落ちた、そこにいる面々は二人の状況を理解するに至らない。

「嘘でしょ？小町があのア修羅？」

「それは私のセリフよ、貴女全然霊が見えなかったじゃない、あの時もルシファーが見えなかったし」

「どうしたんスカ？沙羯羅って阿修羅の神になる前の友達なんスカ？」

「そうよ、もう会えないと思ってたのに……………」

そして阿修羅の涙は激しさを増し、見かねた沙羯羅がそっと抱き寄せた、阿修羅の無いところを見たことの無い男性陣はしどろもどろ。

「小町…………じゃなくて阿修羅、久しぶり」

「嬉しい、ありがとう」

「おかしいと思ったんだよ、阿修羅がいなくなった途端みんな阿修羅の事忘れちゃうんだもん」

「えっ、私の事覚えてたの？」

「当たり前だよ、友達だもん」

阿修羅は金色孔雀を睨んだ、金色孔雀は知らないと言わんばかりに明後日の方向を見て口笛を吹いてる。

「ど、どうしたの？」

「沙羯羅、何で自分が他人に見えてないとか、ホーリナーの事を知らなかった事とかを疑問に思わなかった？」

「全然」

沙羯羅のハキハキとした即答にため息が出た、阿修羅は自分に言い聞かせる、全て日本支部が悪い、それに沙羯羅は超ポジティブシンキングだからしょうがないと。

「私達はホーリナーとダークロードの記憶にしか残らないの、過去

も未来もね」

「そうなの!？」

「(それより何で沙羯羅の記憶には残ってたの?これも神に愛されてるから?)」

沙羯羅は目を丸くして金色孔雀を見ると、金色孔雀は椅子に座って背を向けている。

沙羯羅は怒り机の上に乗ると同時に腕輪に触れた、得物は弓幹が刃の弓矢、名は菊理姫。

矢は金色孔雀の頭に垂直に突き付けられている、このまま放てば体を一直線に矢が貫く。

「何で言わなかったのよ？」

「ほ、ほら、必要無いだろ？」

「本当に?嘘だったら貫くからね」

「め、面倒だから……」

「はぁ、年々説明がおろそかになってる」

阿修羅が頭を抱えてる隙に沙羯羅は金色孔雀を蹴り飛ばし、壁に立たせると矢を3本握って金色孔雀に向けている。

「今日はそこにいてね」

沙羯羅が物凄いスピードで矢を放つと、金色孔雀を縁取るように矢が金色孔雀の服を射た、壁に磔になった金色孔雀はもがいて離れようとしている。

「で、阿修羅とそのイケメンさんは何でココに？」

「はぁ、貴女と緊那羅の護衛よ」

「何でまた護衛なんて？」

沙羯羅は金色孔雀を睨みながら阿修羅に聞いた、日本支部の支部長の権限は皆無、強気なホーリナーのせいで肩身が狭い思いをしてるのはヘリオスにも分かった。

20..妹

Japan VCSO Japan branch office

阿修羅とヘリオス、つまり神選10階が日本支部に來た理由を話すと、いくら樂天家な沙羯羅しゃがらでも顔が曇った。

惡魔の事を知らずとも行っている事からその力の大きさは分かる、しかも神選10階レベルの緊那羅きんならのみならず、まだまだ新米の沙羯羅までもが狙われている、つまりホーリナーで目障りな者は殲滅する、惡魔からの宣戦布告に等しい。

だが沙羯羅の興味は惡魔に狙われてる自分や緊那羅、ましてや狙っている惡魔でも無い、阿修羅の隣で眩しい笑顔を放っているヘリオス。

それは獲物を狙う獣の目ではなく、奇怪なモノを見るような目でもない。

品定、この中では一番‘女’に近い沙羯羅の目は見通していた、少なくともヘリオスのキモチは。

「阿修羅 あ！俺何か悪い事したツスカ？」

「はあ、いきなり何？」

「何か沙羯羅がさっきから怖いツスよ」

阿修羅が呆れて沙羯羅を見ると確かに怖い、敏腕刑事の洞察眼よりも嫌な眼をしてる、タナトスが睨む方がましかもしれない。

「じゃ、沙羯羅、何してるの？」

「……………」

「こ、怖いっすよ」

遂にヘリオスは阿修羅の後ろに隠れてしまった、阿修羅もヘリオスを守るように後退りする。

しかしそれよりも速く沙羯羅は二人に近寄り、ヘリオスの顔を舐め回すように睨む。

「……………阿修羅あ」

「はい!？」

「阿修羅! 良い男を釣ったね!」

沙羯羅以外目が点になる、沙羯羅は晴れ晴れとした笑顔で腰に手を当ててふんぞり返る。

「超イケメンじゃん! 流石阿修羅、やっぱり阿修羅は私の見込んだだけあるわね」

「沙羯羅、全く話が読めないんだけど?」

「だからあ……………」

沙羯羅は阿修羅と肩を組んで引き寄せると、誰にも聞こえないような声で話す。

「ヘリオスって人の事好きなんでしょ?」

「ば、馬鹿言わないでよ!」

「まあまあ、他の人は騙せても私は騙せないよ」

一人で盛り上がる沙羯羅をよそにヘリオス以外の男性陣は早々と撤退した、緊那羅も摩和羅女も呆れて言葉が出ない。

沙羯羅は一人で何かブツブツ言いながら阿修羅とヘリオスを批評し

ている、そんな沙羯羅に阿修羅は頭を抱えてため息を吐いた。

「摩和羅女、帰るよ」

「緊那羅、沙羯羅を止めないのか？」

「あんたも分かるでしょ？ 沙羯羅がああなったら止まらないって事に」

「はあ、やっぱり治ってないんだ……」

そう、沙羯羅の暴走癖は前々から、とくに恋の事になると全く周りが見えなくなる、現に帰ろうとエレベーターに乗り込む阿修羅達に全く気付かない。

可哀想なので一応緊那羅が声をかけたが、全く反応せずに自分の世界に入っている、それを見て阿修羅は迷わずにエレベーターの扉を閉めた。

そして一人取り残された事に気付かない沙羯羅は手をポンと叩き、晴れた顔で振り向いた！

「そうだよ阿修羅！ つまり………、ってまた誰もいない！ まあ良いか、二人とも幸せそうだったし」

沙羯羅は全く気にせずに笑顔でエレベーターに乗り込んだ、一人にされても全く気にしないそのポジティブさ、そこだけは阿修羅も尊敬している、他は尊敬どころか褒誉にすら値しないのだが。

一夜が明けて朝食の時、見慣れない日本食だがヘリオスが喜んで食べてる時だった、ビリビリと嫌な空気が辺りに張りつめる、日本支部内とは思えないような空気、さながら戦場のような嫌な空気だ。

「阿修羅、来たの？」

「違う、これはエビルユニオンと霊のダークロードの群れ」

「ちょっとおかしくない？ココって神様に守られてるんでしょ？あんな汚物に入れるわけないじゃん」

沙羯羅はたくあんを口に放り込みながらぼやいた、そう、VCSOの本部、支部共にダークロードでは入れないようになっている。

「大丈夫なのか！？阿修羅、アタシ達襲われちゃうぞ！」

「大丈夫よ摩和羅女——」

「阿修羅様ヘリオス様！総員配置完了と共に抗戦を開始しました」

「ありがとう、シャーリ」

そこにいるのはソルジャーになったばかりのシャーリ、二人はニッコリと笑うと阿修羅は立ち上がった、それにつられて約一名を抜いて立ち上がる、その一名は摩侯羅迦^{マヘーラカ}。

摩侯羅迦は未だに専用の肉にかぶり付いている、摩醯首羅^{マキシムラ}は動じずに摩侯羅迦を持ち上げ、窓に向かって放り投げた。

窓ガラスを割って摩侯羅迦は下に落ちる。

「うええ！？そんな事して良いんスカ！？」

「問題ない」

摩醯首羅もそのまま飛び降りた、それに釣られて摩和羅女も飛び下りる。

迦楼羅は腕輪に触れた、得物は鎖鎌、名は首切。

迦楼羅は鎖を逃げようとする金色孔雀に巻き付ける。

「ボスも参戦でしょ？」

「あははは、バレちゃった？」

「バレバレ」

迦楼羅はそのまま窓から飛び降りた、金色孔雀は引きずられながら窓から落ちて行った、それを見てヘリオスは興奮して飛び降りようとするが、阿修羅に掴まれて全く進まない。

「はあ、ヘリオスは護衛でしょ？」

「嫌ッスよ！俺も飛び降りたいッスよ！」

「阿修羅、ダーリンとの茶番劇は終わりそうだよ」

「本当だ、あそこ見てみなよ」

ホーリナーが飛び降りた窓ガラスとは反対側の窓ガラス、それを見る緊那羅と沙羯羅の視線の先には黒い穴が空いている、そこから赤黒いローブが落ちた、そして別の赤黒いローブが穴の淵に立っている。

4人が睨む悪魔はフードを脱いで4人を睨んだ、真っ黒の長い髪の毛に鋭い瞳、冷たいその瞳は阿修羅を連想させる。

「久しぶりだな、緊那羅」

「今はルシファーだったっけ？帰れば？死ぬよ」

「後ろにいるのは……、ふっ、神選10階か」

ルシファーは嘲笑うように微笑んだ、まるでココに神選10階がいるのが分かっていたかのように。

そしてそのままルシファーが落ちると4人も腕輪に触れながら落ちた、阿修羅は長刀夜叉丸、ヘリオスは片手剣レーヴァテイン、緊那

羅は刀と鞘羅刹、沙羯羅は弓幹が刃の弓菊理姫。

沙羯羅は飛び降りる途中で2人の悪魔に大量の矢を放った、それは雨のように2人に降り注ぐ。

「速い、そして無駄がない」

「ルシファー様！やっぱあの雌すげえな！くううう、グツチャグチャにしてえ！」

興奮して取れたフードからはスキンヘッドで大きい瞳、大きな口をした悪魔の顔が覗いた、そして悪魔は腕輪に触れた、得物はモーニングスター、名はパイネル。

「やれシトリー」

「リョーカイッ！」

シトリーは頭の上でパイネルをグルグルと回し、矢を全て弾き飛ばした、それどころかあまりの広範囲で回してるため、4人が着地するスペースがない、このままでは4人はあっけなくミンチになってしまう。

「沙羯羅！」

「OK！行くくよお……………」

沙羯羅は再び菊理姫に矢を構え、思いつきり引いた、そしてそのまま矢を放ったが、ルシファーやシトリーに当たる気配は全く無い。

「大ハズレッスよ！」

「はあ、まだミンチになりたくない」

「二人とも沙羯羅を見くびりすぎじゃない？」

「エクスペンション【拡大】！」

矢は巨大化すると、そのまま地面深く突き刺さった、パインルは巨大な矢に当たり、鉄球の重みでグルグルと巻き付いた。

「スゲェ！あの雌あったま良い！」

関心してるシトリーをよそに4人は地面に着地した、シトリーはパインルを戻すと全く構えず、地面に鉄球を落としたまま。

4人のすぐ近くではソルジャーとダークロードが交戦している、そして一番近くではシャーリが戦っていた。

「一つ問おう、悪魔になれば生かす、ならぬのなら殺す、さあどちらを選ぶ？」

「はあ、それではいってきますって言う人がいると思う？」

「阿修羅、お前は必ずこちら側の住人になるだろう、俺と同じ血が流れているのだからな」

4人の表情は驚きが隠せないようだ、阿修羅とルシファアは血が繋がっている、その意味は……………

「その反応からまだ覚醒していないな？」

「覚醒？それなら私は貴方にホーリナーにされた」

「それは最低条件だ、さあ阿修羅あすらの正当後継者、天竜の巫女、にして我が妹よ、その力を俺にしめしてくれ」

21..覚醒

Japan VCSO Japan branch office

「妹って何よ？」

阿修羅を始め他の3人は阿修羅とルシファーを交互に見ている、確かに目付きの鋭さだけは似ている、しかし鋭い目をしている、ただそれだけの事だ。

そしてルシファーの言った‘天竜の巫女’、そして覚醒、全く理解出来ない4人をルシファーは馬鹿にするように笑った。

「どうした？妹よ」

「馬鹿な事言わないで、私は捨て子よ、そんな事あるわけない」

「奇遇だな、俺も18年以上も前に捨てられていた、いや、逃がされて日本にたどり着いたと言った方が正しい。」

俺とお前はあの阿修羅^{あすら}と毘沙門天の双子の子だ、捨て子だったのは戦地から阿修羅^{あすら}がソルジャーに命じてある場所まで連れて行かせようとした、お前だけな、俺は日本支部に届けられ、時期、天竜の巫女、たるお前は阿修羅^{あすら}の生まれた所に届けられる予定だったんだ。

それがソルジャーは途中で力尽き、俺らは捨て子扱いになり、腕輪を付けた俺は日本支部、ただの赤子の阿修羅は孤児院に入れられたというわけだ」

淡々と話すルシファーとは違い、阿修羅の顔は青白くなる、知らない方が良かった事実、いつも冷静な阿修羅を動揺させるほどの事実が目の前にはある。

「阿修羅、信じちゃダメッスよ、嘘に決まってるッス」

「嘘か、まあ信じなくても良い、時期に分かる事だ、なんなら君たちの元老に聞いたらどうだ？元老の毘沙門天にな」

元老、それは元帥を陰から支える存在だが、実際は元帥や神選10階へのダメ出しばかりだ、しかし元老は元神選10階、それなりの実績があるために元帥も強くは逆らえない。

「アイツは俺の事をよく知ってる、まあ、もう2度と会えないがな」

ルシファアは腕輪に触れた、得物はクレイモア、名は髭切。

生きている条件は悪魔に墜ちる、悪魔にらなければ死のみ、しかしココにいる者達はかなり強い、一筋縄でいかないのは分かる。

「もう俺っち行きますよ！？そこの馬鹿そうな金髪！俺っちと勝負！」

「俺で良いんスカ？」

「何だ！弱いのか？」

「強すぎッスよ！」

ヘリオスはそのまま跳び上がった、しかし空中にいる敵は中距離型のシトリーにとっては狙い易い、ヘリオスがそれに気付いた時には遅かった。

鉄球がヘリオスの顔めがけて飛んでくる、しかし途中でグンと方向が変わった、その理由は鎖に当たっている矢、それは菊理姫から放たれた矢だ。

「じゃんじゃんやっちゃってよ！」

「サンキューッスよ！」

ヘリオスはレーヴァテインをグルンと回した。

「インフェルノ【烈火】！」

レーヴァテインは燃え盛り、そのままシトリーに振り下ろした。

阿修羅は平静を装うが夜叉丸を握る手には力が入る、緊那羅とルシファアがそれに気付かないわけが無かった、阿修羅はそれを隠そうとするが、隠そうとすればする程動揺が浮き彫りになる。

「阿修羅、しっかりしなさいよ」

「妹ながら情無い」

「大丈夫よ、心配しないで」

阿修羅は更に夜叉丸を強く握ると、思いっきり地面を蹴ってルシファアに向かった、上体はぶれ、息は必要以上に上がる。

そして阿修羅は下段から切り上げるが、片手で持った髭切で防ぎ、そのまま力を込めたら阿修羅の手から軽々と夜叉丸が落ちた、ルシファアは阿修羅の襟元を掴み持ち上げた。

「情無い、それくらいで動揺するとは……………」

「い、いや、私は貴方とは違う、私は、私はただの阿修羅、天獅子小町だったただの阿修羅、何も関係ない」

「殺す価値もない、ひれ伏している」

ルシファアは阿修羅を地面に落とすと夜叉丸を掴んだ、そして夜叉

丸を阿修羅の足に突き刺した。

「—————!」

すぐに夜叉丸を戻すが、歩ける状態ではない、ルシファーは蹴り飛ばして遠ざけると、緊那羅に向き直った。

「悪魔になるか？」

「拒否する」

「相変わらず気の強い女だ」

「ありがとう」

緊那羅は嫌味ったらしく言い、羅刹を抜刀すると、全く構えていないルシファーに向かって走り出した。

低い姿勢から懷に潜り込み、斬り上げるように攻撃するが、緊那羅の素早い連撃を軽々と避ける。

全く髭切を使わず体の動きだけで避けていたルシファーだが、顎を貫くような鞘での切上げを遂に髭切を使い防いしまった。

その瞬間緊那羅は受け太刀している髭切ごと、鞘を蹴り上げた、完全に無防備になったルシファーを嘲笑うように見上げる。

「終わりよ」

防ぐ事もできなくなったルシファーの喉元に羅刹を突き上げる、完全な勝利を確信した緊那羅だが、滴り落ちる血は喉元から流れていない。

ルシファーは左手、素手で羅刹を握っている、そしてビクともしない羅刹。

「強くなった、だがまだ俺の方が強い」

ルシファアは緊那羅を羅刹ごと持ち上げると、サッカーボールのように蹴り飛ばした、緊那羅は日本支部の壁によって勢いは止まるが、一発の蹴りなのに身体中が軋む、そして思い知った圧倒的な力の差、阿修羅が必要だが阿修羅は精神肉体共に傷付き戦えるような状態ではない。

緊那羅は何とか歯を食い縛り、立ち上がると再び腕輪触れた。

羅刹を納刀したまま腰の辺りで構え、息を整えた、軋む体にムチを打ち低く沈むと、殺気を込めた上目使いでルシファアを睨む。

「ベロシティ【光速】」

緊那羅は一瞬にしてその場から消える、そして光速でルシファアの横を駆け抜け、腹から両断するはずだったが、羅刹はルシファアの肉体に届く前に髭切に防がれた。

しかし緊那羅は慌てずに握る手に力を込める、そしてグッと髭切を押した。

「シンパシー【共振】」

今までのシンパシー【共振】とは違い羅刹が揺れてるようには見えない、しかし、それは髭切を弾き飛ばすという結果では無く、切断という結果でその振動を示した。

超高速振動により羅刹の切れ味は格段に上がり、同じディアンギットの鉄から出来た髭切をも切断した。

「流石音楽神様、と言いたところだが、お前の負けだ」

「あ、あんた、いつ、の間、……………に？」

倒れた緊那羅の腹は髭切が貫通している、緊那羅がシンパシー【共

振】を発動したのと同時に突き刺したのだ、神の法則を無視した悪魔だから出来る得物の複数顕現、それを忘れていた緊那羅は敗北という形でそれを嫌でも思い出させられた。

「愚かな妹よ、次はお前が死ぬ番だ」

ヘリオスは珍しく防戦一方となっていた、シトリーのパインエルの中距離攻撃が次々と放たれ、ヘリオスの間合いまで近寄る事を許さない。

「クソッ、沙羯羅はまだッスか」

「何か言ったか！？聞こえないからもう一回！」

ヘリオスはそれを無視してシトリーの攻撃をいなすのに専念する、シトリーはまだ気付いていない、着地してから沙羯羅の姿が消えた事に、ヘリオスも何でいなくなったのかは知らないが、沙羯羅を信用してその場を任された。

「まだッスか！沙羯羅！？」

「行つくよお！」

沙羯羅の声が聞こえた瞬間、森から一本の矢が放たれ、シトリーの

肩を貫いた。

「やっぱり枝が邪魔だな、10cmもずれちゃった」
「痛いんだよ！ナメるんじゃない！」

シトリーはパインルの鉄球を森に向かって思いっきり投げた、木を折りながら矢が放たれた方へ向かって行く。

暫く進むと、金属音と共に鉄球の軌道が変わった、シトリーは鉄球を戻すが、それよりも早くヘリオスがシトリーの背後にいた。

シトリーはパインルを放し、横に避けそれと同時に腕輪に触れた。
ヘリオスは切り返しと同時にシトリーに斬りかかるが、シトリーの手には既にパインルが握られていた、燃え盛るレーヴァテインはパインルの鎖に阻まれた。

「退いてえ！」

ヘリオスはバックステップで後ろに下がると、ジャンプした沙羯羅が菊理姫の刃の部分で斬り下ろした。

しかしそれもあると受け止められてしまうが、既に菊理姫は矢を引いている。

「ちょっとタイムタイム！」

シトリーは慌てるが、沙羯羅は全く気にせず矢を放った、しっかりと照準を合わせられなかったが、矢はもう一方の肩を貫いた。

シトリーは苦痛に顔を歪めるが、ヘリオスや沙羯羅とは違う方を見て笑った。

「俺っちの大将の勝ちだな」

「何よ？絶体絶命なのはあんたでしょ？」

「もう一人死んでるぜ」

沙羯羅とヘリオスが阿修羅達の方を見ると、腹に髭切が刺さった緊那羅、そして力なく倒れる阿修羅に髭切を突き付けるルシファア。

「阿修羅！」

「行かせねえよ！」

走り出そうとし沙羯羅と緊那羅をパイネルで巻き付け、地面につき倒した。

ルシファアはゆっくりと腕を引く、その切っ先は阿修羅の心臓に向けられている、阿修羅は何とか逃げようとするが恐怖と痛みで思うように動けない。

「情無い、なんとも情無い、醜き妹よ、ココで散れ」

「阿修羅！！」

「お姉様！」

ルシファアは髭切を阿修羅の心臓めがけて突き出した、しかしそれは阿修羅には刺さらず、ダークロードと戦っていたはずのシャーリの腹に。

「しゃ、シャーリ？」

「しっかり、してくだ、さい、おねえ、さま」

ルシファアが髭切を抜くと、シャーリの体は阿修羅に倒れこんだ。

「何してるのよ？わ、私なんかのために」

「そる、じゃー、は、しんせん、じゅっ、かいさま、の、た……て、……で……」

「シャーリ？嘘でしょ？ココは戦場よ、冗談は後でにしてよ」

「愚かな妹だ、ソルジャーに助けられた上に情けをかけるとは、死んでいるのだよ！」

ルシファアは嘲笑うように髭切を横薙に振る、そして髭切は阿修羅の抱いていたシャーリの首を斬り落とし、阿修羅の顔を吹き出すシャーリの血で染めた。

「いやあああああああ！！！」

阿修羅はシャーリの体を放し、頭を抱えながらシャーリの体から離れた。

「嫌、嘘、嫌、シャーリ、嘘、ダメ！」

「ハハハ！醜いぞ！」

阿修羅は髪の毛を掻き乱しながらシャーリの体から離れる、顔は真っ赤に染まるが、阿修羅の真っ黒な髪の毛は差ほど変わらない。そして過呼吸となり、口を大きく開けて苦しんでいるようにも見える、胸を掻きむしるように抑え、地面に顔を埋めた。

「う、うう、あがぁ、くっ、ぐあぁ、うぁ、……………ああああぁ、あつ、い、熱い」

阿修羅は顔と頭を抑え始めた、そして吐血、顔を抑えたまま体をのけ反らせると、指の間からルシファアを睨み付けた、その眼は赤く染まり、瞳孔は猫のように縦に割れている。

「熱い、熱い、熱い熱い、熱い熱い熱い熱い熱い！」

頭を抑えながら叫び苦しむ阿修羅、その光景はまさに異様、ヘリオスや沙羯羅はあまりの光景に恐れを抱く程、あのルシファーまでも一歩退いた。

「熱い熱い熱い熱い熱い！……いやあああああ！！」

前屈みになって奇声を上げた瞬間、阿修羅の真っ黒な髪の毛が毛根から真っ赤に染まり始めた。

「こ、これは、まさか‘天竜の巫女’？」

髪の毛が真っ赤になった瞬間、阿修羅は真っ赤な眼でルシファーを睨んだ、人間のそれとは思えない縦に割れた瞳孔。

阿修羅はゆっくり立ち上がると全員の目の前から消えた、次の瞬間ルシファーはみぞおちを殴られ吹っ飛んでいた。

「べ、ベロシティ【光速】だと？」

「技名を言っただけ無いですよ！？」

「それより、あれは本当に阿修羅なの？」

眼や髪の色以外は阿修羅、しかしその威圧感は今までの阿修羅とは違う。

阿修羅は腕輪に触れると、拘束されているヘリオスと沙羯羅を見た。

「貴方、放しなさいよ」

「俺たち！？無理無理！」

阿修羅は夜叉丸を振ると、そこからは漆黒の刃が放たれた、それはエミッシヨン【放出】と全く同じ、しかし霊体を全く吸っていない。漆黒の刃は動けないシトリーを一瞬で両断した、ヘリオスと沙羯羅

の拘束が解かれると、阿修羅はルシファーを睨んだ。

「貴方は許さない、緊那羅にシャーリまで……………、絶対に殺す」

22..巫女

Japan VCSO Japan branch office

阿修羅は縦に割れた不気味な瞳でルシファーを睨む、その威圧感に流石のルシファーも息を飲んだ。

阿修羅は腕をブランと垂らし、夜叉丸を引きずりながらルシファーに近寄る。

ゆっくりゆっくり、一步一步ルシファーに近付く事にルシファーの死が近付くように。

しかし足下に緊那羅の動かない体が来た時、阿修羅は下を向いてしまった、そして肩を震わせながら止まり、動かなくなった。

顔を上げた時に阿修羅の頬には涙の跡が残ったまま、歯を食い縛り、夜叉丸を振り上げた、夜叉丸からは再び漆黒の刃が放たれるが、ルシファーは髭切で弾き飛ばす。

しかし阿修羅はそれに構う事なく何度も何度も漆黒の刃を放った。

「ねえ、あれおかしくない？」

沙羯羅はヘリオスの肩を叩いて阿修羅を指差した、ヘリオスはその異変に全く気付かない、しかし阿修羅は着実に変化していた。

「可愛いッスね」

「こんな時に呑気な人、阿修羅の顔じゃなくて髪、あれ撃つ度に阿修羅の髪が黒に近付いてる、どういう事？」

ヘリオスは沙羯羅に言われてやっと気付いた、真っ赤だった阿修羅の髪が徐々に黒みを帯ていく、僅かな変化だが連続で放っているた

めにそれが分かり易い。

そして阿修羅の事をよく知っているヘリオスはそれが示す意味を悟った、それと同じような反応を知っているからだ。

「ヤバいッスよ！あのままじゃ阿修羅が死んじゃうッスよ」

「どういう事？」

「阿修羅のエミッション【放出】はアブソルペーション【吸収】で得た霊体を刃と化して放つ神技ッス、夜叉丸は霊体がMAXの時は真っ黒、無くなった時は元の色の銀色戻るんでスけど、このままいくと阿修羅の髪の毛が真っ黒になった時、阿修羅の霊体はゼロになっ
て……………」

ヘリオスはそこで言葉を濁した、沙羯羅にもそれは分かる、霊体がゼロになればエネルギー切れ、つまり死ぬという事。

「じゃあ止めてよ！」

「今の阿修羅に近付けると思ってるんスカ！？俺だって助けたいッスよ、でも近寄れないじゃないッスカ」

阿修羅は足下にいる緊那羅に当たらないように夜叉丸を振り回している、そのため長刀である夜叉丸の軌道が不規則且つ広範囲、無闇に近寄れる状況ではない。

そして受け太刀したとしても漆黒の刃が放たれる可能性がある、迂濶に近寄れる状況では無いのだ。

今の阿修羅は他人の言葉を聞き入れられる状況ではない、まさに絶体絶命。

阿修羅は無我夢中で体力が減っている事に気付いてない、ルシファ―の体には確実に傷付いているが致命傷はない、このままだと阿修羅が死だけが待っている。

ヘリオスが唇を噛んで何とか阿修羅を助ける方法を考えていた時、阿修羅の動きが止まった、ヘリオスや沙羯羅のみならず、ルシファ―までもが驚きの表情を浮かべた。

そして阿修羅の視線は徐々に下がり、足下で止まった、阿修羅の足首は緊那羅に掴まれている。

「お、ち……………、つ、い……………」

緊那羅は再び倒れた、それだけでも阿修羅を現実に戻すには充分、阿修羅は夜叉丸をしっかりと握ると再びルシファ―を睨む、決意と覚悟に満ち、恐怖や不安の無い目で。

「妹を甘く見た事を後悔させてあげる」

「俺も戦況が分からない程愚かではない、神選10階に後方援護、そして天竜の巫女、流石の俺でも勝ち目が無い、今回は退かしてもらう」

「卑怯よルシファ―！」

阿修羅は追おうとしたがルシファ―あつという間に黒い穴に入ってしまった。

阿修羅は緊張の糸が切れ、髪の毛と眼が元に戻ると同時に倒れた、ヘリオスは慌てて近寄り、上半身だけ持ち上げる、阿修羅は気を失っているだけでヘリオスは安堵の息を漏らした。

「皆塔内に戻って！近くにいる負傷者は抱えて、ダークロードは私が相手します！」

沙羯羅が叫んで戻ったのはホーリナーだけだった、ソルジャーは全く聞く耳を持たず、動く気配が無く戦い続けたままだ。

「ソルジャーも戻って！」

「ちっ、小娘風情が粹がるな」

「俺達でやっとなのに一人でどうにかなると思うのかよ？」

「支部のホーリナーごときが」

プライドの高いソルジャーは口々に沙羯羅を馬鹿にする、沙羯羅を知らないソルジャーだからしょうがない。

「お前ら何やってるんスカ！？命令が聞けないなら全員ダーククロードと一緒にぶっ殺すだけッスよ！」

ヘリオスの命令でやっと戻って来たソルジャー達、それと同時に全ての防護シャッターが閉じる、そして一人でエレベーターに乗り込んだ沙羯羅。

防護シャッターを壊そうとする音が塔内に響く、そして一階ロビーのモニターに沙羯羅が写った。

沙羯羅がいるのは屋上、沙羯羅はカメラに向かって手を振ると菊理姫を構えた、矢を思いっきり引いて空へ向ける。

「あんな小娘なんかに出来る」

「どうせ目立ちたいだけだろ？」

「現実を思い知らせてやれよ」

ヘリオスは苛々しながらソルジャー達の話聞いていた、一緒に戦ったから分かる、少ない動きだが分かった沙羯羅の強さ。

「やっぱソルジャーッスね、お前ら何かが束になっても沙羯羅には勝てないんじゃないッスカ？力を過信したソルジャーより、自分の身の程を知ってる沙羯羅の方がよっぽど強いッスよ」

ヘリオスのキツイ口調にソルジャー達が萎んでる中、沙羯羅の準備は着々と整っていた。

沙羯羅は空に向けた矢を思いっきり放つ、ある程度昇った時。

「エクスペンション【拡大】」

矢が丸太以上に巨大化する、その増加率は神選10階レベル、もしくはそれ以上。

しかしそれだけでは2、3体を殺せるのが関の山、沙羯羅は両手を真っ直ぐ矢に向けた。

「乱れ散れ！」

沙羯羅が腕を左右に大きく開くと、巨大化した矢が数百本の普通の矢に別れ、塔をギリギリで避けて日本支部支部の敷地に降り注ぐ。沙羯羅の菊理姫の矢は形状を自由に換えられる、同質量なら分裂させようが、先を丸くしようが、矢の範囲を脱しなければ自由自在に操れる。

一階ロビーにいるソルジャーは大きな口を開けて驚いている、そして地面に矢が突き刺さる凄まじい音と共に、ダークロードの凄まじい悲鳴がこだました。

数日後

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

緊那羅は奇跡的に一命をとりとめた、阿修羅が倒れた原因は霊体不足と過剰な負荷、つまり今回の戦いでの死者はシャーリ一人だけとなった。

シャーリの死体はバチカンに送られ葬儀も終了したとのこと、神選10階を守り名誉的な戦死としてかなり盛大なものだったらしい。しかし阿修羅の心は塞ぎ込んだまま、病室で隣にいる緊那羅は動かず、大切な友達は自分のせいで死んだ、そればかりが阿修羅の心を苦しめ続けた。

「阿修羅あ、緊那羅はまだ起きないのか？緊那羅が起きたらまたくれーぷ食べような！」

「そうね」

照準の定まらない目でどこかを見ながら摩和羅女に応えた、摩和羅女はあれ以来阿修羅と緊那羅の隣で寝泊まりしていた、ヘリオスは神選10階の任務の延長で日本支部の任務を手伝っている、沙羯羅も任務だ。

元帥は阿修羅が天竜の巫女になった今、ルシファアの狙いは阿修羅

一点になったと推測、それ故にヘリオスは残したのだ。

病室には摩和羅女以外は来ない、緊那羅と摩和羅女の穴を埋めるために日本支部のホーリナーは各地を飛び回っているからだ、ヘリオスや金色孔雀もしかり。

コンコン

扉をノックする音が鳴った、医療班が来るには早すぎる、誰かと思って摩和羅女が扉を開けると、そこにはブルージーンズに刺繍の入ったTシャツというラフな格好の男、ボサボサな髪の毛を掻きながら摩和羅女を覗き込んだ。

「どちら様？日本人のホーリナー、……だよな？」

「天竜の巫女はいるか？」

その瞬間摩和羅女は腕輪に触れた、得物は暗器の針、名は針鬼。

針鬼を握り男の喉元に突き付けた、動けば一瞬で殺せる、男は苦笑いを浮かべながら両手を挙げた。

「かあああ！威勢が良いねえ、そして良い心がけだ、天竜の巫女を守るにはそんなくらいの心がけがなきゃな！」

俺も苦労した、アイツ自由だから目を付けてないとすぐにいなくなりやがる、本当に猫みたいだなだった！人にはなつかないクセに家には帰って来る、甘えたかと思ったら噛みつきやがって、でもそこに惚れたってのもあるのかもな。

それでお嬢さんは誰だい？」

流石の摩和羅女もあまりの出来事に針鬼を落としてしまった、何も聞いていないのに長々と喋り、一人で思い出に浸る、そして何より

煩い、声がデカイ、口が大きい、やかましい。

「摩和羅女、誰か来たの？」

「阿修羅、何か変なおじさんがいるんだ」

「うお！いたいた！」

男は中に入ろうとしたが、扉の梁に頭をぶつけてその場に蹲った、阿修羅も摩和羅女も呆れて言葉が出ない。

そして悪い悪いと立ち上がろうとした時、下から突き上げるように再び梁に頭をぶつけた。

「摩和羅女、戻って来なさい」

「おう！そういう冷たいところも阿修羅あすらに似てる」

その瞬間阿修羅の顔が変わった、男は頭を抑えながらパイプ椅子を取り出し、阿修羅のベッドの隣に座る。

イテエイテエと繰り返しながら阿修羅用の水を飲み干した。

「それで貴方誰？」

「俺か？俺は元老の毘沙門天、こう言った方が分かり易いか？俺は阿修羅、テメエのパパだ！」

23…犬猿

Australia VCSO Australia branch
office

熱いを連呼しながらオーストラリア支部の一階で倒れるククルカン、イタリアはヨーロッパの中では暖かいとはいえオーストラリア程ではない、逆にアルテミスは比較的テンションが高い、アルテミスの故郷はエジプト、砂漠のど真ん中に建っているオーストラリア支部のような環境は慣れっこだ。

今回の二人の任務は創造神ズルワーンの護衛、ズルワーンは背中に刺繍の入ったボロボロダボのロングTシャツに、薄手の茶色い布で出来たズボン、それに頭には茶色いバンダナを巻いた小さな少年だ、砂漠地帯のホーリナーはアルテミスやズルワーンを始めターバンやバンダナを着けるらしい。

「あ、あのお、本当に僕が狙われてるんでしょうか？」

「そうだよ、アンタ強いんだろ？」

「えーと、まあ、人並みに」

「謙遜はモテないモテない、強いからうちらが来たんでしょ」

ズルワーンは顔を真っ赤にしながらバンダナの上から頭を掻いた、その幼さはモリガンにもアストライアにも無い可愛さがある、そしてすぐに照れるシャイな一面。

「ねえねえ、ココにクーラーとかは無いの？」

「馬鹿か！一階にクーラーなんて置いてみる、出入りの時に入る砂

で全部スクラップだ」

「アルテミスさんは、よく知ってますね」

「当たり前だ、アタイはエジプト支部だよ」

「エジプトの砂は、大きくて困るん、ですよ？」

「まあな、この細かいのも充分問題ありだけどな」

砂漠など無いイタリア支部のククルカンに入る隙は無い、それ以前に何故こんな所に塔を配置したのかが疑問だった。

しかしそんな暑さをも忘れさせる黒い穴、その瞬間ダルそうだったククルカンの目の色が変わった。

3人はほぼ同時に腕輪に触れる、ククルカンは柄が刃で覆われている槍、名はルドラシス、アルテミスはドーナツ型の暗器チャクラム、名はフルムーン、ズルワーンはかき爪、名はネイト。

3人が外に出ると、黒い穴から赤黒いローブをおった悪魔が出てきた、悪魔はフードを取ると片面で3人を睨んだ、もう片目には眼帯がしてある。

「チッ、かなり大物が釣れたぞ」

「誰誰？超綺麗な金髪の彼に惚れたの？」

「馬鹿が！奴は、隻眼のバアル、恐らくホーリナーで最強だった奴だ」

「物知りだな、しかし一つだけ間違いがある、最強は我ではなくルシファア様、そして今の名は……、辞めておこう」

「何よ何よ！言いかけたんだから言いなさいよ！」

悪魔は鼻で笑うとあざ笑うようにククルカンを見た、ククルカンはジャージの襟で隠れていて分からないが、かなり口元が膨らんでいる。

「しょうがない、問題だ、我の名はルシファア、バアル、ベルゼブ

ブ、さあどれだ？」

「ククルカン！アタイが先に解くからね！」

「無理無理！うちに勝てるわけないでしょ！」

「あのお、明らかにベルゼブブだと、思うんですけどお」

「少し黙ってろ！」

「す、すみません」

中指を立てたククルカンとアルテミスに何故か謝るズルワーン、そしてそれを見て小さく笑いながら手を叩くベルゼブブ。

「コレくらいの問題も解けないとは低レベルだ」

「ムカつくムカつく！あの人を馬鹿にした態度！」

「アタイも好きじゃないね、ああいうタイプは」

「では次の問題だ、君達が生き残るにはそのガキを差し出す、君達が我々の仲間になる、和平交渉、さあどれだ？」

「悪魔をぶっ殺す！」

ククルカンは思いつきり突っ込んだ、ベルゼブブは交渉決裂と誰にも聞こえない声で言い、腕輪に触れた、得物は槌、名はトゥールハンマー。

ベルゼブブはトゥールハンマーを担ぐと、両手で思いつきり振った、重い槌は受ければそのまま吹き飛ばされるが、ククルカンは左手のみで受けた。

「うちの力をナメんなよ！」

そのまま空いてる右手でベルゼブブを殴った、ベルゼブブはよろめきながらも踏ん張るが、懐には既にズルワーンが潜り込んでいた。ズルワーンは下から切り上げたが、ズルワーンの腕自体を掴み、そのまま投げ飛ばした。

「ククルカンしゃがんで！」

「えっ！？うわぁ！」

ククルカンがアルテミスの声で振り向いた瞬間、目の前にはフルムーンがあり、ククルカンは倒れ込むように避けた。

フルムーンはベルゼブブの首を擦りアルテミスの人差し指に戻って来た、傷は致命傷では無いが、ベルゼブブのプライドは傷付けられた。

「我に傷を付けた……………」

「次はぶっ殺すよ！」

「ナメるな、我は神選10階ごときに負けはしない」

ベルゼブブはもう一つトゥールハンマーを顕現し両手握った。

「コレだけで驚くな」

「いやいや！驚くでしょ」

「エレクトリフィケーション【帯電】」

2つのトゥールハンマーは電気を帯た、そしてトゥールハンマーを平行して突き出すと、間でアークが行き交う。

トゥールハンマーを振るとアークがアルテミスに襲いかかる、アルテミスはアークの軌道を読み横に避けるが、それに応じて方向が変わった、アークはアルテミスを捉えると一気に電流がアルテミスに流れ込んだ。

「くうあああああ！」

アルテミスはそのまま膝を着き、ゆっくりと倒れた、アルテミスは痙攣しながら倒れている。

「バキューム【真空】！」

ククルカンはアルテミスとトウルハンマーを繋ぐアークを真空中で切断した、アルテミスは体に電気を出しながら痙攣している、気を失っていて全く動かない。

「何よ何よ！2つ使って卑怯よ」

「卑怯と取るか、力と取るかだ」

「うるさいうるさい！ムカつく！」

ククルカンはルドラシスをぐっと引くとベルゼブブもトウルハンマーを引いた、そしてククルカンはルドラシスを突き出し、ベルゼブブはトウルハンマーを振った。

「ツイスター【竜巻】」

二つの細い風の渦が二人の間でぶつかった、砂漠の砂は舞い上がり砂嵐と化す。

目の前の視界がゼロになり、どちらが優勢か劣勢かは分からない。

「終わりだ」

「ふえ？」

その瞬間ククルカンの体を竜巻が包み込んだ、ククルカンは周りの砂と同じように軽々と吹き飛ぶ、身体中砂まみれになりながら砂に埋まるように止まった。

「後は君だけだな」

ベルゼブブは今まで尻込みしていたズルワーンを睨んだ、ズルワーンは震えながらも構えた。

「問題だ、悪魔になり安泰を望むか、その爪を向けて後悔すら出来ないようになるか、どちらが利口だ？」

ズルワーンは冷や汗をかきながら大きく息を飲んだ。

「ほ、本当に何も、しないんですか？」

「約束しよう、我らは仲間を裏切らない」

「そ、それなら、僕は――」

「「ちょっと待てえ！」」

ボロボロになったアルテミスとククルカンが立ち上がっていた、フラフラになりながらも得物を握っている。

「まだ生きていたのか、しぶといな」

「死ぬわけないでしょ、あんたなんかアタイは殺せないよ」

「温い温い！殺したいならこうしなきゃ」

ククルカンは両手を前に突き出した、しかしそれよりも早くベルゼブブはトウルハンマーを振る。

「ツイスター【竜巻】」

完全に油断していたククルカンとアルテミスはそれを防ぐ手段が無い、さすがにもう一度それを受ければ命の保証はない。

「コンストラクション【構築】」

その瞬間アルテミスとアストライアを覆うように壁が現れた、コンストラクション【構築】は全ての物質の形を変える神技。風の渦は壁に当たり砂を舞い上げて消えた。

「君は邪魔だ」

ベルゼブブはトゥールハンマーをズルワーンに向かって投げた、ズルワーンは怯む事なく構える。

「カット【切断】」

ズルワーンのネイトは黒く光り、トゥールハンマーが近付いた瞬間バラバラに斬り刻んだ。

物を作り出し、全てを破壊する、それから付いた名は、万状のズルワーン、ズルワーンの前では全ての形が意味を成さない。

「ツイスター【竜巻】！」

ベルゼブブの意識がズルワーンに向いている時、ベルゼブブの体を風の渦が包んだ、踏ん張っていれば飛ばされないが、視界が砂のせいでゼロなタメに耐えるしかない。

「アルテミス、あそこにフルムーンを投げ入れて」

「馬鹿か！視界を無くしてもあれじゃあベルゼブブに届かないだろ！」

「良いの良いの、ほら、早く、いっぱいだよいっぱい」
「分かったよ」

アルテミスは大量のフルムーンを竜巻に投げ入れる、フルムーンはベルゼブブに届く前に竜巻に巻かれぐるぐる回っている。

「確かに出れないけど、殺さなきゃ意味が無いよ」

「バキューム【真空】」

竜巻の中のフルムーンは急に角度を変えベルゼブブに向う、まるで何かに当たったように曲がる。

「うちの神技ならこんな事簡単簡単」

「じゃあ一気に殺りなよ」

「はいはい」

ククルカンには竜巻の中は手に取るように分かる、フルムーンの位置は当然、そして目を瞑り集中する。

「バキューム【真空】」

小さな声で神技を放つと全てのフルムーンがベルゼブブに襲いかかる、この状態でフルムーンを避けるのは不可能、竜巻の中にはベルゼブブの屍があるはずだが、ククルカンの顔が晴れない。

「どうしたんだい？」

「嘘よ嘘よ」

竜巻が消えた時、その中にはフルムーンのみでベルゼブブはいなかった、悪魔特有の移動手段、黒い穴に入り消えたのだ。

「悔しい悔しい！逃げられた！」

「まあ良い、任務は完遂だ」

「あのお……………」

任務の終わりを喜ぶ二人の前に申し訳なさそうにズルワーンが現れた、体をモジモジさせながらうつ向いている。

「何何？愛の告白？」

「馬鹿か！そんなのあり得るわけないだろ。」

それで、何か用かい？」

「あ、ありがとうございます、ございました、僕、悪魔になってる、ところでした」

「そんなの気にしない気にしない、任務も終わったし、お風呂に入りたあい、砂だらけ」

「砂風呂でも入ってな」

ズルワーンの申し訳なさなど全く気にしてないアルテミスとククルカン、ズルワーンには外見は全く違う二人が似た者同士に見えた、自己チューで大雑把で男勝り。

「お二人は似てますね」

「「どこが！？」」

「こんな自己チューで！」

「大雑把で！」

「「男勝りの女のどこが！？」」

同類嫌悪、同じような者同士を嫌うのは人間なら仕方ない事。

24..歪形

I n d i a V C S O I n d i a b r a n c h o f f i c e

インドの独特な空気で元気が削がれているメルポメネとユピテル、インドはバチカンに次ぐホーリナーの拠点。

しかし近年は悪神のアカ・マナフくらいしか有望なホーリナーが出ていない、強いのに変わりないが、第2の神選10階と呼ばれた全盛期の面影は無い。

そして悪神の名の通りのアカ・マナフが神選10階にならない理由、それはダークロードが強いにも関わらず、ホーリナーは強くないという理由からだ。

支部長は泣く泣くアカ・マナフを支部に残している状態だ。

そしてアカ・マナフはメルポメネに絡み続ける、メルポメネは笑顔を崩さないが、内心護衛する相手でなければ皮を剥いでいた。

「おいそこの引きこもり」

「お、オラの事かあ？」

「そうだよ、神選10階ってのはこんな綺麗な人ばかりなのか？」

「基準は分がらねえけど、可愛いんでねえか？」

「貴方みたいな人には勿体無いくらいですよ」

毒を吐くメルポメネ、メルポメネが出す殺気にアカ・マナフもユピテルも気付いていたが、アカ・マナフがその手をメルポメネから退けるような気配はない。

しかしアカ・マナフのおふざけもここまでらしい、ビリビリと張り

つめるような空気を感じ、アカ・マナフは人が変わったかのように飛び出した。

アカ・マナフが辺りを見回すと、黒い穴があった、アカ・マナフは興奮しながら腕輪に触れる、得物はインド特有のナイフ、ククリ、名はナフト。

悪魔は穴から出てくると静かにフードを取った、半目でアカ・マナフを睨むというよりは、確認するように見ている。

「神選10階さんよお、ココは俺に任せてもらう」

「それはダメだあ、オラたちはおめえも守りに来た、だから戦わせるわけにはいがねえ」

「うるせえんだよ、ココは俺のホームだ！戦わせなきゃお前達をぶっ殺すぞ」

アカ・マナフは殺気を込めてユピテルを睨む。

「まあ良いんじゃないですか？暴走により自滅、私達に抜かりはありません」

「分かってるじゃねえか」

アカ・マナフは独特な形のナイフ、ナフトをチラつかせながら悪魔に近寄る、悪魔は無表情で感情が読み取れない、半目で眠いようにも見える。

アカ・マナフはナフトを突き出して悪魔に向ける、アカ・マナフの顔は自信に満ち溢れている。

「名前を名乗れ、俺はアカ・マナフ」

「……………ザガム？」

「だからアカ・マナフだ！」

「……………ザガム」

悪魔は誇らしげに言う、何故かその表情は達成感に満ち溢れている、何が嬉しいのか分からないが、何かが嬉しいらしい。

「ザガム」

「それ、お前の名前か？」

悪魔もといザガムは胸を張って頷いた、何故か気の抜ける青年、一本ネジの外れたような不思議な青年だ。

ザガムはやつくりと腕輪に触れた、得物はダガー、名はクラスト。

「やる気満々じゃねえか」

「……………強い？」

「俺は強いぞ」

「……………強い」

ザガムは再び自信に満ち溢れた顔でアカ・マナフを見る、どうやらザガムの疑問符は質問ではなく、自分の事を示しているらしい。

アカ・マナフは誇らしげな顔のザガムを気にせず、地面を蹴ってザガムに近付く。

ザガムはもう一つクラストを持つと、全く構えずにアカ・マナフを見ている。

「気をつけろよ！」

アカ・マナフは右手に持ったナフトを引いた、そしてぐっと沈むみナフトを突き出そうとしたが。

「クッ！」

アカ・マナフの肩は急に切れ、血を吹き出して倒れた。
その間ザガムが動いたようには見えなかった、ザガムは眠そうに立っている。

「テメエ！何した！？」

「……………斬った？」

「クソがあああああ！」

アカ・マナフはナフトを振り上げ、ザガムに近付くが、振り下ろす前にザガムに抱きつくような形で止まった。

ザガムはアカ・マナフを軽く手で押すと、アカ・マナフの腹にはラストが刺さっていた。

「……………弱い？」

「て、テメエ……………、何を、した？」

倒れたアカ・マナフのもとにいち速く駆け付けたのはユピテルだった、ユピテルはアカ・マナフを抱き上げ、支部の医療班に任せるとザガムに近寄った。

「ココからはオラだちが相手だあ」

「……………」

「おめえこつち側に戻るきはねえが？」

「……………ない？」

「ユピテル、相手は悪魔ですよ、敵には問答無用です」

「でも仲間になるかもしれねえでねえか！」

メルポメネはユピテルを軽蔑の目で見ている、しかしユピテルの目は至って真剣だ。

「ユピテルのやってる事は今の悪魔がやってる事と同じですよ、仲間にならないなら殺す」

「殺さねえ！オラは人は殺さねえ」

「ならこの戦いでユピテルの信念を示してください」

「望むところだあ」

ユピテルは腕輪に触れた、得物は三叉の矛、名はトライデント。

ユピテルトライデントを構える、しかしザガムは相変わらず眠そうにして、ただそこに立っているだけ。

ユピテルは前髪を上げて白い右目を露にした、ザガムは不気味がる事もなく、ただ傍観している。

「悪魔なんか辞めろお」

「……………楽しい？」

「悪魔は楽しくねえ」

「楽しい」

「それなら無理矢理連れて帰るまでだあ」

ユピテルはザガムに突きを放つが、トライデントはザガムから反れて行った。

「そういう事がある」

ユピテルはトライデントを持ってそのまま突っ込んだ、しかし途中でユピテルが止まった時、ユピテルはザガムの腕を掴んでいた。

「……………え？」

「見えねえ程のスピードで腕を動かす、だからいつの間にか斬られてる、そうだべ？」

「……………正解？」

ユピテルはザガムから遠ざかり、跳び上がった、ユピテルはトライデントをザガムに投げつける。

「ライトニング【落雷】！」

ザガムがトライデントを防いだ瞬間、トライデントに雷が落ち、トライデントごとザガムを感電させた。

「もう動けねえべ？」

ユピテルはゆっくりとザガムに近付く、ザガムは体から煙を出して倒れている。

そしてユピテルがトライデントを手についた瞬間、倒れてたザガムが立ち上がりユピテルに斬りかかった。

「しぶといなあ」

ユピテルはトライデントで弾くが、もう一方の手に持ったクラストで斬りかかる、ユピテルには動きが分かるが、遠くで見ているメルポメネには全くわからない。

しかし連撃となると話は別、ザガムの速い攻撃を全ていなしきれず、ユピテルは傷だらけになる。

確実にユピテルの体力は奪われている、ただでさえ相手の電気信号を読み取るのに体力を消費するのに、素早い攻撃を受けるのは更に難しい。

「これまでですね」

メルポメネが動いた、メルポメネは腕輪に触れる、得物は1m四方

の布、名はラフスキン。

ユピテルの体力が限界に近付いた頃、ザガムの心臓を貫くように剣状のラフスキンが出てきた、ザガムは動かなくなり、ラフスキンが抜けるとザガムは倒れた。

後ろからはメルポメネが現れた、ユピテルは傷だらけの体でメルポメネを睨んだ、メルポメネは笑顔でラフスキンを戻す。

「何で殺した!？」

「ユピテルの身を案じての事ですよ」

「殺す事ないだろ!俺はアレだけじゃ死なない!」

「何を怒っているんですか？」

ユピテルの訛りが無くなる時、それは本当に怒った時のみ、メルポメネは笑顔でそれを流す。

「人を殺したんだぞ、人を殺して何で平気なんだよ!？」

「敵ですよ?敵を殺しただけじゃないですか」

「敵でも人間だ!」

ユピテルはメルポメネのドレスの胸ぐらを掴み上げた、体はバチバチと帯電しはじめ、髪の毛は軽く上がりだした。

「私に刃を向けるんですか？」

「人は殺さない、俺は俺のやり方で悪魔を無くす」

ユピテルはメルポメネを突き飛ばした、それでも笑顔が崩れないメルポメネ。

ユピテルは踵を返して帰路に向かった、メルポメネは笑顔から嘲笑へと変わる、ユピテルの甘さと弱さへの嘲笑だ。

治る事の無い歪み、しかし信念は違えど目的は同じ。

「もしかして、……………ロボットなんですか!？」

『人間だよ、君、頭弱いね』

「絶対にロボットですよ、じゃなきゃ嫌」

『君の偏見で僕を決めないでくれよ』

若干不機嫌を漏らしながら言うモリガン、喜怒哀楽の起伏が皆無に等しいモリガンでも失礼なメルクリウス。

「アストライアさん、白装束さんの顔見た事あります？」

『モリガン』

「……………可愛い」

「それは幻覚ですよ!絶対に配線がいつぱいです!」

力説してるメルクリウスの前にモリガンが立った、メルクリウスは何故か構えてモリガンを見る。

『そんなに見たいのかい?』

「何をですか?」

『顔だよ、そこまで言われたら侵害だ』

「み、見せてくださいよ」

メルクリウスは息を飲んだ、モリガンはゆっくりと仮面に手を掛ける、メルクリウスは目を丸くして次のモリガンの行動を期待する。しかしモリガンの手は止まった、背後に感じるビリビリという嫌な感覚、スツと立ち上がるアストライア、モリガンは仮面から手を退けて後ろを向いた。

そこには黒い穴がある、そこからは赤黒いローブ、つまり悪魔が出てきた。

『やっと来たよ』

「顔は見れないんですか!？」

メルクリウスはかなりのショックを受けている、モリガンは2重声のため息を吐いた。

「……………任務」

『分かってるよ』

「私にもやらせて下さい」

『まあ良い、足を引っ張る心配はないだろう』

3人は外に出ると同時に腕輪に触れた、アストライアは剣と盾、名は剣はフリスト、盾はヒルド。

モリガンの得物は鎖の付いた2m程の鉄球、名はシヴァ。

メルクリウスの得物は刃の付いた靴、名はソルシュ。

「やっと着いたっつの」

悪魔はフードを取った、そこにいるのは元第10階のアスモデウス。モリガンは何の躊躇もなくシヴァの鉄球を投げた、しかしシヴァは凄まじい音と共に止まった。

『さすが馬鹿力だね』

「ククルカンには負けるっつの」

再び爆発のような音が響くとシヴァがモリガンの基に戻って来た、モリガンは片手でシヴァを取り、アスモデウスを睨んだ。

アスモデウスは既に腕輪に触れていた、得物は籠手、名はメギンギヨルズ。

「その構えはフェアバーン・システム？」

「知ってるじゃん！でもニアピンだっつの、俺のはそれにCQCとシステムを足した、言わば軍隊武術の最強型だっつの」

全て攻撃をその両腕のみに託し、ゼロ距離の戦法のみに特化したアスモデウス、神の時は近距離最強クラスだった。

「そういうあんたはテコンドーか？」

「残念ですね、カポエラです」

「そんなもんは戦いに使えないっつの！」

その瞬間メルクリウスの顔が変わった、初めて見せた怒りの表情、温厚だったはずのメルクリウスが怒る事など皆無に等しい。

「カポエラは立派な武術です！」

メルクリウスは走り出した、それにつられてアストライアは横に動く。

メルクリウスは自分の間合いに入ると、体制を低くし大きな弧を描いてアスモデウスを蹴る。

アスモデウスはメギンギョルズで防ぐと、真っ直ぐ殴りかかるが、メルクリウスはすると煙のように避けた。

そして真っ直ぐ突き出されている腕に両足を絡め、両手を地面に着いてアスモデウスを投げ飛ばした。

「そんなのあり！？」

そして投げられた方にはアストライアがいた、アストライアはフリストで斬ろうとするが、アスモデウスが体制を立て直す方が早く、アスモデウスの一発をヒルドで防ぎフリストは引く。

「……………エクステンション【延長】」

「酷いっつの!!」

アスモデウスは何かメギンギョルズで防ぐが、アストライアは既にヒルドを振ろうとしている。

「……………ミーティア【流星】」

「馬鹿! 辞めろっつの!」

ヒルドから放たれた光の円盤はアスモデウスを捉えた、そしてボールのように吹き飛ぶアスモデウスを待つのはモリガン、鉄球と鎖接続部分を持って思いつき振る。

「ナメるなっつの!」

アスモデウスは何とか体制を立て直し、シヴァを強く睨んだ。

「エクスプローション【爆発】!」

アスモデウスが思いつきシヴァを殴ると、爆発してシヴァはモリガンごと吹っ飛んだ。

『グラビテーション【重力】』

シヴァは急に重くなりコンクリートの地面に突き刺さる、そしてモリガンはやっと止まった、しかしアスモデウスの方が上を行っている。

「ベロシテイ【光速】!」

アスモデウスは光速で移動し、止まったばかりのモリガンを殴り飛ばす、モリガンは支部塔の中へと消え、宿主が消えたシヴァ宿主と同じように消えた。

「一丁上がり」

得物が消えたのはホーリナーの死を現す、例え気絶したとしても、ホーリナーの意思に反して得物が消える事はない。

「酷い、何で私達を狙うんですか!？」

「そうだそうだ、忘れてたっつゝの、悪魔になれ、さもなくば殺す、だったかな？」

「断ります!モリガンさんを殺した罪、死んで償ってもらいます!」

メルクリウスは走り出した、その後ろにいるアストライアは涙を浮かべながら後を追う。

メルクリウスは先ほどよりも素早い動きで蹴る、そしてもう一方からアストライアが斬りかかって来る、明らかなアスモデウスの劣勢に見えた。

「まだまだ甘いっつゝの」

アスモデウスは一瞬の隙をついてアストライアを蹴り上げた、そして体の浮いた無防備なアストライアを殴り飛ばす。

アストライアは体を打ち付けながら止まり、ぐったりと動かなくなった、得物がまだ両手にある事から生きてるが、まさに絶体絶命。

「弱いつつゝの、ほら、悪魔になれよ、死にたくないだろ？」

「ダンシング【舞踊】!」

メルクリウスは体でリズムを刻み始めた、カポエラは本来音楽と共にやること。

「何が変わるんだっつの」

メルクリウスは先程よりも素早い蹴りを放った、しかしそれをも軽々と防ぐアスモデウス。

メルクリウスは防がれた足を上げたまま、体を浮かして反対の足で蹴った。

「だから甘いっつの」

メルクリウスはそのまま両足をアスモデウスの脇に入れ、バック転してそのままアスモデウスを地面に叩き付けた。

「くうっ！」

メルクリウスはそのまま逆立ちして体の向きを変え、アスモデウスのみぞおちを踵で蹴り落とす。

「アア……」

アスモデウスはフラフラになりながら立ち上がると、メルクリウスを思いっきり睨んだ、先程までの余裕はなく、完全に怒りに満ちた顔だ。

「やるじゃねえか、久しぶり血の味ってもんを知ったっつの」

アスモデウス口から血を吐き出した、メルクリウスは変わらずに踊

っている。

「コレから本気だっつゝの！」

アスモデウスは軽く跳ねながら構える、その構えはボクシング、アスモデウスが最も得意とする形だ。

アスモデウスは重いストレートを放つが、それをも軽々とよけるメルクリウス、しかし避けた所にはアスモデウスの拳があった。メルクリウスの腹を思いっきり突き上げ、フックで殴り飛ばした。

「ベロシティ【光速】」

アスモデウスは先回りしてメルクリウスに拳の嵐を降らせる、メルクリウスは手も足も出ずに身体中を殴られ続ける。

そして地面に叩き付けるとメルクリウスは動けなくなった、ココに立っているのはアスモデウスのみ。

「コレで終わりだ、お前ら弱すぎだっつゝの」

「まだ、しにたく、ない」

アスモデウスは拳を振り上げた、矛先はメルクリウスの頭部。

「終わりだ——」

「グラビテーション【重力】」

アスモデウスの体に過度な重力が加わり、地面に叩き付けられて動けなくなった。

アスモデウスとメルクリウスが見る先には、身体中ボロボロになったモリガンがいた、当然仮面などは割れてモリガンの素顔が露になっている。

「デメエ、死んだんじゃないかねえのかよ？」

「シヴァを戻したのは死んだように見せるため、遅くなったのは動けなかったからだよ」

モリガンの小さな悪魔が笑う、美少年という形容がふさわしいモリガン。

「まだ死ぬわけに行かないっつゝの、モリガンの顔が見れただけでも儲けもんだな」

「また逃げるのかい？」

アスモデウスは歯を出して笑うと地面に穴を作り、そこに消えて行った。

メルクリウスは骨を何本か折り立ち上がれないが、命への問題は無い、アストライアはいつの間にか立ち上がり、モリガンの後ろにいた。

「モリガンさん、凄く可愛いですね」

「う、うるさい」

モリガンは顔を真っ赤にして明後日の方向を見た。

「私のタイプですよ」

「そんなの知らないよ」

「神選10階補充の時は私を呼んで下さいね」

「……………モテモテ」

「うるさいうるさい！だから顔を見せたくない——！」

モリガンは腹を抑えて倒れた、腹からは大量の血が流れだし、モリ

ガンの白いローブを更に赤く染める。

「モリガンさん！大丈夫ですか！？」

「大丈夫に、見えるかい」

「……………モリガン、死なない」

「ぼくは、……………にんげん、だ」

モリガンはその場でうつ伏せに倒れて動かなくなった、救護班は慌てて3人に近寄り、担架で運んで行った。

26..連携

Belarus VCSO Belarus branch of
fice

タナトスとダグザは紅茶を飲みながら外を眺めている、二人の任務は悪魔に狙われている文化神ケツアルコアトルの護衛。

そして今飲んでいるのはケツアルコアトルが出して来た物、飲み干せば注がれ、飲まなければ怒られ、結局は飲ませただけである。そして狙われている当の本人は…………。

「そこで私はこう言ったんです！……君の瞳のタメならこの命、最期の一滴まで捧げよう、ってね」

自分の口説き自慢が永遠と続いている、かれこれ5時間、話が尽きない事に賞賛を送りたいくらいだ。

「おいダグザ、コイツが何で神選10階じゃないか分かったような気がする」

「奇遇だな、俺もだ」

「おいエセ色男！」

タナトスがエセ色男と呼んだケツアルコアトルは薔薇を持ったまま固まった、そして暫くすると薔薇を噛んで悔しさを表現している。

「テメエのその口説き自慢、それ全部ココの支部長だろ？」

「ふふ、分かってしまったならしょうがない、そうだよ、私の愛しのハニーはココの支部長さ、私と彼女の愛、それは例え元帥、まし

てや悪魔になんか引き裂けない、何故なら私達は神のお導きにより出会ったのだから！あれは8年前――」

タナトスとダグザは呆れてため息を吐いた、そしてケツアルコアトルに話を振った事を後悔する。

ケツアルコアトルのような邪魔な人物が支部に残ってる理由、それは支部長との恋愛関係にあった。

だがタナトスとダグザは心底ベラルーシの支部長に感謝した、こんなのは神選10階にはいないと。

「その時私達は真に結ばれたのだよ、そして誓っ――」

「終了だぜエセ色男、奴さんの登場だ」

壁に囲まれたベラルーシ支部の中に堂々と開く黒い穴、しかしそれは一つではない、無数に空いた。

ダグザとタナトスは慌てて腕輪に触れる、ダグザの得物トンファー、名はサラスヴァティー、タナトスの得物は太鎌、名はスケイル、そしてケツアルコアトルの腕輪に触れようとしたが。

「貴様はいらん」

「何故かな？私は強いですよ」

「知らない奴は連携が取りづらい、腐ってもタナトスとは5年近く一緒に戦っているから連携が取れる」

「まあ、テメエは愛しの支部長さんのタメにどっしり構えてろ」

二人はガラス扉を蹴開き、外に出る。

大量の黒い穴からは同じく大量の悪魔が出てくる、それはアスタロト、全てのアスタロトの手には既に双剣、カリバーンが握られている。

タナトスは歓喜に顔を歪ませ、ダグザは冷静に相手を分析する。

「インクレイス【増殖】か、こういう輩は自分は違う所にいるのが通例だ、そして体術に関しては欠伸が出るようなモノ」

「つまり全員ぶっ殺して親玉を引っ張り出せば良いんだろ？」

「ああ、計69人、俺とタナトスなら………11分28秒だ」

「遅い！10分もいらねえよ！」

タナトスはスケイルを右手で持ち走り出した、そしてダグザは時計をセットして目を瞑る。

「フォーサイト【予知】」

「カット【切断】」

タナトスはカリバーンごとアスタロトを斬り刻む、大きな間合いで他人を近寄らせない、対大群戦術に関しては群を抜くタナトス、その華麗な鎌捌きはまさに死神。

そしてダグザは正反対に全てをカウンターで倒している、相手の攻撃の時の勢いを殺さずに急所を一突き。

「デメェ動きが無駄に速くねえか？」

「よくぞ分かったな、フォーサイト【予知】は視界も自分もスローになる、しかし今の俺は視界はスローだが動きは通常、つまり貴様らには速く見えるというわけだ」

それがダグザの死にも狂の修行の成果、体術を鍛える事によりフォーサイト【予知】発動時の運動能力を上げたのだ。

移動しながら戦っていたタナトスとダグザはいつの間にか背中合わせになっていた、そして既に15分経っている。

「貴様、何人殺した？」

「53だ」

「俺は36、つまり二人で89、そして今俺達を囲んでいるのは54」

「つまり全部で………」

「143だ」

「はっ、大した人数だ」

「そして今5増えた」

アスタロトは常にインクレイス【増殖】を繰り返して消耗戦に持ち込んでいる、つまりこのままでは体力に限界のある二人の負けだ。ダグザは二人の今出来る大量殲滅術を計算している、その間もタナトスはダグザに気にせずスケイルを振る、ダグザはそれを軽々と避けながら思考を働かせる。

「よし、コレだ」

「早くしろ、こっちだって体力の限界があるんだよ」

「エクスプロージョン【爆発】」

その瞬間タナトスが血相を変えて跳び上がる、ダグザは地面を殴ると凄まじい爆発が起こった、それによって飛び散った瓦礫で1／3が死に、上空に舞い上がった瓦礫をタナトスが斬り刻み、スケイルの背で弾丸のように弾き飛ばして他を全て殺した。

「デメエも無茶な事するな」

「貴様なら死なないと思った」

タナトスは鼻で笑うと辺りを見回した、増殖したアスタロトは消え、瓦礫の山だけがそこに残っている。

「親玉は何処だ？」

「知らん」

「はぁ！？何で知らねえんだよ！」

「黙れ、俺に聞いたのがそもその間違いだ」

「いやぁ強い強い！さすが死神だよ」

ケツアルコアトルは笑いながら得物のサーベル、ウエミクスをダグザの後頭部に突き付けている。

「そういう事か、俺とした事が……」

「どういう事だよ？もしかしてエセ色男は既に悪魔に堕ちてたのか？」

「違う、パラサイティズム【寄生】だ、噂には聞いた事があるが、まさか本当にこの神技が存在するとはな」

「正解！」

ダグザはサラスヴァティーを捨てて目を閉じた、ダグザもケツアルコアトルに睨まれスケイルを捨てる。

「またかよ、また俺様は何も出来ないのかよ」

「あれえ、どうしたの死神？コイツと一緒に私も殺しちゃいなよ、死神なんでしょ？」

タナトスは唇を噛んだ、今タナトスが無駄に動けばダグザは確実に死ぬ、しかしあの状態ではダグザは何も出来ない。

フロラの時と全く同じ、そして何も出来ない自分に嫌気がさした。

「もう辞めだ、俺様もそいつも殺せ、それで満足だろ？」

「ダサい、死神の事もっと骨がある奴だと思ったのに」

「勝手に思ってる、……………、コレもそこに置いとく、俺様

は何もしない」

タナトスはダグザの足下に拾ったスケイルを突き刺し、離れて座った、そして何故かダグザは笑っている。

「最期に聞いておこう、貴様の名前は？」

「アスタロトだよ」

「そうか、良い名前だな」

「えへへ、誉められちゃった」

「そしてさようなら、アスタロト」

その瞬間ダグザの足下が崩れ落ちた、ダグザは素早く腕輪に触れて間合いを取る、タナトスも立ち上がり腕輪に触れた。

「何が起こったのよ！何この穴！？」

ダグザがいた所は紫色に腐食した土と瓦礫。

「貴様も考えたな、まさかあそこでクロージョン【腐食】を使うとは」

「はは、肉以外でも腐るなんて初めて知った、一か八かだよ」

二人は笑いながら構えた、刃を向けるのは護衛するはずだったケツアルコアトル、ケツアルコアトルも同じくタナトスとダグザにウェミクスを向けている。

「私知ってるよ、死神はコイツの事を殺せない、だから私に殺される一方！」

「やってみなきゃ分からないだろ？」

タナトスはスケイルを右手で持って走り出した、何の迷いもなくアスタロトをスケイルで横薙に斬り払う、アスタロトはウェミクスで防ぐが、体勢を崩してしまった。

そしてよろけてたどり着いた先にはダグザがいる、ダグザはサラスヴァティーでアスタロトの腹を殴った。

「悪いな、自慢の顔、傷付けるぞ」

そのまま顔面を蹴り飛ばした、そしてフラフラと後退しているところに、タナトスはスケイルの背でアスタロトを弾き飛ばした。

アスタロトはボールのように吹っ飛び、体を地面に擦りながら止まった。

軋む体を何とか立ち上がらせると、恐怖と絶望の目でタナトスとダグザを見る、守るはずのケツアルコアトルの体を平気で攻撃した、恐らく殺される。

「き、君達おかしいよ、仲間の体だよ、何でそんな、平気で攻撃出来るの？」

「貴様、俺達を見くびってないか？」

「本気出してたら最初の俺様の一撃で死んでる」

「そうだよ、そうだよ！君達は私を殺せないんだよ！それなら簡単だよ」

アスタロトはウェミクスを握って走って来た、タナトスは一步前に出ると口を開けて笑う。

「カット【切断】」

アスタロトがウェミクスでタナトスを突こうとしたが、タナトスはウェミクスを斬り、そのままアスタロトの首を掴んで持ち上げた。

「殺せない？なあタナトス、コレは同志討ちか？」

「俺なら悪魔を殺す過程での不慮の事故、そういう報告書にするだろうな、恐らく悪魔を殺す事になるだろうから墜ちる事はないだろうし」

「……………ドウカンダ」

アスタロトはタナトスの笑みを見て身震いした、それはまさに死神、殺意だけを詰め込んだような顔でアスタロトを見る。

タナトスはゆっくりとスケイルをアスタロトの後頭部に近付けた、冗談や脅しではない、これは完全に殺す事しか考えていない。

「殺れ、タナトス」

「俺様達の前に現れたのを後悔するんだな」

その瞬間アスタロトはケツアルコアトルの体から離れた、そのまま逃げるように黒い穴の中に消えて行った。

タナトスは気絶しているケツアルコアトルを投げ捨て、ダグザと一緒にヘリコプターへ向かおうとした時だった、タナトスの携帯は珍しく鳴り響く。

「誰だ？……………ってテメエ！……………何で俺様が！？……………」

……………チッ、分かったよ！」

タナトスは携帯思いっきり投げ捨てた、明らかに苛ついている、携帯の見るも無惨な姿を見れば分かる。

「ダグザ、先に帰ってろ、俺様は任務だ」

27..天竜

Japan VCSO Japan branch office

「テメエのパパだ！」

「嫌よ」

毘沙門天のパパ発言に間髪入れずに拒否する阿修羅、不変の真理である血の繋がりをも否定したくなるような父親、毘沙門天はがっくしと肩を落とし、抜け殻のようになっている。

一応阿修羅も知らない父親に乙女のような妄想を抱いていた、優しくて気品に溢れ、紳士のようなスラッとした男性を想像していた。しかし、目の前にいるのはトラックの運転手のようなガタイに、ゴワゴワした髪の毛、豪快だけが取り柄のような男性だ。

「本当に母親に似てやがる」

「それで、貴方が何の様？ 私には――」

「おいジジイ！ ガキじゃねえんだからスキップしながら先に行くな！」

扉に寄りかかっているのはタナトス、阿修羅は目を丸くしてタナトスを見ている。

護衛の任務が終わったタナトスは、任務で毘沙門天と合流の後、阿修羅の護衛に迎えと言われた。

タナトスとヘリオスが阿修羅の護衛、それは最上級警戒体制に等しい、今のホーリナーで考えられる最強のトリオだ。

「何でタナトスがココに？」

「テメエの護衛だ」

「俺はいらないうって言ったんだぞ、でもどうしてもコイツが来たいと――」

「テメエが呼んどいて、どの口がそんな白々しい事を言ってるんだ？ ああ！？」

タナトスはスケイルを毘沙門天の喉元に突き付けながら毘沙門天を睨んでいる、毘沙門天は冷や汗を流しながら両手を上げて許しを乞う。

「おじさん、何しに来たの」

「酷い！実父に向かっておじさんだなんて、もう生きていけない」「そうか、じゃあ死ね」

タナトスは更にスケイルを近付ける。

「嘘嘘！生きます、生きますから殺さないで下さい！」

タナトスはスケイルを戻した、毘沙門天は安堵の息を漏らすと、冷や汗を拭って阿修羅を見た、今回は真面目な顔、阿修羅はその顔を初めて見て、やっと毘沙門天が任務で来た事を把握した。

「今この時点をもって阿修羅、君を天竜家一族の総主とする」

「はあ、病室で話すような話題じゃないでしょ、場所を移すわよ」

阿修羅はベッドから降りてスリッパを履いた、摩和羅女が止めようとするが、阿修羅は優しく笑って摩和羅女の頭を撫でた。

阿修羅は近くにある誰もいない部屋に入った、机と椅子しかない話

すにはうってつけの場所。

毘沙門天は適当に腰掛け、阿修羅は正面に座る、そして阿修羅の隣にはタナトスが座った。

「それで、天竜一族って何？」

「‘天竜の巫女’の天竜は家名だ、つまり天竜家で生まれた特殊な力を持った者の事を‘天竜の巫女’と呼ぶ」

「何で巫女なの？男の場合の呼称は？」

「天竜家は代々女系一族だから特殊な力は女性にしか出ない、天竜の巫女は母親の阿修羅も祖母のカグツチ、曾祖母と永遠に女だ

そして、巫女の力を継承した者は天竜家の長となる事が代々の掟だ、つまり阿修羅には天竜家の当主になってもらう」

「嫌よ」

再び間髪入れずに拒否する阿修羅、毘沙門天は肩を落として再び嘆く、そしてボソボソと阿修羅もそうだったと言っている、毘沙門天は女に相当弱いらしい。

「頼む！この通り！」

「無理ね」

「そこをどうに——」

「不可能よ」

「何とか——」

「ならない」

「——」

「黙れ」

最終的に何も言わしてもらえなくなった毘沙門天、タナトスはケラケラと笑いながら二人のやりとりを見ている。

毘沙門天は最後の望みと何かを言おうとしたが、阿修羅に強く睨ま

れて言葉を飲み込んだ。

「私は天獅子小町、天竜とは関係ない」

「それでも阿修羅に当主になってもらわないと困る、天竜家はホーリナーに対しても絶大な力を持つてるから、何かと俺達も困るんだ」

「それなら家に連れて行きなさいよ、私が話をつけてあげる」

「ややこしくなりそうだぞ、これは」

毘沙門天は意気消沈しながら立ち上がった、タナトスは終始ケラケラ笑いながら二人のやり取りを見ていた。

Japan Kyoto Tenryu home

阿修羅達は京都の外れにある山の上、そこだけ異様な空気が漂う家にいた。

ココが天竜家、大きな敷地にも関わらず人の気配はしない、大きいはずなのに何故か威圧感がない。

「でっかいッスねえ」

任務終わりに毘沙門天に呼び出されたヘリオスが叫んだ、阿修羅が出歩く時はタナトスとヘリオスが護衛に付く、それだけ阿修羅が危険な状態にいるという事。

天竜家には門はなく、大きな鳥居が建っているだけ、阿修羅達は迷わず鳥居を潜ろうとした時、どこからともなく人が2人現れた。

「ヘリオス！」

「余裕ッス！」

タナトスとヘリオスは瞬時に得物を取り出し、出てきた人の喉元に突き付けた、しかし出てきた方もタナトスとヘリオスの喉元に小太刀を突き付けている。

黒装束を纏った忍者のような2人、目は殺気で満ち溢れている、そして後ろには更に大量の時代錯誤の武闘派集団、刀や薙刀を持った人がいる。

「はあ、めんどろな事になりそう」

阿修羅も得物を取り出した。

「全員得物をしまえ！」

毘沙門天があり得ないくらい大きな声で叫んだ、黒装束軍団は毘沙門天を見ると得物をしまった、しかし阿修羅やタナトス、ヘリオスも得物を出したまま。

「婆！婆はいるか！？」

毘沙門天が叫ぶと奥の方から人を掻き分けて出てくる小さなお婆さん、しかし目は鋭く全てを見透かされてるような目。

「お前さんか、何じゃ？今更」

「当主代理に随分な言い様じゃねえか」

「貴方当主代理なの？なら私はいらないじゃない」

阿修羅が踵を返して全員に背中を向けた時、背中に突き刺さるような視線を感じた、それにより阿修羅は動けなくなった。

「お前さん、誰かに似てると思ったら、阿修羅あすらに似てるじゃないか」

「私は阿修羅よ」

「阿修羅あすらと俺の娘だ」

婆の顔が変わる、天竜家の者なら全員が知っている事、阿修羅あすらの娘が行方不明のままだと言う事を。

「という事は巫女様の最有力候補じゃな？」

「いや、既に巫女だぜ」

婆を始め黒装束達までが地面に両手を着いた、異様な光景にヘリオスは笑い、タナトスは呆れて頭を抱えた。

「はあ、何この集団？」

「当主様！これからは天竜家のタメにご尽力を——」

「嫌よ」

毘沙門天と同じように即答、むしろ毘沙門天よりも酷く、相手の言葉を遮つての拒否、婆や一同はあっけらかんとした顔で阿修羅を見ている。

「しかし——」

「やらないわよ、巫女だかなんだか知らないけど、私は当主なんてやらない、こんな見ず知らずの家の当主なんて出来るわけじゃないじゃない」

「それでは天竜家はどうかさるんじゃ？巫女様が当主にならず、誰が当主になると？」

「知らないわよ、私は神選10階第10階の阿修羅、親は阿修羅らしいけど、血の繋がりしか無い人間と同じ道を歩かなきゃいけない意味が分からない、私の事は私で決める、しきたりなんてそんなもん私に押し付けけないで」

阿修羅は婆を睨みながら言った、確かにそこにいるのは天竜の巫女だが、天竜家の当主ではない。

そもそも昨日今日の出来事でいきなり当主になれと言われ、当主になるような人間などいない。

「そでは仕方ありません、神選10階に圧力をかけさせてもらいます」

「はあ、最低ね、良いわよ、そこまで言うならなってやろうじゃない」

天竜の者達は顔が明るくなり、ヘリオスとタナトスは不安の目で阿修羅を見ている、しかし阿修羅は何かを考えているような顔。

「それじゃあ、当主からの最初の命令、巫女が当主を継ぐというしきたりはおしまい、それで私は当主を辞めます」

「デメエ！さっきから聞いてればいい気になりやがって！」

後ろの方から刀を抜いて走って来る一人の青年、前に出ようとしたヘリオスとタナトスを抑え、阿修羅は一步前に出た。

阿修羅の身体中の血が熱くなり、飛び抜けるような感覚と共に、阿修羅の髪の毛と目が赤く染まり、瞳は猫のように縦に割れた。

ヘリオスと毘沙門天以外は驚く、しかし阿修羅はその視線の束から一瞬で消えた、一閃だけ残して次に現れた時には刀を振り上げた青年を殴り飛ばしていた。

「これが阿修羅かよ？ありえねえ………」

「やっぱり阿修羅あすらそっくりだ！」

「この阿修羅も可愛いッスね」

阿修羅は不気味な瞳で周りを見る、ココにいる者達は天竜の巫女を見るのは初めてだ、その不気味さに手を出す事も出来ない。

「一族がどうのこうのとか小さいわね、誰も知らない私なんかに当主を頼むくらいなら、下らないしきたりなんて捨てなさい」

阿修羅はそのまま踵を返し帰路に向かった、タナトスとヘリオスも後ろを歩き、追って来る者は誰もいない。

28..絶望

Japan VCSO Japan branch office

毘沙門天は日本支部に帰ると同時に本部へ帰って行った、タナトスとヘリオスは阿修羅の護衛のため、阿修羅が帰るまでは帰れない、当の阿修羅は任務が入らないために暫くは日本支部にいるらしい。

阿修羅達は緊那羅がいる病室に入った時、緊那羅は既に体を起こして摩和羅女と話していた、阿修羅は緊那羅が元気なのを確認すると、小走りで緊那羅に近寄った。

「緊那羅、もう大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、摩和羅女から聞いたけどあんたの方がヤバそうじゃない、SPも1人増えてるし」

緊那羅はヘリオスとタナトスを見た、護衛として補充されたタナトスを見るのは初めてだが、無愛想で不気味、ヘリオスは笑顔で緊那羅を見ているが、タナトスは誰も見ようとせずに違う方向を見ている。

「ああ、あれね、あれは気にしないで」

「俺様をあれ呼ばわりするな、俺様にはタナトスっていう立派な名前がある」

「別に良いじゃない、あれだろうがこれだろうがそれだろうが」

タナトスはイライラしながらもいつもの様に食い付かない、それはあらゆる意味で阿修羅だからだ、しかし阿修羅はそれに気付いてや

つてるわけじゃない。

「俺はあれでも良いッスよ」

「テメエ馬鹿だろ？何が良いのか俺様には理解出来ない」

「阿修羅に呼ばれるだけで満足ッスよ」

「阿修羅、あんた豊作ね」

「な、何がよ？」

緊那羅はさあねとはぐらかし、摩和羅女を見た、その摩和羅女はタナトスを見ながら震えている、緊那羅は首を傾げてタナトスを見るが、震えるような事は何一つ無い。

「摩和羅女、どうしたの？」

「あ、アイツ怖い、アタシは嫌いだ」

「テメエ、嫌われるのは慣れてるが見ず知らずの奴に嫌われる筋合いはねえ、訂正しろ」

「ちよつとあんた、摩和羅女が怖がってるんだから止めなさいよ」

「テメエもだ、俺様に口出しするな」

緊那羅の表情が変わった、久しぶりに見せた緊那羅のキレた顔、タナトスはそれに更に怒りの表情で返す、二人の睨み合いにあたふたするヘリオスをよそに、阿修羅は余裕の表情で摩和羅女を外に出した。

「あんた神選10階だからって調子乗り過ぎじゃないの？」

「誰に向かって口利いてる？」

「ロン毛の狂犬色男」

阿修羅とヘリオスは思わず吹き出してしまった、後ろでクスクス笑う阿修羅とヘリオスをよそに、タナトスは顔を真っ赤にして緊那羅

を見てる、緊那羅のその勝ち誇った顔。

タナトスは侮辱や罵声には慣れていたが、このように外見の事で何かいわれるのには免疫が無いらしい、緊那羅はそれを狙わずに突いた。

「あらどうしたの？色男さん」

「て、テメェ！馬鹿にするな！」

タナトスは緊那羅の胸ぐらを掴み上げた、しかし顔は真っ赤で若干たじろいでいる。

「馬鹿にしてないわよ、本当の事を言っただけ」

タナトスの胸ぐらを握っている手に力が入らなくなり、更に真っ赤で情けない顔になった、長い間タナトスと一緒にいたヘリオスでも見たことの無い表情。

「可愛い顔も出来るじゃない」

緊那羅の最後の一撃、タナトスの手から緊那羅の胸ぐらがスルリと抜け、タナトスは軽く後退りした後、小走りで病室を抜け出した。

「緊那羅最高、あんなタナトス初めて見た」

「凄いッスね、あのタナトスを負かすなんて」

「そうかな……………」

緊那羅は上の空、阿修羅もヘリオスも首を傾げて緊那羅を見る。

「彼、案外良いかも」

硬直する二人、しかし緊那羅の顔は大マジだ、阿修羅はどう聞こうか悩んでる時、マイクのスイッチが入る音がした。

『支部内に敵影！只今タナトス様が交戦中、阿修羅様とヘリオス様は至急加勢を、他のホーリナーは緊那羅様の護衛を！』

その瞬間阿修羅とヘリオスが走り出した。

2人が外に出ると血まみれで地面に倒れているタナトス、そして血で濡れた2振りのクレイモア、髭切を持ったルシファーがいる。タナトスはピクリとも動かずにうつ伏すに倒れたまま。

「弱い護衛だ、話にならん」

「ヘリオス気を付けて、タナトスがココまでって事は他にいるかもしれない」

ルシファーは高笑いをした、腹を抱えて目には涙を浮かべながら笑っている。

阿修羅とヘリオスは警戒して腕輪に触れた、阿修羅は長刀、名は夜叉丸、ヘリオスは片手剣、名はレーヴァテイン。

「ココには俺一人だ」

「嘘よ！タナトスが負けるわけがない」

「そうッスよ！タナトスがこんな簡単に………」

阿修羅は怒りの表情を浮かべた、血が熱い、中から熱せられてるように熱い、そして噴き上がるような感覚と共に、髪と目が真っ赤に染まった。

「巫女の力を既に使いこなしてるとは、流石と言ったところだな」

阿修羅はベロシティ【光速】でタナトスに近寄り、タナトスを抱き上げて戻って来た、すぐさま救護班が来てタナトスをタンカーで運んで行った。

「殺るわよ、ヘリオス」

「余裕ッス！」

まず阿修羅がベロシティ【光速】で斬りかかる、しかしルシファアは顔色一つ変えずに凄まじい速さの阿修羅を受け太刀した。

「インフェルノ【烈火】！」

阿修羅が後ろに避けると上からヘリオスがルシファアに斬りかかる、ルシファアは熱に耐えながら受け太刀し、もう一方の髭切で斬ろうとするが、ヘリオスはスルリと避けてしまった。

そしてヘリオスの後ろからは阿修羅の漆黒の刃が、ルシファアは体を開いてるために防ぐ事が出来ない。

「プロテクティブ【防護】」

ルシファアの体が薄く光り、漆黒の刃が当たったが、ルシファアの体には傷一つ付いていない。

「あり得ない、そんなのあり？」

「ベロシティ【光速】！」

驚きを隠せない阿修羅をよそに、ヘリオスは斬りかかるが、体に当

たれど傷は付かない。

「温い、温すぎる」

ヘリオスはルシファー一閃をギリギリで避けたが、肩に軽く傷を負った。

「先の男も同じような顔をしていた」

「ルール違反ッスよ」

「ルールとは弱き者の泣き所だ、強き者を許さないただの枷にすぎなのだよ」

ヘリオスを唇を噛んだ、完全に希望が消えた、そしてタナトスが負けた意味を理解した。

ルシファーのその嘲笑うような笑み、2人は最後の望みと2人で斬りかかるが、ルシファーの体に当たれど傷は付かない。

「ハハハハ！愚かだ、勝てぬと分かっているもおも戦う、何とも愚かで、哀れだ」

ルシファーは2人を薙払った、2人は受け太刀をするが、力で押されて吹っ飛んでしまった。

そしてルシファーの矛先はヘリオスに向いた、髭切を投げ飛ばす、ヘリオスは何とか体制を立て直して髭切を受けようとするが……

「エクスプロージョン【爆発】」

ヘリオスを受けたのと同時に髭切が爆発した、その力は強大でヘリオスは更に吹き飛ばされてしまった。

それを追撃するようにルシファーは走り、フラフラのヘリオスに追

いつく、ルシファーは頭を掴んで地面にたたき付ける。

「クッ！」

食い縛った歯の隙間から血が漏れた、そしてルシファーは不気味に笑うとヘリオスを見下した。

「コラプス【崩壊】」

「うわああああああああああ！！！」

ヘリオスは耳をつんざくような悲鳴を上げ、体を反らせた後に動かなくなった、ルシファーが手を退けると、そこからは白眼を剥いて生きてるようには思えないヘリオスが、現にヘリオスのレーヴァテインは消えた。

「ヘリオス！」

阿修羅はルシファーの事を気にせずにヘリオスに近寄った、外傷は少ないが息をしていない。

「ヘリオスに何をしたの！？」

「コラプス【崩壊】、つまり心肺機能そのものを壊した、機関には傷付けずに生命を絶つにそれしかない」

「ヘリオスは、しんだの？」

「ああ」

阿修羅の髪と目は元に戻り、目からは涙が溢れ出した、シャーリに続きかけがえのない存在を失った阿修羅、既に闘志はなくなっていた。

「何故首をはねなかったか分かるか？」

「……………」

「致命傷があると生き返らせられないからだ」

阿修羅の目に力が戻りルシファーを見た、ルシファーは優しい笑みを浮かべて阿修羅を見下ろす。

「俺達の仲間になればそいつを生き返らせてやろう」

「そんなの誰が信じると思ってるの？」

「悪魔になり何にも縛られなくなった天竜の巫女の血は、死者には生を、生者には永遠の命をもたらす」

阿修羅は息を飲んだ、コレは確実に阿修羅を悪魔にする口実だ、しかし確認しない限りには嘘とは言えない、そこまで阿修羅は思考回路がニブっていた。

「でなければ貴様など求めない」

いやに説得力を持っていた今の一言、普段の阿修羅なら否定するのだろうか、目の前に息をしていないヘリオスがいては別。

「嘘だったら殺すわよ」

「構わない、この場で貴様を殺さない、それだけで信頼に値すると思うがな」

「分かったわよ、貴方達の仲間になってやろうじゃない、ヘリオスのタメなら悪魔に堕ちても良い」

阿修羅はヘリオスを抱いて立ち上がった、ルシファーはすぐそこに黒い穴を作り入るように促す。

「阿修羅！」

「……………緊那羅」

「あんた何処に行くのよ!?!」

「ゴメンね、緊那羅」

「阿修羅！待ちなさいよ！それでヘリオスが喜ぶとでも思ってるの!?!」

阿修羅は緊那羅の制止を振りきって黒い穴に入って行った、そしてルシファアも入ると黒い穴は消え、緊那羅はその場に泣きながら崩れ落ちた。

全てが狂い始め、世界が急激に終焉へと向かい始めた瞬間だった。

29…アスラ

Unknown

ベッドの上で死体と化しているヘリオス、阿修羅は涙を浮かべてヘリオスを見ている。

阿修羅がココに来て数日、腕輪の形は変わり、纏っているのは赤黒いローブと化した、そして悪魔としての名前はアスラ。

アスラの隣にはルシファーがいる、これがアスラの選んだ道、悪魔になって神選10階に刃を向ける、ヘリオスを生き返らせる、全てを捨てる程アスラの中でヘリオスは大きな存在となっていた。

アスラは腕輪に触れて夜叉丸を取り出した、夜叉丸の刃を握って力を入れる、滴り落ちる真っ赤な液体、悪魔と化した巫女の血だ。

「先に俺からだ」

ルシファーはアスラの手を取った、アスラはヘリオスに視線を向けたままルシファーを見ようとしなない。

ルシファーはアスラの傷口から直接血を舐めとり、そのまま飲み込んだ。

アスラが横目でルシファーを見た瞬間、ルシファーが体を抑えて悶え始めた、アスラは無表情で床で苦しむルシファーを見下ろした。

「あ、熱い、ぐううう、……………があ」

冷や汗を大量に流しながらルシファーは立ち上がった、肩で息をしながら微笑む、外見だけでは何も変わっていないが、尋常でない反

応からただ事でない事は分かる。

「は、はは、ハハハハハハ！コレが永遠の命、コレで俺は生き続けるのか！」

歓喜に声を上げるルシファー、アスラはルシファーが言っていた事が信頼に値すると確認すると、ヘリオスの口を開けた、そして滴り落ちる血を何滴かヘリオスの口の中に入れた。

暫くすると、ヘリオスの体が脈を打ち始め、体温が急上昇する、そして目をカッと見開いた。

「うわああああああ！」

ヘリオスの叫び声にアスラは笑みを浮かべた、そして体を抑えながら肩で息をしている、苦しみながらベッドから落ち、ダウンジャケットを強く握りしめる。

「ヘリオス、私よ、分かる？」

アスラはヘリオスに手を差し出した、ヘリオスは誰かを確認する前に、悪魔の腕輪を確認してその手を弾いた。

「あ、阿修羅 あ、苦しいッスよお」

「ヘリオス、ココにいるわよ」

ヘリオスはアスラの声に反応して目を開き、アスラの姿を確認した、悪魔の腕輪に赤黒いローブ、そして隣には嫌な笑い方をするルシファー。

「あ、しゅらッスか？」

「そうだよ」

「その、格好は何ッスか？」

「ヘリオスが死んだから、それを助けるためには仕方なかったの、ヘリオスなら分かってくれるよね？」

「嘘ッスよ、阿修羅が悪魔に？そんなのあり得ないッス」

ヘリオスは座りながらゆっくり後退りしている、目の前にいるのは神選10階の阿修羅ではなく、悪魔に堕ちたアスラ。

「阿修羅、ホーリナーに戻れるんスよね？」

「無理よ、もう戻れない、だからヘリオス、私達だけの世界を作ろう？私とヘリオスなら出来るよ」

「何言ってるんスか？阿修羅おかしいッスよ」

「おかしくないわよ、ヘリオスのためにココまでしたんだよ、ヘリオスなら分かっ——」

「嘘だ！こんなの阿修羅じゃないッスよ、俺の知ってる阿修羅はこんな事しないッス、今の阿修羅はただの悪魔、俺の知ってる阿修羅はもういないんスね」

ヘリオスはアスラに背を向けて出口に向かって歩き始めた。

「ヘリオ——！」

アスラが走ってヘリオスに近寄ろうとした時、喉元にレーヴァティン突き付けられた、刃を向けるヘリオスの顔にいつもの笑顔はなく、アスラが初めて見る冷酷な顔、ダークロードに対してもこのような顔はした事ない。

「次に会った時は殺す、俺は阿修羅が大好きだったんスよ、でももう阿修羅はいない、お前のせいで阿修羅は消えちゃったんスよ！」

アスラはその場に崩れ落ちた、その光景をルシファーはただ見ているだけ、ヘリオスはそのまま出口に向かって走って行った。

「愚かな妹よ、救いようがない」

「うるさい！ 全て貴方のせいよ、ヘリオスが大好きなホーリナーも、貴方が引き込んだ悪魔達も全て私が壊す、そうしたらヘリオスと私だけの世界を作る、それまで利用してあげる」

「良からう、刃を向ければ返すまでだ」

アスラは涙で視界を歪めながら、部屋から出ていくルシファーの後ろ姿を睨んだ。

アスラは全てを恨んだ、阿修羅を生んだホーリナーも、平穏を壊した悪魔も、ヘリオスと巡り会わせた神選10階も、悪魔に墜ちた自分自身も、全てを壊したいと強く願った。

数日後

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

会議室に集まる神選10階と元帥、そしてそこにいる全員の顔が険しい。

憔悴しきったヘリオス、苛つきが激しいアルテミス、笑顔が崩れたメルポメネ、顔は見えないが空気が焦っているモリガン、考えこんでいるダグザ、意気消沈しているユピテル、今にも泣きそうなクルカン、長い髪の毛で顔を隠しているタナトス、目を真っ赤に泣き腫らしたアストライア、そして真剣な顔を見せている元帥が口を開いた。

「最悪、だよね？」

「俺様がいけないんだ、俺様があそこで……」

「それなら俺は目の前にいたんすよ、それで逃げて来た」

「貴様ら、悔やむ暇があったら打開策を考えろ」

ダグザが苛つきながらタナトスとヘリオスを一喝した。

「……………阿修羅」

「アストライア、もう彼女の事は忘れなさい、もう敵なんだから」

「阿修羅は仲間だあ、絶対に連れ戻す」

護衛の任務以来メルポメネとユピテルの確執は広まる一方、しかしココにいる者達はただでさえ精一杯のため、二人の異変には気付いていない。

「嘘よ嘘よ、阿修羅は悪魔に堕ちるような子じゃないよ」

「あんた現実を受け止めな、アタイだって信じたくないけど、全ては現実起きてる事なんだよ」

『僕は絶対に許さない、僕達を裏切ったのは紛れもない事実、刃を向ければ潰すまでだよ』

重い空気が更に重くなる、呪われた第10階、それはただの迷信と言って笑ってられるような状況ではない。

「悪魔がどうやって攻めて来るのか僕達には分からない、敵の戦力は多少なりとも削ったけど、全容は分からない。

でも向こうには阿修羅ちゃんがいる、こっちの力はただ漏れた、ホーリナーラグナロクの方がまだましかもね、コレじゃあ全滅もありえるよ」

元帥は自傷気味にふざけてみせた、しかし冗談にしては質が悪すぎる。

「コイツの事は放っておいて、こちら側が理解出来る敵の戦力を把握しろ」

提案ではなく命令するダグザ。

「まずは俺が全力で戦い負けた波旬。

そしてモリガンとアストライア、そしてメルクリウスを持ってしてもやっとのアスモデウス。

ユピテルとほぼ同じくらいのベリト。

一番弱いと思われるアスタロト。

ホーリナー最強と言われた元オーディン

アルテミスとククルカン、そしてズルワーンを最後まで追い詰めたベルゼブブ。

ヘリオスとタナトスを完膚なきまでに圧倒的な力の差を見せて倒したルシファー。

リバイアサンは生死未確認だが、死んだと考えると間違いないだろう。そして天竜の巫女として覚醒した阿修羅。

生きていると確認出来るのはそれだけだ、まあ、正面からぶつかれ

ば全滅は間違いないだろう」

ダグザはその場の空気を重くするだけ重くして口を閉じた、既に顔を上げている者は誰一人としていない、ダグザが言う事ほど信憑性のあるものは無いからだ。

「ま、まああれだね、悪魔が攻めてくるまで神選10階は無期限休暇、好きなように過して良いよ」

『死への一時を楽しめって事だね、最後の思い出を作らなきゃ』

モリガンが立ち上がるのと同時にぞろぞろとエレベーターに乗り込む。

たった2人を除いては、ヘリオスは机に伏したまま、タナトス机に足を乗せてうつ向いたまま動こうとはしない。

「おい、俺様達の任務は何だ？」

「阿修羅の護衛ッス」

「俺様はまた守れなかった」

「まだ終わってないッスよ、まだ、阿修羅は戻れるッスよ」

タナトスは髪の毛の隙間からヘリオスを睨んだ、青い瞳は冷たく悲しい、睨むというよりは殺気そのもの。

「俺様の汚点だ、アイツは俺様がこの手で殺す」

「阿修羅は俺が連れ戻すッスよ」

「俺様の邪魔をする奴は殺す」

「阿修羅を傷付ける奴は殺すだけッスよ」

ヘリオスがタナトスの目を見て、二人の視線が合わさった瞬間、二人は腕輪に触れて同時に斬りかかった。

お互い受け太刀して一歩も譲ろうとしない、力だけでジリジリと押し合う。

「テメエ、俺様に刃向けるとは良い度胸じゃねえか」

「タナトスこそ、俺は本気ッスよ、阿修羅を傷付ける奴は皆殺しッス」

「アイツは元には戻れない、苦しむくらいなら俺様が殺すまでだ」「殺したいだけなのに言い訳とはタナトスっぽくないッスね」

「ああ、言い訳でもしなきゃアイツの事を殺せねえよ、ただの仲間なら殺せるけど、阿修羅を殺すにはこっちも死ぬ程覚悟しなきゃ殺せねえ」

どちらからともなく得物を戻した、ヘリオスはタナトスの気持ちに気付いてしまった。

しかしヘリオスは一歩も譲る気はない、二人は信念と阿修羅への想いだけで動いている、全ては悪魔である阿修羅を救うために。

30：戦鼓

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

あの会議から2日が経った、全員が焦燥感や虚無感を感じながら過していた、何もする事はないが何かしたいという事はない。

いつもより活気が無い本部塔、嵐の前の静けさ、しかしそれを引き裂くように本部塔に警報音が鳴り響いた。

『広場に悪魔が現れたよ！神選10階は至急バチカンの広場へ直行して！』

本部塔が一気に慌ただしくなり、本部塔にいる全員が動き出した。

バチカンの広場には赤黒いロープをはおった悪魔が立っている、そして続々と本部塔から出てくる神選10階。

全員の手には既に得物が握られていた、悪魔はフードで誰かは確認出来ないが威圧感は相当のものだ。

「貴様一人か？戦いに来たようではなさそうだな」

「……………」

「何をしに来た？」

「……………」

「答えられな——」

「悪いッスね、着替えてて時間かかったツスよ」

緊張感の欠片もないヘリオスがダグザの隣に行った、そして悪魔を

睨んだ瞬間一歩前に出た。

「あ、阿修羅、ッスよね？」

全員の驚きをよそに悪魔はフードを取った、そこからは黒く長い髪の毛少女が、それは元阿修羅、そして今は悪魔のアスラだ。

全員が驚きの表情を隠せないでいる、確かに阿修羅の腕輪も服も悪魔と化している、そこにいるのは今までの仲間ではない。

「阿修羅！ やっぱり戻って来たんスね？」

「……………」

「何か言ったらどうッスか？」

アスラは強くヘリオスを睨んだ、それは悪魔としての覚悟を携え、ホーリナーに戻る意思が無い事を示している。

「ヘリオス、もうコイツは悪魔だ、俺様が殺す」

タナトスがスケイルを振り上げた時、アスラは腕を振った、その瞬間アスラの後ろに9つの黒い穴が現れる、タナトスは立ち止まりアスラを睨んだ。

「何の真似だ？」

「殺し合いよ」

「何言ってるんスカ阿修羅？」

「私はアスラ、そして、私達は貴方達を殺したい」

アスラが私達と言った事はアスラ自身が自分を悪魔と認めた事、そして殺したいというのも本心、アスラは全てを憎み、アスラとヘリオスを引き裂いた全てを壊したいと願っている。

「始めましょう、どちらが生き残るか正々堂々と」

アスラはそのまま黒い穴の中に消えて行った。

「阿修羅！」

ヘリオスはアスラの後を追って黒い穴に入って行った、それを追おうとタナトスが入ろうとしたが、ダグザが腕を掴んで引っ張り制止した。

「何しやがる！？」

「貴様、穴がいくつあるか数えろ」

「……………9だ」

「俺達も9人だ、つまり一人一殺、それしかない」

「全員で一氣に一人を殺せば早い話だろ！」

「馬鹿か、悪魔を抑えるためには全員を一氣に潰さなきゃ話にならない、つまりアスラにはヘリオス一人だけだ」

タナトスは唇を噛んでダグザを突き飛ばした、そして適当な所に立つ。

「デメエらせいぜい死ぬな」

初めてタナトスが見せた氣遣い、それだけを残してタナトスは黒い穴の中に消えて行った。

『僕も行こうかな、皆、死体回収とか面倒だから自分で帰って来てよね』

これもモリガンなりの気遣い、そしてモリガンは黒い穴の中に消えて行った。

「ククルカン、ぜってえ生きて帰って来るんだ」

「余裕余裕、ユピテルも死んじゃダメだよ」

「分がつてる」

ユピテルとククルカンはギリギリまで手を繋いで黒い穴に消えて行った。

「かったりいなあ、ささっと殺って帰ってくるか、アタイだけ死ぬってのシャレにならないよな」

アルテミスは欠伸をしながら黒い穴へ入って行った。

「さて、行きますか」

「……………メルポメネ」

アストライアはメルポメネの腰の辺りを掴んだ、しかしメルポメネはそれを振り払う。

「最後まで甘えないでください、私は助けられませんよ」

そのままメルポメネも穴の中へ消えて行った、残されたアストライアは泣いている。

「アレはメルポメネなりの気遣いだ、一番心が弱い貴様へのな」

ダグザはアストライアにハンカチを渡して穴の中に入って行った。

「……………生きる」

最後に一言だけ残してアストライアは黒い穴に入って行った。
そして全員が入った瞬間、全ての黒い穴が消えて殺風景な広場に戻った。

第二次ホーリナーラグナロク、後にそう呼ばれる大戦の幕開け。

31：勝ちたい（前書き）

大変遅れて申し訳ありません。

これから遅れるかもしれませんが、なるべく早く更新出来るように頑張ります。

最後までお付き合い下さい

31..勝ちたい

Unknown

ヨーロッパ系の至って普通の住宅街、しかし人の住むような生気が少しも感じられない、その中をナックルガードの付いた槍、ルドラシスを持って歩くククルカン。

人が住むべき場所に人がいない、さすがのククルカンもコレばかりは気付いていた。

そして更に気付く、歩いても歩いても、曲がっても曲がっても景色が変わらない、同じ所を歩いているわけではない、ククルカンが苛ついて壁に開けた穴が無いからだ。

「何処にいるんだよお！」

ククルカンは物凄い声量で叫んだ、隣に人がいたら耳が使い物にならなくなっていただろう。

「」「うるさいなあ」「」

イライラした多重声が街に響き渡る、それは反響しているからではない、色々な所から一つの声が聞こえている、ククルカンはそれでココにいるのが誰だか理解した。

「何よ何よ、またあんた？」

「今度はしっかり気を持ってね、死んじゃうよお」

「2度も同じへまはしないよお」

至るところに現れたアスタロト、その手には双剣のカリバーンが握られている。

しかしククルカンは嘲笑うようにアスタロト達を見ている、気持悪いのに変わりないが、一度見れば平常を保っていられる。

「こんなの冷静になれば怖く無いよ」

「別に怖がらせるタメにやってるんじゃないけどなあ」

ククルカンはルドラシスを構えた、それと同時にアスタロト達が走り出す、まるで中世の戦争、人を大量に遣い得物を振りかざして衝突する、まさにその様だ。

「ツイスター【竜巻】！」

巨大な竜巻が辺り一帯を包み込んだ、アスタロトは踏ん張りながらもククルカンに近づく、しかしククルカンの猛攻はまだ終わらない。

「バキューム【真空】！」

竜巻の中を真空が舞い踊り、まさに巨大なかまいたち。

竜巻に入ろうものなら体をつんざかれ、一撃受ければ動けなくなる、そして動けなくなっている間に急所をやられ、致命傷となって死に至る。

致命傷でなくとも深く切り裂くかまいたちに当たれば失血により死。風神、風の怒りに触れた時、風に体を引き裂かれ、自分の鮮血が風に舞い上がる、全てを運ぶ風は死を運ぶであろう。

「うわあ、こりゃ酷いなあ、地獄絵図ってやつ？」

ククルカンの足下から声が聞こえた、ククルカンが下を向くとそこ

にはアスタロトがいる、地面から上半身だけを出して笑顔を作るアスタロト。

「なにになに！？気持悪い！」

「また人の事を気持悪いって言う、傷付くんだから辞めてよ」

アスタロトはカリバーンを振り上げ、ククルカンの足を斬ろうとした、ククルカンは後ろに跳んで避けたが、神技への集中が切れてしまい、近寄れなかったアスタロト達が襲いかかって来た。

「ツイスター【竜巻】！」

ククルカンは一方の集団をツイスター【竜巻】で吹き飛ばし、反対側のアスタロト達に目をやった。

アスタロト達は既に後ろにいて、ククルカンに斬りかかろうとしている、ククルカンはルドラシスを大きく振り、一気に何人か薙払った。

「キツイキツイ！でも負けられない」

ククルカンは体術では確実に圧倒している、しかしアスタロトは量でアスタロトが圧していた。

リーチが長いルドラシスを力一杯振り、何とか近寄らせないようにしているが、体力が限界に近付いて来た。

肩で息をしながら尽きないアスタロトと気力だけで戦っている。

「もう、無理無理」

ククルカンは家の中に逃げ込んだ。

「バキューム【真空】」

家を真空中で覆った、コレで暫くは近付けないが、アスタロトが量を蓄える時間も与えてしまう。

そして先ほどアスタロトは地面から出てきた、家の中においてもアスタロトは家に寄生している可能性がある、それ故にククルカンは警戒を怠れない。

「いるんでしょ？出てきなよ」

「アハハ、バレちゃった？」

壁から出てくるアスタロト、何故かアスタロトは顔面蒼白、ククルカンと同じように肩で息をし、顔には大量の汗を溜めている。

「最悪最悪、もうあんた質悪いよ」

「君もね、私だってコレだけやられたら、精神力が擦り減るよ」

その瞬間外にいたアスタロトが一気に消えた、増やしたアスタロトを操るのには集中力を要する、あれだけの量を長時間動かし続けられかなりの体力を使う。

「馬鹿馬鹿、あんなに出すからだよ」

「うるさい、馬鹿みたいな神技使うからいけないんだよ」

ククルカンはルドラシスに寄りかかりながら立ち上がった、アスタロトはカリバーンを構える。

「神技抜きなら負けないよ」

「私だって一つに集中出来れば強いんだから」

ククルカンはルドラシスを思いっきり振り上げるが、ココは室内、天井に突き刺さってしまった。

「馬鹿じゃないの？」

「うるさいうるさい！」

アスタロトは斬りかかろうとするが、ククルカンは壁を引き裂いてそのまま振り下ろした。

「流石馬鹿力」

「黙れ黙れ！」

アスタロトはギリギリで避けると、踏み込んでそのまま切り返した、しかしククルカンは体を沈めてアスタロトの腹に拳を沈める。

「————クッ！」

アスタロトはそのまま家の壁に突き刺さった、そのまま崩れ落ちるように床に伏した。

アスタロトは壁に手を付きながら立ち上がり、口から血を流してククルカンを睨む。

「悔しい、何で私は負けるの？」

「弱いからだよ」

アスタロトは唇を噛み締めながら涙を流した、その光景にククルカンはたじろいでしまう。

「いつも私は足を引っ張ってばかり、それで悪魔になったのに、悪魔になっても何も変わらないよ、何で私だけいつも弱いままなの

！？私だって勝ちたいのに！」

アスタロトはカリバーンを振り上げて床を蹴った、ククルカンに向かって力一杯、体重を乗せて斬りかかる。

ククルカンは跳び上がったアスタロトの斬撃を防ぎ、再び殴ろうとするが、カリバーンに受けられてしまう。

アスタロトは着地と同時に斬りかかった、ククルカンは顔を微妙にずらして避けるが、ジャージの襟と綺麗な金髪が切れてしまった。

「私だって勝ちたい！」

アスタロトはククルカンを蹴って壁に叩き付けた。

「くうっ！」

ククルカンが座り込むと、アスタロトはククルカンの首を足で思いっきり押した、喉が塞がり息が出来なくなる。

「君を殺して私が勝つ、ルシファー様に認めてもらうんだから」

ククルカンはアスタロトの足を掴んで息を出来るスペースを作った、大きく息を吸うとアスタロトを睨み返す。

「そのルシファーってのが何だか知らないけど、うちには負けちゃいけない理由がある、あんたなんかと違って目的があって戦ってるんだから、あんたなんかには絶対に負けない！」

ククルカンはアスタロトの足を掴んでアスタロトを投げた、アスタロトは壁を突き破り外に出る。

ククルカンも後を追って外に出ると、そこにはもうアスタロトの姿

は無かった。

「それでも私は勝たなきゃいけないの！」

ククルカンが背を向けていた壁からアスタロトが出てきた、ククルカンは背中を大きく斬られてアスタロトから遠ざかる。

疲労と痛みで意識が飛びそうになるが、ユピテルへの思いだけで立ち続けている。

ククルカンの負けられない理由はユピテル、ユピテルのタメに死ねないのだ。

「弱い弱い、こんなのじゃあうちは殺せないよ」

「私は君に勝たなきゃいけないの」

先に動き出したのはアスタロトだった、ククルカンに斬りかかろうとするが、ククルカンはアスタロトが自分の間合いに入る前に、ルドラシスを最大限に突き出した。

アスタロトは止まって避けたが、頬に切り傷を作ってしまう。

「勝ちたいだけじゃ勝てないよ！」

アスタロトは間合いを取ろうと後ろに下がったが、ククルカンの猛攻は止まらない。

ククルカンは大きく踏み込むと、素早い突きの連撃を放つ、アスタロトは致命傷にならない程度に防ぐが、体の切り傷の量が劣勢を物語っている。

「うちは生きる理由のないあんたには負けない！」

アスタロトは後退しながら防いでいたため、壁に塞き止められてし

まった。

「私は強くなりたい、勝ちたい」

「無理無理、強くなるには生きたいと強く願わなきゃ、あんたはそれが足りないから死ぬんだよ」

ククルカンは迷わずアスタロトの心臓を貫いた、アスタロトは口から血を流し、多少痙攣して動かなくなった、ククルカンがルドラスを引き抜くとアスタロトは崩れ落ちる。

ククルカンはフラフラになりながらその場を離れたが、既に体力は限界に近く、路上に倒れこんでしまった。
真っ青な空を見上げながら風を感じる。

「ユピテル、うち勝ったよ、だから、ユピテルも帰って来てね」

「それは無理だよ！」

仰向けになっているククルカンを覗き込むアスタロト、体に傷は無く、かなり元気な表情で爽やかな笑顔を振り撒くアスタロト。

「これが私のやりかた、相手が憔悴しきって戦えなくなったら私がサクッと、正々堂々とか面倒だよ、殺せば良いの、殺せれば。」

なんか好きな人がいるみたいだけど残念だね、殺したいと思わなきゃ勝てないよ、生きたいなんて戦いの邪魔、どうやって相手を殺——」

「バキューム【真空】」

アスタロトが喋ってるのを遮って神技を放つククルカン、真空は喉元を深く切り裂いてアスタロトを殺した。

その瞬間街全体がガラスのように砕け散り、真っ白な世界に黒い穴

がぽっかりと空いている。

ククルカンはルドラシスに支えられながら黒い穴に向かう、ユピテルに会える希望と、戦いが終わった歓喜を噛み締めながら、軋む体を前に進めて行った。

32：強さ

Unknown

空中に開く黒い穴、そして下にはコロセウムが広がっている、黒い穴からユピテルが出てきたが、ユピテルはそのまま地面に落ちて行った。

「ううえええ？」

受け身を取る余裕もなく地面に叩き付けられた、目に涙をを浮かべながら立ち上がり、服に付いた誇りを叩き落とす。

そして辺りを見回して悪魔を探すと、観客席に座っているアスモデウス。

「悪いなあ、これ苦手だから失敗ばかりだったっの」

「今はアスモデウスだったべか？」

「正解！」

アスモデウスは指をパチンと鳴らして人差し指をユピテルに向ける、目の前にいるのは神選10階にいた時のアナンガと何ら変わらない、しかし悪魔のアスモデウス。

「戻って来る気はねえが？」

「ないない、これっぽっちも無いっつの、それにココに来たから殺さなきゃな」

アスモデウスは立ち上がり腕輪に触れた、得物は箆手、名はメギン

ギョルズ。

ユピテルは警戒して三叉の矛、トライデントを構えて前髪を上げた、白い目が覗いて不気味さが加えられる。

「オメエとは戦いたぐねえ、それに、オラはベリトを助けなきやいけねえんだ」

「何だ、ククルカンからベリトに乗り換えたのか？」

「違う！ベリトは戻って来れる、オラが連れ戻すんだ」

「じゃあ俺に勝ったら道を提示してやるっつーの、だから殺りあおうぜ！」

アスモデウスはステップを踏みながら構えた、アスモデウスが本気の時の型、ボクシングのような構えだ。

アスモデウスはユピテルの強さを知っている、アスモデウスにとって最悪の相手という事も、故に最初から本気を出しているのだ。

「行くぜ！」

アスモデウスは走り出す、ユピテルは集中してアスモデウスの電気信号を読み取ると、トライデントを握る手に力を入れた。

アスモデウスはユピテルとの距離を詰めると、素早い拳の連撃をユピテルに降らせる、しかしユピテルは全てをトライデントでいなす。

「本当に嫌な目だっつーの、ルール違反だっつーの！」

「戦いにルールはねえって言ったのはオメエだべ？」

アスモデウスはしまったというような顔をする、そしてやけくそになり力を強めて殴り始めた。

「力なら負けないっつーの！」

「エレクトリフィケーション【帯電】」

ユピテルの身体中に電気が駆け巡り、ユピテルの身体能力が上昇する、体の電気信号を熟知しているユピテルだから出来る事。

「やっぱり最悪だっつーの！」

アスモデウスは完璧な体術型、故に動きが分かっってしまうユピテルの目は忌まわしい物だ。

ユピテルはアスモデウスのストレートをギリギリで避けるが、もう一方からフックが飛んでくる、ユピテルはコレもギリギリでトライデントを使い防いだ。

そしてトライデントで一瞬腕が止まると、その腕を掴んで電流を流し込む。

「クソッ！」

電流が完全に流れ込む前に間合いを取った、そう、今のユピテルに触られたら電気信号が遮断され、その部位が全く動かなくなる。

「クソッ、痺れるっつーの」

「よぐ避けだなあ」

「当たり前だっつーの、お前に触られるの程嫌な事はないっつーの」

その瞬間ユピテルの目に涙が溜まり始めた、アスモデウスは慌てて自分が何をしたか考え、一つの答えにたどり着いた。

「いや、ユピテルに触られる事自体は全然OKなんだけど、今触られるのはヤバいというか、俺的にも避けなきゃいけない、みたいな感じだ。」

な？ユピテルの事は嫌いじゃないから、泣くなっつーの」

何故か敵を慰めるアスモデウス、ユピテルが涙を拭ってアスモデウスを見据えると、ホッと胸を撫で下ろして構えた。

「お前も案外面倒だっつーの」

「うるせえ、それにオラは敵だぞ、助ける必要ないべ」

「100%のお前を殺さなきゃ俺が俺を許せないっつーの」

「オラは戦いたぐねえんだがな」

ユピテルはそう言いながらも構えた、既に体が痛み始めている、痛みを遮断しても良いのだが、ベリトを連れ戻すために動けなくなるわけにはいかない。

アスモデウスはユピテルを見据えたまま、腰で構えてグッと体を沈ませた。

「ベロシテイ【光速】」

一瞬で消えるアスモデウス、ユピテルは残像を追ってアスモデウスの跡を追うが、一閃は瞬きの間にユピテルの懐に潜り込んだ。

ユピテルは慌ててトライデントで防ぐが、体制が不十分だったために崩れてしまう。

「エクスプローション【爆発】」

アスモデウスはトライデントを掴み、もう一方の腕で殴りかかるが、ユピテルは腕でアスモデウスの拳を防いだ。

「どかん」

アスモデウスの拳は言葉の軽さに似合わない音を上げ、凄まじい爆発がユピテルの腕を襲う。

「—————っ！」

ユピテルは豪快に吹き飛び、コロセウムの壁に叩き付けられた、腕は裂傷と火傷で痛々しくて見てられない。

それでもユピテルは汗を溜めて立ち上がる、しかしその光景はアスモデウスから見えない、砂塵でユピテルの姿が隠されているからだ。

「失敗だっつーの、何にも見えねえ」

「オラはココだあ！」

ユピテルは思いっきり跳び上がっている、筋力を最大限に上昇させてなるべく高く。

そしてユピテルは力一杯トライデントを投げつけた、しかしアスモデウスは顔色一つ変えずに、トライデントと掴んでユピテルを睨む。

「得物を投げるなんてあり得ないっつーの！」

「ライトニング【落雷】！」

その瞬間何も無い所から放たれる落雷、それは特有の屈折をしながらトライデントに直撃した、そしてトライデントを掴んでいたアスモデウスに莫大な量の静電気が流れ込む。

「ぐうわあああああああ！」

派手に感電してトライデントを突き飛ばして倒れる、痙攣して体はところどころが焦げている、まだ体はバチバチと感電しているが。しかし目はしっかりとっていて、メギンギョルズが消えていないと

ころを見ると生きている。

「しぶてえな」

「当たり前だ、つつーの、俺は、死なねえ」

フラフラになりながら何とか立ち上がる、ユピテルも地面に落ちているトライデントを広い上げた。

あれほどの落雷が落ちてもしつかりと気を持っているアスモデウス、精神力だけは確かなものだったらしい。

「強くなったじゃねえか」

「オメエが化物なんだべ？」

「化物か、そんなもんあり得ないつつーの、死ねないって意志があれば人間は死なねえ」

「じゃあ動けなくしてやる」

ユピテルは広い上げたトライデントを回して構えた。

「エレクトリフィケーション【帯電】」

再び体に電気が走る、体が限界が近付いているのが分かる、体の電気信号が戻った時の猛烈な痛み、そして身体中の軋み、これ以上長く戦えない事が分かった。

「お互いもうヤバそうだな」

「オラは大丈夫だあ」

「強がり言うようになったんだな、でも、お前には負けられないつつーの！」

アスモデウスとユピテルは同時に走り出した、お互い限界に近い、

身体中が痺れて動き辛いアスモデウス、筋繊維が千切れ始め思うように動かないユピテル。

次に倒れた者が敗者、恐らくもう一度倒れたら立ち上がるだけの力は残っていないだろう。

交わり合うトライデントとメギンギョルズ、激しい火花が乱れ散り、お互い一步も引かない攻防、否、お互いの攻撃が交差している、攻撃は最大の防御とはこの事だ。

「オラは負けらんねえ！ベリトも、ククルカンも待ってるんだあ！」
「俺だってお前ごときに負けてられないっつーの！俺が最強なんだっつーの！」

更に速くなる二人の攻撃、お互いの信念だけが体を前に進ませている、誰かのタメに戦うユピテル、自分のタメに戦うアスモデウス。最初に行動をしたのはアスモデウスだった、後ろに跳びはねてユピテルとの間合いを取り、腰で拳を構えた。

「ベロシティ【光速】！」

地面がえぐれて高速で移動するアスモデウス、ユピテルは腰を据えてアスモデウスの動きを追う。

そしてアスモデウスが殴った瞬間、ユピテルはトライデントで受け、アスモデウスの顔に触れた。

「だから見え見えだっつーの！」

アスモデウスは再びユピテルとの間合いを取った、そしてそのまま殴りかかる。

「エクスプロージョン【爆発】！」

アスモデウスの素早く思い一撃が放たれ、ユピテルの腹に拳を沈めた、はずだった。

アスモデウスの拳はユピテルをすり抜けた、振り向くとやはりユピテルはそこに立っている。

「ユピテル！どこにいるんだっつ——！！？」

アスモデウスは首に違和感に違和感を感じると同時に身体中の力が抜けた、そして糸の切れた操り人形のようにへたりこむ。

そしてその瞬間、ユピテルだと思っていた所には誰もいない、ユピテルは後ろにいた。

「何で当たらない！？」

「目に触った時、ちょっといじらせてもらった」

ユピテルはアスモデウスに避けられる事は計算済みだった。

「目だけの電気信号をいじるのは簡単だあ、そこからの光の認識を少しだけいじらせてもらった」

「やっぱりスゲェや、約束だ、ベリトの所に行けっつーの」

アスモデウスは絶対に約束を守る事をユピテルは知っていた、そして黒い穴はユピテルの前に開く。

「さあ、俺を殺して行け」

「それは出来ねえ、終わったら迎えにぐる、だから待っでろ」

ユピテルはそのまま穴の中に入って行った、アスモデウスはユピテルが来た事を後悔する、そしてユピテルの強さを改めて知らされた。

「な、何だぁ！？」

黒い穴を這上がるようにユピテルが出てきた、何故かユピテルの体は水に濡れている。

「な、何が海が広がってる！オラ泳げねえぞ！」

「ああ悪い、また間違えたっつーの」

ユピテルは何とか黒い穴から抜け出すと、必死な形相でアスモデウスを見る。

ユピテルはかなづち、故に海など天敵に近い。

「次こそは大丈夫だっつーの」

再び黒い穴が開き、ユピテルは敵のタメに戦場へ飛び込んで行った。

33..信頼

Unknown

大きな道が果てしなく続いている、その脇には歪な形をしたビル郡が隙間だらけで建っている。

そしてそこを凜とした姿勢で歩くメルポメネ、その視線の先には黒いローブを着た悪魔がいる。

メルポメネの歩いて来た後にはラフスキンで削られた跡が残っている、全てを削りながら歩いて来るメルポメネ。

悪魔はメルポメネが立ち止まるとフードを取った、メルポメネと同じようにブロンドの髪をした、メルポメネのとは違いキツイ印象のベリトだ。

ベリトは若干の落胆と共に腕輪に触れる、得物は無定形、名はグラム。

腕輪に触れたのに何も出ないのを不信に思い、メルポメネはラフスキンを握る手に力が入る。

「得物は何処ですか？」

「定形がないだけだ」

「そんなのがありえるんですか？」

ベリトの手には銀色の液体が流れ出し、一瞬にして形を成した、その形は三叉の矛。

「そういう事ですか、それなら私も同じですね」

「そんな布きれと同じにするな」

「ハードウン【硬化】」

メルポメネはラフスキンを軽く動かしてラフスキンの形状を変える、そのまま固まった時、ラフスキンは棒の形を成していた。

「真似事だ」

「そうだとっても私は全てを削るヤスリ、それに貴女も真似事じゃないんですか？」

ベリトの顔が引き吊る、そう、ベリトが持っている三叉の矛はユピテルのトライデント、神選10階であるメルポメネが気付かないはずもない。

ベリトにとってユピテルは僅かな希望でもあり、完全な悪魔になる条件でもある、少からずベリトにとってユピテルは特別だった。

「貴女を殺したらユピテルは憤怒するでしょうね」

「生かすのか？それとも奴の逆鱗に触れるのか？」

「殺します、貴女は私に刃を向けている、そしてユピテル最大の弱点、彼に非情さを教えるためにも私は貴女を殺します」

「奴は私が殺す、でなければ私が生きた意味がない、故に貴様は私が殺す」

二人の得物を握る手に力が入った瞬間、同時に走り出した、激しい火花を散らせて交わる得物、徐々に徐々に削れるグラム、それを察知してベリトは一旦間合いを取った。

「厄介だ」

グラムはすぐに修復されるが、ほんの一瞬交わっただけでこれだけの損傷、長期の打ち合いは劣勢に立たされるだけと理解した。

「どうしました？ 顔色が悪いですよ」

「貴様のその張り付けたような笑顔に吐き気がしたただけだ」

メルポメネの顔が若干引き吊る、常に笑顔のメルポメネに常に無表情のベリト、心情が分からないのはどちらも同じ。

ベリトは三叉の矛を片手で持つと、若干短くなり同じ長さの矛をもう一つ作り出した。

「始めよう」

「そうですね」

二人は同時に走り出す、ベリトは二振りの三叉の矛で交互に攻撃し、削られた得物を修復する時間を作る。

メルポメネはなるべく力を込め、出来るだけベリトの得物を削ろうとする。

「即席なのによく得物を使いこなしますね」

「貴様の真似事とは違うからな」

そう、削られさえしなければベリトの圧倒的優勢、メルポメネが圧してるようにも見えるが、ベリトがあと一歩踏み込めないだけ。

しかしベリトもこれ以上削られると修復が間に合わなくなる、気を抜いた方が負ける。

自然とお互いの額には汗が溜っていく、精神的疲労に押し潰されそうになりながらも、生きるため殺すために負けられない。

「ユピテルが来るのを待ってるんですか？」

「—————！」

メルポメネの一言で同様し、ベリトの体に切り傷とも言い難い痛々

しい傷が出来る。

ベリトは慌てて間合いを取ると、メルポメネは不適な笑みを浮かべてベリトを見る、明らかな同様が分かる。

「この戦いでユピテルは生き残れませんよ」

「……………」

「彼は優しすぎる、だから甘すぎる、敵と味方の区別もつかない子供にこの戦いは重すぎたのよ」

「…………だからどうした、私は奴を信じる」

「は、はは、ハハハハハハハハ！」

メルポメネは声高々に笑い始める、ベリトは殺気を込めてメルポメネを睨むが、メルポメネの笑いは納まるところをしらない。

「敵を信じるなんて、貴女も愚かですね」

「誰も信じられない貴様よりは数倍ましだ」

メルポメネの笑い声が張り付いた笑顔に変わる、それを好機と思い、ベリトは更に追い討ちをかけた。

「人を信じれない奴は自分をも信じられん、ただ、正義というモノを信じるのはさぞ楽だろうな、任務をこなす、それだけで良いのだからな」

「何が言いたいんですか？」

「正義など曖昧なものにすがりつくくらいなら、自分の力や敵を信じた方がましだという事だ」

メルポメネの顔から笑顔が消えた、確かにベリトが言ってる事は的確に射ている。

神選10階という、一方的な正義だけにすがりつき、任務や元帥、

元老が全てになっている。

「貴女に何が分かるんですか？人は信じれば裏切られます！でも、正義だけは決して裏切らない！」

「弱いな、人を信じられない人間に人は守れない」

「私が守りたいのは人じゃない」

「自分自身か、何とも愚かだ」

メルポメネは唇を噛んだ、そして悔しさを隠そうと走り出す、しかしその動きはワンパターン且つぎこちない、動き一つ一つが躊躇っているように思える。

ベリトはメルポメネの得物を左右に振りながら、メルポメネの出方を伺う。

そして、メルポメネに出来た大きな隙、それを見計らってラフスキンで出来た棒を三叉の矛で絡み付け、遠くへ弾き飛ばした。

「終わりだ」

得物がラフスキンの手袋だけになったメルポメネにベリトの突きを防ぐ術はない、真っ直ぐ心臓に向かう三叉の矛。

「やめろおおおおお！」

三叉の矛が三叉の矛を叩き付け、絡み合って地面に突き刺さる三叉の矛、そしてその横に落ちるように着地したユピテル。その瞬間ベリトの顔から初めて笑顔が作り出された。

「また失敗だあ、まあギリギリ成功でもあるなあ」

「ユピテル、何故貴方がココに？」

「約束を守りに来だんだあ」

ボロボロの体のユピテル、それが物語るのは壮絶な戦いの後、体は火傷やら打撲やらで痛々しい、所々筋肉が切れて内出血し、それが皮膚から滲出ている。

「誰だ？ 貴様誰と戦った？」

「アナンガ、今はアスモデウスだったかあ？」

メルポメネとベリトの顔が一瞬で変わった、そう、それほどアスモデウスは強い、近付かれたら誰も勝ち目が無いくらいだ。

「貴様、そこまでして……………」

「当たり前だあ、約束したべ？ 絶対にオメエをホーリナーに連れ戻すって」

ユピテルはメルポメネに背を向けてベリトの涙を拭った、ベリトは意地を張って振り払おうとするが、本当に払おうとはせず、当てるだけに等しい。

メルポメネはベリトを羨んだ、敵を信じた末に助けられた、そして、ユピテルが救ったのは信じたベリトだけではない。

あのままだったらメルポメネの命は無かったであろう、ユピテルは一瞬で全てを救ってしまった。

しかしそれがあらぬ方向へ歪んでしまう、憎悪と羨望が入り混じる不思議な感覚に。

「さあ、帰るべ、元帥にも話をつけてあるが大丈夫だあ」

「ユピテル、何を考えてるんですか？ そこにいるのは敵ですよ、殺すのが妥当じゃないんですか？」

「まだそんな事言ってるのかあ？ ベリトはもう敵じゃねえ、メルポ

メネもベリトもお互い傷付けるんでねえぞ」

「仕方がない、罰でも何でも受け——」

「嫌です」

メルポメネはユピテルを押し退け、ベリトに向かう、ベリトは反応出来ずにただ呆然と目の前の光景を見るだけ。

メルポメネのラフスキンの手刀はベリトの赤黒いローブと共に、心臓を貫いて、文字通りその手でベリトの鼓動を絶った。

「ベリト！」

辺りの風景がガラスのように碎け散り、辺り一面が真っ白な空間になる、その中には黒い穴で出来た出口が口を開けている。

ユピテルは走ってベリトに向かい、軽く抱き上げた、即死、胸にぽっかりと空いた穴から血が流れ出す、心臓が無いので鼓動も何も無い。

「な、何んて事をしたんだ！？」

「敵を殺しただけですよ？何でそんな怖い顔をするんですか？」

「許さない、お前がやってる事は絶対に間違ってる！」

ユピテルは地面に刺さった三叉の矛、トライデントを抜いて構えた、その光景を目を見開いて見るメルポメネ。

ユピテルの髪の毛は逆立ち白い眼が露になる、雷神の力が怒りに呼応し、バチバチとユピテルの体から漏電しはじめた。

「何で仲間の俺の言う事が信じられない！？何で俺を信じなかった！？」

「貴方が甘いからですよ」

「おかしい、お前の考え方はおかしい！」

ユピテルはトライデントを握る手に力を入れた、メルポメネは歩いて近くに飛ばされた棒を取る。

「私に刃を向けるなら、返すまでです」

メルポメネも構える、お互い信念を突き通した結果、仲間同士で刃を向ける事になった。

先に走り出したのはユピテル、常軌を逸した速さで動くユピテル、トライデントの動きも普通ではない。

ユピテルの上段からの振り下ろしを防ぐが、がら空きになった腹を蹴り飛ばされた、そのままトライデントを横薙に払う、メルポメネは体を翻してギリギリで避けたため、腹を軽く切ってしまった。

「流石アナングを殺しただけです」

「殺してない！動けなくしたただけだ」

メルポメネの動きが一瞬止まった、故にユピテルの突きを避けきれずにトライデントが肩を貫いた。

「殺さなくても戦いは終わる！そんなのも知らないお前は殺しを楽しむタナトスよりも残酷だ！」

「違います、私にとって敵は敵だけです」

「敵なのはダークロードだけだ！人を平気で殺せるのは正義でもなんでもない！」

ユピテルとメルポメネの攻防はユピテルが圧倒的有利だ、しかしユピテルも気付いている、体が徐々に動かなくなっている事に。

怒りに身を任せてるユピテルは相手を生かすという事を忘れている、メルポメネの体は傷付き、全てメルポメネが避けているため、致命

傷は避けられているが、このままだとユピテルはメルポメネを殺すであろう。

「貴方が、私を殺しては、矛盾してませんか？」

「殺さねえよ、ただ、死の恐ろしさを知れ」

ユピテルはメルポメネの突きを避けようと足に力を入れた瞬間だった。

“ブチッ”

嫌な音、それはユピテルの筋肉が限界を超え、完全に切断された音だ。

「何で、今頃？」

メルポメネの突きは途中で止まったが、ユピテルの体は自由がなくなり、体がラフスキンに吸い込まれるように倒れる。

「……………ククルカン」

ユピテルはそのままラフスキンで心臓を貫かれ、メルポメネがラフスキンを抜くと、ユピテルは下にいたベリトに抱きつくように倒れた。

「私が正義です、私に刃を向けるのは正義に刃を向けるのと同じですよ」

メルポメネは再び笑顔になると黒い穴に向かった、まだメルポメネは気付いていない、自分の腕輪が倒れているベリトと同じ腕輪にな

った事に。

34：最強の戦い

Unknown

殺伐とした風景、正常な姿をした物が何もない荒地、しかし、そんな異様な風景をも似合うタナトス。

大鎌であるスケイルを担ぎながら歩くその姿は、まるで誘き出す側、地獄を見回る番人のようだ。

暫く歩くと人が立っている、赤黒いローブだけでも分かるその体の大きさ、そして屈強な体つき。

悪魔がフードを取ると、タナトスは思いっきり口角を上げる、悪魔は無表情のままタナトスを見ている。

「最高だぜ！これは大当たりだな！」

「大ハズレ」

「いや、大当たりだぜ、オーディンさんよ」

「否、エリゴス」

そう、タナトスの前に立っているのは元オーディン、そして現エリゴス。

「俺様は強いぜ？」

「同じく」

「テメエとは格が違うんだよ、俺様は本物の死神だぜ、俺様は最強なんだよ」

タナトスはスケイルを構える、エリゴスは腕輪に触れた、得物は十

字槍、名はグングニル。

先に動いたのはタナトス、スケイルを片手で持って走り出した。ぶつかり合うスケイルとグングニル、何度も繰り返し飛び散る火花、薄暗い荒地に火花が舞う度、得物が光るように反射する。

タナトスがスケイルで横薙に払おうとするが、エリゴスはグングニルを地面に突き立て防ぎ、がら空きのタナトスを殴ろうとする。

タナトスは体を回転させて拳を避けると、そのまま勢いを殺さずに上段回し蹴りでエリゴスの頭を蹴り飛ばした。

エリゴスは完全に倒れる前に、地面に手を着いてそのままタナトスとの間合いを取る。

「おいおい、随分弱いじゃねえか、……………いや、俺様が強くなったのか？ 貴様は弱くねえな」

「油断」

「ああ、良い言い訳だな、油断っていうのは弱い奴がやる事だぜ、最強ならなら最弱相手にも全力を出すもんだ、違うか？」

タナトスの問いかけに初めて笑みを作ったエリゴス、タナトスも不気味に口を開けて笑う。

「悪い、戦うに値しなかった」

「ああ？」

タナトスは怒りに任せて走り出した、片手で一本大きなスケイルを振り回すタナトス、しかしエリゴスもグングニルを片手で振り回す。

タナトスはエリゴスの足を斬り払おうと足首を狙い、スケイルを振るが、エリゴスは跳び上がりそれを軽々と避ける。

しかしタナトスはスケイルを切り返し、スケイルの背で殴るが、エリゴスは素手でスケイルを受け止め、グングニルをタナトスに向けた。

「エクステンション【延長】」

タナトスは横に避けたが間に合わず、脇腹を深く切り裂かれてしまった。

エリゴスと間合いを取って脇腹を抑える、額には汗を溜めてただでさえ白い顔を、青白くしてエリゴスを睨んでいる。

「弱者、ひれ伏せ」

「死なねえ、俺様は死神だ！」

「死ぬ神か」

「違う、死を提供する神だ」

「関係ない、死ね」

エリゴスは空中にグングニルを放り投げた、タナトスはその何が起こるか分からない光景を、ただ眺める事しか出来ない。

「フロート【浮遊】」

グングニルは空中でピタリと止まり、動かなくなった。

「開始」

エリゴスが軽く腕を振ると、グングニルがタナトスめがけて飛んできた。

タナトスはグングニルを軽々と打ち落とすが、グングニルはすぐに切り返してタナトスに襲いかかる、タナトスはギリギリで避けるが、

グングニルの猛攻は止まらない。

「カット【切断】」

タナトスは黒く光るスケイルでグングニルを両断した。

「少し様子見てれば調子に乗りやがって！」

「同じく」

「はあ？」

エリゴスはグングニルに取り出す、しかしそれは一つではなく、無数に浮遊するグングニル。

「さすが悪魔だな」

タナトスは冷や汗を浮かべながらスケイルを構えた。

グングニルはタナトスを包囲するようにに散らばると、一斉にはなく、徐々にタナトスに襲いかかる。

タナトスはグングニルを斬り刻むが、全てとはいわずに体に小さな傷を作る、エリゴスは一步も動かずにタナトスを見ているのみ。

「動けよ！俺様が死ぬのを見てそんなに楽しいか！？」

「ああ、楽しい」

タナトスは唇を噛んだ、このままでは確実に殺されてしまう、しかし今のタナトスには成す術が何もない。

タナトスが必死に斬り刻んでも、グングニルは全く減らずにタナトスに襲いかかる。

タナトスの体がボロボロになり、動いてるだけでも不思議な程の傷。

「死なないな」

「あたり、まえだ、しねない、……んだ、………よ」

タナトスはそのまま倒れてしまった、グングニルは攻撃せずに包囲したまま止まる。

身体中から血を流しながら倒れているタナトス、しかしエリゴスは得物を消さない、それはタナトスの得物が消えていないからだ。

「起き上がれ、弱者」

「……………くねえ」

タナトス指がピクリと動く、ゆっくりとスケイルを握り、体に近付けた。

フラフラになりながら立ち上がり、スケイルに支えられながら立っている。

「…………死なねえ、まだ、死ねねえ、んだよ」

「そうか、最後だ」

「テメエには負けねえって言ってるだろ！」

タナトスはスケイル刃の根本で持ち、切っ先を自分に向けてニヤリと笑った。

「自害か、愚かだ」

タナトスは力を入れ、スケイルを自分に突き刺した。

「シンクロ【同調】！」

スケイルは真っ黒な布のように大きく広がると、タナトスの全身を真っ黒に包み込んだ。

「何をした？」

波打つように震え始めたタナトス、そして、腕が真っ黒な腕が突起すると、大きく開き、手を開いた。

真っ黒な腕が肌の色に変わるのと同時に、真っ黒なスケイルが2つ現れ、タナトスの手が握った。

「コロシテヤル」

タナトスはグルリと回ると、ボロボロの真っ黒なローブをはおり浮遊しはじめた。

足は見えず、フードの奥は闇で何もない、腕だけが人間のものに思

える。

「何だ、それは？」

「シンクロ【同調】、オレハシニガミニナツタ」

「ありえるのか？」

「チカツキスギタンダナ」

「死神にか」

シンクロ【同調】、それは神徳に近付きすぎた者が、本物の神を体に顕現してしまい、限りなく神になる事だ。

つまり、タナトスは本当に死神になった、死というものに色々な意味で近付いた結果、死神と化してしまった。

「ハジメヨウゼ、コロシテヤルヨ！」

タナトスは浮遊したままエリゴスに近付く、しかしグングニルがタナトスに向かう。

タナトスは両手のスケイルでグングニルを斬り刻む、素早い動きに加え、自由に動くタナトス、それに当てるのは至難技だ。

「ドウシタ？モウオワリナノカ？」

「卑怯」

タナトスはグングニルを斬り刻み、避けながら笑った、声だけが笑っている不気味な状態。

「ヒキョウカ、マサカオマエカラソンナコトバガデルトハナ！」

「何故？」

「タシカニヨワイヤツカラシタラヒキョウダロウナ？ダガコレガオレノチカラダ」

「しかし、愚か」

タナトスが慌てて周りを見ると、グングニルに完全に包囲されていた、エリゴスに気を取られ、自分の置かれている状況を把握できなかったのだ。

「戦い中、気を抜くな」

「ソレデカッタツモリカ？」

一斉にグングニルがタナトスに向かう、花火が縮まるように、タナトスを襲うグングニル。

タナトスはスケイルを戻すと、ローブの中に腕をしまった。そして、グングニルが当たる瞬間、タナトスから黒く細長い布のようなものが現れ、全てのグングニルに巻き付いた。

「何？」

「オレサマヲコロシタイナラ、シヲコエルンダナ」

その瞬間、グングニルが紫色になり、全てが崩れ落ちた。

全てを斬り刻み、全てを腐らせる、まさに死というものを体に宿した神、否、悪魔をもが恐る恐怖の存在であろう

「人間、捨てたか」

その瞬間タナトスが地面に叩き付けられたかと思うと、影のように地面に溶け込み素早く移動し、そしてエリゴスを這上るように影のようなタナトスが伸びる。

顔だけエリゴスから出すと闇色の顔でエリゴスを見た。

「タシカニコツケイナスガタダゼ、デモタスケナキヤイケナイヤツ
ガイルンダヨ」

「落ちぶれた」

「オレサマノナニヲシッテル!?」

タナトスはエリゴスから離れてスケイルを両手に顕現した。

エリゴスもグングニルをいくつか浮遊させてタナトスの出方を伺う。

「来い、死神」

タナトスは凄まじい速さでエリゴスに近付く、エリゴスはグングニルを放ち応戦するが、腐らされたり斬り刻まれたりしてタナトスには到底及ばない。

そしてタナトスの体から無数のヒモが伸びる、全てがグングニルを無視してエリゴスに向かう。

エリゴスは足下に来たヒモをバックステップで避けるが、他のヒモがエリゴスの横から襲いかかる。

グングニルを盾にして逃げるが、逆側から来たヒモに足を掴まれてしまった。

「マダコロサネエヨ」

タナトスはそのままエリゴスを何度か地面に叩き付ける、エリゴスは受け身を取る余裕もなく吐血した。

そのままエリゴスを上空に投げ飛ばすと、エリゴスを追ってタナトスも上昇する。

「バラバラダ」

「フロート【浮遊】!」

タナトスがスケイルを振るが、エリゴスの体は不自然な動きをしてタナトスから離れた。

そして重力を無視して浮いている、タナトスはともかくエリゴスは人間だ。

「理解した」

「シンギノタイショウヲジブンニシタノカ」

「ご名答」

「カンケイナイ」

タナトスは気にせずエリゴスに向かう、エリゴスも出来る限りのグングニルでタナトスを止めようするがタナトスは止まらない。

「愉快、実に愉快だ」

「キグウダナ、オレサマモダ」

いくらホーリナーといえど常軌を逸した戦い、浮遊し、いくつもの得物が辺りを飛び回り、その得物の残骸が雨のように地面に降り注ぐ。

エリゴスの突きをタナトスはグングニルを斬り刻み防ぎ、エリゴスは素早く避けるが、タナトスはスケイルを投げた。

「甘い」

スケイルは不自然な動きをしてあらぬ方向に飛んで行った。

「テキニマデエイキヨウヲアタエルノカ」

「否、神には通じぬ」

「ダカラオレサマフツウニタタカエルノカ」

タナトスは素早い動きで近付きスケイルを両手で振り上げた、エリゴスはそれをただ見つめることしか出来ない。

そしてタナトスが振り下ろそうとするがスケイルが全く動かない、タナトスは軽く首を傾げた。

「メンドウナコトヲオボエヤガツテ」

「勝利」

エリゴスはグングニルでタナトスを貫いた、確かな人を貫く感触、そしてフードの中の闇が徐々に晴れ、口から血を流して青白い顔をしたタナトスが現れた。

「まだ、死ねネエンだヨ」

タナトスの体からヒモが伸びてエリゴスの体を覆った、ほんの数秒、その後にタナトスを貫くグングニルが消え、ヒモが取れると原形が分からない粒のような物が落ちた。

完全に体を腐食されたエリゴス、そしてタナトスも力尽きたように落ちる。

落ちる途中でローブが剥がれ青く長い髪の毛のいつものタナトスが現れた。

「あ、…………しゅ、ら」

人形のように地面に叩き付けられるのと同時に、世界が割れて白い世界と化す。

タナトスは腹から血を流して動かない、白い世界に一人倒れるタナトス。

35：リベンジ

Unknown

中国のお城のような場所、そこには日本で言うなら御前試合をするような広場。

そこをポケットに手を入れながらジャリジャリと小石が敷き詰められた広場を歩くダグザ、その目はただ一点を見ている。

目の前の悪魔、ダグザならそれが誰だから一瞬で理解出来た。

ダグザが減多に見せない笑顔を作り悪魔に近付く、悪魔はフードを取る、吊り目気味で髪の毛は三編み、ダグザが一度完膚無きまでに負けた波旬。

ダグザは笑顔で腕輪に触れる、得物はトンファー、名はサラスヴァティー。

「またお前ネ？」

「感謝しろ、更に強くなって帰ってきた」

「それがどうしたネ、朕は^{ちん}はまだ本気出してないヨ」

「貴様の得物が棍ではなく三節棍、それだけ分かれば充分だ」

波旬は計算済みと言わんばかりの笑顔で腕輪に触れた、得物は三節棍、名は承影。

波旬は承影を振り上げると地面に向かって振り下ろす、途中で承影は大きくしなり、否、3等分されて鎖で繋がれている。

そのまま地面に叩き付けると地面があり得ない程えぐれる。

「三節棍は力を倍増させるネ、分かっているも防げないヨ」

「そうか、なら戦う前に質問だ、貴様自分の事を『朕』と言ったな

？貴様は女だからこの一人称はおかしい、何故だ？」

「知りたいなら教えるヨ、朕が悪魔になる前は一族の長の一人娘ヨ、親父が男として使えないから朕一人しか産まれない、でも中国は男じゃない長ダメネ、だから朕は男として育てられたヨ、その時のクセが抜けないだけネ」

ダグザは黙ってその事を聞いていた、そして構えて戦闘に移ろうとするが。

「待つネ、朕だけ話すは平等じゃないネ、お前も話せ」

「まあ良いだろう、俺は国営のスパイをやっていた、表の裏の世界の深い部分に関与していた、貴様らチャイナや隣のジャパン、そしてUSAやロシア、UKフランス、それらの経済成長をコントロールしてうちの国が安定した位置を保つ事に関与していた」

「つまり影で世界を操ってたって事ネ？」

「まあそうなるな」

「更に裏の世界に來た事後悔するネ！」

波旬は承影で片手で持つと走り出した、ダグザはサラスヴァティーを強く握って構える。

波旬が承影を振り上げると、承影は3等分に鎖で繋がりが折れる、さまざまの勢いで振り下ろすが、ダグザは回転させたサラスヴァティーでいなすと、深く踏み込んで波旬のみぞおちに狙いを定める。

「遅いネ！」

波旬はダグザの腕を蹴り飛ばすと跳び上がり、蹴った後の遠心力を殺さずに軸足でダグザの頭を蹴ろうとした。

「貴様も甘い」

ダグザは両手を地面につくと、下から波旬の足を蹴りあげた。

「エクスプローション【爆発】」

素早く体勢を立て直すとサラスヴァティーを腰だめで構え、着地しきらない波旬を殴った。

凄まじい爆発と共に波旬は吹き飛ぶ、地面に体をこすりつけながら勢いが弱まり、最後は承影を地面に突き刺して止まった。

「痛いヨ」

波旬は立ち上がるとダグザを睨んだ、地面に叩き付けられたのに擦り傷が少なく、擦り傷以外の外傷は皆無。

つまりエクスプローション【爆発】によるダメージはゼロということ、その代わりに承影から煙が上がっている。

「まだまだネ」

「それくらい分かっていた」

「だからどうした？分かったからって変わらないヨ」

波旬は承影をぐるりと回して構える。

「インフェルノ【烈火】！」

承影は燃え上がる………、というよりは承影の周りを薄い炎が纏ったような状態、承影が真っ赤に染まったように見える

「ヘリオスのとは違うな？」

「同じヨ、ただアイツは、燃やす、事重視しただけ、朕は違うよ」

波旬は承影を片手で持って走り出す、今度はダグザも走り出して相対する。

先に仕掛けたのはダグザ、最後の一步で深く沈み、全体重とダグザの脚力、そして腕力を乗せた一発を波旬に放つ。

恐らくこれほどの条件とダグザの無駄が省かれた動きから繰り出される一撃は相当なモノになるはずだ。

そして……………

「エクスプロージョン【爆発】！」

更に威力を増させる神技、恐らく防いだとしても腕が使い物にならなくなるだろう。

「だから甘いネ」

波旬がダグザのサラスヴァティーを受けると大きな爆発が起きる、波旬のインフェルノ【烈火】の炎を借りて勢いを増す爆破。

しかし波旬はその場に立っている、それどころかダグザの手に伝わる‘殴った’という感覚が鈍い。

ダグザは警戒して間合いを取ると、サラスヴァティーが視界に入っ

た。

「……………そういう事か」

サラスヴァティーはドロドロに溶け、持ち手だけになっている。

「ヘリオスの‘燃やす’エネルギーを全て‘溶かす’エネルギーに集約したのか、だからディアンギットの鉄をも軽々と溶かす。

メルポメネのラフスキン並に面倒だ、だが得物が当てられない戦い

はメルポメネで体験済みだ」

ダグザは持ち手だけになったサラスヴァティーを捨て、腕輪に触れて新たなサラスヴァティーを握った。

そして音もなく走り出すと波旬はそれに応じて構える。

ダグザは素早い一撃を放つが承影に当たる寸前で引く、そして反対のサラスヴァティーで再び素早い一撃を放つ。

波旬はまたかたという呆れた表情で波旬を押し出すように防御体勢に入るが、ダグザの手だけがその場で静止して、体は移動を続け波旬に近付く。

腰で構えたサラスヴァティーで波旬の頭を薙払おうとしたが、止めていた手がぶれたタメに一旦間合いを取った。

ダグザは不思議そうな顔をしてサラスヴァティーと波旬を交互に見る。

「どうしたネ？ 来ないならこっちから行くヨ！」

波旬は承影を持って走り出す、ダグザは仕方なく構えて波旬の動きに集中した。

波旬は跳び上がり、不必要なまでに承影を振り被る、ダグザは疑問に重いながらも、振り下ろされた承影を体をずらして避けた。

そしてがら空きになった波旬を殴ろうとしたその時、小さな炎の竜巻が承影から放たれた。

ダグザは急な出来事で避けきれず、右腕の肘から下を火傷しながらもなんとか波旬との間合いを取った。

「そういう、ことか、……………熱による、気流の変化、そして、炎の、巻き上げる、力を、利用して、小さな、火災旋風を、起こした、訳だな？」

「カサイセンブウ？まあそんなところヨ、でもお前ボロボロネ、そんなんじゃ朕に勝てないヨ」

「ああ、そうかもしれない」

ダグザは目を閉じた。

「フォーサイト【予知】」

何も変わらない外見、しかしダグザの見える世界と常識は確実に変わっている。

「その弱点、それは知らない事は分からないネ、朕はまだ神技隠してるヨ」

「知らん、もう終らせる」

ダグザは火傷した右手でサラスヴァティーをしっかりと握り走り出した。

殴りかかるがそれは気流の流れであらぬ方向に曲がってしまう、しかしダグザの世界でそれは計算済み。

全てを計算して動いているダグザだが、波旬が圧倒的有利なものには変わりない。

触れたらならば得物が溶けてしまう、防いでもしかり。

「どうしたネ？そんなもんネ？」

「いや、今分かったところだ」

「何か分かったところで関係無いネ、朕の方が強いヨ！」

ダグザは瞬時に間合いを取った、しかしその間合いも波旬に簡単に埋められてしまう。

それに全く憶さずにむしろニヤリと笑っている。

「エクスプロージョン【爆発】」

ダグザは力の限りサラスヴァティーを地面に振り下ろした、凄まじい爆発は地面をエグって波旬の視界を砂塵で覆った。

「フォーサイト【予知】」

「卑怯ネ！」

「誰かがいつも言っていたな、卑怯とは弱者が使う言い訳だ、と」

ダグザは波旬の横に回るとサラスヴァティーを振り上げる、そしてダグザは頭を打ち抜こうとしたが、ダグザの目は波旬の僅かな動きを捉えた。

今殴れば急所を外すばかりではなくカウンターを受けるかもしれない、ダグザはコンマ1秒の世界で瞬時にそれを理解した。

そしてダグザは波旬の手を殴り、承影を叩き落とす。

「やっぱり一筋縄ではいかないネ」

波旬は素早い動きでダグザの両手を捻る、ダグザは耐えかねてサラスヴァティーを落とす。

ダグザは構わずにハイキックを放つが、波旬は体を退け反らせてかわし、体を前に出す反動を利用して掌でダグザの顎を打ち抜いた。

ダグザは後ろに倒れるが、手を着いて足を振り上げた、ダグザの足は波旬の顎を蹴り上げダグザバック転して着地する、波旬は何とか踏ん張りダグザを睨んだ。

お互い脳が揺れて意識が飛びそうだが、奥歯が砕けんばかりに噛み締めて何とか立っている。

「初めてネ、ココまで痛い初めてネ！」

「何もかも上手く行くとするな、一度勝利した相手程恐ろしい相手はいない、理解しておけ」

「理解したヨ、だから今度こそ殺すネ」

波旬は腕輪に触れようと手を動かしたが、5 m程の距離を一瞬で詰め、波旬の手を掴んで睨み、そのままお互いの目の距離が近づく。波旬がそれを理解した時にはダグザの額で波旬の額を打ち抜かれていた。

「ず、つき？」

波旬は完全に脳が揺れ、気を失ったまま後ろに倒れた。

波旬が目を覚ますまでそれほど時間はかからなかった、波旬の視界に最初に入ったのは額から血を流すダグザ。

波旬は諦めて体を動かそうとはしない、ダグザはあぐらをかいて波旬を見下している。

「さあ、何が聞きたいネ？」

「聞きたい事はない、ただ他の奴らの所に行かせろ、一番強い奴の所だ」

「お前そんな奴だったネ？戦いあんまり好きじゃない思ったヨ」

ダグザは軽く鼻で笑った。

「ああ、戦いってのはあまり好きではない、だが仲間は大切だ、助けに行く」

「そうネ、じゃあ一番はルシファー様ヨ」

波旬が軽く腕を上げると黒い穴が開く、ダグザは辛そうに立ち上がる、そしてそのまま何も言わずに立ち去ろうとしたが……………

「待つネ！」

波旬が片膝をついてダグザのズボンの裾を掴んでいる、ダグザはそのまま冷たい目で何かを求めるような波旬を見下ろす。

「何だ？ まだ何か用か？」

「殺すネ、朕を殺すネ！」

ダグザの表情は変わらず、波旬の手を振りほどいて波旬に視線を合わせる。

「俺は人を殺さない」

「戦いに負けて生きて帰るの恥ネ！ それなら死んだ方がましヨ！」

ダグザは若干顔をしかめた、無駄な事、不必要な事が嫌いなダグザに無駄な殺生とは頭が痛い事だ。

「……………殺すネ、生き恥は、嫌ヨ」

「俺は殺さない、死にたいなら勝手に死ね」

「自分で死ぬの弱虫やる事ネ！ 朕は誇り高き一族の長ヨ！」

波旬は怒りをむき出しにしてダグザの胸ぐらを掴んだ、ダグザは全く気にせずに手を払い、立ち上がった。

「貴様のプライドなど知らん、俺のプライドが傷付く、その命好きに使い、もう一度俺に得物を向けるようなら、もう一度生かしたまま地にひれ伏させてやる」

ダグザはそのまま背を向けて黒い穴に向かった、そして波旬が立ち上がる音が聞こえる、じゃりじゃりと歩く音が……遠ざからない。

ダグザはすぐに異変に気付き振り返るとやはり波旬がいる。

「背後から殺すか？ 確に誇り高き一族だな」

「違うヨ！」

波旬は初めてプラスの感情がこもった顔をする、その表情は、恥じらい。

「ち、朕の命、この体、お前自由に使うネ、お前は、朕のご主人様ヨ」

波旬は真っ赤な顔で伏し目がちに言う、ダグザは嫌な笑みを浮かべる。

「それが主人に対する態度か？」

波旬はハッとして片膝を地面に着けて頭を下げた。

「朕の――」

「朕？貴様、いつまで高貴なご身分でいるつもりだ？」

ダグザはこのやりとりを楽しんでいるが、波旬は今にも泣き出しそうな顔でダグザを見上げる。

戦いの時とは全く違う、年相応の少女のような顔、悪魔というよりは天使の方が近い、そんな無垢な顔だ。

「ワタシの命、そしてこの肉体、自由に使って下サイ」

「俺の名前はダグザだ、行くぞ祝融」

「シュクユ？」

「貴様の神の名前だろう火神祝融、俺に神に戻る一つの仮説がある、だからもう波旬と名乗る必要はない、分かったな祝融？」

「……………祝融」

「返事が無いぞ？」

「は、はい！ダグザ様！」

祝融は涙を拭って歩き出すダグザの後ろを追った、その涙は忘れていた何かを取り戻した嬉し涙。

二人は黒い穴に入って行くと、世界が砕け散って真っ白な世界に変わった。

36：頑張る

Unknown

ジャングルを剣と盾、フリストとヒルドを持ってゆっくりと小さく歩くアストライア。

葉が光を隠して薄暗くなっている、木漏れ日はスポットライトのように細く、小さくアストライアを照らす。

そして暫く歩いていると一本の木が倒れてきた、アストライアは全く慌てず、幼い瞳で木を見ると、ギリギリまで引き寄せてあつという間に斬り刻んだ。

物凄い早業、一瞬で原型を無くした木、そして切株の向こうには髭切を持ったルシファーがいる。

「子供かと思ったら、中々だ」

「……………誰？」

「人に名前を聞く時は自ら名乗る、それは当たり前だろう？」

アストライアは一瞬考える、その幼い無表情は本当に強き者とは思えない。

アストライアは軽くお辞儀をしたまま上目使いでルシファーを見た、マニアならば一瞬で逝くようなその視線、ルシファーは微動だにせずアストライアを睨む。

「……………エクステンション【延長】」

腰の辺りで構えられたフリストが素早く伸びる、完全に油断してい

たルシファアは慌てて髭切を構えるが、力が入りきらずに髭切を離してしまった。

「ミーティア【流星】」

ヒルドを振ると光の円盤が放たれる、完全に無防備になっていたルシファアは成す術がない。

光の円盤はルシファアのから空きになった腹部を捉え、ルシファアを思いつきり吹き飛ばした。

ルシファアは太い木を一本折り、なんとか踏ん張って止まった。

口から血を流して殺気のみがこもった視線をアストライアにぶつけるが……………、50m以上遠くにいたはずのアストライアは目の前にいる。

右手には伸びたフリストが、左手のヒルドは体に巻き込まれて完全に殴る体勢に入っている。

「俺をナメるな！」

ルシファアはヒルドを素手で掴むと、腕輪に触れずに髭切を顕現した。

片手で髭切を振るがアストライアは髭切に乗ってバック宙でルシファアから遠ざかる、身軽なアストライアはクルクルと回って着地する。

「腐っても神選10階か、だが所詮は子供、力不足だ」

「……………頑張る」

「頑張るだ！？笑わせるな！」

高々と笑うルシファア、しかしアストライアは至って真剣な眼差し、否、殺気をも込めた歳不相応な視線、これが神選10階史上最年少

と呼ばれたアストライアの目である。

「そのような目をしたところで俺は殺せない」

「……………何とか、なる、阿修羅、助ける」

「アスラは自分の意志で悪魔になったのだ、貴様ごときの説得で変わる訳がないだろう」

「……………頑張る」

アストライアは構えて走り出した。

『プロテクティブ【防護】』

フリストの攻撃をともに体に受けるルシファー、しかし、まったく効いている様子は無く、傷一つついていない。

アストライアは構わずにもう一度フリストを振るが、やはり傷も何もついていない。

一先ず間合いを取って冷静に今の状況を考えるが、おかしい点は何一つない。

「そんなにかしいか？」

「……………神技？」

「ご名答、それだけ気付けば自分に勝ち目が無い事くらい分かるな？」

アストライアは無言で構えた、それはルシファーの問いかけに対する抵抗、そして強い心を持った神選10階であるアストライアの意志そのものである。

ルシファーは両手に髭切を顕現し、アストライアに向かって走り出す。

お互い両手に獲物をもっているために息もつかせない素早い連撃、クレイモアという大剣を軽々と振り回すルシファー、体と獲物の身軽さを使い舞うように戦うアストライア。

どちらが攻撃でどちらが防御かも分からないような手数、素早い戦いならアストライアのフィールドらしい。

「エクスプロージョン【爆発】」

ルシファーは大きく振り上げた髭切を振り下ろす、完全に予期していなかったアストライアはヒルドで防ぐ形となった。

凄まじい爆発に押し潰されそうになるが、なんとか堪えてフリストの切っ先ルシファーに向けた。

「…………エクステンション【延長】」

伸びたフリストをルシファーは何とか避けようとするが、避けきれずに肩口を切り裂かれてしまった。

神技の同時発動が出来るのはククルカンとベルゼブブのみ、つまりエクスプロージョン【爆発】を放った瞬間にプロテクティブ【防護】は解除されたという事。

しかし傷を見れば一目瞭然、身体中に火傷を負ったアストライアと肩を切られたルシファー、圧倒的に幼いアストライアの方が体力の消耗が激しい。

「俺に傷を与えたの誉めてやろう、だが、逆鱗に触れた事を後悔しろ！」

アストライアはその気迫に一瞬怯えてしまった、その隙に近寄るルシファー、アストライアはフリストを構えると再びルシファーに向ける。

「……エクステンション【延長】」

「学習をしろ」

ルシファアは伸びてきたフリストを軽く避け、素手で掴むと怪しい笑みを浮かべた。

「コラプス【崩壊】」

長くなったフリストにヒビが入り、ガラスのように粉々に砕け散った。

アストライアは絶望に顔を歪め、泣きそうになりながらもヒルドを体に巻き込む。

「……………ミーティア【流星】」

「だから甘いと言っているだろ！」

光の円盤は髭切によって軽々と打ち消されてしまった、コレが気迫と殺気の違い、アストライアに大きく欠如していたもの。

「……………阿修羅、……………メルポメネ」

「戦いでは誰も助けには来ない、神選10階にもなってまだそんな甘えが残っていたのか」

ルシファアは髭切を振り下ろすと、アストライアはヒルドで何とか防ぐが、既に反撃をするだけの気合いも力も残っていない。

「弱かった自分を恨め」

ルシファアはアストライアの首を掴むとそのまま持ち上げた、アス

トライアの目からは涙が溢れ落ち、戦意どころか生に対する執着すら失われてるように思える。

ルシファーは近くにあった木にそのままアストライアを叩き付けた、押し付けるようにしてアストライアを睨む。

「アスラが貴様の死を知ったら悲しむと思うか？」

アストライアは頷こうとするが動けず、言葉を発する事も出来ない。

「今のアスラには男の事しか見えていない、一人の男のタメに世界を捨てたアスラが貴様ごときの死を悲しむと思うか？」

「……………あ、しゅら、やさ、しい」

「貴様の知っている、阿修羅、はもういないんだよ、いい加減目を覚ませ」

ルシファーは更に妖しい笑みでアストライア睨んだ、そして、反対の手に持った髭切を体の後ろまで引く、それはアストライアからもしっかりと確認出来る。

「仲間達も貴様の後を追う事になるだろう」

ジャングルの中に黒い大きな穴が空いた、そこからはサラスヴァテ
イーを握ったダグザと承影を握った祝融が出てきた。

二人とも警戒していつでも動けるような状態、臨戦体勢、そして黒
い穴が閉じる

「誰もいないぞ」

「おかしいヨ、確かにルシファークコにいたハズ」

「そうか、過去形なのか」

「そ、それは……………」

ダグザは踵を返して祝融を見ると顔が青ざめた、否、祝融の奥にあ
る一本の木だ。

「あ、……………ああ、あ……………あ」

「どうしたんデス——!?」

祝融がダグザの視線をたどって振り向くとそこには人、だったもの、つまり死体、木に磔にされた人。

それは先ほどまでルシファーと戦っていたアストライア、心臓を髭切で貫かれそのまま木に髭切ごと突き刺されている、まるで標本のように。

「クソがあ!!!!!!」

ダグザが近くにあった木をサラスヴァティーで殴ると、サラスヴァティーは爆発をして木を薙ぎ倒した。

その光景に祝融は顔を驚きに歪める、怒りによる神技の暴発。

「だ、大丈夫デスカ?」

「次に強い奴は誰だ!?!」

ダグザの叫び声に祝融は怯んでしまった。

「……………答えろ」

「つ、次はベルゼブブネ」

「行くぞ」

「こ、コイツは!?!」

「時間がない、早くしろ」

祝融は急いで穴を開けるとダグザは何も言わずに駆け込んだ、祝融も後を追って駆け込む。

そして穴は閉じて再びジャングルに静寂が戻った、磔にされたアストライアは息もせず、傷口から大量の血を流して静寂を守っている。

37..魅せる

Unknown

華美で派手、必要以上、むしろ場違いなくらいに装飾された協会、その広さはまるでアリーナのような大きさ。

アルテミスはフルムーンを握りながら歩く、そこに警戒は無い、何故なら目の前には既に眼帯を付けたベルゼブブがいるからだ。

アルテミスはなるべく間合いを取って止まるとフルムーンを回し始めた、ベルゼブブは足を組んで棺の上に座ったまま動こうとしない。

「さて問題だ、この棺は——」

「テメエの棺桶だよ！」

アルテミスは反対側の握り拳の中指を立てる、ベルゼブブはため息と共に頭を抱えた。

「無粋だ、品がない」

「棺桶に座るあんたも充分品が無いけどね」

「ああ、そうかもしれない」

アルテミスは気が抜けてフルムーンを落としてしまった、まさかベルゼブブが認めるとは思わなかったからだ。

「棺に入る者がコレなら敬意をはらう必要は無い」

「少なくともアタイは入らないよ」

「我もそのつもりだ」

「ラチが明かないね、それなら——」

「「力づくで入れるまで」」

先に動き出したのはアルテミス、フルムーンを同時に4つ投げた。ベルゼブブは素早く腕輪に触れる、得物は鎚、名はトゥールハンマー。
1。

2つのトゥールハンマーを顕現すると軽々とフルムーンを打ち落としました。

「エクスペンション【拡大】！」

その先にもう一つのフルムーン、それはベルゼブブの一步手前で大きくなる、ベルゼブブは体を退け反らせて何とか避けた、その時にベルゼブブの美しい金色の髪の毛が数本宙に舞った。

ベルゼブブはゆっくりと元の体勢に戻るとアルテミスを殺気が籠った目で睨む、先ほどのまでの余裕なベルゼブブとは違い、感情を剥き出しにしている。

「一度のみならず二度までも我に傷を付けるとは」

「傷？ 髪の毛切れたくらいで何が傷だ、甘ったれも甚だしい」

「君は我が必ず殺す、この手でその顔を潰してやろう」

「じゃあアタイはあんたを3枚に卸してやるよ！」

今度は2人同時に走り出した。

「エクスペンション【拡大】！」

手元で大きくなるフルムーン、お互い得物を横薙に振ると激しい火花が飛び散る、まだ遠距離型のアルテミスの方が劣勢だが敗退に至る程ではない。

「さすがは最強と言ったところだな」

「アタイを誉めてるのかい？それは面白い事するね」

「君を誉めたところで我には何の影響もない、如何にしても我より弱いのは事実、それは不変の真理だ」

右手に持ったトゥールハンマーの横薙の攻撃が………、否、両手のトゥールハンマーでアルテミスを挟み潰す用に振っている。

アルテミスは必要最低限のバックステップで避けると、お互いを殴りあつてゐるトゥールハンマーにフルムーンを通した。

「チェンジ【転化】！リデューション【縮小】！」

あつという間に縮まり身動きの取れなくなったトゥールハンマー。

「なっ!？」

アルテミスはトゥールハンマーを踏みつけてそのままベルゼブブを殴り飛ばした。

ベルゼブブは何とか踏ん張ると腕輪に触れずにトゥールハンマーを顕現する。

「ナメるなよ！」

そしてアルテミスを全く見ずにアルテミスの頭を薙払った、アルテミスは派手に転がると椅子に突っ込んで止まる。

ゆっくり立ち上がるアルテミスのバンダナは自身の血で赤く染まっている、ベルゼブブの頬は腫れ上がり口から血が流れている。

「実に馬鹿力だ、腹立たしいくらいの馬鹿力だ！」

「ククルカンよりまましだよ、それよりレディーの顔を殴るあんたも紳士じゃないね」

「レディー？ 答えはアマだ」

「まあナルシスト野郎よりはマシだね」

今度はベルゼブブが走って来る、両手には各々にトウルハンマー。ベルゼブブの上段からの振り下ろしをアルテミスは横に転がり避けるが、もう一つのトウルハンマーが薙払うようにアルテミスに向かう、アルテミスはトウルハンマーに足をつき、ショックを軽減しながら吹き飛ばされた。

そして空中で体を立て直すと、フルムーンを4つベルゼブブに投げる、ベルゼブブはトウルハンマーを投げて全てを打ち落とした。それだけではない、壁に足を付いて一瞬静止したアルテミスに向かって、アルテミスは迷わずに壁を蹴ってトウルハンマーに向かった。

トウルハンマーを持つと自らの体を軸にしてベルゼブブに投げ付ける、アルテミスが着地すると同時にベルゼブブが片手でトウルハンマーを掴んだ。

「さすがさい——！」

ベルゼブブが余裕の笑みでアルテミスを賞賛しようとした時、ベルゼブブの背中に熱く鈍い痛みが走った、ベルゼブブが背中に手を当てると血がついている、そしてアルテミスの指に戻って来る血の付いたフルムーン。

「いつだ！？ 何故我が気付かなかった！？」

「あんたの得物と一緒に、あんたの得物とは全く違う軌道で投げさせてもらったよ、最強ってのは近距離と遠距離が万能だからじゃない、飛び道具では不可能と思われていた方向転換が可能なんだよ」

「ココまでナメられたのは初めてだ、我に屈辱を与えた事、とくと後悔させてやろう」

ベルゼブブの表情から冷静さが消えた。

「レイン【降雨】」

ココは室内だというのに雨雲天井を覆い、激しい雨が降り始めた。

「だからどうしたってんだよ？」

「ライトニング【落雷】」

アルテミスの表情が一瞬にして険しいものとなり、アルテミスが横に避けた瞬間、アルテミスがいた場所に雷が落ちた。

アルテミスは当たらずに済んだが、何故か地面に伏している、ゆっくり近づくベルゼブブを睨むだけで、全く反撃しようとはしない。

「雨を降らせた理由はコレだったんだね、水で万が一外れても通電で相手を仕留める、かなりえげつないやり方じゃないか」

「それだけではない、もし当たったならその力は絶大、例え鍛錬をしたホーリナーといえど死を免れる事は出来ないだろう」

「確かにそうかもね、直接当たってもないのに足が痺れて立てない」

「さあ、我に齒向かった事を詫びろ、そして後悔しろ」

「断る！」

アルテミスは中指を立ててニタリと笑った。

「はあ、何とも愚かだ、しかしコレで君の愚かな顔を見るのも最後だ」

ベルゼブブはトゥールハンマーを両手で持って振り上げた、アルテミスは伏したままベルゼブブを睨むように見上げる、ベルゼブブは

嘲笑の笑みでアルテミスを見下している。

「さあ、コレで最後だ、認めてやろう、君は我が戦った中でもトップクラスに強い、しかし、我の方がつよ——」

「ルナティック【狂気】！」

アルテミスがベルゼブブに手の平を見せるとフルムーンが顕現される、そしてフルムーンは淡い光を放ちながら回転しはじめ、ベルゼブブの視界にそれが入ってしまった。

「あんたは一々話が長いんだよ、敵ならさっさと殺せ」

「な、……………ナにシタ？」

「魅させてもらったよ」

ベルゼブブは頭を抑えながら悶え始めた、歯を食い縛り目を見開いて何かに耐えているように見える。

そう、耐えている、内から来る自らに対する狂気に、気を抜いたら内から何かに食われそうな恐怖、自分の体が違う何かに支配されそうになる恐怖。

「あたいの勝ちだね、そうなたらあんたに勝ち目は無いよ」

「ま、ま……………だだ、ワレは、……………まけ……………ナい」

ベルゼブブの顔には掻きむしった痕がある、ベルゼブブが内なる何かと戦っている痕、そして唇は強く噛み過ぎて血が滲出している。

「もうそろそろあたいの痺れもとれてきたね」

アルテミスは多少ふらつきながらも立ち上がった、勝利を確信したアルテミスはベルゼブブの滑稽な姿を眺めている。

コレがアルテミス、遠距離型最強の力。

「よく粘るね、やっぱり人間とダークロードじゃ違うんだね」
「な、……………ナメるな！」

ベルゼブブは一瞬でトウルハンマーを顕現して、ベルゼブブを眺めているアルテミスの頭を殴り飛ばした。

肩で息をしながらトウルハンマーを握るベルゼブブ、そして頭を殴られて意識が飛びそうになるのを必死で堪えるアルテミス。
ベルゼブブは既に正気を取り戻しているようにも見える。

「あ、あんた、なんで、ふつうに、してられるんだい？」
「ダークロードと、同じに、するな、我に、敵うのは、ルシファー、様、のみだ」

ベルゼブブは再びトウルハンマーを振り上げる、もうアルテミスに反撃する力は残っていない、指先まで動かせない程失血している。

「さあ、終わりだ」

ベルゼブブはトウルハンマーをアルテミスめがけて振り下ろした。

「今度は間に合ったな」

アルテミスの視界にはダグザがいる、そしてトールハンマーを受けているのは祝融。

「止血剤と増血剤だ、飲んでおけ」

「あんたが、何で、ココに？」

「もう誰も死なせたくないからだ」

波旬はベルゼブブの腹を蹴り飛ばして間合いを取る、そしてダグザは祝融の隣に立つとサラスヴァティーを構えた。

「波旬、君が何故そちらがわにいる？」

「波旬じゃないネ、祝融ネ」

「祝融はこちら側だ、そして貴様はココで死ね」

ダグザが走り出した、ダグザは低い姿勢からサラスヴァティーを突き出す。

「エクスプロージョン【爆発】」

ベルゼブブはトゥールハンマーで防ぐが、爆発の衝撃で吹っ飛んでしまう。

「ベロシティ【光速】」

吹っ飛んだベルゼブブを追うように一閃と化した祝融、一瞬でベルゼブブに追い付くとそのまま承影で殴り飛ばした。

ベルゼブブは何も出来ずに壁に叩き付けられた、口からは激しく吐血してトゥールハンマーに支えられながら何とか立っている。

「殺れ、祝融」

「ハイ」

「波旬！君はこっち側ではないのか？我々を裏切るのか！？」

「元から仲間なんて思った事はないヨ、ワタシの仲間がご主人様だけネ」

祝融は承影を振り上げ、殺意の眼差しと共に承影を力一杯振り下ろした。

しかし、ベルゼブブはトゥールハンマーを持ち上げて何とか承影を防ぐ、既に気力のみで立っているベルゼブブ、力押しすれば屈するものの力を入れようとしない祝融。

「インフェルノ【烈火】」

竜巻のような炎の渦がベルゼブブを飲み込んだ、ベルゼブブの悲痛な叫び声も炎の轟音に掻き消されてしまう、レイン【降雨】で濡れた床も一瞬にして乾いてしまうような炎。

あっという間に辺りの壁等はガラスのように碎け散り、真っ白な世

界になった、そこにぽっかりと開く黒い穴。

「ベルゼブブは死にましたヨ、空間自体が支配を失ったんデス。

ご主人様、次は何処に行きマスか？」

「貴様にはもうココでの使用意義が無くなった」

「何故デスカ！？ワタシを利用するだけして殺すというのデスカ？」

懇願するようにダグザのジャケットを掴む祝融、ダグザはその左手をそっと掴み上げ、袖をまくってみせた。

そこには悪魔のものではない、ダグザ達と同じホーリナーの腕輪がある。

「神が神を殺した時に悪魔になるのなら、逆も然りだ」

「ワタシ、神に―――」

「ダグザ！なら阿修羅を救い出せるんじゃないのかい！？」

祝融の言葉を遮って叫ぶアルテミス、あまりの音量にダグザは片耳を塞いで怪訝な顔をする。

「その前に奴を正気に戻す必要があるだろ、話はそれからだ」

ダグザはアルテミスに肩を貸して立ち上がらせた、ゆっくりと黒い穴に向かう3人。

38：幼き戦い

Unknown

半径20m程の小さな陸地、そしてそこに所狭し生える木、そこから脱すれば気が遠くなる程の海が広がっている、空を見上げれば雲一つない海を鏡で写したように青い空。

そんな所にぼつりと立たされているモリガン、シヴァの上からぼつと辺りを見回し悪魔を捜すが人の気配がない。

そんな静寂がかれこれ5分した時、木に何かが当たるような音が無数に聞こえた、そして次の瞬間、モリガンを包囲するように無数のナイフが飛んできた。

『やっぱり君か』

モリガンはシヴァから伸びる鎖を掴みながらシヴァから飛び降りる、そして空中で大きくシヴァを回してナイフ、そして周りの木まで薙払った。

丸裸になった小さな島、そこに立っているのはリバイアサン、両手には先ほど投げたティルヴィングが握られている。

「何で木まで壊しちゃうんだよ!？」

『君に有利なのは卑怯じゃないか? リバイルとして正々堂々と殺りあおうじゃないか』

「そうだね! なんかライバルって響き良いなあ」

『やっぱり馬鹿だ』

「何か言った!？」

モリガンはリバイアサンに聞こえないように嘲笑うとクスクスと不気味な声で笑う。

『さてと、さっさと潰してあげるよ』

「僕は絶対に――！？」

モリガンはリバイアサンが言い終わる前にシヴァを投げた、上空からリバイアサンめがけて落ちてくるシヴァ。

「この卑怯者お！」

『戦いは目をあわせた時から始まってるんだよ』

リバイアサンは体の軽さを利用して側宙して避ける、そして飛んでいる間にテイルヴィングをモリガンに向かって投げた。

モリガンは鎖を振って全て弾くが、テイルヴィングは新たに飛んできたテイルヴィングにぶつかり再びモリガンに向かう。

『そんな事も出来るんだ』

モリガンはギリギリで横に避けるが、完全には避けきれずに一本が太股に刺さってしまった。

「僕だって頑張れば強いんだから」

『腐っても元遠距離No.2って事だね』

モリガンは太股のテイルヴィングを引き抜くと地面に落とした、真っ白なローブはモリガンの血で赤く染まり、モリガンはなるべく体重をかけないように立っている。

リバイアサンはそれを全く気にせずにモリガンとは全く違う方向にテイルヴィングを投げた、そして再びテイルヴィングを投げると、

お互いがお互いに当たり方向を変え、モリガンを包囲するようにモリガンに襲いかかる。

「死んじゃえ！」

『一々面倒だな』

モリガンは鎖を体全体に巻き付けた。

「そんな小さな穴じゃあティルヴィングは通っちゃうよ！」

モリガンはギリギリまでティルヴィングを引き寄せると、鎖の巻き方とは逆に回転をし、一気に鎖を解き放った。

鎖はそのままの状態を維持しながら広がり、さながら鎖の繭がモリガンを包んでいるかのようだ。

「そんなの甘いよ！」

ティルヴィングが鎖に当たり激しい金属音が鳴り響く、しかし、完全にティルヴィングを防ぎきれず、鎖と鎖の合間を縫ってモリガンに襲いかかる、それに対してモリガンはなす術がなく、体を動かして避けるしかない。

全てが終わった頃にはモリガンは身体中傷だらけになっていた、肩で息をして、真っ白なローブはどこどころ赤く染まっている、仮面も割れて既にモリガンの素顔が露になっている。

「少し甘く見すぎたみたいだね」

「馬鹿だ、ばあか！」

「まあ僕が君ごときに負けるなんてあり得ないんだけどね」

モリガンは鉄球であるシヴァに飛び乗った、そのまま足を動かしてシヴァを転がす。

リバイアサンは軽々と避けながらも、モリガンにテイルヴィングを投げ続けている。

「こんなの一度見ちゃえば怖くもなんともないよ！」

「ノミみたいにピョコピョコとすばしっこいね」

「の、ノミ！？僕はそんなにちっちゃくないよ！」

「何だ小さいのを気にしてたのかミジンコ？」

「みみみみ、ミジンコ！？ムキヤー！本当に君ってムカつくね！？」

「ミトコンドリアが叫んでも僕の耳には届かないよ」

「もう怒ったよ！君なんて海の藻屑になっちゃえ！」

リバイアサンはバックステップで大きく間合いを取った、そして地面にテイルヴィングを突き刺すと、両手を上に上げる。

「ツナミ【津波】！」

モリガンは素顔の口角をニヤリと上げ、軽い笑みを溢した。

次の瞬間、リバイアサンの後ろの海から10m以上ある津波がモリガンに向かって来ている、あれをまともに受ければ空母だろうが一たまりもない。

「これで終わりだよ！」

リバイアサンには当たらず、津波がモリガンを呑み込もうとしたその時。

「グラビテーション【重力】！」

津波は一瞬にして宙に浮き上がり、滴となって空を覆っている。

「何をしたんだ——！」

リバイアサンが上からモリガンに視線を移そうとした時、モリガンの拳がリバイアサンの頬を捉えた。

そして吹っ飛んだりバイアサンの体には、鎖が巻き付いていて、モリガンが力一杯引くとモリガンを追い抜き、宙に放り出された、モリガンはそのままシヴァをリバイアサンに向かって投げると、リバイアサンは派手に吹っ飛び海に消えて行った。

しかしモリガンは得物をしまおうとはしない、それはティルヴィングが地面に刺さったまま消えないからだ。

暫く待つとリバイアサンがボロボロの体で海から出てきた、そしてモリガンは指をパチンと鳴らすと、空にあった水がバケツをひっくり返したかのように二人に降り注ぐ。

真っ白なローブを着た幼い少年のモリガン、真っ黒なローブを着た幼い少年のリバイアサン、全く正反対の二人の決着がモリガンの手に委ねられた。

「さっき、何した、んだよ？」

「津波に対する重量を無重力にした、それによって束縛するものがあるもなくなり浮き上がったってわけさ」

「もしかして、わざと出させたの？」

「そうさ、君のツナミ【津波】は神技の中でもトップクラスの破壊

力と攻撃範囲を誇ってる、だからこそその絶対的な力に溺れてたんだね」

モリガンは血の通っていないような表情でリバイアサンを見下ろす、正に冷徹。

逆にリバイアサンは喜怒哀楽をフルに顕現させたような表情のバリエーション。

「僕はまだ……………」

「何か言った？」

「僕はまだ負けられない！」

一瞬でテイルヴィングを両手に顕現すると、モリガンを突こうとする。

「大人しく負けてくれよ」

モリガンは軽く体をずらして避けると、リバイアサンの腕を掴んで軽く捻った。

「くうあっ！」

そのままみぞおちに膝を打ち込み、もう一発蹴ってリバイアサンを海に蹴り飛ばした。

豪快な水しぶきをあげて海に突っ込むリバイアサン、モリガンはそれを相変わらずの冷めた目で見える。

「何で君はそこまでして僕に勝とうとする？分かるだろ、僕に勝てない事くらい」

「うるさいうるさい！ルシファー様と約束したんだ！」

再び走り出すリバイアサンモリガンは呆れながらもリバイアサンを睨んだ。

走りながらテイルヴィングを投げるが、モリガンは鎖で軽々と防いでしまう。

両手のテイルヴィングによる連撃も、モリガンは鎖を使って次々といなす。

疲れと傷で無駄だらけのリバイアサンの動き、それに焦れば焦る程更に動きに無駄が生じる、その負の連鎖に気付いているのはモリガンのみ。

モリガンはリバイアサンの腕に鎖を巻き付けると、そのまま海に向かって投げ飛ばした。

「少し頭を冷やしたらどうだい？」

「うわあああああああああああああああ！」

リバイアサンは懲りずに再びモリガンに向かって走り出す、モリガンは呆れて頭を抱えると、持っていた鎖を放した。

モリガンはリバイアサンの喉元への突きを軽々避けると、全体重を乗せたストレートでリバイアサンの顎を打ち抜いた。

豪快に吹っ飛び波打ち際で動かなくなったリバイアサン、完全に脳が揺れて意識が飛んだのであろう。

「おおきろお、いつまで寝てるのかい？」

リバイアサンの顔に水をかけ続けるモリガン。

「ぶわぁっは！ゴホッ！ゲホッ！」

「やっと起きたよ」

リバイアサンが目を開くとモリガンがいた、何かしようとしたがもう動くだけの力が残っていない。

「負けちゃったんだ」

「ボロ負けだね」

少しずつ涙を流し、ついにはとめどなく涙が流れだした、モリガンはそれすらも無表情で眺め続ける。

「そんなに死ぬのが怖いのかい？」

「死ぬ？そんなの怖くないよ」

「じゃあ何で泣く？」

「ルシファー様と約束したんだ、この戦いで勝ったらパパとママを生き返らせてくれるって」

モリガンは初めて笑った、クスクスではない、大きな声を出して目には涙を浮かべて泣いている。

「君、馬鹿だね！人なんて生き返るわけないだろ！？」

「でもルシファー様が……」

「嘘に決まってるじゃないか、人を生き返らせるなんてどうやれば出来るんだい？」

リバイアサンは目が点になっている、モリガンは馬鹿を見るような笑みで見下している。

「じゃあ君は親を生き返らせるために悪魔になったのかい？」

「そうだよ、僕の腕輪は海で溺れて死にそうになった僕を助けてくれたパパとママなんだ、僕のせいで死んだから僕が助けたいんだ」

「奇遇だね、僕の腕輪も両親なんだよ」

再び目が点になるリバイアサン、事あるごとに似ている二人、そして、正反対の二人。

「だけど僕は両親をこの手で殺したんだよ、盗み、破壊、暴力、1歳で犯罪っていう犯罪に手を染めたよ、でまあ、そうきたら殺すでしょ？一番身近な両親を殺したらコレだよ、本当、嫌になっちゃうよね。」

「って僕は何でこんなに饒舌になってるんだ？この事を初めて話した相手が君だなんて、本当にあり得ないよ」

モリガンは立ち上がってシヴァの鎖を掴んだ、そしてリバイアサンを足でひっくり返してうつ伏せにする。

「神に戻りたくないかい？」

「そんな事出来ない——」

「ってルシファー様が言ってたのかい？」

リバイアサンは頷いた。

「ルシファーを信じるか、僕達を信じるかは君次第だね」

モリガンはシヴァをリバイアサンの背中に軽く当てた、リバイアサンは慌ててシヴァを見るが動くに動けない。

「そんなの無理だよ！」

「まあダグザならどうにかしてくれるんだろうね」

「ダグザ？」

「ああ、恐らく彼の頭の回転の早さは世界一だよ、どうする？」

リバイアサンは何かを考えている、モリガンはそれをイライラしながら見ている。

1分、5分、10分、刻々と時間が過ぎていく、そしてモリガンの痺れが切れた。

「グラビテーション【重力】！」

シヴァにリバイアサンが張り付き、シヴァが風船のように浮き上がった、モリガンはシヴァを風船を持つように鎖を持った。

「さて、バチカンに戻してくれよ」

「僕はまだ何も言っていない！」

「あつ、反抗するの？」

「ぐあああああああ！苦しい！苦しいって！」

シヴァの重量が軽くなり、リバイアサンに対する重量が重くなった、そして更に過重がかけられる事により息苦しくなる。

「どうする？」

「分かった！バチカンに戻すよ！」

「それで良いんだよ」

波打ち際に現れる黒い穴、モリガンは風船のようになったシヴァを持ちながら黒い穴に向かう。

モリガンが黒い穴に入ったのは良いが、浮いているシヴァはリバイアサンを挟んで黒い穴に引っかかってしまった。

「痛い痛い痛いよお！」

「もう、うるさいなあ」

モリガンは一度黒い穴から出て、シヴァを掴んで先に黒い穴に放り込んだ。

そして再びモリガンは黒い穴に入ってしまった、しかしモリガンは大きな事を忘れている、それは地面に散らばった仮面。

39..愛、故に……

Unknown

黒いローブをはおったアスラの後ろを黙々と着いて行くヘリオス、そこは下は砂利、そして周りは境内やらがある寺。

ヘリオスは辺りを見回しながら歩いていると、前でアスラが止まったのを確認して自分も止まる、レーヴァテインを握る手に力が入ったのが自分でも理解出来た。

アスラはゆっくりと振り返る、その表情は冷淡そのもの。

「ヘリオス、ここ、覚えてない？」

「ココッスか？日本支部じゃないし、双子を助けに入った所じゃないし、……どこッスか？」

アスラは悲しい顔でため息を吐いた、そう、ココはヘリオスとアスラにとっては何よりも大切な場所。

「ココは、私と貴方が初めて会った場所、ルシファーに殺されそうになってた私達を、貴方が助けてくれた場所なのよ」

2年前の日本支部で起きた鬼とホーリナーの戦い、鬼に勝った日本支部だが、ルシファーの奇襲により死にかけていたアスラ達を救ったのがヘリオスだった。

ヘリオスにはほんの些細な事でも、アスラにとっては何よりも大切な日だった、そしてVCSOにとっては壊滅を暗示させる日。

「阿修羅、本当に戦うんスカ？」

「貴方次第よ、私と一緒に逃げよう」

「俺は皆を裏切れないッスよ、阿修羅の事は大事ッスよ！でも、タナトスやモリガン、ユピテルにククルカン、ダグザにアルテミス、メルポメネとアストライア、皆仲間じゃないッスか！だから阿修羅、戻って来るんスよ、皆で頼めば何とかなるはずッスよ」

必死にアスラを説得しようとするヘリオス、しかしアスラの顔は曇る一方、徐々に表情は悲しみに染まる。

「ヘリオスは私より神選10階を取るの？それじゃあ私一人で馬鹿みたいじゃない」

「それは……」

「貴方を助けるタメに私は悪魔になったのよ！？それを貴方は踏みこじるつもりなの！？」

「それは阿修羅が勝手やった事じゃないッスか！」

ヘリオスは慌てて口を押さえるがアスラの顔から絶望の色は消えない、そしてアスラの間からは涙が溢れ落ちる。

「誰も私の事を分かってくれない……」

「阿修羅、これは――」

「うるさい！結局ヘリオスも私の敵なんだね、私の事を分かってくれない」

「分かってるッスよ、阿修羅は俺のためを思って――」

「嘔吐き！もう何も聞きたくない！」

アスラは腕輪に触れた、得物は長刀、名は夜叉丸。

「力づくでも連れて行く、ヘリオスは私だけのものなんだから」

「阿修羅……」

「殺す気で来なさい、私も貴方を殺す気でいくから」

アスラは技名を言わないベロシティ【光速】でヘリオスに近付く、しかし、横薙に振った夜叉丸は空を斬った。

アスラは後ろを向くとそこにはヘリオスが立っていた、アスラは慌ててヘリオスから間合いを取るが、ヘリオスが常軌を逸したスピードで近付いて来た、それはアスラの技名を言わないベロシティ【光速】と同じ。

ヘリオスはアスラの手元を蹴り飛ばし、夜叉丸をアスラの手から離すとアスラを睨んだ。

「何で、ヘリオスがそれを？」

「ナメないでほしいッスね、コレでも阿修羅より神選10階にいたのは長いんスよ？これくらい出来るに決まってるじゃないッスカ、自分だけ特別だと思ったら大間違いッスよ」

アスラは再び素早い動きで間合いを取ると夜叉丸を顕現した、片手で握るとヘリオスを睨む、ヘリオスの顔に笑顔はなく、怒りと言うよりは悲しみに近い表情を浮かべている。

アスラは軽く沈むと、一瞬でヘリオスとの間合いを詰めた、しかし、ヘリオスは一瞬でアスラの後ろに回り込むが、アスラは振り向き様に上段の蹴りを放つ、ヘリオスは体を後ろに反らせて避けるとレーヴァテインを横薙に振る、それをアスラが受け太刀すると、二人はピタリと止まった。

「何で俺達が戦わなきゃいけないんスカ？」

「貴方が私と一緒に来てくれるなら、私は貴方とは戦わない」

「それは出来ないッスよ」

「何で？何でヘリオスは私よりも神選10階を選ぶの？」

「阿修羅を捨てたわけじゃないツスよ、ただ、阿修羅のやり方は間違ってる、だから俺は阿修羅を正気に戻して連れ帰るんすよ」

「私が悪魔にならなかったら貴方は死んだままだったのよ？私を悪魔にしたのはヘリオス、貴方なのよ」

ヘリオスの手元が動揺により若干ぶれた、それをアスラが見逃すはずもなく、レーヴァテインを弾くと夜叉丸を横薙に振る、ヘリオスは一瞬の出来事に戸惑ってしまい、若干の反応が遅れた、それにより間合いの大きい夜叉丸に腹を切り裂かれてしまった。

ヘリオスは間合いを取り、額に脂汗を溜めながら片膝をついてアスラを見た、アスラは夜叉丸の切っ先をヘリオスの額ギリギリで止める。

「それが事実よ、だから私と一緒に来て償いなさい」

「俺はそんな事頼んでないツスよ」

「じゃあ貴方は死んだままでも良かったの？」

「それは……………」

「私は貴方の何なの？ただの仲間？それとも……………」

アスラは目を伏せる、ヘリオスは夜叉丸とアスラを同時に睨み、アスラの目を見ようとする。

「ただの仲間をココまで説得するわけじゃないじゃないツスカ、タナトスとかだったら簡単に殺してるツスよ

俺は阿修羅のためなら何でもするツスよ、でも、それが阿修羅を助ける事になるならの話ツスけどね」

「今の私は救いようがないって事？」

「だから俺が救うんすよ」

ヘリオスはアスラに見えないように腕輪に触れてレーヴァテインを

顕現する。

「インフェルノ【烈火】！」

レーヴァテイン、そしてヘリオスを包むように燃え上がる炎、アスラは一旦間合いを取るが、ヘリオスがレーヴァテインを振ると竜巻状になった炎がアスラに襲う。

アスラは夜叉丸を振って何とか炎の勢いを殺すが、既に目の前にヘリオスはいない。

炎が燃えるような音で上を見ると、炎の上昇気流を利用してあり得ない高さまでジャンプしたヘリオスがいる。

「貴方も本気って事ね」

その瞬間アスラの髪の毛が朱に染まり、瞳は縦に割れて赤くなる、それは巫女の力、アスラの全身全霊。

ヘリオスが着地の寸前で振り下ろしたレーヴァテインは夜叉丸に受けられる、しかし、炎は凄まじい勢いで渦を巻き、辺り一帯を全て呑み込んだ。

周りにある建物や植物、それら全てが燃えている、だが一番近くで呑まれたハズのアスラは無傷でレーヴァテインを受けている。

「コレでも太陽神でもあるのよ、貴方の炎の中に入れる唯一のホーリナーって事を忘れないで」

「そんなの分かってるツスよ、目的は阿修羅を燃やす事じゃなくて、周りを燃やす事ツスよ」

ヘリオスはバックステップで間合いを取ろうとするが踏み込みが甘い、夜叉丸の間合いから脱する事ができなかった。

「はあ、コレで終わりね」

アスラは夜叉丸を振るとヘリオスを両断した、……………ハズだがヘリオスは揺らいで消えてしまった。

「俺がコレくらいで死ぬわけないじゃないッスか」

アスラは声の位置からヘリオスの位置を把握して、ヘリオスの斬撃を何とか柄で弾く。

振り向いた時にはヘリオスは揺らいでいて、斬っても手応えがなく消えてしまう。

「阿修羅、弱いッスね」

アスラが気付いた時には首元にレーヴァテインがある、ヘリオスは後ろで冷たい目でアスラの背中を見ている。

「何よその力、何で私の前で見せなかったの？」

「出し惜しみしてたわけじゃないッスよ、ただ、完成した時に日本支部の任務じゃないッスか、あんな所でコレを使ったら日本支部が燃えちゃうッスよ」

「じゃあココは燃えても良いって言うの？」

「だってココは偽物の世界じゃないッスか」

アスラは慌ててヘリオスを横目で見ると、完璧に創られた世界のはずだった、それにココをヘリオスは憶えていない。

歪な場所はないはず、自分は何もミスをしていないはず、アスラの動揺は隠しきれない。

「こんな完璧な世界ならダグザでも騙せたんだろうッスね」

「なら、何で貴方なんかに」

「俺だからッスよ」

「ヘリオスだから？」

「建物の燃え方ッスよ、阿修羅には分かんないと思うんスけど、インフェルノ【烈火】の火力は並の鉄でも簡単に溶けちゃうんスよね。でもあの建物、木の上に古くて乾燥してるのに燃えるのが遅かった、あんな燃え方するのは生きてる木だけッスよ、生きてる木は水が通ってるから燃えにくいんスよね」

「何でそんな無駄な事には気づくのよ？」

「太陽ってのは自然界の神様ッスよ、自然の事なら全部手に取るように分かるんすよね。」

それに全てを包み込む大きさ、その点阿修羅は太陽神なんて名ばかりでダメダメじゃないッスカ」

「太陽は全てを燃やす冷徹なものよ、それに——」

アスラは一閃と化してヘリオスとの間合いを取る、そう、それは紛れもなくベロシティ【光速】、巫女の力を使ったから成し得る事。

「私は戦闘神よ」

「阿修羅はやっぱり戦闘神なんスね、少しでも太陽神らしさがあればと思ったんスけど」

ヘリオスはアスラに向かって走り出す、しかしアスラは一閃となつてヘリオスの横を通り過ぎようとしたが……………

「今の阿修羅は戦いに溺れたただの悪魔ッスよ」

ヘリオスはその一閃となったアスラの腕を掴んで止めた、アスラは明らかに動揺している、ベロシティ【光速】が止められるなどあり得ない、がしかし、ヘリオスはいとも簡単に止めている。

「今の阿修羅の動きは分かりやすいんすよ、何を焦ってるのか知らないッスけど、何もかもが阿修羅らしくないッスよ」

「貴方に何が分かるって言うの!？」

アスラはヘリオスの手を振りほどくと、再び一閃となってヘリオスとの間合いを取った。

「ベロシティ【光速】」

しかし、ヘリオスはそれを追う、アスラが止まった時にはヘリオスは目の前にいた。

「何なのよ!？ 何で貴方なんかに読まれるの？」

「何も考えないで戦ってるからッスよ、いつもの阿修羅ならそんなイライラした表情を浮かべない」

「貴方がいけないのよ、私の全てを無駄にするから」

「全てを無駄にしたのは阿修羅じゃないッスか、俺とタナトスが必死に阿修羅を守ろうとしたのに、阿修羅は悪魔になっちゃったじゃないッスか、勝手に裏切ったクセに被害者を気取るのは辞めるッスよ」

ヘリオスがアスラに向けるキツイ口調、アスラの知らないヘリオスがそこにはいる。

アスラは絶望にすら近い感情でめまいがしてきた。

「ヘリオス、私を見捨てないで、分かるでしょ？ 私には貴方が必要なの」

「なら神に戻るんすよ、こんなの間違っ——」

「やはり愚かな妹だ」

ヘリオスを遮って空から髭切を振り上げたルシファーが降りて来た、ルシファーは迷わずヘリオスに髭切を振り下ろす、ヘリオスは受け太刀するとルシファーを睨んだ。

「ルシファー！何で貴方がココにいるの！？邪魔しないで！」

「愚かな妹よ、コイツは俺が殺す」

「何でお前がこんな所にいるんスカ？9対9だから誰かと戦ってるはずッスよ？」

ルシファーは高々と笑い始める、そう、アスラは気付いていた、ルシファーがココにいるという事は、神選10階の誰かが殺されたという事。

「ああ、彼女は弱かった、幼いながらに頑張ったのかもしれないが、俺の前では無力だ」

「お、幼いって、貴方もしかして……」

「アストライアと言ったかな？俺に傷付けたのは良いが、まだまだ力不足だ」

「あ、アストライアが死んだんスカ？」

「ああ、殺した」

「ルシファアアアアアアア！」

アスラは一瞬でルシファーとの距離を詰めると、ルシファーの首を撥ねた。

地面に落ちるルシファーの首、あまりにあっけない幕切れ、あのルシファーがほんの一瞬で死んでしまった、そう、2人はそう思っていた………

「ハハハハハ！愚かな妹よ、俺に刃を向けるとは実に愚かだ！」

首だけになって笑い喋るルシファー、2人が恐怖の目を向けるのよ
そにルシファーの体は頭を拾って切断面を合わせた、ほんの数秒で
接着された首と体。

「神や悪魔に不老不死とは無敵だな」

「化物ツスよ、こんなの倒せるんスカ？」

「俺は死なない、愚かな妹のせいだな」

それは絶望、そして敗北の提示、無敵に等しいルシファーを殺す術
が二人には見付からない。

嫌な笑い方をするルシファーを額に汗を溜めながら睨むアスラとヘ
リオス、初めて感じる勝ち目のない戦い、まさに終焉そのもの。

一層赤みをおびる、それはルシファーから吸い取った霊体をそのまま自分のものになっているから。

「燃え尽きろ！」

レーヴァテインは激しく燃え始める、辺り一帯を呑み込むような大きな炎と化し、ルシファーはその炎に吞まれ肌を焦がす。

「愚かだ、実に愚かだ」

ルシファーは髭切を振り上げた、そしてそのまま地面に向かって振り下ろす。

「エクスプロージョン【爆発】」

髭切はヘリオスの炎をも吸って凄まじい爆発を起こす、それは通常のとは比にならない程の力で2人を吹き飛ばす。

ルシファーの周りは深くえぐれその力の強大さを物語る、2人は何とか受け身を取るが火傷による体力の消耗は激しい。

「愚かな妹よ、俺に刃を向けた事を後悔しろ、貴様には俺に勝てる道は残っていない」

「それなら、一気に終らせるわよ」

アスラは夜叉丸を左手に持ち、右手で腕輪に触れた、そう、悪魔特有の得物の複数顕現、………しかし、何も起きない、本来ならば夜叉丸がもう一振り顕現されるはずなのだが、その気配は全くない。

「やはり愚かな妹だ」

ルシファアはアスラに近付くと左手を持ち上げ、アスラの目線にあわせる、アスラの目に映った腕輪は悪魔のものではなく、神のもの。

「な、何で戻ってるの？」

「俺を殺したからだよ」

「貴方は死んでない！だってこうやって生きてるじゃない？」

「だが貴様は神に戻っている、それは何故だ？」

アスラもとい阿修羅は必死に考える、ヘリオスはその空気に入れずにいるが、阿修羅から若干の笑みが溢れた。

阿修羅は手首だけで夜叉丸を右手に投げると、そのままルシファアの首を斬り落とした。

「愚かな妹だ、何度やっても同じ事」

「はあ、貴方勘違いしてるんじゃない？不老不死で傷が治るわけないじゃない、悪魔の巫女の血ってただの馬鹿みたいな回復能力じゃないの？生命をも回復させるようなゴキブリ以上のしぶとさ。」

つまり、貴方は死ぬ、無敵じゃないって事よ」

「ハハハハ！それは面白い仮説だ、しかし――」

ルシファアは首を拾って体に接着した。

「プロテクティブ【防護】」

「それ、完璧じゃないんスよね？」

ヘリオスも笑みになっている、阿修羅とヘリオス、それは自信に満ち溢れた神選10階の証。

「ダグザが言ってたツスよ、神技にも許容量があるって、阿修羅のが良い例ツスよ、どんな神技にも使用時間、使用範囲、耐久度は決

まってる、つまり、プロテクティブ【防護】もいつかは破れるって事ッスよ！」

「そうと分かれば私達2人相手はキツイんじゃない？」

「俺をナメるのもいい加減にしろ、貴様らが思っているほどこのルシファーは脆くはない、そんな事が分かったところで貴様らに勝ち目はないのだからな」

ヘリオスと阿修羅は走り出した、阿修羅は一瞬でルシファーとの間を詰めると、腹に夜叉丸を叩き込む、当然の如く夜叉丸の刃は全くルシファーには通らない。

ヘリオスは首元に斜めに斬り下ろすが例の如くルシファーに傷は付かない。

「これならどうッスか!？」

レーヴァテインが激しく燃えだす、渦を巻くように3人を包み込む、流石の阿修羅でも熱いと感じるくらいの強力な炎。

阿修羅は片足を上げてルシファーの顔を蹴ろうとしたが、ルシファーに足を掴まれてしまう。

「受け身は性に合わない」

ルシファーは足を持ったまま阿修羅を投げ飛ばした、そしてヘリオスの首を掴んで持ち上げる、手を離すのと同時に蹴り飛ばした。飛ばされた2人に挟まれるように立つルシファー。

「コレで分かったか？勝ち目がない事に」

「俺達はまだまだピンピンしてるッスよ？」

「私達の事だってナメないでほしいわね」

再び挟み打ちで斬りかかる、全くルシファーには刃が通らないが、二人はひたすら斬り続ける。

「ああ、何とも愚かだ、勝てぬとわかっていても必死にあがき続ける、絶望、それを認めろ」

ルシファーは阿修羅とヘリオスの得物、夜叉丸とレーヴァテインを握った、ビクともしない得物、ルシファーは不気味な妖しい笑みを浮かべる、そして握っているから手からは血が流れ出した。

「ヘリオスチャンスよ！」

「そうッスね！プロテクティブ【防護】が解けたッスよ」

「甘いな」

ルシファーの夜叉丸とレーヴァテインを握る手に力が入った。

「コラプス【崩壊】」

二人の得物が砕け散った、阿修羅は空かさず腕輪に触れようとしたが、ルシファーに蹴り飛ばされてしまった。

そしてルシファーはヘリオスの左腕を掴むと持ち上げる、髭切を顕現すると二人は睨み合う。

「2度死ぬるなど光栄と思え、なかなか出来ない体験だ」

「ヘリオス！」

「大丈夫ッスよ」

ルシファーの髭切はヘリオスの腹を貫いた、ルシファーが手を放すと、ヘリオスは淡く笑いながら地面に倒れこんだ。

「いやああああああ！」

阿修羅はルシファーを押し退けてヘリオスに近寄った、ルシファーは髭切を消すと更に血が流れ出す。

「ヘリオス！お願い、…………死なないで」

「大、丈夫ッスよ、まだ、ま、だ、死ねな…………スよ」

ヘリオスの腹から流れ出す血を必死に手で抑えようとする、しかし無情にも血は止まるところを知らず阿修羅の手を真っ赤にした。

「嘘、嘘よ、もう死なないで、嫌だよ」

「よゆ、う、っす、…………しな、ない、……………っす……………」

……………」

「ヘリオス？ねえ、ヘリオス！」

「……………」

阿修羅はヘリオスを抱き締めて泣き叫ぶ、それを見て高々と笑うルシファー。

阿修羅は手で顔を覆うとヘリオスの血で真っ赤に染まった手が視界に入る。

「……………ち？」

阿修羅は何かを思いついたかのように夜叉丸を顕現する、そして自分の手首に傷口を作った。

「愚かな妹だ、もう貴様は悪魔ではない、血も意味を成さないんだよ」

阿修羅は無言で傷口から滴り落ちる血をヘリオスの口の中に入れた、しかしそれは喉を通らずに口から流れ出す。

阿修羅は頬を真っ赤にすると舌打ちをした、傷口に吸い付き口の中に自分の血を含む、そして、ヘリオスの唇と阿修羅の唇を重ねた、阿修羅は直接ヘリオスに血を流し込んだ。

「どのような事をしてもしそいつは助からない」

阿修羅は口角に付いた血を親指で拭い払うと、真っ赤な顔でルシファーを睨んだ。

「やってみなきゃ分からないじゃない」

「ほう、女らしい顔も出来るんだな」

「う、うるさいわね」

阿修羅は夜叉丸を握った途端、女の顔から神選10階の顔に変わった。

阿修羅は走り出すと片手で夜叉丸を握り始める、そして、ルシファーを下から蹴り上げた。

「——————クッ！」

「神技、解けてるわよ」

阿修羅はもう一度、更に高くルシファーを蹴り上げると同時にルシファーの心臓を夜叉丸で貫いた。

「無駄な事を」

「ヘリオスが諦めなかった、だから私も諦めない！」

素早く夜叉丸を抜くと、未だ空中にいるルシファーの首を撥ねた。

ゴロリと転がるルシファアの首と体、例の如くルシファアの体は起き上がり、首を広い上げると体にくっつけた。

「動く暇を与えなきゃ良いのよね」

阿修羅は走り出して夜叉丸を振り上げた。

「プロテクティブ【防護】」

夜叉丸が触れる前に無敵状態になるルシファア、阿修羅は離れようとしたが、それよりも早くルシファアが阿修羅を蹴り飛ばす。

そして今度はルシファアが追い討ちをかけるように走り出す、阿修羅が体制を立て直した時、ルシファアは既に髭切を突き出していた。阿修羅は夜叉丸で受けるが、その力の前に歯が立たずに夜叉丸を放してしまった。

無防備になる阿修羅、既にルシファアは切り返している、今から腕輪に触れて夜叉丸で防ごうとしても間に合わない。

「ベロシティ【光速】！」

目を瞑っていた阿修羅は聞き慣れた声を聞いてゆつくりと目を開ける、そこには目一杯に穴の空いたダウンベストを着た、そう………

「ヘリオス！」

「待たせて悪かったッスね」

「何故貴様が生きている？腹の風穴は………」

ヘリオスは笑顔で無傷の腹に触れる、相変わらず浮き上がるくらいの筋肉の黒い腹。

「何か治ってたんスよね？」

「しかし貴様が飲んだのは神の血だ！悪魔の血じゃなきゃ生き返らないはずだぞ！？」

「いやいや、勝手に殺さないでほしいッスね、俺は死んでないッスよ」

ルシファーは一旦間合いを取ってヘリオスを牽制する。

「まさか、神の血は全ての傷を治すのか？」

「だとしたら何よ？」

「俺とは違うという事だ、……………次は確実に殺す」

「あは、はは！ハハハハハハハハハハ！」

ヘリオスは高々と笑う、二人はその異様な笑い方にすごんでしまった。

ヘリオスはニヤリと笑うとレーヴァテインの刃を自分に向けた、上目使いでルシファーを睨む。

「お前に殺されるくらいなら……………」

「ヘリオスやめて！」

ヘリオスは笑ったまま自分の体をレーヴァテインで切り裂いた。

41..2人の太陽神

Unknown

ヘリオスはニヤリと笑いながら自分の体を切り裂いた、ガクリと落ち込むが、寸前で踏ん張り上目使いでルシファーを睨む。

「シンクロ【同調】！」

その瞬間ヘリオスの体は傷口から出た炎に包まれた、凄まじい炎は阿修羅さえも息苦しさを感じる熱量。

炎は渦を巻き上げ辺りに風を起こす、炎は真紅から白に変わり、その熱の強大さを物語っている。

「な、何なのよコレ？」

「まさかシンクロ【同調】だと？だが太陽に近付き過ぎるなど物理的に不可能なはず」

ヘリオスの炎は爆発するように全てを呑み込み燃え上がる、あまりの威力でルシファーが一步退いた瞬間、炎の塊がルシファーを殴り飛ばした。

ルシファーは派手に転がると、辺りの炎が消え、炎の塊が見えた。人のような形をしているが手足を地面についている、全身が炎、そう、自ら燃える太陽のようになっているヘリオス、これがヘリオスのシンクロ【同調】。

「何故貴様は太陽になっている！？」

「それは阿修羅のお陰ツスよ」

様々な場所から聞こえるヘリオスの声、美しいとさえ思えるような和音を奏でている。

「二つの太陽が結び付いたんスから、欠けてたモノを取り戻したんスよ」

阿修羅の神徳は戦闘神、しかし阿修羅を太陽神と崇めるような所もある、つまり、太陽に近付き過ぎた、それは阿修羅の唇に触れた事を意味する。

阿修羅は顔を真っ赤にしながらヘリオスを睨むというよりは見つめた、ヘリオスも阿修羅の方を向いているが、口が開くのみで目や鼻は炎に包まれていて表情は判断出来ない、しかし阿修羅には分かる、ヘリオスの柔らかい表情は何も変わっていない事に。

ヘリオスは阿修羅を見ていたかと思う一瞬でその場から消える、凄まじい轟音、それは炎が乱れ、唸り、大気を揺らす音。

阿修羅とルシファーは完全に見失ってしまう、それはベロシティ【光速】をも凌駕するスピード。

ヘリオスは一瞬、刹那でルシファーの背後を取る、そしてほんの一秒するとヘリオスを通った跡は凄まじい炎を巻き上げる。

それに気を取られていたルシファーはヘリオスに蹴り上げられ宙に浮く、ヘリオスを中心に登る火柱、ルシファーは完全に呑み込まれた。

火柱が晴れるとそこには凄まじい速さで攻防を繰り返すルシファーとヘリオス、手足を使うヘリオスに引けを取らないルシファーのスピード、阿修羅はあまりの速さに息を飲んだ。

「あり得ない、何よあの二人の速さ、化物じゃない」

「「化物じゃないッスよ!」」

ヘリオスは戦いの最中というのに阿修羅に怒った、それにより一瞬生まれる隙、それをルシファーが見逃すはずがなくヘリオスは地面に叩き付けられてしまった、何とか防いだため傷はないが、体制が不十分なのに加え髭切を振り上げたルシファー。

「「こりゃヤバいッスよ!」」

ヘリオスは焦っていたが阿修羅が一瞬でルシファーを蹴り飛ばし、ヘリオスから遠ざけた。

ルシファーは着地するがすぐにヘリオスの追撃が待っていた、ヘリ

オスを髭切で弾き飛ばすが直ぐ様阿修羅が斬りかかる、阿修羅は蹴り飛ばし遠ざけるが間髪入れずに放たれる漆黒の刃。

「ちょこまかと！」

反対側からはヘリオスの火の玉、ルシファーはバックステップで二つの攻撃を相殺すると阿修羅の方に向かった。

今のヘリオスは強すぎる、恐らくルシファーと同等、否、それ以上の強さ、そして阿修羅は天竜の巫女、阿修羅から倒すのが得策と考えた結果だ。

「「そうはさせないッスよ！」」

「そんなの計算済みだ」

ルシファーは既に髭切を振り下ろしてした、それは阿修羅に届かない、完璧にヘリオスを狙ったとは思えない太刀筋だ。

「まずは一人」

ヘリオスの体はルシファーに両断され……………揺らぎ、消えた。

「なっ!？」

そしてルシファーは背後にいたヘリオスに体当たりを受けて派手に転がる。

それはヘリオスの炎による熱で光の屈折をねじ曲げた事による錯覚。

「「まだまだ甘いッスよ! 2度も同じ攻撃を喰らうのは馬鹿のやる事だ」」

「はあ、それ、ダグザが貴方に手合わせで言ったセリフでしょ？」

「「いやあ、一度言ってみたかったんスよね」」

おどけているヘリオスを気にせずルシファーは大きな間合いを一瞬で詰めて斬り掛る、しかしヘリオスは再び揺らいで消える。

「立て続けに喰らうとも思っているのか？」

ルシファーは背後にいるヘリオスに斬り掛るがそのヘリオスも揺らいで消える。

「3度とも同じ攻撃だと思うな、これもダグザの言ったセリフスよ」

ヘリオスはルシファーの頭上にいる、そして口から凄まじい轟音と共に凄まじい熱の炎を照射する、ルシファーはギリギリで避けるが、炎は広がりルシファーを呑み込んだ。

ルシファーにダメージはないがココまで追い込まれた事によりプライドと勝利への希望が薄れていった、その表情の変化を見逃さなかったのが阿修羅。

「ルシファー、貴方は何のタメに力を求めたの？」

脈絡のない問いかけにヘリオスとルシファーは止まってしまう。

「貴方はそれだけの力を持っておきながら何でそれ以上に力を求めたの？」

「…………貴様には関係ない」

「あら？ 兄が落ちぶれた理由も聞いちゃいけないの？」

ニヤリと笑ってルシファアを見る、その笑顔は不気味で妖艶。

「貴様に分かるか？全てを知っていて、全てを知らない悲しみが」
「何意味分らない事言ってるの？」

「俺は貴様と違って全てを知っていた、母の阿修羅あすらが当時のルシファアを倒すのと同時に力尽きたのも、父の毘沙門天が助けられるであろう母を見捨てて俺を助けたのも、妹が何も知らずに平和な表の世界で呑気に生きているのも、全て知っていた。

そして、その全てに手が届かなかった、俺は生まれた時から孤独が約束された人生だったんだ、人の温もりを知らず、戦いという裏の世界だけを唯一の居場所としてきた、この生まれた時から生きる道が一つしかない絶望が、貴様には分かるというのか！？」

阿修羅はその気迫と絶望感、悲壮感にたじろいでしまう、“心からの悪は絶対にいない”、それが沙羯羅の信念だったのを思い出す。

「でもそれなら何で私をこっちの世界に引きずり込んで、力を得ようとしたの！？」

「復讐のタメだ」

「復讐？」

「そう、復讐だ————」

ルシファアは大きく目を見開き阿修羅を睨む、それは憎悪に満ち、殺気や狂気、悲哀に満ちた恐怖そのもののような目だった。

「俺をこんな孤独にしたあの毘沙門天へのな！母を見捨てずに俺を死なせていれば母は死なず、俺は孤独を知らず、貴様は本物の家族と暮らせたんだ！

それなのに奴はその大きな可能性を捨てて絶望の未来を選んだ！愚かな父への愚かな選択を分からせるために俺は奴を殺す、俺を生か

した事を後悔させてやるのさ！」

阿修羅はいつの間にか涙を流しながらルシファーに近付いていた、ゆっくりと、その一步一步を確かめるように。

そしてルシファーに手を伸ばすとルシファーの頬を両手で挟む、その目は優しく、敵対はゼロ。

「もう貴方は苦しまなくていい、復讐なんてやめよう？復讐の先には何もない」

「貴様は恨まないのか？俺がいたせいであるはずの全てを失ってしまったんだぞ？」

「恨めない、それは運命だし、過去を嘆いても何も変わらない」

「そうか————」

ルシファーの悲痛な表情が再び妖しい笑みになる、それに二人が氣付いた時にはもう遅かった。

「やはり愚かな妹だ」

阿修羅はゆっくりと視線を下ろす、そして腹部を見ると髭切が刺さり、阿修羅を完全に貫いている。

ヘリオスの阿修羅を必死に呼ぶ声、ルシファーの不気味な高い笑い方、絶望に満ち溢れた表情でルシファーから目を離そうとしない阿修羅。

阿修羅が倒れ込む前にヘリオスは阿修羅を抱えてルシファーとの間合いを取る、ヘリオスは阿修羅をそっと地面に寝かせるとルシファーに顔を向ける、口だけしか分からないが、明らかな憎悪が読み取れる。

「「消えろ」」

ヘリオスは口を開くと周りのエネルギーが集まるように見える、ルシファーはその大きな隙を利用して逃げようとするが、何故か逃げられない、むしろヘリオスに引き寄せられている。

「クソ、……………クソ、クソがあ！」

ルシファーに気にせずヘリオスの体は凄まじい炎をあげる、そしてその業火のエネルギー全て口に集約された。

そして、それは凄まじい熱量と勢い、轟音と共にルシファーを呑み込んだ。

ヘリオスの体は燃え上がるがそれよりも先にエネルギーを口に吸い取られてしまう、その力は全てを焼き付くし跡形もなく蒸発させてしまう、しかしルシファーにはプロテクティブ【防護】がある、それを打ち崩せばヘリオスの勝利、逆に持ち堪えてヘリオスがエネルギーを使いければルシファーの勝ち。

ヘリオスの業火は凄まじい熱量でルシファーを呑み込んでいるが、いっこうに倒れる気配のないルシファー。

かなりの時間が過ぎた、否、実際にはものの数分だがこの凄まじい攻撃を数分も続けているのが奇跡に近い、ヘリオスの体も徐々に炎が薄れ、元のヘリオスに戻りつつある。

バリン！

何かが割れる音、そして……………

「ぐうわあああああああああああああ！」

それはルシファアの苦痛に歪んだ叫び、悲鳴、そう、プロテクティブ【防護】が崩れ去り、ルシファアが豪華に晒されている。

このままヘリオスが照射を続けていけばヘリオスの勝利が約束されていた、しかし限界が来ていたのはルシファアのプロテクティブ【防護】だけではなかった、ヘリオスのシンクロ【同調】も限界が来ていた。

ヘリオスの体の炎が完全に消えて元のヘリオスに戻る、それと同時にうつ伏せに倒れ込み、動かなくなってしまった、エネルギーを大量に使い過ぎた結果だ。

倒れるヘリオス、そして動かない阿修羅、この瞬間ルシファアの完全勝利が約束された。

そのルシファアも限界、体が火傷だらけで、もう天竜の巫女の血による再生能力も底を尽きた。

ルシファアは髭切を持ってなんとかヘリオスの前までたどり着き、見下す。

「これで、終わりだ、俺の、勝ちだな」

ルシファアは髭切の切っ先を下に向ける、その真下にはヘリオスの心臓がある。

「……………死ね」

「……………やめて」

ルシファアの足首に圧迫感、その先には阿修羅がいる、ルシファアの足首を掴んでいるのは阿修羅。

「もう、ひとを、ころさない、で」

「死に損ないが、貴様から殺してやる」

「おね、がい、……………にいい、さん」

ルシファアの手が止まる、初めて感じるこの感覚、不思議な感覚がルシファアの心を支配する、それによって髭切を振り下ろせないルシファア。

「もう、やめ、……………よう。ね？……………に……………いい、さ……………」

阿修羅はそのまま気を失った、ルシファアはただ立ち尽くすのみ、ただ、地面に倒れている阿修羅とヘリオスを眺めている。

「愚かだ、実に愚かだ」

ルシファアは髭切をしまった。

41..2人の太陽神（後書き）

遂に阿修羅達の戦いが終わりました、ラスト2話で最終回です。

次回作もしっかりと続きます、次回作は今までに出た生きてるキャラクターを総動員したいと思っています、真面目な話はおいという………みたいな感じです。

42：帰還

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

腕を組んでひたすら黒い穴が空いていた所を見る元帥、神選10階の面々が入って行ってからかなりの時間が過ぎた。

前のホーリナーラグナロクを体験している元帥は全滅も視野に入れている、それほど悪魔達は強力だからだ。

元帥は悪魔達が他のやり方でバチカンに攻めてくると思っていたが、怖いぐらいの静けさ、まるで、興味があるのはホーリナーだけと言わんばかりの静けさだ。

更に待っていると黒い穴が空く、その瞬間元帥と共に待機していた医療班の間にも緊張が走る。

ゆっくり、ゆっくりと得物のルドラシスを杖にしながら出て来たのはククルカンだった。

バチカンの地を踏み、自分が一番だと知ると、笑顔で元帥にVサインを送る。

「やったやった、うち一番」

「医療班、すぐにククルカンを治療室に————」

「待て待て、うちは皆を待つよ、ユピテルもまだだしね」

「そう？じゃあククルカンに応急処置してあげてよ」

すぐにククルカンに集まる医療班は、背中の切傷は大きいが、致命傷には到らない、だが体力をかなり消耗しているのは確かだ。

「相手は誰だったの？」

「あの超超ムカつく増殖女だよ」

「アスタロトか……………、殺したの？」

ククルカンは苦虫を噛み潰したような顔をして頷いた、人を殺して平気なわけがない、気分が悪いのは確かだ。

元帥がククルカンから報告を受けていると、新たな黒い穴が空いた、再び走る極度の緊張感、ククルカンはユピテルの名前を心の中で唱え続ける。

しかし、待てども待てども誰も出てこない、辺りに嫌な空気が立ち込める。

「ソルジャー達、お仕事だよ、あの中を見てきてくれない？」

一班が素早く穴の中へと入って行った、更に高まる緊張感、そして徐々に強まるホーリナーの死。

すぐに小隊長が出てきた、その顔は青ざめ、緊迫感が伝わる。

「げ、元帥！た、た、タナトス様が倒れています！」

「医療班！並びに救護班！今すぐにタナトスを治療室に連れて行って！」

極限まで高まった緊張感、あの“死神”ですら瀕死の状態、そこで

初めて実感するこの戦いの酷さ。

「ねえねえ、元帥、タナトスは大丈夫なの？」

「さあね、僕にもそれは分からないよ、でも、タナトスの常人離れした生命力なら……、とか思っちゃうんだよね？」

「やだやだ、タナトスあんな奴だけど、うちの仲間だもん、死んじゃ嫌だよ」

「今は信じてあげな」

運ばれていくタナトス、腹には穴が空いていて重体というのは一目瞭然、ソルジャー達はタナトスが死んだと思っている者もしばしば。

そんな緊張感の中、新たな穴が空く、そしてそこからは白いローブをはおった目付きのキツイ少年が出てきたが。

「痛い痛い痛い！」

「もう、うるさいなあ」

元帥とククルカンの頭にはクエスチョンマークが浮かんでいる、あの香気さ、そして見知らぬ少年、別の少年の声。

黒い穴からシヴァが飛び出す、そこには小さな少年、リバイアサンがくっついていて、元帥は写真を見ていたのですぐにリバイアサンだと判断出来た、その後が続いてシヴァを風船のように持ち、ボロボロの白いローブを着た少年、そう、モリガンが出てきた。

シヴァとローブ、そこでやっと二人の思考はモリガンという答えに行き着く。

「もしかして、モリガンかな？」

「そうだよ、それしかないだろう？」

「あり得ないあり得ない！モリガンがこんな可愛い男の子なわけないもん！」

「それ、凄い失礼だよ」

モリガンは明らかな不満を巻き散らす。

「それで、何でリバイアサンが？」

「ああコレ？」

「コレじゃないよお！早く下ろせて！」

「うるさいなあ、コレは神になる見込みがあるから連れて来た、ダグザなら何とか出来るんじゃないかな？とね」

「まあ良いや、リバイアサン、後で色々話を聞かしてもらってから」

「痛い事するなよ？」

「したらゴメンね」

嫌だとギャーギャー騒ぐリバイアサン、モリガンは顔をしかめながら耳を塞いだ。

「本当にうるさいなあ」

モリガンはシヴァをしまった、それにより地面に落ちるリバイアサン。

「痛いなあ、もっと優しくしてよお」

モリガンはムスツとした顔でその場に座る、リバイアサンはギャーギャー騒いでモリガンの不機嫌に拍車をかけている。

暫くするとまた嫌な空気が流れる、その空気、もうそれが何の合図

かは言わずとも分かる。

宙に黒い穴が空く、今回は誰が帰って来るか、もしくはタナトスのように瀕死の状態か、それは定かではない。

アルテミスを抱えながら出てきたのはダグザだった、ククルカンの顔が明るくなるが、後ろからはまだ黒いローブを着ている祝融が来た。

「医療班、アルテミスを連れて行け」

「アタイは大丈夫だよ、それより阿修羅とヘリオスは？」

全員が顔を伏せた、その緊迫した空気を薙払うようにリバイアサン。リバイアサンは祝融の周り、主に左腕にあるディアンギットの腕輪を見回す。

「ずるい！何で波旬だけ神に戻ってるの！？」

その瞬間元帥とモリガンの表情が変わった、そう、ダグザは神と悪魔の謎をまた一つ解決したからだ。

「うるさいネ、お前黙るヨ」

「相変わらず酷い事言うなあ、僕だって傷付くんだよ」

「それよりダグザ、どうやってそいつを神に戻したんだい？コレも戻してやってくれよ」

ダグザはリバイアサンを見る、リバイアサンは期待に満ち溢れた目でダグザを見る、ダグザはため息と共にリバイアサンを見据えた。

「神が神を殺せば悪魔になる、逆もしかり」

「そんな簡単な事だったんだあ」

「ふっ、神も悪魔も単純だね」

「何だよお！僕にも分かるように説明しろ」

モリガンは軽くりバイアサンを睨むように顔を傾けた、目で訴えている、

「黙れ」と。

「君みたいな馬鹿にはこう言えば分かるかな？……さっきまで仲間だった奴を殺すんだよ」

モリガンのそのドスの効いた声にリバイアサンは言葉を吞んでしまった、そんな事が簡単に出来るとは思えない、まだ幼いリバイアサンには酷すぎる。

ダグザと元帥が話し合っている、アルテミスは阿修羅が帰るのを待つとココで処置を受けている。

そして黒い穴が開く、未だに慣れないこの緊張感、そして足が覗くそこには黒いローブが、ダグザとモリガンは瞬時に腕輪に触れて得物を構えた。

出てきたのはルシファー、しかしおかしい、ルシファーは両脇にロボロになったヘリオスと阿修羅を抱えている。

「うーん、何かややこしいなあ」

「確かにね」

「阿修羅が神に戻っている、そしてルシファーがいるのに二人を連れて来た」

「コイツと妹の手当を頼む」

全員が驚いた表情をした。

「また面白い仮説だ、貴様と阿修羅が兄妹だと？」

「その話は後だ、早くしろ」

「それはさせませんよ」

ルシファアの後ろにはメルポメネがいる、そして棒状になったラフスキンは阿修羅に突き付けられている、黒い穴とは違う、辺りが一瞬で凍りつく。

「それに貴方、よくまあ顔を出せましたね」

「それより貴様、堕ちたか、誰を殺した？」

ダグザの問い、それにより全員が左腕を見る、そこには神の腕輪ではなく悪魔の腕輪がある、そして誰よりもククルカンの表情が曇った。

悪魔になるには神を殺す事、そして今帰って来てないのはユピテルとアストライア。

「生き残りはコレで全てか」

「何で何で！？どっちか生きてるかもしれないじゃん！」

「やっぱり馬鹿だね、ルシファアがいる時点で誰か殺されてるんだよ、じゃなきゃ阿修羅とヘリオスの戦いを邪魔出来ないだろ？」

ククルカンはグラツと揺れるとそのまま倒れた。

「あああ、誰かククルカンちゃんを運んであげてえ」

「二人して弱いですね」

「貴様がユピテルを殺したのか？」

「はい、私に刃を向けたので返したまでです。」

悪魔を助けようとしたんですよ？私は間違っていないません」

ダグザとモリガンはクスリと笑った、そう、そうになるとダグザとモリガンも間違っている事になっている。

「モリガン、俺達は間違っているか？」

「いや、使えるモノは使わないとね、むしろ仲間を殺したのに正当性を主張する方が間違ってるんじゃないのかい？」

メルポメネの笑顔が崩れる、変わったのは腕輪だけじゃない、神選10階のメルポメネに対する態度も変わっている、最悪の場合、敵。

「でもココにいるルシファーと阿修羅、コレは敵です！」

「いやあ、それがルシファーには敵意がないし阿修羅ちゃんは何故だか神に戻ってるんだよね、敵意が無いのは敵じゃないでしょ？」

元帥の一言でメルポメネの顔が引き吊った、そう、もうココに自分の居場所はない、自分の理解者であるアストライアもういない。メルポメネはいつの間にかラフスキンを振り上げていた、その先には阿修羅がいる、全員の顔が焦りの表情に変わる。

「私は正義です！私の刃は間違っていない」

メルポメネの振り下ろしたラフスキンは宙を舞う、自分の肘から先を残したまま。

「えっ？」

「妹に手を出すな、誰であろうと容赦はしない」

そこにはいつの間にか髭切を振っていたルシファーがいる、ルシファーは瞬時にラフスキンを弾くのは危険と判断し、メルポメネの腕を斬り落とした。

「まだ、まだ終らせません！」

残った左手をラフスキンの手袋のみで阿修羅の心臓を貫こうとした。

「分からないのか、俺の言っている事が」

次に飛んだのはメルポメネの首だった、ポーカーフェイスのルシファーが怒りの表情を浮かべる。

そして徐々に変わる腕輪、それはルシファーが帝釈天になった証、神に戻った証。

「はは、俺様がいない間にゴタゴタしやがって」

「タナトス様！まだ安静にしててください！」

医療班を振り払いながら現れたタナトス、倒れているヘリオスと阿修羅を見て悲しい表情を浮かべる。

「俺様よりも、この二人をどうにかしろ」

「しかし——」

「早くしろ」

“死神”の前では医者と患者の法則は完全に無視された。

阿修羅とヘリオスは直ぐ様運ばれ、メルポメネの遺体の処理も迅速に行われた。

「ルシファーまでいるとは、何が起きてるのか理解出来ねえじゃねえか」

「ルシファーではない、護法神の帝釈天だ」

「悪い悪い、じゃあ帝釈天さんよお、阿修羅をよくも傷付けてくれ

たなあ」

タナトスのスケイルがいつの間にかルシファアの首を捉えていた、しかしルシファアの髭切もタナトスの首元に突き付けられている。

「貴様にとやかく言われる筋合いはない」

「ああ？ テメエ、今ココで殺り合ってもいいんだぞ？」

「死神も弱っていたら意味がない、死ぬ神か？」

「なら殺りあ———」

「終了だよ！」

その瞬間誰も確認出来ないようなスピードで二人は紐で縛られた、二人は背中合わせて縛られている、その紐を持っているのは金色の長い髪の毛、そして真っ白なライダーズジャケットの襟元に小さく詩集、下はレザーのスキニーを履きこなしした寡黙な男性。

「テメエ誰だ！？」

「このような紐」

ルシファアは落とした髭切を腕輪に触れずに顕現する、そして紐にあてがうが一向に切れる気配はない。

「黙、戦争終了、不用意戦闘禁止」

ライダーズの男性は目の威圧感だけでタナトス達を黙らせる程の気迫、その瞳の奥にある覚悟は並々ならぬものがある。

「ランギが得物を使うのも久しぶりに見たなあ」

「はははは！ 元気なのは良いことじゃねえか！」

「毘沙門天、笑止、無駄排除、死者最低限」

「ランギだと？」

ダグザが反応する、元帥といつの間にか来ていた毘沙門天、そしてランギと呼ばれた男性。

「まさかあのランギだと？」

「明答、我天空神ランギ也」

「過去最強と呼び声が高い神選10階が集まるなんてね、しかも阿修羅のママの阿修羅あすらを抜いた4強、ふふ、これじゃあいくらタナトスとルシファーでも勝てないよ」

「帝釈天だ」

当時のホーリナーラグナロクはココにいる3人に阿修羅あすらを入れた4人が殆ど倒したという、しかも今いるランギは対大量戦術に関しては最強と言われている、神選10階クラスの悪魔を一人で5人倒したのでも有名である。

「貴様らが何故ここにいる？」

「問題解決、帝釈天聴取」

「そういう事か、そうなるぞ“拷問のミトラ”の出番か？」

「今は元帥だよ、それに古い事を良く知ってるんだね」

「俺が何も知らないとは思ったのか？拷問のミトラ、鉄壁の毘沙門天、量殺のランギ、貴様らの事を潰すタメに俺はココまで生きてきた」

「俺もお前の事は良く知ってるぜ！鼻垂れの帝釈天、いや、マザコンの帝釈天だったか！？」

「コラプス【崩壊】」

ランギの紐を壊して立ち上がる帝釈天、そして髭切を抜いた、ランギが再び取り抑えようとするが毘沙門天がそれを制止する。

「人生初の親子喧嘩と行こうじゃねえか！」

「アレスト【捕縛】」

毘沙門天と帝釈天は硬直して倒れる、二人とも騒ぐだけで全く動けない、それをしたのは元帥。

「もう、いざこざは辞めてよね、ランギ、二人を持って行ってえ」
「承知」

二人を紐で担ぐとランギと元帥は党の中へ入って行った、ダグザ、タナトス、モリガンは動けずにいた、元帥の見えない強さに気付いたからだ。

「あり得ないね、まさかそんな事があるなんて」
「ダグザ、アレはマジか？」

「ああ、恐らく最強だったのは阿修羅あすらなんかじゃない、本当に最強なのはあの元帥だ、奴は止めに入ろうとした俺達に腕輪に触らせる事すらさせなかった、あの距離から、しかも恐らく超高速で得物を出し入れして俺達の手を一瞬で弾いた」

3人の手の甲は打ち身のようにになっている、3人と元帥の距離はそれぞれ約5m、しかも3人は別々の位置にいる、それ全で一瞬で攻撃した。

その得物の実体も、動きも全て悟られずにこの3人に手を出すのなど普通なら出来ない、しかしあの威圧感と殺気は元帥のもの、それが最強でないのなら、恐らく他も化物クラスだ。

42：帰還（後書き）

あと一話で最終回です。

次回作に向けて感想等を聞かせてもらえるとありがたいです。

次回作は今回出てきた元帥や元老の2人、その3人を少し絡めていこうと思っています。

Fin..事後……………

V a t i c a n V C S O h e a d q u a r t e r s

第二次ホーリナーラグナロクから3日が過ぎた、アストライアとユピテルは戦死という事で丁重に葬儀が行われた、メルポメネは反逆と離反の罪で悪魔と同じ処理を受けた。

そしてリバイアサンは神に戻った、そう、同じ悪魔を殺して……………

ダグザとモリガン、そしてリバイアサンは情報収集の結果アスモデウスだけ死んでいないのを突き止めた。

そして今3人がいるのはコロセウム、そこで倒れているのはアスモデウス、喚きながらリバイアサンに助けを求めるが、ダグザとモリ

ガンを見て怒りに表情を歪めた。

「おい！テメエ！ルシファー様を裏切るのかよ！？親父とお袋を生き返らせるんじゃないのかよ！？」

「アスモデウス、もう終わったんだよ？ルシファー様も神に戻っちゃった、だから終わり」

「貴様が戻って来るといふなら俺達は受け入れよう、どうする？」

「うるせえ！早く体をどうかしやがれ！ユピテルを呼んで来い！」

「やっぱり馬鹿だね、せっかくのチャンスを無駄にするなんて」

ダグザとモリガンはリバイアサンを見た、リバイアサンは悲しい表情を浮かべながら腕輪に触れる、得物はナイフ、名はティルヴィング。

「僕、アスモデウスの事好きだったんだよ」

「ならその二人を殺せよ？なっ？」

「僕は償わなきゃいけない、いけない事をしたから償わなきゃ」

「所詮テメエもその程度かよ！？」

リバイアサン目を瞑り、涙を流しながらティルヴィングを投げた、何も見ていないにも関わらず的確に額を捉え、一発でアスモデウスを殺した、それに準じてリバイアサン腕輪が神に戻る。

「人を殺す痛み、分かったかい？海神ニヨルド」

辺りはガラスが割れるように砕け散り、真っ白な世界にぽっかりと黒い穴が開く、そこから処理班が現れアスモデウスの遺体を運んで行った。

今回の事件に関わった神選10階、そして元悪魔は元帥と元老の会議室に呼ばれていた、いるのはヘリオス、アルテミス、モリガン、タナトス、ダグザ、阿修羅、帝釈天、祝融、ニヨルド、ククルカンはショックで未だに心を閉ざしている。

今回呼ばれたのは阿修羅、そして元悪魔である帝釈天、ニヨルド、祝融の処罰等。

元帥の両隣にはランギと毘沙門天、重罪であろう阿修羅と帝釈天、ヘリオスとタナトスは膝を付いて頭を下げながら唇を噛んでいた、この会議にかけられればかなりの確率で死罪というのは暗黙の了解。

「ココにいる阿修羅ちゃん、帝釈天、ニヨルド、祝融ちゃん、計四名の処罰を発表します」

「離反、反逆、殺戮、各種大罪、黙殺不能」

「まあテメエらがやった事を考えれば――――」

「ちよつと良いか？」

帝釈天が立ち上がって一步前に出て再び膝まづく、平穩を装っているが全員が同様しているのは確かだ。

「俺はどうなってもいい、全て俺がやった事だ、だからコイツらは厳罰してやってくれ」

それを見てクスリとダグザが笑った、立ち上がりポケットに手を入れながら帝釈天の隣に立つ。

「祝融は俺のものだ、手駒を失うのは手痛い、俺からも頼みたい」
「僕も納得いかないね」

仮面をつけなくなったモリガンも体勢を崩した、足を放り出すと見下すように元帥達を見る。

「ニヨルドは騙されていたんだよ、そりや確かにした事は悪いけど純粹な思いがあったんだ、それを潰すのがお固いお偉いさんなのかい？」

「俺からも頼むっすよ！阿修羅がいなきゃ俺は死んでたんスよ？」
「それに悔しいが帝釈天は確かに強い、それを神に戻せたのは儲けもんだと思うぜ」

「アタイからも頼むよ、今回ユピテルが死んだのだってメルポメネのせい、むしろ損害を大きくしたのはこっち側じゃないのかい？」

毘沙門天は欠伸をしながら耳に小指を突っ込んでいる、緊張感のか
けらもないと思っていたその瞬間、殺気の満ちた目で睨んだ。

「最後まで聞けっの、馬鹿共が」

「第3階海神ニヨルド、第6階火神祝融ちゃん、第9階護法神帝釈
天、君達には今度から神選10階になってもらうよ」

「監視、強者減員故増員要員」

ヘリオスの表情が一瞬で笑顔になって阿修羅を見る。

「良かったッスね阿修羅！何もないッスよ！」

「それは無いでしょ？阿修羅ちゃんには……………」

部長室に集められた日本支部一同、袴に胴着姿の緊那羅、大きめのシャツにハーフパンツの摩和羅女、キャミソールにカーディガン、七分丈のジーンズの沙羯羅、ラフなロングシャツにジーンズの迦楼羅、パーカーのフードを被りサングラスをしている摩醯首羅、腕捲りをしたシャツにジーンズの摩侯羅迦、トレンチコートにホットパンツの毘楼勒叉と毘楼博叉。

そして目の前に銀髪に銀淵メガネに白いコートを着た金色孔雀。

「今日集まってもらったのは新人さんが入ったからだよ」

「ええ！誰え？イケメン？」

「沙羯羅はそれしか頭に無いのか？アタシは優しい人なら誰でも良いぞ」

「摩和羅女、すごい怖い人だったらどうする？」

「そ、そしたら緊那羅が守ってくれ！」

「摩醯首羅！何だ？皆美味そうな話をしてるのか！？」

「黙れ馬鹿犬（摩侯羅迦）、飯なら食って来ただろ。」

俺なら来たそいつをしごいて強くするがな」

「摩醯首羅、それじゃあ可哀想でしょ？」

「じゃあ迦楼羅ならどうするの？」

「ボス、今はそうじゃないだろ？新人さんと早く対面させろ」

金色孔雀は笑いながら入って良いよと叫ぶ、そしてゆっくりと小さな階段を登る音、全員は音の主を探して振り返る。
そして一番上に上ると全員の表情が変わる。

「はじめまして、新人の———」

「阿修羅あ！」

誰よりも先に摩和羅女が新人、阿修羅に飛び付いた、阿修羅はそつと受け止めると摩和羅女の頭を撫でた。

「阿修羅、あんた神選10階は？」

「はあ、クビになっちゃった」

「良いことだ！うん！」

「じゃあ第10階は誰がやるの？」

「それは俺から説明させてえ」

身を乗り出して自己主張をする金色孔雀、まるでクイズの答えが分かったかのような勢い。

「コレから緊那羅、沙羯羅、摩和羅女、阿修羅、計4名にはバチカンに行ってもらう。」

そして、神選10階を決める大会に出てきてほしい、コレはボス命令、絶対だからね」

「
「
「
は
っ
「.:?
「
「
「

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

Fin：事後……………（後書き）

やっと悪魔編も最終回を迎える事が出来ました！

今回も次回作に繋がる終り方となってしまうした。

当初の終り方とは同じものの、殺す人と生き残る人を大きく変えてしまいました。

当初ルシファーとリバイアサンとダグザは死ぬ予定でした、そしてユピテルとベリトは生かす予定だったんですが、どうにもメルポメネが動かし辛いので残念ながら一緒に……………って事で。

一番後悔してるのはアストライアです、彼女は動かしやすかったんですけど殺すしかなかったんです、アストライアファンはすみません。

次回作のテーマは、‘最強’です。

感想やアドバイスを貰えると次回作への原動力となります、お願いします。

それでは、次回作までごきげんよう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0842b/>

修羅の巫女2 《悪魔編》

2010年10月22日02時08分発行